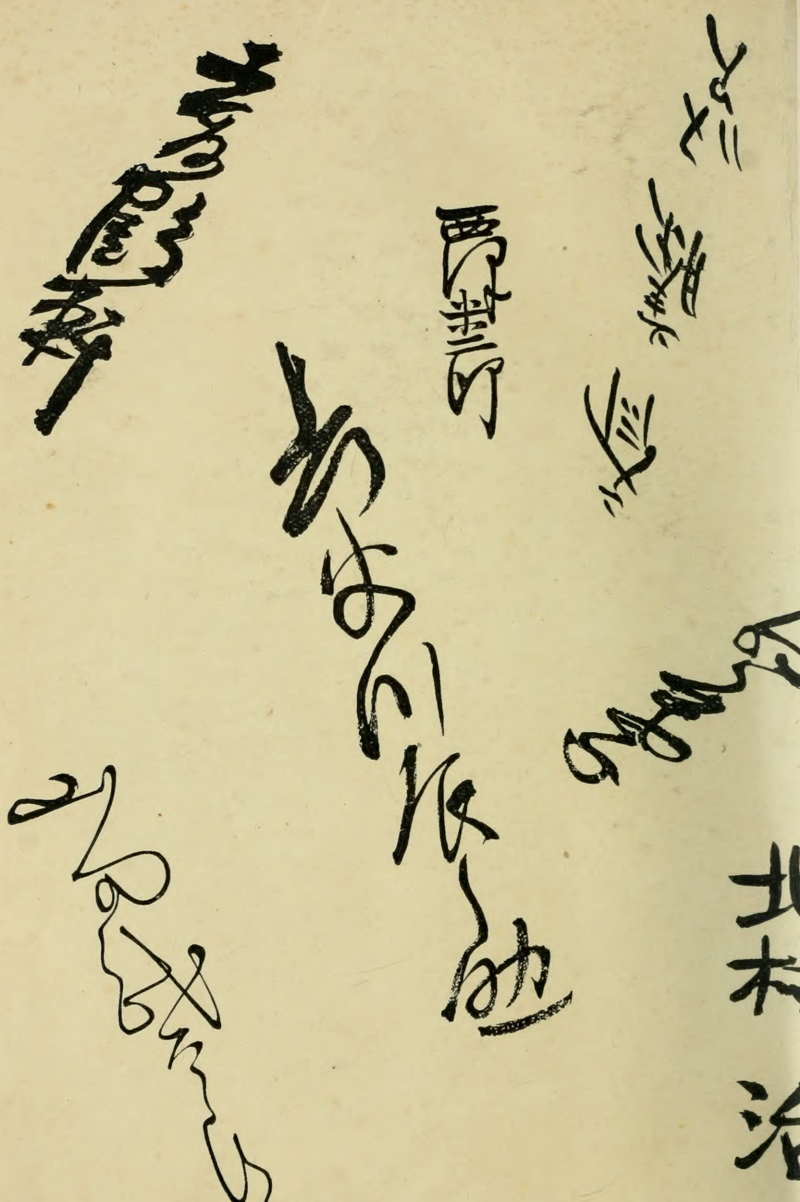

北村

内田魯庵著

おもひ出す人々

四十年間の文明の一瞥

春秋社発行



舊著「きのふけふ」の久しく絶版となれるを友の勸めるまゝに全部に涉りて增訂を施こし、最近に發表した數家の憶出話數章を加へて改題して再び公けにする。古き酒は新らしき革嚢に盛りても新酒の匂ひのするもので無いといふ人もあらんが、久しく棚に置古したる貧乏徳利を煤だらけのまゝに持出すよりはと新たに火を入れて再釀したので、利き酒は諸君の御批評のまゝである。

一九一四年新綠

著者識

目次

四十年前――新文藝の曙光……………………一――一七
鹿鳴館――假裝會――歐化熱――保安條例――尾崎愕堂――『經世偉勳』――演劇改良――政治家の創作熱――新文藝勃興
美妙齋美妙……………………一八――四一
(一) 歐化熱の早產兒……………………一八
(二) 初對面の印象……………………二三
(三) 得意の絕頂期……………………二五

（四）人氣失墜の原因……………………………………三〇
（五）美妙と紅葉との比較……………………………………三四
（六）悲慘な終焉……………………………………三八

硯友社の勃興と道程……………………四一—一〇四

（一）飯田町の中坂——馬琴と「まどき」と思案外史……………四一
（二）『我樂多文庫』……………………………………四九
（三）硯友社の當時の生活——『紅子戲語』……………五五
（四）文士劇の先驅、黄鶴樓の芝居……………………五九
（五）『新著百種』——薄倖の作家北村三唖と天才露伴の
『風流佛』……………………………………六一
（六）漣山人……………………………………六六

（七）川上眉山……………………………………………………七一
（八）硯友社の全盛時代………………………………………八一
（九）尾崎紅葉の性格の半面…………………………………八四
（十）紅葉と外國文學……………………………………………九一
（十一）紅葉の筆蹟及び人氣…………………………………九三
（十二）紅葉と最後の會見——世間に傳へられざる紅葉の
最後の逸事……………………………………………………………九七
齋藤綠雨（大正十三年九月補訂）……………………………一〇五
「杏の落ちる音」の主人公——江戸の文明の落し子
たる頽廢的通人の半面（明治四十五年三月號『はきゞす』大正十三年十月補訂）……………一二六

淡島椿岳――過去時代の文化が産出したる
畫界のハイブリッド（大正十四年三月補訂）……一四九―二〇四
（一）淡島氏の祖――馬喰町の輕焼屋……一五三
（二）江戸名物輕焼――輕焼と疱瘡痲疹……一五五
（三）二代目喜兵衛の商才……一五七
（四）狂歌師岡鹿樓笑名……一六一
（五）神楽坂路考……一六二
（六）川越の農家の子――椿岳及び伊藤八兵衛……一六三
（七）小林城三……一六七
（八）淺草生活――大目鏡から淡島堂の堂守……一六九
（九）椿岳の人物――狷介不羈なる半面……一七二

（十）椿岳の畸行……一七五
作さんの家内太夫入門◉東京で初めてのピヤノ彈奏者◉椿岳名誉の琵琶◉山門生活とお堂守◉淺草の畸人の一群◉椿岳の着物◉椿岳の住居◉天狗部屋◉女道樂◉明治初年の廢頽的空氣
（十一）畫人椿岳……一八四
椿岳の畫才及び習畫の動機……一八四
椿岳の畫の系統……一八五
椿岳の畫家生活……一八八
椿岳の泥畫……一八九
淺草繪と淺草人形……一九一
椿岳の畫料……一九二
椿岳の作品……一九三

圓福寺の椿岳の畫……一九七
(十二) 椿岳の終焉及び內外人の椿岳蒐集熱……二〇〇
鷗外博士の追憶……二〇三
最後の大杉……二二一
三十年前の島田沼南……二三九
二葉亭の一生(明治四十二年六月記大正三年正月補修)……二五六―四七八
(一) 生ひたちから靑年まで……二五七
(二) 春廼舍との握手……二六五
(三) 『浮雲』及び其時代の生活……二七〇

(四)『あひゞき』及び『めぐりあひ』……二九八
(五)浮雲時代の失意煩悶……三〇一
(六)『浮雲』第三篇及び官報局出仕……三一二
(七)官報局時代……三一七
露語の楠川●高橋時代の官報局●精神心理の研究●罪惡心理と下層研究●最初の家庭生活の失敗●官報局を去る
(八)放浪時代から語學校教授……三三一
原稿生活●實業熱●海軍編輯●語學校教授
(九)哈爾賓行……三三七
二葉亭獨特の實業論●女郎屋論●哈爾賓の生活及び奇禍
(十)北京時代……三四四
川島浪速と佐々木照山●提調時代の生活●衝突辭任

（十一）朝日新聞社に入る……………………二五一
（十二）『其面影』と『平凡』……………………二五四
（十三）第二期の失意煩悶……………………二五八
朝日社内に於ける髙藤不平●國際的危言『平凡』前後●實際的抱負
（十四）露國の亡命客及びダンチェンコ……………………二六五
（十五）露都行及び其最後……………………二六八
露都行の抱負●入露後の消息●發病●歸朝●終焉●葬儀

二葉亭餘談……………………二七八—五二五

（一）二葉亭との初對面……………………二七八
（二）津の守の女の寫眞屋……………………二八四
（三）食道樂と無頓着……………………二九〇

(四) 俗曲趣味……三九四
(五) 犬と猫……三九九
(六) 二葉亭の文章癖……四〇八
(七) 田端の月夜……四一一
(八) 對島沖大海戰の二日後……四一三
(九) 二葉亭の破壞力……四一五
(十) 二葉亭の風丰人品……四一七

二葉亭追錄

(1) 二葉亭が存命だつたら……四二二
(2) 二葉亭は實は舊人……四二六
(3) 二葉亭は長生きしても終生煩悶の人……四三一
(4) 二葉亭は失敗の英雄……四三五

挿寫

硯友社の樂屋　劇雅堂綠芽畫（我樂多文庫所載『紅子戲語』挿畫）……六八—六九
紅葉自畫像　巖谷小波氏所藏……九四—九五
綠雨の筆蹟……一一四—一一五
椿岳庵畫房の一隅……一八〇—一八一
椿岳木筆畫『忠臣藏七段目』　磐瀨純氏所藏……一九四—一九五
晩年の椿岳……二〇〇—二〇一
森鷗外の筆蹟……二〇八—二〇九
二葉亭の筆蹟（『其面影』の題名に就ての手紙）……二五六—二五七
パセパンシンャの茶毘の煙　送棺者の一人　野口駿尾氏スケッチ……二七四—二七五
埋骨當時の墓標（池邊三山筆）……四二〇—四二一

おもひ出す人々　四十年間の文明の一瞥　魯庵生

四十年前

――新文學の曙光――

鹿鳴館――假裝會――歐化熱――保安條例――尾崎愕堂――經世偉勳――『演劇改良』――政治家の創作熱――新文藝勃興

亞米利加の排日案通過が反動團體のヤッキ運動となつて、其傍杖が帝國ホテルのダンス場の劍舞隊闖入となつた。ダンスに夢中になつてる善男善女が刄引の鈍刀に脅かされて、ホテルの

ダンス場は一時暫らく閉鎖された。今では餘熱が冷めてホテルのダンス場も何ケ月振かで再び開かれたが、左しもに流行したダンス熱は一時ほどでなくなつた。一時は猫も杓子も有頂天になつて、場末のカフエでさへが蓄音機のフォックストロットで夏の夕べを踊り抜き、ダンスの心得の無いものは文化人らしく無かつた。

か、四十年前の所謂鹿鳴館時代のダンス熱は之どころぢや無かつた。尤も今ほど一般的では無かつたが、上臺閣の諸公から先きへ立つて浮れたのだから上流社會は忽ち風靡された。當時の歐化熱の急先鋒たる公伊藤、侯井上は其頃マダ壯齡の男盛りだつたから、啻だ國家の爲めの政策ばかりでもなくて、男女の因襲の垣を撤した歐俗社交がテンと面白くて堪らなかつたのだらう。搗てゝ加へて渠等は貴族といふ條、マダ出來立ての成上りであつた。一千年來の氏族政治を廢して、藤氏の長者に取つて代つて陪臣内閣を樹立したのは、無爵の原敬が野人内閣を組織したよりもヨリ以上世間の眼を睜らしたもんで、此の新鋭の元氣で一足飛びに歐米の新文明を極東日本の蓬萊仙洲に出現しやうと計畫した其の第一着手に、先づ歐化劇の本舞臺として建設したのが卽ち鹿鳴館である。今でこそ樟腦臭いお殿樣の溜の間たる華族會館に相應はしい古風

な建造物であるが、當時は鹿鳴館と云へば倫敦巴黎の燦爛たる新文明の榮華を複現した玉の臺であつて、鹿鳴館の名は西歐文化の象徴として歌はれたもんだ。

當時の歐化熱の中心地は永田町で、此のあたりは右も左も洋風の家屋や庭園を連接し、瀟洒な洋裝をした貴婦人の二人や三人に必ず邂逅つたもんだ。ダアクの操り人形然と妙な内鰐の足どりでシヤナリシヤナリと蓮歩を運ぶものもあつたが、中には今よりもハイカラな風をして、其頃流行つた横乘りで夫婦轡を駢べて行くものもあつた。此のエキゾチツクな貴族臭い雰圍氣に浸りながら霞ケ關を下りると、其頃練兵場であつた日比谷の原を隔てゝ鹿鳴館の白い壁からオーケストラの美くしい旋律が行人を誘つて文明の微醺を與へた。今なら文部省に睨まれ教育界から顰蹙される頗る放膽な自由戀愛說が官學の中から鼓吹され、當の文部大臣の家庭に三角戀愛の破綻を生じた如き、當時の歐化熱は今どころぢや無かつた。

先年侯井上が薨去した時、侯の憶ひ出噺として新聞紙面を賑はしたのは此の鹿鳴館の舞踏會であつた。殊に大臣大將が役者のやうに白粉を塗り鬘を着けて踊つた前代未聞の假裝會は當時を驚かしたばかりぢや無い。今聽いてさへも餘り突拍子も無くて、初めて聞くものには作り噺

としか思はれないだらう。

何しろ當夜の賓客は日本の運命を双肩に荷う國家の重臣や朝廷の貴紳ばかりであつた。主人側の伊井公侯が先づ俊輔聞多の昔しに若返つて異様の扮装に賓客をドッと笑はした。謹嚴方直容易に笑顏を見せた事が無いといふ含雪將軍が緋縅の鎧に大身の槍を横たへて天晴な武者振を示せば、重厚沈毅な大山將軍ですらが丁髷の鬘に裃を着けて踊り出すといふ騒ぎだ。況してや其他の月卿雲客、上﨟貴嬪らは肥滿の松風村雨や、痩身の夷大黒や、猩々面のベニスの商人や、顏を赤く彩つたドミノの道化役者や、七福神や六歌仙や、神主や坊主や赤ゲットや、思ひ／＼の異装に趣向を凝らして開闢以來の大有頂天を極めた。

此の一夜の歡樂が滿都を羨殺し笑殺し苦殺した數日の後、此夜、某の大臣が名状す可からざる侮辱を某の貴夫人に加へたといふ奇怪な風説が忽ち帝都を騒がした。續いて新聞の三面子は仔細ありげな報道を傳へた。此夜、猿芝居が終つて賓客が散じた頃、鹿鳴館の方角から若い美くしい洋装の貴夫人が帽子も被らず靴も穿かず、髪をオドロと振亂した半狂亂の體でバク／＼と駈けて來て、折から日比谷の原の端れに客待らしてゐた俥を呼留め、飛乘りざまに幌を深く卸

させて神田へと急がし、只ある伯爵家の裏門の前で俥を停めさせて、若干の代を取らすや否や周章てゝ潜門の奥深く消えたといふ新聞は尋常事ならず思はれて、噂は忽ち八方に廣がつた。歡樂湧くが如き假裝の大舞踏會の幕が終ると、荒涼たる日比谷原頭悪鬼に追はれる如く逃げる貴夫人の悲劇、今なら新派が人氣を呼ぶフヰルムのクライマックスの場面であつた。

風說は風說を生じ、辯明は辯明を産み、數日間の新聞は此の噂の筆を絕たなかつたが、幾何もなく風說の女主人公たる貴夫人の夫君が一足飛びの榮職に就いたのが復たもや疑問の種子となつて、喧々囂々の批評が更に新らしく繰返された。

が、風說は雲を攫むやうに漠然として取留めがなく、眞相は終に永久に葬られて了つたが、歡樂極まつて哀傷生ず、此風說が歐化主義に對する危惧と反感とを長じて終に伊井內閣を危うするの蟻穴となつた。二相は恰も福原の榮華に驕る平家の如くに咀はれた。

伊井公侯を補佐して革命的に日本の文明を改造しやうとしたは當時の內閣の智囊と云はれた文相森有禮であつた。森は早くから外國に留學した薩人で、長の青木周藏と列んで渾身に外國文化の浸潤つた明治の初期の大ハイカラであつた。殊に森は留學時代に日本語廢止論を提唱し

たほど青木よりも一層徹底して、剛毅果斷の氣象に富んでゐた。

青木は外國婦人を娶つたが、森は明治の初め海外留學の先驅をした日本婦人と結婚した。式を擧げるに福澤先生を證人に立てゝ外國風に契約を交換す結婚の新例を開き、明治五六年頃に一夫一婦論を說いて婦人の權利を主張したほどのフェミニストであつたから、身文教の首班に座するや先づ根本的に改造を企てたのは女子教育であつた。

優美よりは快活、柔順よりは才發、家事よりは社交、手藝よりは學術と云ふが女に對する渠の註文であつた。此方針から在來の女大學的主義を排して高等學術を授け、外國語を重要課目として旁ら洋樂及び舞踏を敎へ、直轄女學校の學生には洋裝せしめ、高等女學校には歐風寄宿舍を設け、英國婦人の監督の下に歐風生活を實習させて、日本の女をして一足飛びに西洋の女たらしめやうと敎育した。

文相既に此の如くだから、女學校の先生達は盛んに男女交際を鼓舞し、結婚の自由を主張し、男女の學生が自由に往來するを少しも干涉しないのみならず、敎師自身が率先して種々の名目の下に青年男女を會同し、自由に野方圖に狎戲け散らすのを寛大に見た。隨つて當時の女學校

の寄宿舍の應接室に青年學生の姿を見ない日は無かつた。通學生の待合室にすらも若い學生が屢々出入した。學生の倶樂部や青年の會合には必ず女學生が出席して、才色あるものが女王(クヰン)の位置を占めてゐた。が、子女の父兄は教師も學校も許す以上は之を制裁する術がなく、呆然として學校の爲すまゝに任して、之が即ち文明であると思つてゐた。

自然女學校は高砂社をも副業とした。教師が媒酌人となるは勿論、教師自から生徒を娶る事すら不思議がられず、理想の細君の選擇に女學校の教師となるものもあつた。或る女學校では女生の婚約の夫が定まると、女生は未來の良人を朋友の集まりに紹介するを例とし、夫から後は公々然と音信し往來するを許された。女流の英文學者として一時盛名を馳せたI夫人は在學中二度も三度も婚約の紹介を繰返したので評判であつた。

突飛なるは婦人乘馬講習所が出來て、若い女の入門者が可成に輻湊した。瀟洒な洋裝で肥馬に横乘りするものを其處(そこ)ら中で見掛けた。更に突飛なのは、六十のお婆(ばア)さんまでが牛に牽かれて善光寺詣りで娘と一緒にダンスの稽古に出掛け、お爨どんまでが夜業(よなべ)の雜巾刺(ざふきんさし)を止めにして坊ちやんやお孃さんを先生に『イット、イズ、エ、ドッグ』を初めた。

愈々出でゝ益々突飛なるは新學の林大學頭たるK博士の人種改良論であつた。日本の文化を根本的に革新するには先づ人種を改造するが先決問題であるといふが博士の論旨で、人種改良の速成法として歐米人との雜婚を盛んに高調した。K博士の卓　の御利生でもあるまいが、某の大臣の夫人が紅毛碧眼の子を産んだといふ浮說さへ生じた。

何の事は無い、一時は世を擧げて歐化の魔術にヒプノタイズされて了つた。が、暫らくして醉り草臥れて漸く目が覺めると、苦々しくもなり馬鹿々々しくもなつた。且此の猿芝居は畢竟するに條約改正の爲めの外人に對する機嫌取であるのが誰にも看取されたので、此の如きは國家を辱かしめ國威を傷つける自卑自屈であるといふ猛烈なる保守的反動を生じた。折から閣員の一人隈山子爵が海外から歸朝して此の猿芝居的歐化政策に同感すると思ひの外慨然として靖獻遺言的の建白をし、維新以來二十年間沈默した海舟伯までが恭謹なる俠文の意見書を提出したので、國論忽ち一時に沸騰して日本の危機を絶叫し、舞踏會の才子佳人は恰も阪東武者に襲はれた平家の公達上臈のやうに影を潛めて屏息した。さすがに剛情我慢の井上雷侯も國論には敵し難くて、終に歐化政策の帳本人としての責を引いて挂冠したが、潮の如くに押寄せる

と民論は益々政府に肉迫し、易水劍を按ずる壯士は慷慨激越して物情洶々、帝都は今にも革命の巷とならんとする如き混亂に陷つた。

機一發、伊公の著名なる保安條例が青天霹靂の如く發布された。危險と目指された數十名の志士論客は三日の間に帝都を去るべく嚴命された。明治の酷吏傳の第一頁を飾るべき時の警視總監三島通庸は遺憾なく鐵腕を發揮して蟻の這ふ隙間も無いまでに嚴戒し、帝都の志士論客を小犬を追拂ふやうに一掃した。其時最も痛快なる芝居を打つて大向ふを唸らしたのは學堂尾崎行雄であつた。尾崎は重なる逐客の一人として、伯爵後藤の馬車を驅りて先輩知友に暇乞ひしに廻つたが、尾行の警吏が俥を飛ばして追尾し來るを尻目に掛けつ、『我は既に大臣となれり』と傲語したのは最も痛快なる幕切れとして當時の青年に歡呼された。尾崎は其時學堂を僞堂と改め、三日目に帝都を去るや直ちに横濱埠頭より乘船して渡歐の途に上つた。其の花々しい神速なる行動は眞に政治小說中の快心の一節で、當時の學堂居士の人氣は伊公の惡辣なるクーデター劇の花形役者として滿都の若い血を沸かさしたもんだ。

先年侯井上が薨去した時、當年の彈劾者たる學堂法相の著書『經世偉勳』が再刊されたのは

皮肉であつた。『經世偉勳』の發行されたのは恰も侯井上の歐化政策時代であつて、其頃學堂はヂスレリーに私淑してゐるといふ評判だつた。が、政治家としての尾崎は相應に見識があつたらうが、ヂスレリーを私淑するには學堂の文藻は餘りに貧しかつた。尤も日本の政治家に漢詩以外の文學の造詣あるものは殆んど無かつたが、其頃政治家が頻りと小説を作る流行があつて、學堂も亦『新日本』といふ小説染みたものを著はした。餘り評判にもならなかつたが、那翁三世が幕府の遣使栗本に兵力を貸さうと提議した顛末を夢物語風に書いたもので、文章は乾枯びてゐたが月並な飜譯傳記の『經世偉勳』よりも面白く讀まれた。『經世偉勳』は實は再び世間に顏を出すほどの著述では無いが、ヂスレリーの夢が漸く實現された時、其實餘人の抄略したものを尾崎行雄自著と頗る御念の入つた銘を打つて、左も新らしい著述であるかのやうに再刊されたのは、腕白時代の書初めが麗々しく表裝されて床の間に掛けられるやうなもんだ。學堂居士に取つては得意でもあらうが擽ぐつたくもあらう。

今の學堂夫人テオドラが初めて日本の父の家に歸つて來たのも丁度『經世偉勳』が發行されて若い學堂の潑溂たる意氣が青年の思慕の中心となつた頃であつた。が、日本へ歸つたばかり

のテオドラ孃は日本の民間黨の領袖に母國の大政治家ヂスレリーを私淑する花形役者があるのを少しも知らなかつたらうし、又此の和製ヂスレリーが未來の良人となる事を少しも豫期しなかつたらう。噂だから虛實は解らぬが、當時のテオドラ孃は日本の父の家庭が本國で想像したとは案に相違したのを滿足出來なかつたさうだ。英人のホームを見馴れた眼には一家の夫人ともあらうものが酒飯の給仕をしたり、普通の侍婢と見えない婦人が正夫人と同住してゐる日本の家庭が不思議でもあり又不愉快で堪らなかつたさうだ。殊にテオドラ孃の父は元老院議官であつたが、英國のセネートアの堂々たる生活振から期待したとは打つて變つた見窶らしい生活が意に滿たないで、不滿のある度に一々英國公使に訴へ、公使が亦一々取次いで外相井侯に苦情を持込むので、テオドラ孃の父は事每に外相からの内諭で娘の意を慰へるに汲々として弱り拔いてゐたが、歐化心醉の伊井公侯も之には頗る困らされたさうだ。

當時の歐化は木下藤吉郞が淸洲の城を三日に築いたと同樣、外見だけは如何にも文物燦然と輝いてゐたが、内容は破綻だらけだつた。假裝會は啻だ鹿鳴館の一夕だけでなくて、此の歐化時代を通ずる全部が假裝會であつた。結局失態百出よりは滑稽百出の喜劇に終つた。が、糞泥

汚物を押流す大汎濫は減水する時に必ず他日の養分になる泥沙を殘留するやうに此の馬鹿々々しい滑稽歐化の大洪水も亦新らしい文化を萠芽するの養分を殘した。少なくも今日の文藝美術の勃興は歐洲文化を尊重する當時の氣分に發途した。

井侯が陛下の行幸を鳥居坂の私邸に仰いで團十郎一座の劇を御覽に供したのは劇を賤視する從來の陋見を破つて千萬言の論文よりも藝術の位置を高める數倍の効果があつた。井侯の薨去當時、井侯の逸聞が傳へられるに方つて、文壇の或る新人は井侯が團十郎を愛して常にお伴につれて歩いたといふを慊らず思ひ、團十郎が井侯をお伴にしないまでも切めては對等に交際して侯伯のお伴を榮としない見識があつて欲しかつたと云つた。今日の文人の見識としては左もあらうが、今から四十年前――或は今日でも猶ほ――俳優が大臣のお伴をするは社會の實情上決して屈辱では無かつた。且、井侯は團十郎をお伴につれてゐても藝術に對する理解があつたは、夫まで匹夫匹婦の娛樂であつて士太夫の見るまじきものと侮蔑んだ河原者の藝術を陛下の御覽に供したのでも明かである。今から見れば何でも無いやうに思ふが、四十年前俳優がマダ小屋者と稱されて乞食非人と同列に賤民視された頃に渠等の技藝を陛下の御眼に觸れるといふ

は重大事件で、宮内省其他の反對が尋常で無かつたのは想像する餘りにがある。其の紛々たる群議を排して所信を貫ぬいたのは井侯の果敢と權威とがなければ出來ない事であつて、之も亦藝術を尊重する歐米文明の感化であつたらう。

劇を文化の重要件として演劇改良が初めて提言されたのも亦當時であつた。陛下の天覽が機會となつて伊井公侯の提撕に生じたのだから、社會的には今日の新劇運動よりも一層大仕掛けであつて、有力なる縉紳貴女を初め道學先生や教育家までが盡く參加した。當時の大官貴紳は今の政友會や憲政會の大臣よりも遙に藝術的理解に富んでゐた。

野の政治家も亦今よりは藝術的好尚を持つてゐた。且在官者よりも自由であつて、大抵操觚に長じてゐたから、矢野龍溪の『經國美談』、末廣鐵腸の『雪中梅』、東海散士の『佳人之奇遇』を先駈として文藝の著述を競爭し、一時は小說を著はさないものは文明政治家で無いやうな觀があつた。一つは憲法發布が約束されて政治が休息期に入つたからだが、一つは當時の歐化熱が文藝を尊重する歐米の空氣を注入して、政治家も亦靖獻遺言的志士形氣を脫してヂスレリーやグラッドストーン、リットンやユーゴー等の操觚者と政治家とを一身に兼ぬる文明的典型を

學ぶやうになつたからだ。政治家肌が怎ういふ傾向になつたのも亦間接に伊井公侯の文明尊重に負ふてゐるので、當時の政界の領袖は朝野を通じて皆文藝的理解に富んでゐた。庄屋様上りの百姓政治家は帝都の中央では對手にされなかつた。

由來革命の鍵はイツデモ門外漢の手に握られてをる。政治上の革命が屢々草澤の無名の英雄に成し遂げられるやうに、文藝上の革命も亦往々シロウトに烽火を擧げられる。京傳馬琴以後落寞として膏の燼きた燈火のやうに明滅してゐた當時の小說界も龍溪鐵腸等のシロウトに新らしい油を注ぎ込まれたが、生殘つた戲作者の遺物どもは法燈再び赫灼として耀くを見ても古い戲作の頭では怎う做やうもなく、空しく傳統の圈內に彷徨して指を啣へて眼を白黑する外は無かつた。中には戲文や駄洒落の才を賴んで京傳三馬の舊套を追ふ、恰も今の歌舞伎役者が萬更時代の推移を知らないでもないが、手の出しやうもなくて歌舞伎年代記を繰返してゐると同じであつた。が、大勢は終に滔々として渠等を置去りにした。

斯る折から卒然崛起して新文學の大旆を建てたは文學士春廼舍朧であつた。世間は既に政治小說に目覺めて、歐米文學の絢爛莊重なるを敎へられて憧憬れてゐた時であつたから、彼岸の

風を滿帆に姙ませつゝ此の新らしい潮流に進水した春廼舍の『書生氣質』は恰も鬼ヶ島の寶物を滿載して歸る桃太郎の舟のやうに歡迎された。是れ實に新興文藝の第一聲であつて、天下の青年は翕然として文學の冒險に志ざした。

當時の記憶は綿々として憶浮べるまゝを盡く云はうとすれば限りが無い。其頃一と度は政治家たらんと欲し、轉じて建築に志ざし、再轉して今度は實業界に入らうとした一青年たる自分が文學に興味を持つやうになつたのも亦、直接には龍溪鐵腸等の小說、間接には是等の新傾向を胚胎した英國の政治家的文人の典型であつた。幸か不幸か知らぬが終に半生を文壇の寄客となつて過ごしたのは當時の青春の憧憬に發途してをる。

井侯の歐化政策は最早夢物語となつた。當時の記念としては鹿鳴館が華族會館となつて幸ひ地震の火事にも無事に免かれて殘つてるだけだが、之も今は人手に渡つて軈て取毀たれやうとしてゐる。井侯薨去當時、故侯の歐化政策は滑稽の思出草となつたが、有らゆる舊物を破壞して根底から新文明を創造しやうとした井侯の徹底的政策の小氣味よさは事毎に八方へ氣兼して喀咀逡巡する今の政治家には見られない。例へば先祖から持ち傳へた山を拓いて新らしい果樹

園を造らうとしたやうなもので、其策は必ずしも無謀淺慮では無かつたが、但だ短兵急に功を急いで一時に根こそぎ老木を伐採した爲めに不測の洪水を汎濫し、八方からの非難攻撃に包圍されて竟にアタラ九仭の功を一簣に缺くの失敗に終つた。が、汎濫した歐化の洪水が文化的に不毛の瘠土に注いで肥饒の美田となり、新たに植樹した文明の苗木が成長して美果を結んだのは爭へない。少くも今日の新らしい文藝美術の勃興は當時の歐化熱に負ふ處があつた。

井侯以後、羹に懲りて膾を吹く國粹主義は代る〴〵に武士道や報德講や祖先崇拜や神社崇敬を復興鼓吹した。が、半分化石し掛つた思想は耆婆扁鵲か如何に蘇生らせやうと骨を折つても再び息を吹き返す筈か無い。結局は甲冑の如く床の間に飾られ、弓術の如く食後の腹ごなしに翫ばれ、烏帽子直垂の如く蟲干に昔しを偲ぶ種子となる外は無い。津浪の如くに押寄せる外來思想は如何なる高い防波堤をも踰して日一日も休みなく古い日本の因襲の寸を削り尺を崩して新らしい文明を作りつゝある。此の世界化は世界の進歩の當然の道程であつて、民族の廢頽でもなければ國家の危險でも無いのである。

イツの時代にも保守と急進とは相對立して互に相反撥し相牽掣する。が、官僚はイツでも保

守的であつて、放縱危激な民論を控制し調節するが常である。官僚が先へ立つて突飛な急進の空氣を醸成して民間から反對されたといふは滅多に聞かない話であつて、伊井公侯の歐化政策は平和的ボリシエウヰズムであつた。夫から比べると今日はあんまり平凡過ぎる。官僚も民間も皆老衰して了つた。政治界でも實業界でも爺さんでなければ夜も日も明けない老人萬能で、眼前の安樂や一日の苟安を貪る事無かれ主義に腰を叩いて死慾ばかり渇いてゐる。女學校を出たてのお孃さんが結婚よりも女の獨立を主張し、五十六十のお婆さんまでが洋服を着て若い女と一緒に參政權を絶叫し、臺所のお爨どんまで時間制を高唱して勞働運動に參加しやうとする今日の思潮は世間の大勢で如何ともする事が出來ないのを、官僚も民間も切支丹破天連の如く呪咀して、惴々焉として其侵入を防遏しやうとしてをる。當年の若い伊井公侯なら恐らく之を危險視する事は豈夫有るまい。伊井公侯の歐化策は文明の皮殼の模倣であつたが、人心を新たにし元氣を横溢せしめて新らしい文明のエポツクを作つた。頓挫しても新らしい文化の種子を播いたのは爭へない。當時の公侯の文化主義は終に曾我の家式滑稽として終つたが、シカモ此喜劇は極めて尊い滑稽であつた。

（大正十四年三月再記）

美妙齋美妙

（一）歐化熱の早產兒

丁度此の歐化主義の最絕頂に達して、一も西洋、二も西洋と、上下有頂天となつて西歐文化を高調した時、此潮流に棹さしに極端に西洋臭い言文一致の文體を創めたのが忽ち人氣を沸騰して、一躍文壇の大立者となつたのは山田美妙齋であつた。美妙齋は恰も歐化熱の人工孵卵器で孵化された早產兒であつた。

之より先き美妙齋は薩摩の美少年の古い物語を歌つた新體詞を單行本として發表した。外山博士一流の「死地に乘入る六百騎」的の書生節とは違つて優艷富麗の七五調を聯べた歌らしい歌であつたが、世間を動かすほどに注意を牽かないで了つた。が、此詩を發表した時が十八だといふから、美妙の早熟の才は推して知るべきである。

美妙齋の名が初めて世間を騷がしたは讀賣新聞で發表した短篇『武藏野』であつた。極めて

新らしい言文一致と奧淨瑠璃の古い「おぢやる」詞とが巧みに調和した文章の新味が著るしく讀書界を驚倒した。『美妙齋とはドンナ人だらう？』と、當時美妙齋の作を讀んだものは作者の人物を揣摩せずにはをられなかつた。が、新聞で讀んで感嘆したのはマダ一部少數者だけであつたが、越えて數月此の『武藏野』を卷軸として短篇數種を合冊した『夏木立』が金港堂から出版されて美妙齋の文名が一時に忽ち高くなつた。

丁度同時に硯友社の『我樂多文庫』が創刊された。紅葉、漣、思案と妍を競ふ中にも美妙の『情詩人』が一頭地を抽んで、評判となつた。續いて金港堂から美妙齋を主筆とした『都之花』とが發行されて、純文藝雜誌としてのエポックを作つたので、美妙齋の名は忽ち喧傳されて、トン〳〵拍子に一方の旗頭と成濟まして了つた。

今日の金港堂は強弩の末魯縞を穿つ能はざる感があるが、當時は對抗するものが無い大書肆であつた。其編輯に從事し其協議に與かるものは皆錚々たる第一人者であつた。然るに此の大勢力ある金港堂が一大小說雜誌を發行するに方つて如何なる大作家でも招き得られるのに漸と二十歲を越えたばかりの美妙を聘して主筆の椅子を與へたのは美妙の人氣が十分讀者を牽くに

足るを認めたからであらう。其頃金港堂の編輯を督してゐたのは先年興津で孤獨の羈客として隱者の生涯を終つた中根香亭であつた。が、『都之花』に就ては美妙が一切を主宰して香亭は唯だ卷尾に謠曲の註釋を載せたゞけであつた。其時は明治二十一年の春であつた。

『都之花』以前に『芳譚雜誌』とか『人情雜誌』とか云ふ小說雜誌があつた。が、皆戲作者の殘黨に編輯されてゐたので、內容も體裁も古めかしくて飽かれてゐた。『都の花』は恰も世間が清新の讀物に渴する時に生れたので、忽ち當時の雜誌のレコードを破つて、美くしい花やかな氣持の好い表紙が新らしい氣分を漲らして若い讀書家の心を誘つた。隨って其主筆たる美妙の位置と人氣とは當時の文學青年の羨望の中心であつた。

『我樂多文庫』は『都之花』に先んじて、硯友社の名は新時代の若い文人の集團として其時既に讀書界を騷がしてゐた。二者を比較すると『都の花』は羽二重の黑紋付の如く、『我樂多文庫』は飛白の羽織の如き等差があつた。其代りに前者はドコとなく市氣があつたが、後者は微塵も算盤氣が無くて自由な放縱な駄々ッ子氣分を思ふ存分に發揮してゐた。ドチラにも各々長所があつて夫々人氣を呼んだが、美妙齋は此の二雜誌に跨がつて、恰も政黨の領袖であつて內閣の

椅子に座してゐるやうな観があつたから聲望隆々として硯友社同人を壓してゐた。紅葉でさへが當時は猶ほ微々として、美妙に對しては太陽の前の月ほども光らなかつた。

美妙と紅葉とは本と同じ町に育つて同じ學校に學び、或時は同じ家に同宿して同じ文學に志さし、相共に提携して硯友社を組織した仲であつた。然るに『我樂多文庫』公刊匆々二人が忽ち手を別つて了つたは所謂兩雄聯び立たずであつて、陽には磊落らしく見えて實は極めて狹量な神經家たる紅葉は美妙が同人に拔駈けして一足飛びに名を成したのを餘り快よく思はなかつたらしい。が、『我樂多文庫』の基礎がマダ固まらない中に美妙が『都之花』に趨つて別に一旗幟を建て、剰つさへ自分一人が幸運に舌鼓を打つて一つ鍋を突付いた糟糠の仲の同人の四苦八苦の經營を餘所々々しく冷やかに視た態度と決して穩當でなかつたから、紅葉初め硯友社の同人が美妙を謀反人扱ひしたのも萬更無理では無かつた。

が、美妙としては其時既に『都之花』の外に『以良津女』といふ婦人雜誌を經營し、『女學雜誌』の特別寄書家として毎號寄稿し、其以外にもアチラコチラの新聞雜誌社から寄書を依頼されるといふ日の出の勢ひであつたから、紅葉は左に右く他の硯友社同人と伍するには餘りに

地位が懸隔し、實際上にも精粗の友を助けて『我樂多文庫』に寄與するだけの餘裕は無かつたのだ。紅葉と乖離するのは決して本意では無かつたらうが、美妙の見識は既に眇たる硯友社の一美妙でなくて天下の美妙齋美妙であつたのだ。

（二）初對面の印象

私が初めて美妙と音信したのは『夏木立』發行後間もなくであつた。私は其中の『武藏野』を感嘆した一人であつたから、マダ學生の貧しいポッケットの中から『夏木立』をも購讀し、『我樂多文庫』をも『都之花』をも愛讀してゐた。

今から考へると幼稚な鑑賞眼が樂隊入りの異形な文章に眩まされたのだらうが、『武藏野』には非常に驚嘆した。が、續いて發表された他の諸作には餘り感服しなかつた。殊に『都之花』の卷頭の呼物となつた『花車』は愚作であると思つた。が、偶然の機會から二三回音信したのが緣となつて、偶々金港堂の編輯所近くへ用達しに行つた戻りに天下の人氣作者を見るべく刺を通じたのがタシカ明治二十一年の十一月頃であつたと思ふ。

應接室に通されて凡そ十五分ばかりも待つてると、廊下で輕い靴の音が聞えてスウッと扉を排いて現れたのは白皙無髯の美少年であつた。『私が山田美妙齋で厶ります』と叮嚀に會釋された時は餘り若々しいので呆氣に取られた。美妙が私と同齡の靑年であるとは前から聞いてゐたが、私の蓬頭垢面に反對へてノッペリした優男だつたから少くも私よりは二三歳弱齡のやうに見えた。が、一ト言二タ言話して見ると極めて世事慣れてゐて、物ごし態度も沈着拂つてゐて二つも三つも年長のやうに思へた。何を話したか忘れて了つたが、こんな色の生白い若い男が那樣な巧い文章を書くかと呆氣に取られた外には初對面の何の印象も今は殘つてゐない。却て當の美妙齋よりは其時美妙に紹介された同席の中根香亭の清癯鶴のやうな表々たる高人の風丰が今でも猶ほ眼に殘つてゐる。香亭は幕人であつた。亡朝の遺臣として聲利を謝し聞達を求めず、『天王寺大懺悔』一冊を殘した外には何の足跡をも殘さないで、韜晦して終に天涯の一羈客として興津の逆旅に易簀したが、容易に匹を求められない一代の高士であつた。

二度目に美妙を訪ふたのは駿河臺の自宅であつた。水道橋内の皀莢坂を駿河臺へ登り切つた堤際の、其頃坊城伯爵が住つてゐた旗本屋敷の長屋であつた。賣れツ子の若い人氣作者の住居

とは思はれない古風な武者窓の付いた頗る見窄らしい陰氣な長屋であつた。(此家は最う三十年も前に取毀たれて了つた。)精々が四室かそこらの家であつたが、書齋を兼ねた八疊の座敷の周圍に大小の本箱を積み重ね、ギツシリ塞つた和漢洋の書籍が室内を威壓してゐた。今考へると夫ほどの藏書では無かつたが、二本立ちの本箱の一ツしか持つてゐなかつた其頃の私の眼には非常な大藏書家であるかのやうに映つた。殊に函入の『源氏物語』や上海版の函入の石印本などが馬鹿に光つて無知な書生ッぽの私を驚かした。

其頃の私は文學よりは經濟に志ざしてゐた。が、小說は好きで新刊も舊刊も可成廣く讀んでゐた。外國小說も語學の研究旁々少しは見てゐた。專門小說家がドレホド廣く讀んでゐたかは知らぬが、讀書の量は夫ほど負けてるとは思はなかつた。が、其晩の美妙齋の談が古今東西に渉つて曾て聞いた事も無い作家の名を五つも六つも聞かされたには我を折つて、自分よりも二つも三つも年下に見えるコンナ若々しい青年がドウして如此なに博識かと煙に巻かれて降參して了つた。どんな話をしたか、此時の談話はスツカリ忘れて了つたが、古今東西に渉つた博覽に煙に巻かれて了つた事だけを記憶してゐる。

(三) 得意の絶頂

其頃德富蘇峰、朝比奈碌堂、森田思軒の三人が新らしい文人の會合を思立つて文學會を組織した。蘇峰と碌堂とは新進第一の論客として勢望既に論壇を壓してゐた。思軒の名聲はマダ兩者に及ばなかつたか、造詣文章は夙に文壇の第一人者と推されてゐた。此三人が幹事となつて文壇各方面の第一流と目される名士を每月案內して會合した。此の文學會は後には次第に有象無象を狩集めて結局文人特有の放肆亂脈に墮して二三年後に自然的に解體したが、初めは最も選ばれたる少數者の集團であつて、當時の私設翰林院を以て目されてゐた。美妙は實に純文學を代表して春のや依田百川と共に最始の少數集團に加つてゐたので、白面の書生が白髯の翁と並び推された當時の美妙の人氣を知るべきである。

當時德富蘇峰の『國民之友』は政治を中心として普く各方面の名士を寄書家に網羅し、鬱然として思想壇に重きをなした雜誌界の覇王であつた。此の『國民之友』が特別附錄として小說を載せ初めたのは從來此種の評論雜誌が漢詩文或は國風の外は小說其他の純粹美文を決して載

せなかつた習慣を破つた破天荒の新例であつた。隨つて『國民之友』の附錄は著るしく讀書界の興味を惹き、尋常小說讀者以外の知識階級者の注目をも集めて批評の焦點となつた。且之に加へて廣告に巧みな民友社が商略上大袈裟に吹聽したから、自然此附錄に載つたものは大家を公認される形があつて、讀書界が毎年二季の此附錄を迎ふるや恰も回向院の番附を見ると同一の感があつた。其の文壇に重きをなしたは今の『改造』や『中央公論』の附錄のやうなものでなくて、皮肉な正太夫は之を稱して民友社の大家製造と云つた。尤も此の大家製造は年々次第に粗製濫造となつて、終には民友社の折紙が餘りに權威を持たなくなつて了つたが、其初めは此附錄が文人の進士登第と認められてゐた。

此新例を創めたのは二十二年の春であつて、美妙の新作は春廼舍朧の短篇と相並んで第一回の選に入つた。當時春廼舍は既に文壇の第一人者として仰がれてゐたから選に入るのは少しも不思議は無いが、新進年少の美妙が春廼舍と竝んで推されたのは異數であつた。シカモ、美妙は特に其作『蝴蝶』の爲めの挿畫を註文し、普通の畫をさへも評論雜誌に挿入するは異例であるのを、擇りに擇つて其頃まだ看慣れない女の裸體畫を註文して容易に容れしめたのは、蘇峰に

作家の意思を尊重する理解があつたからだが、又以て美妙の人氣が先例の無い無理な註文をすらも容れしめたほど高かつたのを證する事が出來る。

が、此の挿畫の策略か見事に中つて作其物よりは美くしい女の裸體畫が公衆の非常なる好奇心を喚起した。此畫は平家の若い美くしい上﨟が檀の浦から遁れて、岸へ上つたばかりの一絲をも掛けない裸體姿で源氏の若武者と向ひ合つてる處で、ツイ此頃も明治の裸體畫の初めとして或る雜誌に寫眞が載せられた。今見れば何でも無い拙い畫であるが、好奇心から評判になると同時に道學先生の物議を釀し、一時論壇は裸體畫論を盛んに戰はして甲論乙駁暫らくは止まなかつた。美妙自身も亦幼稚な裸體畫論を主張して、議論が盛んになればなるほど『蝴蝶』の挿畫が益々評判となつて、知るも知らざるも皆裸蝴蝶を喧傳した。此評判に蹴落されて春廼舍の洗練された新作を口にするものは殆んど無く、『國民之友』附錄に對する人氣を美妙が一人で脊負つて了つた。が、實を云ふと此評判は美妙の作よりは省亭の拙い裸體畫の成功であつたのだ。今なら當然發賣禁止となるべき恁ういふ下劣な裸體畫を寬假した當時の內務省の役人の頭は今の官憲よりも美妙齋よりも進歩してゐた。S・S・S即ち鷗外の新聲社派の『おも影』が

『國民之友』に載つて讀書界を騷がしたのは此年の夏の第二回の特別附錄の時であつて、美妙は文壇的には鷗外よりも早く、春廼舍に次いでのエポック・メーカーであつた。

一方、美妙齋が經營してゐた『以良津女』は、婦人雜誌としての思想上の位置こそ巖本善治の『女學雜誌』に及ばなかつたが、美妙の編輯だけに頗る文學的色彩に富み、搗てゝ加へて美妙の人氣が手傳つて可成に多數の讀者を吸收してゐた。質も量も今の雜誌と比べては話にならぬが、丁度一と頃賣れた『女子文壇』に若干の藝術趣味を加味したやうな相當な雜誌であつた。巖本の『女學雜誌』の素朴に引換へて極めて花やかな色彩を帶び、其寄書欄から多くの若い女の秀才を輩出した。後に美妙と結婚して蜜月の甘い陶醉が覺めない中に敢果ない悲劇の犧牲となつた田澤稻舟も亦此寄書欄から出身した女秀才であつた。

美妙は美男であつた。ドチラかといふと爲永の人情本にありさうなニヤケ男であつた。言語が物柔らかで應對も巧みであつた。女の好きな國文の素養があつて、歌や韻文も上手なら芝居や音樂をも嚙つてゐて、初對面のものを煙に卷く博覽の才辯を持つてゐた。其上に天下の人氣を脊負つて立つて、一世を空うする大文豪であるかのやうに歌ひはやされてゐたから、當時の

文學少女の愛慕の中心となつてゐた。『我樂多文庫』に載つた『情詩人』といふは多分自分自身を主人公としたのであらうが、如何にも多恨多感な詩人らしい生活を描いたものだ。男の我々が見ると堪らなくキザで鼻持がならないもんだが、當時の若い女をゾク／＼さした作で、キザな厭味な文句を文學少女は皆暗誦してゐたもんだ。

が、美妙齋の全盛は裸蝴蝶時代が絕頂で、夫から以後は次第に下り坂となつた。『都之花』に載つた『花車』は人氣のお庇で多少讀まれたが、具眼者の間には愚作と認められてゐた。最も苦辛した勞作と自からも稱してゐた『いちご姫』は昔しの物語の燒直し染みて根ッから面白く無かつた。一時は好奇心を牽いた「おぢやる」詞も徐／＼鼻に附いて飽かれ出した。之に反して一方妙なイキサツから美妙と睨み合ひになつた紅葉はメキ／＼賣出して硯友社の勢力が漸次に文壇を席卷し、何時とは無しに美妙に取つて代つて人氣を獨食して了つた。文壇の壽命が如何に短かいにしても美妙の人氣は餘りに飽氣無くて線香花火のやうであつた。だが、其の短かい間の人氣は後の紅葉よりも樗牛よりも獨步よりも漱石よりも、或は今の倉田よりも武者よりも花々しかつた。美妙が若し裸蝴蝶時代に早世したなら必ず一代の大天才なるかのやうに天下を

擧げて痛惜哀悼を惜まなかつたらう。生じひ生延び過ぎて最も氣の毒な末路に終つた。

（四）　人氣失墜の原因

美妙齋はドウシテ人氣を失墜したらう。美妙齋に就て實は餘り多くを知つてゐないから、私の憶測が中るか中らないかは請合はないが、試みに其原因を數へやうなら、

第一、美妙齋には限らないが、少年名を成すは第一の不幸で、美妙齋は餘り早くから世間に管待やされ過ぎた。詩人には隨分早くから賣出したのが古今珍らしく無いが、美妙齋は世間に出るなり直ぐ大家となつて了つた。二十か二十一で一躍して數年以上の操觚の閲歴を持つ先輩を乘越して名聲を博し、文章識見共に當代の雄を以て推される耆宿と同格に扱はれた。如何に天才でも非凡人でも恁う易々とトン／＼拍子に成上ると勢ひ矜驕となり有頂天となるは人間の免かる可からざる弱點である。美妙齋は餘りに早く大家となつた爲めに自分をも亦餘りに高く買ひ被り過ぎて少しも造詣に勵まなかつた。自然頭の中が忽ち空乏となつて、文章上の工風も構想上の進歩も行詰つて飽かれて了つた。

第二、美妙齋の人氣を博した第一の理由は文章上の新味であるが、此新味は之までの日本文には餘り無かつた非情物即ち草木や動物の擬人法、例へば花が囁嚅いたとか犬が欠伸したとかいふやうな文句や、前にも云つた足利時代の「おぢやる」詞や「發矢！……何々」といふやうな際立つた誇張的の新らしい文調であつたので、初めの珍らしい中こそヤンヤと喝采されたが、段々馴れると鼻に附いて飽かれて了つた。匂ひの高いものは鼻に附くやうになると嘔吐くほどイヤになるもんで、美妙齋の文章の新味も餘り香氣が高過ぎたので一時は盛んに持てやされたが、其反動として今度は極端に嫌はれるやうになつた。

第三、美妙齋に限らず、創作家は餘り評論をしない方が得策である。創作家と評論家とは自づから領分が違つてる。二者共に長ずる少數特殊の人を除いては、創作家は評論をするとボロが出る。怎ういふもんだが美妙齋は評論が好きで、矢鱈と幼稚な評論をしては頭の貧弱を惜氣なく露け出して了つた。殊に美妙齋の生緩い冗漫の言文一致は論難に不適當であつて、いとゞ薄弱なる議論を益々力弱くさせて世間の輕侮を招くやうになつた。（此點に於ては曾て一度もマジメな議論をした事の無い紅葉は有繫に怜悧であつた。）

第四、美妙齋は餘りに多才多能で、何でも鳥渡は器用にやつてのけたので、一事の完成に全力を注がなかつた。創作もすれば評論もする、文學も論ずれば婦人も論ずる、小説の評判が惡くなると字引を作る、著述が受けなくなると算盤を持つ、甚だしいのはラムネの製造までもして損をしたといふやうに、始終轉々して一事を貫く熱心が缺けてゐた。文壇に乘出した抑もの初めこそ小説を生涯の使命とする意氣込があつたらしいが、人氣が去つてからは他の仕事に轉々して、最後に再び文壇に舞戻つた時は最う時代に遲れて了つて、口を糊するに忙がしくて捲土重來の花を咲かせやうとする意氣地が拔けてゐた。

第五、美妙齋は人となりが偏狹で、誰とでも親密になれなかつた。且誠實が多少乏しかつたやうである。其頃我々は大抵獨身で、始終互ひに往來して共に飲食する事が珍らしくなかつたが、美妙と一緒に飯を喰つたといふ話を誰からも聞いた事が無かつた。勿論美妙の家で蕎麥一つ御馳走になつたといふ人も無かつたやうだ。却て美妙を尋ねる時は最中の一と折も持つて行かないと御機嫌が惡いといふやうな影口が有つた。且、文人の集まる席へ案内されても滅多に顏を出さなかつた。尾崎と一緒に下宿して一つ鍋のものを突ッついた仲でありながら、文壇

の羽振が宜くなると忽ち裏切して了つた。二葉亭とは親同士が同僚であつて、小學時代からの友人であつたが、中年以後は全く疎隔して音信不通であつた。文壇人とは誰とも面識があつたが、親友といふものは殆んど一人も無かつたやうだ。であるから金港堂を離れて後の美妙齋は全く孤立して、誰とも交際はないから隨つて誰にも餘り同情されないで、社會的にも私的交際にも段々存在を認められなくなつて了つた。

第六、稻舟女史との關係に就ては眞相を判斷する材料を持つてゐないが、無責任な新聞紙に大袈裟に傳へられるほどの不徳が美妙に在つたとは思はれない。美妙にも必ず同情すべき氣の毒な事情が有つたらうと思ふが、平生誰とも交際はないから自然文壇の同情が薄く、同情したいにも同情するだけの材料を持つてる者が無かつたから、蔭にも日向にも美妙の爲め辯疏する事が出來ないで、新聞紙の報道を半分虚傳と思ひつゝも暗々裡に認める外は無かつた。實を云ふと、日本のやうな道徳的基準の低い國で美妙が犯したぐらゐの戀愛的過失で社會的に葬むられて了うといふのは不思議である。が、嶮崚の隘路に立つものは拳石にだも躓いて直ぐ千仭の底に墜ちる。人氣が落ちて下り坂となつた時だから、責むるに足りない聊かの過失でも取返しの付

かない意外な致命傷となつたのであらう。愛の冷却した夫婦の結合は不自然であるとか虚僞であるとかいふ勝手な理窟を附けて不條理極まる破綻を不人情とも沒義道とも思はず、或は三角や四角の戀愛を憶面もなく手柄顔に告白するのを少しも怪まない今から考へると、唯之だけで葬むられて了つたのは誠に氣の毒であつた。

以上は美妙が文壇に失墜した所以の重なる理由である。其以外に幾多の遠因も近因もあらうが、畢竟するに最後が極めて悲慘であつたのは自ら求めて世間や友人の同情を薄くした爲めである。文壇が美妙に背いたのでは無くて美妙が文壇に背いたのである。

だが、ドウしてこんな風に偏小狭隘求めて世間に遠ざかるやうになつたかと云ふと、美妙をこんなに偏屈に孤立を好むやうにならしめた所以の美妙の生立ちの家庭の事情に遡らねばならないが、美妙と交際の極めて淺かつた私は之を究むるだけの材料に不足してをる。が、美妙の生立ちには一貫した一條の悲劇的徑路が有つたやうに聞いてゐる。

（五）　美妙と紅葉との比較

美妙と紅葉とは種々の點で違つてゐた。第一に雅號である。美妙齋美妙と名乘つた理由は知らぬが、別段說明を聞かないでも解るほど露骨であつて詩人の奧床しさを缺いてをる。小說家よりは曲藝師染みて寄席のビラに書かれさうだ。紅葉山人といふは青年時代に芝に住つてゐた因みから紅葉山の人といふ意味で命じたので、格別捻くらない處に洒落の風が現はれてゐる。第二に筆跡である。美妙齋の筆蹟は定家やうの極めて美くしい書風であつたが、何となく藝人披露の名弘めの散らしの板下然として氣品に缺けてゐた。紅葉は蜀山人を學んで、若い頃のは蜀山人以上に街氣滿々としてゐたが、晚年はスツカリ枯れ切つて蒼勁となつた。蜀山人から出て蜀山人よりも力があつて、何處となく豪快の風が現はれてゐた。

風采から云つても、美妙は色白な柔々しい、ドチラかといふと少し柔氣て、如何にも『詩人でムいます』と云つたやうな美男であつたが、紅葉は色の淺黑い、苦み走つた、スツキリと脊の高い江戸前の、美男といふよりは好男子といふ方であつた。美妙は鰡の脊のやうに光つたベラベラ着物に角帶をキチンと締め、イツでも頭髮を奇麗に分けて安香水の匂ひをさしてゐたが、紅葉は燻んだ光らない着物に絞りの兵兒帶をグル／＼巻いて、五分刈頭の紺足袋で八幡黑

の鼻緒の下駄が好きであつた。萬事がこんな風に著るしく違つてゐた。

私が先づ二人の性格の相違を著るしく感じたのは初對面の印象であつた。美妙齋との初對面は前にも云つた通りに何を訊いても知らざる事なく、打てば響くやうに直ぐ答へる博覽に驚かされたが、二度三度と重なるとイツデモ一つ話ばかりをしてゐて博覽の奥底が忽ち看え透いて來たには嫌氣が挿して來た。

紅葉を尋ねたのは美妙に會つてから三四ケ月後であつた。其頃紅葉は飯田町の國學院大學の横町にお祖父さんと一緒に住んでゐた。美妙の武者窓の長屋よりは氣の利いた一軒建であつたが、美妙が既に一人前の紳士であつたと違つて、紅葉はマダ書生ツぽで三疊の書齋に納まつてゐた。何しろ三疊敷だから二三人座るとギツシリ詰つて身動きも出來ない位で、美妙の書齋のやうに嚇かし道具を列べる餘地もなかつたし、美妙のやうに何でも來いと顋を撫でる物識振を發揮しなかつた。例へば美妙は、之なら豈夫知つてゐまいと窃に豫期して質問した西鶴に就てすらも初對面の私を煙に卷くだけの批評をしたが、紅葉は此頃漸と『一代男』を讀んだばかしで何が何やらサツパリ解らない、女の行水してゐる處を隣りの屋根から遠目鏡で覗いてゐる畫

なんぞあつて面白さうだが少しも解らない、源氏よりは難かしいもんだと率直に答へた。美妙はディッケンスもサッカレーも鵜呑にした批評をしたが、紅葉は矢張難かしくて少しも解らないと云つた。字引をコツ〳〵引いて油汗をダク〳〵出して考へ〳〵讀んで、成程コイツは巧エやでは少とも面白く無いと言つた。美妙は學者然と取澄ましてゐたが紅葉は極めてザックバランで少しも飾らなかつた。美妙の知識の領分は可成廣いやうだつたが、イツデモ一つ領分の中を彷徨して同じ話ばかりしてゐた。紅葉は之に反して段々と新らしい領分を開拓して、會ふ度毎に必ず新らしい本を讀んでゐて新らしい話をした。

美妙齋は少しも温か味が無かつた。何度會つても他人行儀で、心底から胸襟を開いて語るといふ事が無かつた。強ち裃を付けた四角四面の切口上で應接すると云ふわけでは無かつたが、態度が何となく餘所〳〵しくて、自分では打解けてるツモリだつたかも知れぬが、他には何時でも城府を設けてるやうに見えた。紅葉は之に反して、腹の中には鐵條網を張つて餘人の闖入を決して許さなかつたが、表面は城門を開放して靴でも草鞋でも出入通り抜け勝手たるべしといふやうな顏をしてゐた。夫ゆゑ美妙齋とは何年交際つても親友となる事が難かしかつたが、

紅葉は初對面の時から百年の友のやうに打解け、戲言も云へば氣焔も吐いて誰とでも直ぐ肝膽を照らして語り合つた。

其實、紅葉は初對面から誰でも親友扱ひするが心から打解けるのでは無かつた。江戸ッ子風の洒脫らしく見えて實は根ッから洒脫で無かつた。硯友社といふ小さな王國に立籠つて容易に人を寄せ付けなかつた。實を云つたら美妙の方がリベラルで、紅葉の方が遙かにオーソドキシカルであつたかも知れぬが、リベラルな美妙が人に嫌はられてオーソドキシカルな紅葉が却て人に親まれたと云ふは紅葉の社交の才が勝れてゐたからで、文壇的には狹量偏固な鎖港攘夷黨であつても、社交上には助才なく振舞つて勢力を扶植し、硯友社以外にも多數の後援を擁してゐた。美妙は之に反して自分から世間を狹くして友人にも遠ざかつたから、文壇的にも社會的にも孤獨無援の位置に落ちて、終に悲慘の生涯の幕を閉ぢた。

（六）悲慘な最後

美妙の文壇生活の最高調は『都之花』時代であつたが、社會生活としての最得意は平永町に

新築した頃であつたらう。駿河臺の暗ぼつたい旗本屋敷の長屋から移轉したので、タシカ今の神田キネマの邊であつた。軒並の町家の中で目立つた相當に大きな門構への二階建で、間數も可成多かつたらしい。木口は餘り上等とも思はなかつたが、左に右く木の香のする明るい新築だつた。今と違つてマダ操觚者の報酬の薄かつた其頃に三十になるかならぬかの文筆勞働者で之だけの家を建築したのは左も右くも成功者であつた。

書齋は二階であつたが、椅子テーブル式で、クローム畫の額や、ブロンヅや、西洋家具の古道具屋から仕入れたものをゴテ／＼列べ、何のツモリか知らぬが彈けもせぬヴァイオリンが壁へ掛けてあつた。今なら文化生活で、美妙の得意は此の安價洋風裝飾に現れてゐた。が、其頃は字書を編纂してゐたので文壇人としては既に一歩を降り坂に踏入れてゐたのだ。

美妙を訪問したのは前後三四回しか無かつたが、此の平永町の新居を偶然通り縋りに尋ねたのが最後であつた。僅か二十分ほど話して美術學校の一年生ぐらゐが作つたらしい木雕の牛を見せられたが、夫ぎり美妙とは會はなかつた。自分ばかりぢや無い、其頃から以後は美妙が時折寄稿した雜誌の編輯者以外には美妙と往來したものは殆んど無かつたらう。

夫でも稲舟と結婚した時は兩人連名で益々御愛顧を願ふといふやうな開業の引札然たる活版摺の通知を交友間に配つた。が、新婚のお祝ひをする遑が無い中に最う二人の戀の破綻が新聞で剔抉かれた。夫から以來はラムネを作つて損をしたとか、公園藝妓を引入れたとかいふやうな面白くない風說を新聞の三面で聞くばかりで、文壇人としての消息は丸きり絶えて了つた。夫から二三年經つてから復たボツ／＼と美妙の名が低級な雜誌に見え出して、然ういふ雜誌の發行者や編輯者の口から噂を聞く事があつたが、お情に原稿を買つてやるといふやうな口吻で美妙の氣の毒な境遇が想像された。書いたものも亦色も香も艶も生氣も無い萎れた花の憐れさを思はせるやうなものばかりだつた。

二葉亭が沒した時、諸家の追懷談を集めた追悼錄を作らうとして少年時代の友たる美妙齋へも寄稿を依賴した。其時の美妙の返事は敗殘者の卑下した文體で、勝誇つた寵兒のプライドに充ちた昔の面影は微塵も見られないで惻隱に堪へられなかつた。

夫から一二年經つてからであらう、美妙の訃の傳はつたのは。最後の隱れ家は駒込の傳中邊だと聞いたが、丁度旅行してゐたし、十何年間も丸で音信不通であつたし、其以前とても親友

といふほどの關係で無かつたから葬儀に行かなかつたが、後に聞くと送棺者が唯僅かに三四人だつたさうだ。自ら世を狹くしたのだとは云へ、誠に氣の毒な最後であつた

夫から數月經つて聞いた咄だが、最後は石橋思案と丸岡九華が專ら世話をしたさうだ。愈々重體となつてから、九華はシユークリームが美妙の大好物であると聞いて見舞に一と折持つて行つた。美妙は大變喜んだので、家人も厚く感謝して大切にし、病人の外は子供にさへも手をつけさせなかつたさうで、黴の生へたシユークリームが臨終の枕頭に殘つてゐたさうだ。日本の言文一致の先驅者(或は創始者)として文壇の風雲を捲起した一代の才人の終焉として何たる悲慘の逸事であらう。恁ういふ悲慘な運命を速いたのは畢竟美妙自身の罪であつたが、身から出た銹で有つたにしても、日本の新文體の創始者に對して天才の一失を寛容しなかつた社會は實に殘忍である。

(大正十三年九月補修再錄)

硯友社の勃興と道程

（二）飯田町の中坂――

馬琴と「まどき」と思案外史

震災で破壊された東京の史蹟の其中で最も惜まれる一つは馬琴の硯の水の井戸である。馬琴の舊棲は何度も修繕されて殆んど舊觀を喪つてるから、崩壊しても惜く無いが、臺所口の井戸は馬琴の在世時の儘ださうだから、埋められたと聞くと惜まれる。が、井戸だから瓦や土砂で埋められても舊容を恢復するのは容易である。

此の馬琴の硯の水の井戸は飯田町の中坂の中途、世繼稻荷の筋向ひの路次の奥に在る。中坂と云つても界隈の人を除いては餘り知る者もあるまいが、九段の次の險しい坂である。東京のジオグラフキーを書くものは徳川三百年間隨一の大文豪たる瀧澤馬琴の故居の名蹟としての此の中坂を特記する事を忘れてはならない。

馬琴は二十七八歳、通油町の地本問屋蔦屋重三郎の帳面附けをしてゐた頃或人の世話で中坂の下駄屋で家主なる寡婦の入夫となつた。漸く高名となつてからは下駄屋を罷めて手習師匠となり、晩年には飯田町の家は娘に婿を取つて家主の株を繼がせ、自分は忰宗伯の爲めに買つた明神下の家に移つて同居したが、一生の殆んど大部分は飯田町に暮したのだ。

九段の長谷川寫眞館の眞向ひを東へ下りる坂の下り口の北側が今では空地となつてるが、此空地を外れて二三軒目にツイ二十年前まで有つた小さな瀬戸物屋が馬琴の娘の婿の家で、今でも子孫が無商賣で此裏に住んでるさうだ。此の路次裏の井戸が卽ち馬琴の硯の水で、文藝の理解の無い官憲も馬琴の名だけは知つてゐたと見えて、數年前から東京史蹟の高札が建てられた。王侯將相よりも文豪の尊敬される歐羅巴なら疾くに日本の名蹟とし東京の名譽とし將た飯田町の誇りとして手厚く保管し、金石に勒して永久に記念されべき筈であるが、戰場で拾つて來た砲彈の記念碑を建てる事を知つてゐても學者や文人の墓石は平氣で破壞するを少しも怪まない日本では、縱令高札を建てゝも何時此の貴い古井戸を埋めて了はないとは限らない。が、此の古井戸が怎うならうとも、此の中坂はグレート馬琴が半生を暮した故居の地として永久に記念

されべき史蹟である。

不思議にも此の中坂は文豪馬琴の史蹟であると共に亦、明治の文學史に一エポックを作つた硯友社の發祥地でもある。

中坂上の南側に秀光舍といふ印刷所がある。此の秀光舍の前身は同益出版社と云つて、今から四十年前に小說複刻の元祖たる南傳馬町の稗史出版社に續いて馬琴の『俊寛僧都島物語』や風來の『六々部集』を覆刻したので讀書界に知られた印刷所であつた。此工場と相對つてる北側に、今は地震で崩されて舊觀を更めて了つたが、附屬の倉庫の白壁の土藏があつた。硯友社といふ小さな標札が此の土藏の戸口に掛つたのがタシカ明治二十一年夏の初めであつた。尤も『我樂多文庫』は夫より一ケ月前頃から公刊されてゐたが、飯田町の國學院大學の横町の尾崎の家を編輯所兼發行所としてゐた頃には誰にも餘り知られなかつた。人通りの多い中坂上に看板を掛けてから初めて行人の目を牽いた。

馬琴の後裔だといふ瀨戸物屋は爰から僅か十二三軒目であつた。馬琴が江戸一の作者として盛んに鳴らした頃は手習師匠であつたし、家主であつたし、殊にあれだけの學問見識があつた

のだから、馬琴の淸右衞門は必ず町内の學者でもあり口利きでもあつたに相違なく、硯友社の札を掛けたあたりは大方淸右衞門の世話になつてゐたらうと思ふ。少くも硯友社は馬琴の下駄の迹を印し馬琴の聲を聞いた地に育つたので、幽明相隔つると云へ、馬琴と硯友社とは云はゞ大家と店子との關係であつた。

更に此の中坂に就て最う一つ記憶すべき事がある。其頃の讀賣新聞の投書欄は當時の唯一の文藝場であつて、前島和橋、南新二、琴通舍康樂、高畠藍泉といふやうな當時の名流が盛んに寄書して紙面を賑はしてゐた。就中、最も輕い諷喩と圓轉自在の名文で聞えたのが中坂まどきであつて、「まどき」の名は當時の讀賣新聞の讀者の間に喧傳された。此の「まどき」といふは偕行社の眞裏に當るの世繼稻荷の奧の代用小學校の持主で本名を中川眞節と云つた。「まどき」は最う三十年も前に死んで了つたが、當時の讀賣新聞投書欄の愛讀者は今でも「まどき」の名を記憶してゐるだらう。

「まどき」が盛んに讀賣の投書欄を賑はして殆んど獨擅場の觀があつた頃、中坂思案外史の名がポツ〳〵投書欄に見え出した。時としては飯台思案外史とも稱してゐた。「まどき」の老熟に

は及ばなかつたが、折々心憎い事を云ふので讀者の注意を牽いた。同じ中坂だから「まどき」の弟分か弟子ぢや無からうかといふ噂もあつて、「まどき」の名が盛んなるに伴れて思案外史の名も亦段々と聞えて來た。

然るに二十一年の五月の末『我樂多文庫』の第一號が創刊されたのを早速買つて見ると、其卷頭の辭を書いたのが誰あらう思案外史であつた。其頃中坂下に住んでゐて朝夕此界隈を散歩した私は馬琴の瀨戸物屋の前を通つて文豪を偲ぶと共に中坂といふ名に興味を持ち、此の中坂を冠する思案外史は中坂の何邊らあたりに住んでる人だらうと揣摩し、此の思案外史の卷頭の辭を載せた『我樂多文庫』をも矢張中坂に緣があるやうに思つてゐた。

すると文庫が創刊されてから二三ケ月目、不斗或る夕方中坂上を彷徨いてゐると、偶然見附けたのが硯友社の標札であつた。硯友社が如何なる人の團體だとも、思案外史が如何なる人であらうとも考へないで、唯何かなしに行衞を知らなかつた未見の友の有處を突留めたやうな氣がして會心の微笑を禁じ得なかつた。

之より先き數年、今は電車通りの裏となつてる神保町筋の今川小路に武藏屋と云ふ繪双紙屋

があつた。其頃は專門の雜誌屋が無くて繪双紙屋で雜誌を賣つてゐた。到つて貧乏なケチな店だつたが、『金毘羅利生記』を出版してマンマと失敗した面胞だらけの息子が少しばかり貸本屋學問をして都々逸や川柳の咄ぐらゐは出來た。此の店先きで折々邂逅ふ五分刈の大きな頭の近眼鏡をギラ／＼光らした青年が有つた。いつでもドッカと腰を落付けては頻りに都々逸や川柳の氣焔を揚げてゐた。何處の人か知らぬが、雜誌や新刊書を何でも洩れなく讀む人だと感心して、いつでも其の氣焔咄を謹聽してゐた。

一度會つたら忘れる事の出來ない特徴のある人だから、其後往來で摺違う度にアノ人だなと思つた。が、此方は能く覺えてゐても、先方の眼中には脊の低い兒供々々した私が殘つてる筈が無いから、何度摺れ違つてもツイぞ一度顏で會釋した事さい無かつた。勿論、口を利いた事は猶更無かつた。

處が其後、豫備門（今の高等學校）の生徒控室でゆくりなくも此の五分刈の巨頭君に邂逅つて、喫驚して竊に傍人に訊いて、初めて之が石橋助三郎といふ人であると敎へられた。が、之が吾に聞く中坂思案外史だとはマダ其時は知らなかつた。

一體私は頗る臆病な青年であつて、人から話し掛けられゝば知らず、自分から進んで口を開く事は決して無かつた。夫故、其後何度も顏を見ても、氣焰咄を恐る〱傍聞してゐるだけで、益々都々逸や川柳に精しいのを感服したが、讀賣の投書欄でお馴染の中坂乃至飯台思案外史を此の五分刈の巨頭君に結びつけて考へる事は出來なかつた。其頃は何かなしに新聞に投書でもする人は世故にも長け文章にも長じた中老人だとばかり思つてゐたから、中坂思案外史も伯父さん分に當る年配の人だとばかり信じ切つてゐた。

『我樂多文庫』が公刊された時、早速買つて來て第一に眼に留つたのが思案外史の卷頭の辭であつたが、硯友社が私と略ぼ同齡の青年の團體だとも、思案外史が二三年來度々邂逅ふ巨頭の青年だとも少しも知らなかつた。之を知つたのは夫より二三年後であつて、アレが思案外史かと知つた時は啞然として、道理こそ都々逸に精しい人であると思つた。

思案外史は其頃中坂から一丁半ばかり、富士見町の裁判所の横手の、今は曉星中學校の構内に圍込まれた處に住んでゐたから、中坂といふは少し無理だが、馬琴が屢々飯台簑笠漁隱と稱した如くに飯台を戴く因縁は持つてゐたのだ。

（二）我樂多文庫

思案外史の卷頭の辭を首途の祝言として鹿島立した『我樂多文庫』は四六倍判十六頁の表紙無しの疊放しで、今は廢れてゐるが其頃流行つた清朝活字の四號刷であつた。無裝飾のスツキリした、少しも體裁を飾らない、微塵も忌味ツ氣が無い江戸前の雜誌であつて、正札附金三錢が貧乏書生に取つては殊に嬉しかつた。

一日繪双紙屋の店を覗かないと氣持が惡るかつた私は、文庫が店頭に列んだ當日早速買つて來た。全部に若々しい生氣が溢れてゐたのは何となく共鳴を感じたが、世間を一向知らない私は前にも云ふ通り恁ういふものを書く人は皆世の中の酸いも甘いも嚙分けた中年以上の通人だとばかり漠然と思つて、我々同年配の青年の團體とは少しも想像しなかつた。だが、卷頭の辭から廣告社告の末まで一字も餘さず讀んで行く中に、硯友社の社則が其頃の青年の集會の會規と何處かに共通點があるのを發見して、朧ろ氣ながらも割合に若い人たちの集團であると氣が付いて、恁うして恁んな巧い事を云へるだらうと益々感服した。

硯友社の異宗門たる私は『我樂多文庫』の前世紀の歴史に就ては何も知らないが、第一號の思案の卷頭の辭に由ると、五ヶ年以前狂文の羽檄を四方に飛ばして同好の勇士を狩集めとあるから、私が初めて繪双紙屋の店先きで巨頭の青年思案外史の博覧に驚かされた頃には最早成立してゐたのだ。「字は大篆の讀みにくゝ繪は丹綠のあどけない」回覧雑誌として第一號を發表したのが明治十八年の五月二日で、九號から謄寫版と改めて十七號を重ねたといふから、愈々街頭に立つまでの陣容を整へるには可成の長い準備を要したので、一と度起つや忽ち疾風枯葉を卷くが如くに文壇を切捲つたのも當然である。

文庫の連名中、思案と共に世間に知られてゐたのは美妙齋であつた。美妙の名は思案のやうに早くから賣れてゐなかつたが、其の『武藏野』は天才の出現のやうに迎へられた。紅葉も亦讀賣新聞の寄書家の一人であつたが、才幹はマダ認められなかつたので、三人の社幹の中では美妙齋の名が世間的には最も重きをなした。

が、紅葉の才氣は第一號以來の『風流京人形』に早くも現はれて、水際立つた文章の冴えが一段引立つて見えた。且隅から隅まで萬遍なく行渡つた編輯上の努力の跡が歴々として、一座

の總帥たる貫錄が自づから現はれてゐた。

が、一日早く賣出してゐた美妙齋の『情詩人』は矢張一番評判となつた。殊に當時の女學生間には此の爲永を今樣としたやうな生溫い戀物語が喜ばれて、『わたしの心はこの胡椒……嚙みくだいて粉にしてかをりを見て下さるなら……』といふやうなキザな文句が若い女に喜ばれて暗誦されたもんだ。が、紅葉の努力は全幅に溢れてゐたが、美妙齋の色彩は小說以外には頗る稀薄であつた。美妙齋が冷淡であつた乎、紅葉が一人で搔廻してゐた乎、何方か知らぬが何の道『我樂多文庫』には美妙齋の氣分が少しも現れてゐなかつたから、自然文庫の讀者には紅葉の印象が次第に濃くなつた。其中に美妙齋はリューマチスと稱して第六號からは小說を休載し、其後九號と十一號とに鳥渡顏を出したぎりで何時となく分離して了つたから、美妙齋と硯友社との關係は有つた乎無かつた乎忽ち世間から忘れられて了つた。

が、美妙齋と思案と紅葉とが抑々の創立者であつたのは第一號に載つてる百名近くの社員の面々が各々紹介者があるに反して、三人に限つて紹介者が無いのでも明らかである。ツマリ此三人が硯友社の創立發起人であり且無限責任者であつたが、如何なる理由があつた乎して美妙

齋は創刊匆々無限責任を忘れて忽ち分離して了つた。

尤も兩雄並び立たずで、紅葉は本より美妙の指揮を仰ぐを欲しなかつたらうし、美妙は一歩を先んじて乘出した一日の長を頼んでゐたに相違なく、ドチラにも同感すべき事情があつたと思ふが、左に右く紅葉の政治的才幹が硯友社を結束し、美妙が忽ち背いて孤立したのが二者の成功を著るしく懸隔さした一つの原因であつた。

文庫創刊當時の硯友社員は殆んど百名近くを算した。其中には一時大阪で盛んに人氣を湧かして故齋以後の全盛を極めた渡邊霞亭の舊名朝霞や、不幸にして早世して今では殆んど忘られた慶應出身の小說家井上笠園や、達摩の蒐集家として奇名隱れなかつた理學士西芳菲山人の名が見える。が、紙面に載つてるのは悉く匿名だから、誰が誰であるか今では模索し難い。が、萬更楠の藁人形らしくも無かつたので、今なら大方(おほかた)後援者とか維持會員とかいふやうな連中であつたらう。ツマリ恁ういふ多數の應援隊を作つてフレエ〳〵と盛んに旗を振らしたのは紅葉の才幹であつて、硯友社がメキ〳〵文壇に勢力を伸して行つたのは是等の多數の應援隊の社會的潜勢力に負ふ處が少なくなかつたのである。

が、實際に文庫の編輯に與かつてゐたのは樂屋小說の『紅子戲語』に現れる眉山、漣、思案、紅葉、月の舍圓、香夢樓綠、及び春亭九華の八名であつた。漣は紅葉美妙と並んで第一號から小說を載せ、硯友社の麒麟兒たる才鋒を早くから現はしてゐた。

が、此の八名中、美妙は社幹といふ條、初めから關係が薄かつた。圓と綠は餘り振はないで殆んど存在を認められなかつた。九華は初めの中こそ新體詩を捻くつて、能く妖怪を持出すので新體詩壇の李長吉と同人間に稱されてゐたが、高商卒業後は算盤が忙がしくなつて、何時の間にか操觚を遠ざかつて了つた。夫故實際に硯友社の基礎を固めた元勳ともいふべきは紅葉、思案、漣、眉山の四人であつて、水蔭や乙羽や柳浪や其他の面々は硯友社の旗幟が振つてから後に加盟したので、各々一二年乃至數年遲れてゐた。

『我樂多文庫』は第十號から京傳馬琴種彥等の作者の印譜散らしの立派な表紙が付き、體裁も整つた代りに幾分か市氣を帶びて來た。が、尙だ放縱な駄々ッ子的氣分が何處かに殘つてゐたが、第十七號以後唯の『文庫』と改題してからは世間並の唯の雜誌となつて了つた。我樂多を標榜した頃には我樂多の分子が混つてゐた代りに生氣に充ちてゐたが、我樂多を取つて了つて

からはキチンと締つた代りに市氣を帶びて若々しい活氣が段々稀薄になつた。此の『文庫』も一年かそこらで廢刊となり、夫から暫らくしてから『千紫萬紅』といふ新らしい名で更に發行されたが、此の『千紫萬紅』は硯友社よりも寧ろ紅葉一個の機關であつて、編輯から印刷から體裁から全部に渉つて紅葉好みの贅澤な元祿趣味が現はれ、内容も一と粒選で少しも算盤氣が無く、頗る垢拔けがして氣持が宜かつたが、餘り算盤氣が無さ過ぎて、初めから永續しさうもなかつた。果して三四號で永遠の休刊となつた。

此外に文庫の出店と云ふやうな雜誌があつた。柳浪が主宰した『小文學』と『江戸紫』と、水蔭が編輯した『小櫻縅』であつて、何れも明治二十五六年頃の發行であつた。此の『小櫻縅』から田山花袋が出身したは鶯の巣から杜鵑が巣立したやうなものだ。

今から顧みると丸で夢のやうだ。若い花々しい火花が出るやうな元氣の紅葉は三十七の壯齡で脆くも消え、光源氏のやうに美くしかつた紅顏の眉山は思掛けない悲慘の最後を遂げ、水蔭は芝居と相撲に隱れ、柳浪は息子さんが豪くなつて樂隱居して了つた。漣は早くから小説の筆を絶ち、小波伯父さんとなつて揮毫とお伽講話に益々活動してゐるが、今では文壇よりは寧ろ

通俗教育の人である。卷頭の辭を書いた思案外史は早くから表面の活動よりは緣の下の力持の役廻りをして、乙羽無き後の硯友社の總務として『文藝倶樂部』の一角に巨頭を振つてゐたが、數年前から宿痾の爲めに全く文壇を隱退して了つた。

（三）硯友社の當時の生活――『紅子戲語』

當時の硯友社の生活を知るには『我樂多文庫』の十號から十三號へ掛けて連載された紅葉の『紅子戲語』を見るに如くは無い。硯友社員も文學を本職とするやうになつてからは矢張鹽酢に追はれて、中には隨分辛い浮世の鹽を嘗めさせられた人もあつたが、其の看板を掲げた抑もの初めは皆學生籍の若旦那株であつて、眞面目臭つて文學と云ふものゝ實は道樂であつたのだ。第一號の廣告面に或る人々の連名で、『拙等へ文藝上に關し御用の諸粹兒は爾來硯友社へ御文通あられませうツ、オホン』と云ふ廣告が載つてをる。第三號には、硯友社員では無いらしいが露の屋尾花といふ人の改名披露が載つてをる。『今般去る貴婦人の需に應じグツト艶ツぽく露の家尾花と改號』云々といふ文である。先づ萬事が恁う云つた素豆腐式若旦那調子で、雅號を

見ても素晴らしいのになると「唖蓮美也散生」といふやうな歯の浮くやうなのがある。頭株の數人を除いたら手もなく「親釜集」連で、今なら葉書集の投書家程度であつた。尤も是等は硯友社員と云ふ條、フレー〳〵と應援する旗振連中であつた。

が、硯友社を知るには其頃の文壇の調子を考へなければならない。當時は一切の舊文化が維新の革命で破壞され、京傳や馬琴の流を汲んだ戲作者の殘黨が新聞藝人と伍して僅かに餘喘を保つてゐたのだから、偶々文學勃興の機運が熟しても渠等は其運動に與かる力が無くて、勃萃無味なる政治小說や半熟未成の飜譯小說の跋扈するまゝに委してゐた。云はゞ當時の文壇は何にも知らないシロウトが白粉を塗つて舞臺に踊り出し、巡査が人民を諭すやうな口調で女の聲色を遣つたり政談演說をしたりするやうなものばかりで、多少でも文藝の造詣あるものは此の滑稽な田舍講談を馬鹿々々しくて聞いてられなかつた。硯友社は恁ういふ時代に起つたので、當時の政治家どもが未熟な政治的空想を捏ちて小說家顏するを片腹痛く思つて、之に反抗して化政度の新らしいレネイサンスの運動を起さうとしたのだ。紅葉が元祿復興を唱へたのは硏鑽の歩を進めた數年後であつて勃興當初は矢張化政度の復現であつたのだ。

硯友社の調子が初めから如何にも輕くて浮はついて見えたのは、一つは當時文壇に重きをなしたユーゴーやヂスレリーの翻譯小說に馴れた眼で見較べられたからであるが、一つは硯友社の藝術至上が京傳三馬系統の化政度戲作者氣質に卽して、兎角世間を茶にして浮世三分五厘と脂下るテンと面白笑止しき道樂三昧に墮したからである。渠等の把持した藝術至上は必ずしも誤まつてゐなかつたが、新らしい文藝を叫びつゝも時代遲れの化政度の戲作者生活をお手本にしたのが誤りであつた。尤も其頃は英國文學ですら殆んど理解されてゐなかつた。日本の小說戲曲でさへ京傳馬琴以前は餘り讀まれてゐなかつた。此時代の硯友社の作風や態度を佛蘭西や露西亞の近代作家に對するやうな心持で批評するのは時代を無視する色盲である。

元來都會生活には今も昔も通有のデカダン氣分がある。殊に德川末季の江戸生活には三百年の太平に弛緩した廢頽氣分が著るしく濃厚であつて、快樂主義の京傳や三馬の生活が遊戲的であつたは勿論、道學の凝まり仁義忠孝の化物のやうな馬琴すらも『仇討義理與犢鼻褌』といふやうな、外題を見ても內容が察しられる意外の遊戲的な作を何篇も作つてをる。此の浮世三分五厘と脂下つて世間を茶にする江戸作者の洒落な風は江戸の文化に親しむものゝ大部分が浸染

してゐたので、强ち硯友社のみに限らなかつた。一と頃根岸黨と歌はれた饗庭篁村一派の連中には硯友社に一倍輪を掛けた昔の戲作者氣質があつた。今でこそ謹嚴方直な道學先生となつて門下に煙がられてゐる坪内博士も、春廼舍朧時代には矢張此氣分が濃厚であつたのは雅號でも推量られやう。其頃から露西亞の深酷な苦鹹の文學を味得して、風采人品から云つても微塵も戲作者氣の無かつた二葉亭でさへも半面には亦此氣分を可成多量に持つてゐた。看方に由ては此の遊戲氣分が都會文藝の一要素となつてるので、永井荷風や小山内薫や夏目漱石の提携を受けた三田派や人生派の藝術も著るしく此の戲作者的氣分を持つてゐる。强ち硯友社ばかりが戲作者風では無かつたのだが、硯友社は思ふ存分に傍若無人に此氣分を發揮したので、硯友社が單獨で戲作者の毀を脊負つて了つた。が、此の何者にも制肘されない放縱な駄々ッ子的氣分が當時の文學好きの靑年の共鳴を惹くに十分力があつた。

『紅子戲語』には當時の硯友社の生活が活けるが如くに描かれ、幹部の八人の風丰動作が紙上に躍り出してゐる。若き紅葉の技倆を見るべき傑作の一つであるが、其以外に此作は此理由で後世文學史家の資料とすべき意味深いものである。が、爰には此中の一二節を引いて記述する



硯友社の樂屋

（綠芽畫）

閒緩こい眞似をするよりは手取早く渠等の生活の十分現れてる松岡緑芽の挿畫を示すが早手廻しである。緑芽も亦硯友社員で當時は佛法科の學生であつた。卒業後間もなく、千葉の裁判所に在任中早世して餘り現れなかつたが、畫才があつてキャリケーチュアに長じてゐた。八人の風丰が活き〳〵として、若い花やかな世間を茶にする氣分が全幅に漂ふてをる。

が、其頃の渠等は皆學生籍に在つた。此の放縱な生活が如何に學校當局者の眼に映じたかは第四號の廣告に歷然と現はれてをる。思案は『この度某學校を退學し以來は專ら文庫の編輯に從事す』と披露し、前記の劇雅堂緑芽と紅葉とは『當號限り退社す』と廣告して、編輯人尾崎德太郎の名を除いた。が、尾崎德太郎は退社しても紅葉山人は依然社幹の名を列ねて小說を續載してゐたので、裏面の消息は此廣告の中に明かに讀まれた。

（四） 文士劇の先驅、黃鶴樓の芝居

判然とは覺えないが、たしか二十三年の春であつた。小石川水道端の黃鶴樓で硯友社の芝居があつた。黃鶴樓といふは其頃區長をした小石川の素封家佐藤氏の邸で、氏の子息が硯友社員

であつた關係から借りたのである。無論、劇に就ての特別の抱負があつたわけで無く、云はゞ夷子講の茶番のやうなものであつたが、左に右く文士劇の先駈をしたので、何事にも新らしい試みに卒先した當時の硯友社の意氣を窺ふ事が出來る。

今なら舞臺監督兼作者となつたのが水蔭で、一番目の『積る怨切子燈籠』といふ半世話物の仇討劇も二番目の何とか太平記と云つた大塔宮の吉野落を材とした一幕物も皆水蔭の書卸しであつた。水蔭は舞臺監督と作者とを兼ねた上に尾上江見藏と名乘つて舞臺にも登場した。水蔭は今では專門劇作者となつてるが、此時分からの劇道熱心家であつた。

黄鶴樓の庭前に作つた假舞臺と面して見物席に充てたのは二タ間續きの大廣間であつて、二三百人のお客がギッシリ詰つた。森槐南、依田學海といふやうな顔振れも見えたが、大部分は若い女で、紅葉さん漣さんといふ媚かしい囁嚅が其處にも此處にも洩れて、硯友社此夜の人氣は當時の花形たる家橘や染五郎を壓してゐた。

其晩の切が『花競八才子』といふ題で、硯友社の幹部の面々が町奴の伊達姿で舞臺に列んで自作の「つらね」を掛合に渡すといふ趣向であつた。花道から八才子が六方を踏んで現れると

いふ花々しい出に、どうしたものだかお約束の素足の下駄穿きを紅葉だけが紺足袋を脱ぐのを忘れてゐた。見物席のそこらこゝらから笑ひ私語く聲が聞えたが、有繋は紅葉である、少しも周章ないで舞臺へ來ると、グルリと後ろ向きになつて悠然として紺足袋を脱いだ。『之だからシロウトは面白いよ。』と學海先生は大に悦に入つてゐた。

無論內輪の催しであつたが、學海翁が讀賣で劇評を發表したのでパッと評判となつて、此次には是非切符を貰ひたいといふものが多勢あつた。が、夫から後は社內の餘興的の催しは一二度あつたさうだが、半公開的に大袈裟に催したのは唯一回ぎりであつた。

黃鶴樓劇は前にも云つた通り格別抱負があつたわけでは無かつた。が、當時の作者兼俳優兼舞臺監督たる水蔭は本より紅葉も亦早くから劇の興味を持つてゐたので、今に脚本を書く〳〵と常に云ひ〳〵した。紅葉が今少し長生きしたら小說よりは脚本にヨリ以上成功したらう。最後の落付き場は或は劇作家であつたかも知れない。

（五）『新著百種』―― 薄倖の作家北村三唖と天才露伴の『風流佛』

硯友社の世間に乘出したのは『我樂多文庫』であつたが、其藝術を認められて文壇の位置を確立したのは『新著百種』であつた。

『新著百種』を語る前に先づ發行者たる吉岡哲太郎を紹介しなけりやならない。吉岡は水産局の技師として十五六年前に物故したが、東大出身の化學專攻の理學士であつた。科學者に似合はぬ經紀の才があつて、大學を出ると直ぐ出版業を經營した。吉岡の業績に就て特記すべきは"The Student" の發行である。英語書生對手の啓蒙的な語學雜誌であつたが、矢張當時の歐化熱が産出したもので、日本人の手に成つた外國語雜誌の開山である。一時は可成な部數が出て、和田垣博士の赤壁賦や忠臣藏の英譯が青年讀者の評判となつた。佐藤顯理(ヘンリー)と云つても今は餘り知る人も無からうが、一時は英文家として鳴らした佐藤顯理(ヘンリー)が世間から認められたのも此雜誌の寄稿で、安鶴傳(あんつるでん)といふのが取材が面白いので評判された。今では國民競技となつてる野球や庭球の方式を當時の高等學校の教師たる英人ストレンジの筆で初めて教へられたのも亦此雜誌であつて、當時の英語書生は皆此雜誌を愛讀したもんだ。

吉岡は出版業の傍ら私立學校の教師をしてゐた。學校で英文の講義や輪講をしながら生徒に

向つて、『たゞ講義や輪講をしたつて詰らんから毎日濟んだ處を諸君が代る〳〵飜譯して見ちや怎うだ。出版すりや牛肉ぐらゐ喰へるぜ、』など云つたもんだ。レムゼンの化學を自分で飜譯して自分で出版し、自分の學校の生徒の參考書として賣付けたりした。

恁ういふ商賣人肌の男だつたから早くも紅葉初め硯友社の奇才に目をつけて『新著百種』を思ひ立つた。尤も初めは政治、宗教、哲學、科學、工藝、美術、何呉れとなく多方面に渉つた叢書を作るツモリで、小說一方と限つたわけでは無かつたのだ。假に小說を中心とするにしても各方面の作家を網羅する計畫で、硯友社叢書とするツモリは無かつたのだ。が、尾崎の派手な創作が豫期以上の人氣を博した爲めに自然と尾崎の意見が重きをなして、何時の間にか硯友社の機關のやうになつて了つた。

『新著百種』の第一篇たる『色懺悔』は紅葉の出世作であつた。『色懺悔』以前、紅葉の奇才は既に認められてゐたが、世間の人氣を一時に沸騰さしたのは『色懺悔』であつた。歐化主義の反動が文學上にも及ぼして安價なシャボン臭い政治小說や人情小說が飽かれて來た時だつたので、『色懺悔』といふやうな濃艶な元祿情味を滴たらした書名が第一に人氣に投じて、內容

は左して勝れたものでは無かつたが、味淋と鰹節のコッテリした元祿張の文章味が讀書界を沸騰さした。左しもに飛ぶ鳥を落す勢ひの美妙齋の人氣も一時にガタ落ちがして、紅葉露作が取つて之に代つたのは、畢竟歐化主義と國粹主義との勢力消長に原因してゐるので、强ち紅葉と美妙齋との藝術的優勝劣敗では無いのである。

先陣の紅葉が先づ花々しい勝名乘を擧げたので、『新著百種』は一足飛びに出版界の一枚看板となり、紅葉胸中の成竹は漸く熟して此機を外さず硯友社の勢力展開の歩を進めた。第二篇の饗庭篁村の『堀出し物』は丁度新店の見世開きに鄰家の老舗の番頭を傭つて來たやうなものであるが、續いて思案の『乙女心』、漣の『妹脊貝』と、豫定の如くに第三陣第四陣と順々に繰出して、盛んに軍容を整へて威武を張つた。三國志流に云へば旌旗林の如く風に飜つて喊聲天地に震ふといふやうな凄まじい勢ひだつた。ツマリ『我樂多文庫』は硯友社の名題披露の初舞臺で、其の艶つぽい花やかな元祿張の藝風を示した顏見世狂言は『新著百種』であつた。硯友社の基礎は此の『新著百種』で固められた。

『新著百種』に就て憶出されるは薄倖の作家北村三唖である。三唖は土佐の生れで、現内閣の

ベリ〳〵で時めいてる仙石貢の親戚である。隨つて土佐出身の名士には親眤があつたが、文人特有の狷介と懶惰とズボラが累をなして同鄕の先輩に近づかず、硯友社に投じて紅葉の庇護の下に『新著百種』の一冊として『石倉新五左衛門』を發表した。

甘ツたるい戀物語で食もたれしてゐる處へ三唖の人を茶にする三馬式の輕い滑稽は餅菓子のあとへ鹽煎餠を出したやうなもので、三唖の處女作は可成に受けた。此の初陣の功名に乘じて續いて硯友社の諸豪と轡を駢べて二作三作と發表したなら三唖も亦必ず相當の名を成して操觚の位置を固めたであらうが、性來の狷介と懶惰とズボラとが文壇にも累をなし、其上に硯友社からは新參者として外樣扱ひされ、紅葉にも餘り氣に入らないで引立てられなかつた。最後が岡山の山陽新報社に口があつたを幸ひに落延びて、馬骨と改名して田舍新聞に隱れたが、一時馬骨の名が岡山に振つたほど地方新聞小說家としては可成に幅を利かした。が、持つて生れた狷介と懶惰とズボラとは爰でも永續きがしないで、折角數年の辛抱で築き上げた地方新聞社の位置をも些細な失敗で棄てるべく餘儀なくされた。夫から後は阪神附近をアチコチと流離してゐたが、ドコにも容れられないで到頭九州に渡つて別府に逼息し、生活に勞れた病軀を抱へて

淋しく暮した。再び上京したらと元氣を附けてやつた事もあつたが、盛返す勇氣もなくて悶々數年の後、終に大正四年の初冬に別府の同情深い友の家で淋しい敗殘者の生涯を終つた。三唖は『石倉新五左衛門』一冊の外には中央文壇に何の足跡をも殘さないで今では殆んど忘られてゐるが、亦明治の數奇傳中の薄倖なる奇才であつた。

『新著百種』は薄命なる才人三唖を暗黑なる生涯に送り出すと同時に天才露伴の『風流佛』を開眼して赫灼たる前途を耀かした。露伴の初めて世間に發表した作は『都之花』の『露團々』であつて、奇思全湧する意表外の脚色が世間を驚かしたが、雄大なる詩想の群を挺んづるを認められたのは『風流佛』であつた。紅葉の『色懺悔』は萬朶の花が一時に咲匂ふて馥郁たる花の香に息の塞るやうな感があつたが、露伴の『風流佛』は千里漠々たる廣野に彷徨して黄昏れる時、忽然薄靄を排して一大銀輪のヌッと出づるを望むが如く、又千山萬岳の重疊たる中に光明赫灼たる彌陀の山越を迎ふる如き感を抱かしめた。硯友社員に非ざる露伴の『風流佛』を紹介したのは『新著百種』の最も大なる貢獻であつた。

（六）漣　山　人

巖谷の伯父さんと云つたらドンナ山の中の兒供でも知つてるが、漣山人では都會の中學生にも今では通用しない。獨逸から歸つて來てからの漣は出山の釋迦が成覺したやうに小說家たる過去を忘れてお伽噺の小波となつて了つた。が、巖谷の伯父さんの出世作は『我樂多文庫』の創刊號から卷頭を飾つた『五月鯉』であつた。此の『五月鯉』は後に『初紅葉』と云ふ題で單行本として出版されたが、『文章世界』に載せた小波の告白を待つまでもなく、甕江川田博士の令孃に對する小波の幼き戀を描いたものであるのは其頃から誰も知つてゐた。

が、此の同じ物語を延長した後談が紅葉の『金色夜叉』の藍本であるといふ說は知らないものがないほど廣がつてるが實は誣妄である。『金色夜叉』に就ては小波も屢々辯明してゐるし、私も度々紅葉から聞いてゐるが、唯の發端を此事實から思付いたといふ位に過ぎんので、小波をモデルとしたといふのは全然虛傳である。が、小波の此の戀物語は硯友社外の私の耳にすらも早くから聞えてゐたほど可成に評判されてゐた。小波の戀が破れて後、其令孃が緣付いた婚家の近くに住つてゐた私は時折美貌を垣間見、淑德を聞くにつけて小波の爲めに頗る同情に堪へなかつた。小波は小皺の寄つた今日でも秀麗閑雅を偲ばせる美男だから、少年時代は左こそと

推量られるので、『五月鯉』の第一回に稚若丸然とした美少年が荒くれ男に組敷かれる處があるのも大方小波の好か稚兒時代の自叙傳の一節だらうと想像する。『五月鯉』は傑作といふほどのものでは無いが無垢なる少年の無邪氣な戀を描いたものとして可成に評判された。

尤も小波の作は此の處女作に限らず總て何處かに無邪氣い處があつた。其のくせ風俗壞亂に問はれた事が一度や二度で無かつたが、根が貴族的に生立つた人だから、材料がいつでも素直な温和しい上品なウブな戀であつて、深酷な悲痛や捻ぢくれたイキサツや皮肉な諷刺が少しも見られ無かつた。飽くまでも無邪氣なお姫樣式、若樣式のお伽戀物話ばかりだつた。

小波がお伽噺に筆を染めたのは隨分古い事で、二十一年十二月發行の『我樂多文庫』第十三號から『鬼車』といふメールヘンの飜譯を連載したのが抑もの初めであつた。小波の無邪氣な筆が戀物語よりは却てお伽噺に適してゐたは其頃から見えてゐた。

が、小波はお伽噺を一生の仕事とするツモリは少しも無かつたのだ。夫から數年を經、博文館に入つてから『新桃太郎』や『猿蟹後日合戰』を書き、『少年文學』の第一卷として『黄金丸』を發表した頃、「漣もお伽噺ばかり書いてるやうでは最うお終ひです、其内には必ず本統の小説

を書きます』と、或時私に語つた事があつた。處が其頃は筆休めに過ぎなかつたお伽噺が豫期以上に歡迎され、教育界から頻りに頌德表を上つられ、四園の事情も亦風俗壞亂に問はれ勝ちな小說を作るを許さなくなつたらしく、次第に小說よりはお伽噺に傾いて、獨逸から歸朝して以來は終に全くお伽噺に沒頭し、著述以外に講演をも初めて通俗教育の旗幟を建て、博文館を引退してからは文壇よりも寧ろ教育界に近い人となつて了つた。

漣山人の名は中坂思案外史と共に早くから讀賣新聞の投書欄に見えてゐた。私が偶然讀んで記憶してゐた手習の說といふは漣が最初の投書であつて、其時十四歲であつたさうな。十四歲初めて新聞に寄書し、十九歲小說を著はし、二十一歲既に一家を成した漣は稀に見る寧馨兒であつた。前にも云つた通り、其頃の讀賣新聞の投書欄は當時の名士の論戰場であつて、昨年の春易簀した杉浦天台道士も亦寄書家の一人であつたが、或時何かの問題で天台道士と漣と論戰した事があつた。其後漣が先生の稱好塾に入門してから後、偶然此事が解つた時、君が漣山人かと天台道士も意外の感に打たれたさうだ。漣は恁ういふ早熟の奇才子であつた。

私が漣に初めて會つたのは二十二年の夏の初めであつた。或朝、紅葉を飯田町の三疊の書齋

に訪ふて話してゐると、飄然やつて來たのは飛白の單衣の瀟洒たる美少年であつて、之が漣であると紹介された時は、豫て若い人だとは聞いてゐたが、餘り若過ぎるので喫驚して了つた。美妙齋に會つた時も意外に若いので喫驚したが、漣の若いには更にヨリ以上驚かされた。漣は其時二十歳であつたが、精々十八九ぐらゐにしか見えなかつた。しかも此の十八九ぐらゐにしか見えない青年が既に一家をなしてゐたのだから驚かされて了つた。

漣は其時恰も『新著百種』中の『妹脊貝』を書終つて、丁度發行所の吉岡書店から原稿料を請取つて來た處だといふので、紅葉はソンナラ午餐を奢れと云ひ、自分は初對面であつたが、三人して上野の精養軒へ行つた。電車の無い夏の炎天を壹岐殿坂下まで歩いて紅葉はヨボ〳〵爺さんの二人乘を見付け、値切倒して私と二人で合乘して行くと、漣は跡から氣の利いた威勢の好い一人乘を飛ばして來て忽ち拔いて了つた。『此奴、乘打ちをしたナ、覺えてろ！』と紅葉は手を振上げて打つ擬をするとヨタ〳〵俥が愈々ヨタ〳〵した。軈て精養軒の玄關へお抱へ然たる一人乘を横付けした漣が貴公子然と取澄まして俥を下りる跡からヨタヨタ俥を下りて朴々乎と從いて行く紅葉と私の二人の恰好は餘り好い圖ではなかつた。が、江戸ッ子のチャキ〳〵

たる紅葉は泰然と澄ました顏をして、三人して食堂の卓を圍んだ。隣の卓では若い岡倉天心が外國人と相對ひに肉刺を動かしつゝ巧みな英語を滑らかに操つツてゐた。

漣は根が洒落である上に寬濶に育ち、スツキリと捌けた中に何處となく氣品があつた。殊に應酬に巧みで機智に富み、誰とでも隔てなく交際し誰にでも能く親まれた。其上に世と推移る世才に長けてゐるから、硯友社といふ小さい天地にばかり跼蹐しないで、早くから廣い世間に飛出して翺翔してゐた。一味郎黨を堅く結束して鎖國する紅葉は漣の此の世間的態度を內心快からず思つてゐやうに噂されてゐたが、漣が硯友社の凋落した後までも依然として一方の雄を稱してをるは畢竟早くから硯友社埒外の地步を開拓するに努めてゐたからだ。漣は啻に硯友社のみならず全文壇を通じての第一の才人である。

（七）川上眉山

硯友社は御大紅葉を初めとし美妙と云ひ漣と云ひ美男のお揃ひであつたが、美貌を云つたら川上眉山は第一位であつたらう。眉山の美貌は硯友社に限らず、文壇に限らず、美男の畑なる

役者の中を尋ねても決して數多くの匹儔を見出し難いだらう。尤も美男を定める標準にも色々有らうし、人に由ての好き不好きもあらうが、如何なる點の辛い人でも眉山の美貌には百點近くを決して惜まないだらう。

眉山の色の白さは透徹るやうで、支那人が玉人と形容するは慥ういふ人だらうと思ふほどに美くしく、何時でも薄化粧してゐるやうに見えた。所謂女にしても見まほしいといふ目眩しいやうな美貌で、丸で國貞の田舍源氏の畫か拔け出したやうであつた。難を云つたら餘り美くし過ぎて、丹次郎といふニヤケた氣味合があつた。最う少し色が淺黑いとか口が大き過ぎるとかいふ缺點があつたら却て宜かつたらうと思ふ。

眉山が豫備門（今の高等學校）へ通ふ時分、其頃は制服が無かつたので思ひ思ひであつたが、眉山は何時でも黄八丈の袂の長い羽織を着てゐた。此の媚かしい羽織が女のやうな眉山の顏と能く釣合つて、影では蔭間のやうだと惡語を云ふものもあつたが、男の眼にも恍惚とするほど美くしかつた。通學の道筋に當る町の若い女は眉山の往歸りを樂みにして、目牽き袖引き目送つて人知れず焦れてゐたものも少なくなかつたといふ評判だつた。

殊に眉山の艶容媚態——といふと女の形容になるが、其頃の眉山を彷彿するには女の形容を用ゆるが適してゐた——を著るしく引立たしたのは春亭九華であつた。春亭九華などゝ云ふと如何にも柔しげだが、九華は縱も横も大々した巨漢であつた。此の九華がクラスの中でも殊に眉山と大の仲善しであつて、學校の往復は本より何處にでも二人は一緒に連立つてゐた。筋骨逞ましい大兵肥滿の黑々した巨漢と振袖然たる長い羽織を着た薄化粧したやうな美少年と連れ立つて行くさまは辨慶と牛若と云はう乎、髯奴と色若衆と云はう乎。小說でなければ決して見られない圖であつた。今でも憶起すと師宣の繪にありさうな二人の姿を眼前に彷彿する。九華も亦堂々たる風采であつたが、眉山が餘り美くし過ぎてゐた。

此の平家の公達のやうな美少年は早くから知つてゐたが、此人が眉山人であるとは少しも知らなかつた。其後紅葉の家で計らず落合つた時、此の女のやうな顏の持主が也有の再來かと疑はれる名文章の作者だと聞いて喫驚して了つた。且顏に似合はない思切つた皮肉や毒口を連發するには呆れて了つた。眉山は遠くから瞻めてゐると女のやうに媚かしい唯の色若衆であつたが、會つて見ると岩本院の稚兒上りと云ひさうな江戸ッ子風の傳法肌であつた。

眉山の家は本郷の春木町の下宿屋であつた。學校から歸ると、素裸になつて井戸の水を汲込みつゝ大きな聲で女中を揶揄つてゐた。眞白な肉附きの好い肌が役者のやうに美くしかつたので、近所の若い女が目引き袖引き垣根から隙見したさうだ。あの下宿屋の若旦那は役者よりも美くしいと其處ら中の若い女が岡惚れしたといふ評判であつた。

が、眉山の家庭には氣の毒な面倒臭い葛籐が絶間なかつたさうで、何時でも晴れやかな顔をして駄洒落を云つてる內面には人の知らない苦勞が絶えなかつたさうだ。親父が死んでから春木町を去つて小石川の富坂へ別居した。此の富坂上の家といふは滿天星の生垣を繞らした頗る風雅な構へで、手狹であつたが木口を選んだ凝つた普請であつた。爲永の中本にある寮といふやうな鹽梅で、美男であり風雅である眉山の住居には持つて來いであつた。が、其頃から眉山は段々と陰氣臭く詩人臭くなつた。

硯友社員中、眉山は一番詩人らしかつた。初めは矢張陽氣に騷ぐ質であつたが、次第に段々沈欝となつて、稍やともすると考へ込むやうになつた。家庭の事情が面白くなかつた處へ自分の力では迚も脊負ひ切れない亡父の債務が俄に双肩に落ちたからであつた。

其頃眉山と私とは家が近かつたので、少くも月に一度や二度は互に往來した。が、文學よりは債權債務の法律問題に熱心であつて、恁ういふ負債は辨債の義務があるだらう乎とか、乃至は恁ういふ督促は怎ういふ風に切拔けたもんだらう乎とか云ふやうな咄が多かつた。今では其事情は大抵忘れて了つたが、道德上には何の責任も義務も無い夢にも知らない債務を俄に脊負はされて、眉山は其辨債方法に苦んでゐた。

恁ういふ家庭に關聯した道德上及び物質上の難關に苦みつゝある一方には硯友社よりは寧ろ『文學界』同人と親んで生に悶ゆる詩人の類みに共鳴し、一方には又、今は全く韜晦して消息を絕つて了つたが、黑川文淵といふ一種異色ある思想家が同居してゐて朝夕互に偏哲學を戰はしてゐた。眉山は最早のんきに鼻唄を歌ふ春木町時代の眉山では無かつた。

眉山が一葉女史との浮名を歌はれたのも其頃であつた。此消息に就ては餘り精しくは知らぬが、眉山が屢々一葉の家に出入したのは事實であつて、ツマリ頻繁な交際と女に好かれさうな眉山の男振から附會した風說であつたらう。が、眉山の美貌は其頃は生活の苦勞に傷つけられて幾分か險しくなつて來た。

富坂に住んだのは唯ツた一年かそこらで、眉山は終に債務の爲めに世帯を疊むべく餘儀なくされ、僅かばかりの身の廻りのものを友の家に預けて飄然として放浪の旅に上つた。其時の道の記が『ふところ日記』となつて後に發表されたのだが、當時の眉山の旅は『ふところ日記』に現れてるやうな暢氣なものでは無かつたのだ。

三四ヶ月經つてから眉山が歸つて來たと或人から傳言された後、丁度初夏のフラネル時候であつた。其頃江戸川畔に住んでゐた私は偶然川畔を散策いてゐると、流れを下りて來る川舟に犢鼻褌一つで元氣に棹をさしてるのが眉山で、吉原通ひの山谷堀でも下る了簡で、胡座をかきつゝ好い氣持になつてるのが中村花痩であつた。

眉山は三月越しの旅で顏の色が煤けて日に燒けてゐたが、眞白な長身は汗ばんで赤味を帶び、棹は上手か下手か知らぬが流れに從つて下りるんだから樂々として如何にも威勢が好く、迚も旅路に放浪して今歸つたばかりの家なき人とは思はれなかつた。其の艷氣のある勇肌がトンと國貞あたりの錦繪にありさうであつた。眉山の容貌、風采、及び生活は洋畫は勿論院派の日本畫にもならないので、五渡亭國貞あたりの錦繪から拔け出したやうだつた。

『や、乗らないか、』と眉山は私を見るなり聲を掛けた。
『僕ン許へ來い、美味いものを喰はせるぞ。』
『今行くよ、直ぐ行くよ。』と云ひながら元氣に舟を流して行つた。
私の家は川畔の直ぐ近所だつたから、歸つて待つ間もなく、眉山と花瘦とは威勢よくやつて來た。眉山は其時新小川町の花瘦の家に泊つてゐたのだ。
中村花瘦も亦硯友社の一人だつた。最も遲れて加盟したが、伯父さんが俳諧の宗匠だつたので俳句には相當に苦勞し、俳人としては社中の指折であつた。之も御多分に洩れないズボラであつて、一度は金の爲めに奇禍を買つたので、其後を潔くする意味で雪後と改稱したが、一生借金の苦勞に追はれて終に名を成す遑が無い中に、夫妻相續いて急性の肺患に犯され、一と月經たぬ間に夫婦とも鬼籍に入つた極めて不幸な作者であつた。根が三馬鯉丈系統の戯作者肌に出來上つた男だから、いつも月夜に米の飯で暢氣に暮し、貧乏にも借金にも少しも怯げずに、執達吏の應接などは手に入つたもんだつた。眉山が債權者と折衝するに方つて相談對手としたのは專ら此男で、世帶を疊んだ時に身の廻りのものを預けたのも此男の家なら、放浪から歸る

と直ぐ賴つたのも此男の家であつた。（紅葉が『金色夜叉』を書く時、高利貸の知識や粉本を借りたのも亦花痩からであつた。）

此時は小一時間も話した。駄洒落で執達吏を煙に卷く花痩が同席してゐたから、眉山も元氣に噪いで少しもシンミリしなかつた。

間もなく二度目に家を持つたのが牛込の北山伏町で、債務の段落が一時着いたといふものゝ矢張舊債に祟られてゐた。或時尋ねると、『昨日は突然差押へを喰つて茶呑茶碗まで押へられて了つた、』と眉山は一生忠實に仕へた老婢に向つて、『オイ阿婆、何處かで急須と茶碗を借りて來な、』と平氣なもんだつた。

其頃は最う眉山も執達吏に馴れ切つてゐた。『身體に附いてるものは押へる事が出來ないツてから、今度はピカ／＼光る指環を三つも四つも穿めて見せびらかしてやらう、』なぞと平氣な顏をして笑つてゐた。が、眉山は可成長い間債務の交渉に忙がしかつたが、ついぞ服裝を崩さずにリウとしてゐた。何時でも座敷を奇麗に片附け、床の間には幅を掛け花を活け、庭には植木棚を作つて盆栽の二三十鉢も列べて置くといふ風で、儀式張つた席へ臨む時は、質屋で着更へ

て行くと本人は云つてゐたが、左に右く黒紋付の對に仙臺平といふ拵へだつたから、岡目には借金に苦められてるとは少しも見えなかつた。借金取にも最う慣れ切つてゐて、貧乏咄をするにも極めて餘裕があつて、夫程窮迫してゐるとは誰も思はなかつた。

眉山は酒の上が餘り評判が好くなかつた。始終眼が充血してゐて、頭の具合が惡いと口癖に云つてゐたのも矢張酒の爲めらしかつた。が、此の酒は元來好きでもあつたらうが一つは生活の不愉快を忘れたさに益々酒癖を昂じさせたのであらう。春木町時代に極めて陽氣であつたのが富坂時代には沈鬱となり、北山伏町時代には徐々荒んで多少自棄氣味となり、酒の爲めに警察の厄介になり、警察で演說をして新聞種になつた事もあつた。

夫から後、南榎町に轉じてから今の未亡人を迎へて沈着いて來た。生活も段々順調となつて名聲も亦次第に高く、之から新らしい運命を展開しやうといふ處で意外な魔の手は忽然隕石の如く落下して此の秀麗なる玉人を擊碎した。

恰も其時私は京都に旅してゐた。蒲團着て寢たる姿の東山を旅館の窓から瞻めつゝ、眠つたやうな平和な自然美を飽くまで貪ぼつてゐた長閑な夢を破つたのは眉山の訃であつた。其頃は

當時文壇は全く舊作家に飽いて新作家を迎ふるに鋭意してゐたから、多士濟々たる硯友社は忽ち章魚の足のやうに八方に勢力を伸ばし、新聞社に雜誌社に出版人に夫々多少の關係を附けざるは無かつた。其上に固く結束して互に相援引し、應援するにも敵對するにも一齊に起つて進退緩急の行動を侶にした。歩武の整然として訓練の能く行屆いたは有繋に紅葉の統率の才の尋常で無かつた事が解る。硯友社は此の全體の力で常に文壇に衝つたから、一時硯友社は恰も政友會が政界に跋扈したやうに文壇を壟斷して、操觚者も出版者も新聞雜誌社も硯友社に操らされば文壇の仕事は何一つ出來ないやうな形勢となつた。當時の硯友社は實に政友會であつて紅葉の手腕は原敬以上であつた。

當時硯友社と相對峙した團體は思軒、篁村、三昧、得知等一派の所謂根岸黨であつた。が、本來根岸黨の名は根岸を中心とする文人の一群を指して他から與へた名稱であつて、渠等は折に觸れて相集つて所謂詩酒徵逐の風流に遊んだが、酒を以て集まる無形の交友俱樂部であつて、硯友社のやうな文壇的運動を目的とする團結では無かつた。且此の根岸黨の中心となつてゐるものは大抵舊作家の系統に屬し、硯友社に比べては清新の思想と敏活の元氣を缺き、文壇の選

手權を爭ふには餘りに老成し過ぎてゐた。

根岸黨を外にしては鷗外の「しがらみ」草紙派があつたが、此の「しがらみ」草紙派は實は鷗外一人であつて、其他は興味あれば集まり興味去れば散ずる去就常ならざる遊離分子であつた。派と云ふ條、實は鷗外が單獨で八人藝をしてゐたので、弟の三木竹二の外には鷗外の片腕の指一本の力となるものすらも無かつた。隨つて個人としての鷗外の權威は認められてゐても文壇的の實際の運動には全く無力であつた。

硯友社の最全盛期は明治二十六七年頃から三十二三年頃までだつたらう。讀賣新聞を牙城とした紅葉は堀紫山を幕僚と頼んで三面及び文藝欄は思ふまゝに主宰した。春陽堂には前川曙山が座し、博文館には大橋乙羽が控へ、『新小説』も『文藝俱樂部』も硯友社の統轄に歸した。剩つさへ後藤宙外は早稻田を出ると紅葉幕下に參じ、硯友社の客將として主宰する『新著月刊』を硯友社の新版圖に獻じた。當時の紅葉は四方の書肆文人來貢すといふ勢ひであつた。隨つて傘下の硯友社員は各々其の據る處を得て勢力を張つた。

が、此勢力は他の文人が各々孤立してゐたと反して團體的に築き上げたのだから、之と拮抗

する他の團體が生ずれば自然に氣勢を削がれるのは當然であつた。果然、萬年上田博士が歸朝して赤門派が崛起すると硯友社の勢威が幾分か薄くなつた。續いて早稻田派が新旗幟を建つるに到つて、硯友社は復た更に幾分か勢力を削がれた。幸ひ此二派は硯友社の秀才に取つて代るだけの創作家を出さなかつたから當分は猶ほ創作壇の選手權を握つてゐたが、紅葉門下の風葉鏡花が徐々流行兒となり掛けた頃には硯友社の勢力は最早峠の絶頂を越してゐた。夫から幾何もなく紅葉が多年の牙城たる讀賣を棄てゝ二六に移つた時は、一葉落ちて天下の秋を知るで、硯友社の覇權がそろ／＼徐々傾き出した。三十六年の冬、紅葉が物故して以來硯友社の團結は亦舊の如くならず、剩つさへ自然主義が勃興して創作の權威が他の集團に移つたので、硯友社は漸次に凋零して今では全く過去の夢物語となつた。

（九）紅葉の性格の半面

紅葉と私とは二十七八年頃までは可成親しくしてゐた。元來思想上相容れなかつたので思想上の扞格が感情上の乖離となつて、一時は交際が殆んど途絶えてゐた。が、紅葉と私とは稀會

育ちの共通の趣味や性格があつたので、思想上では相容れなくても紅葉に對しては丁度親友に對するやうな親しみを持つてゐた。夫故論壇では紅葉の態度や硯友社の作風に慊らないで忌憚の無い批評をしても、私交上には何の隔心も持たなかつた。が、紅葉の方では兎角に疎隔して會へば打釋けてゐても内心は敵意を挾んでゐた。

丁度其頃であつた。今は殆んど忘れられて了つたが、一時はユーゴーの紹介者として相當に鳴らした原抱一庵が度々遊びに來た。抱一は好き嫌ひの劇しい感情家であつたが、紅葉が大嫌ひで、談紅葉に及ぶ毎に口を極めて痛罵するので、其の度毎に、『君は喰はず嫌ひだよ。會つて見もしないで惡く云ふ奴があるもんか。一度會つて見ろ、決して不快い氣持はしない、極捌けた男だよ。』と云つた。が、何と理解しても抱一は『あんな戲作者輩に會ふ必要は無い、』とばかり云つて、尋ねやうともしなかつた。

すると或時、朝つぱらから飛んで來て、『會つたよ、會つたよ、紅葉に會つて來たよ。德太郎中々話せる。頗る快男子だ。昨宵は徹宵話して、二時まで大氣焰を擧げて來た。紅葉は君、實に豪い。立派な男だ！』

と、今度は褒めるとも、褒めるとも。餘り褒めすぎるので、私が何とか云つて蔑すと、今迄と打つて變つて反對に、『それは君、君は誤解してゐる。紅葉は幵んな男ぢや無い。君、今度は十分肝膽を披瀝して話して見給へ、』と俄に紅葉の辯護を做初した。

紅葉は恁ういふ男で、誰に會つても舊知の友のやうに胸襟を開いて齒切れの好い江戸ッ子辯でサツクリと竹を割つたやうに話すから、誰でも快く感じて一見百年の友に接するやうな心持がした。抱一は放縦と無檢束で人に誤まられたが、根が多感多恨の單純な好人物であつたから一見コロリと紅葉に惚れ拔いて了つた。

嫌ひとなると根こそぎ嫌ひだが、好きとなると直ぐ逆せ上る抱一は矢繼早に三四回も續けて紅葉を尋ねた後、十日ほども經つてから私の許へ頗る厄介な提議を持込んで來た。當時抱一は萬朝報社に在籍して黒岩の祕書のやうな關係であつたが、讀賣新聞社から紅葉を朝報社へ引拔かうといふ獻策をして、黒岩の內意を承けて其の斡旋方を私に持込んだ。

當時紅葉は私を忌避してイッ尋ねても居留守を遣ひ、途中で會つても碌すつぽ口を利かないといふ場合であつたから、事情を話して私の仲介では迚も駄目だと斷はつた。が、抱一は何と

云つても肯かないで、『自分の口からは言ひ兼ねるし、自分が言出したのでは迚も承知しさうもないが君なら必ず紅葉を口說き落せる、』と頻りに迫つて承知しないので、紅葉が讀賣の待遇に不平である內情も聞込んでゐたので、そんなら黑岩と直接談合してからと、抱一と同道して黑岩を訪問し、精しく招聘の條件を相談してから改めて紅葉に會見を申込んだ。

當時紅葉は私に對して何時でも不在と稱して面會を避けてゐた。蛇蝎の如くで無い迄も蚰蜒ぐらゐには嫌つてゐた。其時の返事も突然の會見申込をお辭義をして原稿の周旋でも賴む用事と早呑込みしたものと見えて、其頃私が產業界に首を突込み掛けてゐたので、夙に實業に雄飛せんとする君が此の陋巷の貧乏文人に何の求むる事があるかといふやうな頗るイヤ味タップリなものだつた。が、會つて見れば少しも隔意が無く打解けてゐた。私は本より論壇の上にこそ紅葉と對敵したが、先方は怎うあらうと私交上では矢張親友のツモリでゐたから、胸襟を開いて黑岩の意嚮を話し、紅葉一身の利害の爲めに黑岩との提携を勸說した。紅葉も亦打解けて少しも蟠りが無く用件以外の四方山の世間咄をして其夜を更かした。續いて同じ用件で數回の會見を重ね、或時は家では沈着いて相談が出來ないからと、半日餘りも旗亭で談合した事もあつた。

其頃讀賣新聞の社内の空氣が面白くなくて紅葉は不平滿々だつたから、其頃としてはレコード破りの有利な黒岩の招聘條件に紅葉も一時はグラ〳〵動搖し、愈々日を定めて黒岩と會見する段取にまでなつたが、順序上先づ讀賣の最高顧問たる高田早苗に內々打明けた處が、『團十郎は矢張歌舞伎で無ければ納まらんので、イクラ給金が良くても公園の舞臺で踊つては名が廢れる』と理解され、九分通りまでグラ〳〵したが、結局名を惜んで思ひ留る事となつて一と先づ此の相談を打切つた。が、紅葉の心は其時既に讀賣新聞社を離れてゐたので、其時は高田の斡旋で引留條件の花を持たせられて一時中止したが、終に讀賣を去るやうとなつた。

紅葉は恁うした男であつた。日頃は罵詈讒謗して止まなかつた抱一庵をも一見コロリと感服させ、犬と猿のやうに仲違ひしてゐるものにでも會へば奥底なく打解けて、自分の身上などを細々打明けて話すほど捌けてゐた。が、心から捌けて洒落であつたかと云ふと實は餘り洒落でなかつた。些細な事を執念く氣に掛けて何時までも根に葉に持つ神經質であつた。が、表面はガラ〳〵して江戸ッ子とアングロサクソンを搗交ぜた紳士形氣を理想としてゐた。

紅葉は親分肌で、門下や友人の面倒を能く見た。が、厚意を難有がつて感謝しないと不機嫌

だつた。殊に門下生に對しては、七尺去つて師の影を踏まずといふやうな嚴格な奴隷的道徳を強壓した。『青葡萄』といふ作に、自分は鞭と繩とで弟子を薫陶するといふやうな事を云つてるが、門下の中には往來で摺違つた時、ツイ迂濶して挨拶しなかつたといふので群集の中で呼留められて、新兵が古兵にトツチメられるやうに威丈高に叱られたり、正月の年始が遲れたとか近火の見舞を云はなかつたとか云ふので勘氣を蒙むつたりしたものもあつた。

門下生ばかりでなく、友人關係の同人に對しても草創時代の同輩は別として、後進生に對しては世話もする代りに先輩の權威で臨んだものだ。北村三唖が紅葉に疎んぜられたのも、初めは何かの用事で暫らく無沙汰をした時、『少とも顏を見せんぢやないか、他の家へは行つても俺の家へは來る閑は無いのか、』と妙な見當違ひを諷てこすられた。三唖も旋毛の少々曲つた變挺な男だから嫌氣がさして復た暫らく足を遠のくと、今度は他の家へはマメに出掛けるくせに社のもの丶方へは丸切り鼬の道てのは餘まり義理を知らなさ過ぎるぜと、一々不義理を數へ立てられてネチ／＼と油を搾られた。三唖は紅葉に引立てられたのだから、腹の中では濟まないと思つたらうが、口不調法の男だからもぞくさして辯解もしなかつた、詫りもしなかつた。之が

益々紅葉の氣に入らなかつた。其上に三啞が頻繁に出入したのが社外の異宗門だつたので、終には謀叛人扱ひされて棄てられて了つた。三啞は紅葉の世話になつたといふ條、『石倉新五左衛門』を認められて『新著百種』に推薦されたといふだけであつたが、此の一篇の原稿の斡旋を永久に德として弟子の禮を執らなかつたのが忘恩者として紅葉の勘氣に觸れた所以で、三啞は之が爲めに紅葉の勢力圏の新聞社や雜誌社からボイコットされて了つた。

乙羽も亦紅葉の世話になつた男である。が、乙羽も亦硯友社外の誰とでも交際したのが紅葉の氣に入らないで折々忌味を云はれた。が、乙羽は三啞と違つて如才無い利口者だつたから、三啞のやうに紅葉の機嫌を損じるやうな事は仕なかつたし、背後に資本家の博文館を脊負つてゐたから紅葉の方でも遠慮してゐた。夫でも博文館に入つてから一年ほど經つた或時、近頃は忙がしくて紅葉さんの許へばかり行つてられないで諸方へ顏を出すので、紅葉さんの御機嫌が惡くて困ると愚癡を覆した事があつた。

こんな鹽梅に人の世話もしたが十分感謝して自分を立てないと滿足しない親分肌通有の缺點をも持つてゐた。夫でも後進生や門下生が歸服してゐたのは紅葉が文壇に勢力があつたばかり

でなく、尋常ならぬ熱情と親切とを持つてゐたからであつた。紅葉は人に叱言を云ふ時は涙をボロ／＼覆して、之ほど俺の云ふのが解らないかと泣く事が珍らしく無かつたさうだ。此熱情と此親切とが有つてあれだけの門下を養成し、多數の硯友社員を一身同體の如くに率ひて活動する事が出來たのであらう。紅葉は確に人に長たる親分的性格を有つてゐた。

（十）紅葉と外國文學

紅葉は常に門下の諸生に對して外國小說研究の不必要を說き、創作家に必要なるは實世間の觀察であつて外國小說なんぞを讀んだつて役に立たないと云つてゐた。紅葉門下が秋聲一人を除くの外は皆外國語に疎そかであつたは師家の嚴しい敎訓の爲めであつた。

が、紅葉自身は常に外國小說を讀んで頭を肥やしてゐた、就中ゾラの作を愛讀して『ムール和上の破滅』の如きは再三反讀して其妙を嘖々してゐた。『渠の傑作』を讀んだ時は恰も地方に暮してゐた私の許へ態々手紙を遣して盛んにゾラの作意を激賞して來た。『むき玉子』はゾラの此作から思付いたのである。其外にも外國小說からヒントを得、或は其儘に換骨奪胎したもの

は少くなかつた。紅葉は決して外國小說が嫌ひではなかつた。

私が初めてドストエフスキーの名を聞いたのは紅葉からである。或時飯田町の二疊の書齋を訪づれると、昨宵(ゆふべ)は嵯峨の屋が來て『罪と罰』といふ露西亞の小說の話をしたが、嵯峨の屋がモグ〳〵しながら妙な手附きをして咄すのが實に面白かつたと云つた。且、此小說は露西亞の近代の最大傑作で、何でも此頃丸善へ英譯が來てゐるさうだと云つた。其翌日、私は早速丸善へ行つて、果して一冊あつたのを直ぐ買取つた。明治二十二年の春で、後に聞くと三冊來たのを、一冊は坪內博士、一冊は森田思軒、殘る一冊を私が買つたのであるさうだ。

が、紅葉は藝術本位であつた故、佛蘭西の寫實派には興味を持つても、人生本位の露西亞の小說はジメ〳〵して陰氣だと貶(くさ)し、其頃からツルゲネフやトルストイを推奬した私を外道(げだう)と呼び、私等の主張した人生の爲めの文學說を涅覓(ねちみやく)哲學と嘲つてゐた。何かと云ふと能く『君等の外道文學(げだうぶんがく)では……』などゝ云つたもんだ。

私が初めてドストエフスキーの『侮辱』を讀んだ時、之なら脚色の山もあるし、常識的な戀物語もあるから、紅葉も必ず感服しさうなものと思つて、度々物語の筋や目貫(めぬき)の個處を話した

後に是非讀んで見ろと云つて英譯本を貸した、一と月ほど經つてから讀んだかと訊くと、何だか質くどくて面倒臭いもんだと云つて碌すつぽ讀んでゐなかつた。三月ほどしてから會つた時も矢張讀んでゐなかつた。夫から四五ヶ月も經つてから或時、漸と百頁ばかり讀んださうで、女主人公のネルリが朝早く起きてストーヴの前を掃除してゐる姿が眼前にチラチラするやうな氣がしたと言つてゐた。が、夫ぎりで到頭十月ほどして返して來た時、餘り拗過ぎて我慢にも讀通す氣になれない、矢張外道の喜ぶもので江戸ツ子の讀むもんぢやア無いと云つた。紅葉は萬更外國文學が嫌ひぢや無かつたが近代文學には殆んど同感を持たなかつた。

（十一）紅葉の筆蹟及び人氣

三越で紅葉の眞蹟展覽會が小波其他の主催で開かれてからモウ十年になる。夫から以來紅葉の眞蹟は益々持てはやされて今では短冊一枚が三十圓以上を値ひしてるさうだ。明治の文人の筆蹟では正岡子規のと夏目漱石のと紅葉のが一番高く賣買される。明治の大儒として名聲中外に著聞する中村敬宇先生のよりも、天子の師範として近代の書聖と仰がれる長三洲先生のより

も、近世の大德として上下の歸依篤き行誡上人のよりも、敷島の三十一文字をもて榮爵を忝ふした高崎の正風大人のよりも何等の官位勳爵の無い野の一文人紅葉の短册の方が遙に珍重されてヨリ高價を以て市場に賣買されてゐる。

數年前、或る書畫商の店に書畫帖の賣物があつた。其中には漢學者では息軒、鶴梁、宕陰、詩人では五山、星巖、枕山、湖山、畫家では老山、柳圃、晴湖等其他各方面の一流の近代名家の揮毫があつて、一枚々々隨意のものを剝がして賣つてゐた。處が誰のよりも數倍高價である紅葉の色紙が誰のよりも一番早く賣れて了つたさうだ。

紅葉は死ぬ前に盛んに短册を書いて、『俺の字は死ぬと値が出るぞ』と云つて人に與へたさうだが、果して自信の通りであつた。尤も紅葉は書が巧みであつたし、人氣が盛んであつたから早くから筆蹟が珍重された。今から三十年も前、或る懇意な田舍の素封家に所望されて名士の手紙を十數通與へた處が、一年ほど經つて偶然其家を訪問した或る男から、私に宛てた紅葉の手紙が錦襴表裝の軸となつて床の間に掛けてあつたと知らせて來た。間もなく其の素封家から『紅葉先生と露伴先生のだけは早速表裝しました。お庇で自慢の家寶が二幅出來ました、』と、



紅葉自畫像

慇懃な禮手紙が來た。之ほど熱心な崇拜家があらうとは思掛けなかつたので、早速紅葉に其話をすると、其頃の紅葉はまだ若かつたから嬉しさうな顏をして、『難有いネ、お禮に藤村の羊羹でも贈らうか。』と云つて笑つた。が、今では紅葉の手蹟を立派に表裝して傳家のお寶物のやうに祕襲するものは決して少なくないだらう。

之も數年前の咄、日本橋の或る骨董屋に紅葉の手紙を表裝した額面が出てゐた。宛名はツイ其の近傍の著名な書肆で、「先達ての〇は何々へ屆けて呉れ、本人が義務を怠たつたら自分が返債する」と云ふ罪な文面だ。何々といふはズボラで通つてる門生で、原稿引當ての前借を紅葉が口入したものらしい。恁ういふ書面を、當の書中の本人がマダ健在であるのに、苟にも書肆たるものが他手に渡すといふは怪しからん話で、剩つさへ額面に表裝するといふは言語道斷である。が、夫は左も右くもとして此額面の正札が、驚く勿れ、金六十八圓也とある。イクラの前借を申込んだか知らぬが、多分此の正札の額よりも少なかつたらう。ツイ此頃の大阪の柳屋の目錄にも紅葉の不養生訓といふ自筆の原稿が載つてをる。どんなものか知らぬが貳百五拾圓といふ突飛な價には驚かされる。紅葉の人氣の高いのは之を以ても證される。

明治の文人の全集中、漱石全集の豫約高は近頃群を拔いてゐるさうだが、紅葉全集の既刊部數も恐らく之に劣らないだらう。全集では無いが『金色夜叉』の如きは何度重版しても足りないで、毎年の出版部數が今だに相當な高率を維持してゐるさうだ。實をいふと『金色夜叉』は最初の構想が中途で何度も變つて纏まりが附かなかつた未成品であるが、眞珠の頸飾の斷れたのを南京玉で補つたやうな續篇が二つも三つも出來て、芝居は勿論、活動寫眞ともなれば流行唄ともなり、中學校の國文教科書にも載れば繪葉書にも發行され、今では怎んな田舍の片山里でも『金色夜叉』の名を知らないものは無い。お伽噺の外には何にも讀まない小學校の兒供ですらが『金色夜叉』の名だけは知つてをる。芥川龍之助や谷崎潤一郎や菊池寛や倉田百三や賀川豐彦の新らしい作を讀耽るものも矢張『金色夜叉』を反覆愛讀してをる。

今村清之助は常に紅葉の作を愛讀してゐたが、感服の餘りに一夜旗亭に紅葉を招いて半夜の清興を侶にしたさうだ。西園寺公も誰のよりも紅葉の作を一番多く讀んでをられるやうだ。今では政治家や實業家の中にも可成な文藝の理解者があるらしいが、紅葉の小說は其頃からして奥さんやお孃さんばかりでなく、紳士にも學生にも宗教家にも教育家にも有識者にも無知文盲

の俗人にも讀まれた。弦齋や春葉の作は廣く讀まれたにしても、其の範圍は低級者に限られて高級知識階級に及ばなかつた。紅葉のは之に反して高級者にも低級者にも學者にも無學者にも男にも女にも愛讀された。新らしい文藝家の中には最高文學は低級者には理解されないものと獨斷して、讀者の少數階級に限られるを高しとするものもあるが、最大なる文學は高級者にも低級者にも等しく同感される普遍の興味を持つてる。トルストイやドストエフスキーは決して高級の知識階級者にのみ讀まれるので無くして却て文盲な農民間にヨリ多く愛讀されてる。換言すれば人氣ある作家を直ちに目して最大作家とする事は出來ないが、最大なる作家は多くの場合大抵人氣がある。紅葉がトルストイやドストエフスキーのやうな最大作家であつたか否かは別問題であるが、普遍の興味を持つ點では遙に今日の新らしい作家に勝つてをる。

（十二）紅葉と最後の會見——世間に傳はらざる逸事

紅葉の病氣が重態であると新聞紙に傳へられてから間もなく、或日の午後、私が恰も丸善の

事務室に居合はした時、紅葉さんがお見えになりましたと一店員が知らして來た。重態の病人が自身に來る筈は無いから、紅葉の使ひのものか、左なくば尾崎違ひであらうと訝かりながら店へ出て見ると、痩せ衰へた紅葉が書棚の前で書籍を漁つてゐた。

餘り意外だつたので、狐に魅まれたやうな心地がして暫らく離れて立つて見てゐると、紅葉は偶つと顧眄いて氣が付いたと見えてニッと微笑した。

『どうしたい！』と私は束々と進んで、『先ア此方へ來給へ、』と應接へ案內し、卓を央に相對ひとなるや、『大變悪いやうに聞いたが、能く出て來られたネ！』

『本統に悪いんだよ、』と紅葉はニッと笑ひながら、血の氣の失せた削ぎ落したやうな頰を掌で扱下しつゝ、『壽命は最う定つたんだが、元氣はマダ此通りだ。』

『何しろ結構だ。爰まで出て來る元氣がありやア、醫者は何と云つても大丈夫取返しは附くよ』と元氣づけつゝ顏を見ながら、『思つたほどに痩せないナ。』

『顏だけ見てゐると然うでも無いが、裸體になると骸骨だ。股なんか天秤棒ぐらゐしか無い。能く立つてられると思ふ、』と大學で癌と鑑定された顚末を他人の咄のやうに靜かに沈着いて話

して、『人間も地獄のお迎へが門口に待つてるやうになつちや最うおあひだだ。所詮死ぬなら羊羹でも、天麩羅でも、思ふさま食つてやれと棄鉢になつても、流動物ほか通らんのだから、喰意地が張るばかりでカラキシ意氣地は無い。先ア餓鬼だナア！』

と、淋しい微笑を浮べた。壯健な時と同様にガラ〳〵してゐたが、底力が抜けてゐて、一緒に聲を合はして笑ふ事が出來なかつた。

軈て間を措いて、『何を買ひに來た！』と訊くと、『「ブリタニカ」を豫約に來たんだが、品物が無いツて云ふから「センチュリー」にしたと云つた。（「ブリタニカ」と「センチュリー」とを同時に提供してゐた時で、丁度「ブリタニカ」が品切れになつてゐた時であつた。）

『「センチュリー」を買つて怎うする？』と瀕死の病人が高價な辭書を買つて怎うする氣かと不思議でならんので、『夫どころぢやあるまい、』と云ふと、

『然う云へば然うだが、評判は豫て聞いてるから、怎んなものだか冥土の土産に見て置きたいと思つてネ。まだ一と月や二タ月は大丈夫生きてるから、ユックリ見て行かれる。』

『そんなら「ブリタニカ」にしたら怎うだ。最う二タ月も經てば荷が着くから、今豫約して置

かんでも着いた時に知らせやう……』と、實は私の内心では、餘り豊かでもなからうに、見す〳〵餘命幾何も無いのが解つてゐながら幵んな高價な辭書を買ふでもあるまいと、夫と云はずに無益の費えをさせたくないと思つて云ふと、

『然うさナア』と暫らく考へてゐたが、『二タ月ぐらゐは大丈夫と思ふが、いつ何時怎うなるか解らん。二タ月先きに本が着いた時、幸ひ息が通つてゐたにしてもヒク〳〵して眼が見えないでは何にもならない。』

『大丈夫、大丈夫。其元氣ならマダ一年や二年は大丈夫。字引は怎うでも好いが、病氣の方は大丈夫だよ。今から幵んな弱音を吹くのは愚だ。屹と癒ると思はにや駄目だ。』

『愚でも駄目でも仕方が無い。醫者が三月と宣告したんだから、力んでも踏反り返つても三月經てばゴロ〳〵ッと痰が咽喉へ引からんでのお陀佛樣――と恁う覺悟して置かにや虚僞だよ。』と片頰に笑を含みつゝ力の拔けた空元氣で、『そこは大悟徹底してゐる。生延びやうとは決して思はんが、欲しいと思ふものは頭のハッキリしてゐる中に自分の物として、一日でも長く見て置かないと執念が殘る。字引に執念が殘つてお化けに出るなんぞは男が廢らアナ！』と力の無

い聲で呵々と笑ひながら、『「センチュリー」なら直ぐ屆けられるだらう。』

『むゝ、「センチュリー」なら直ぐ屆ける、』と云ふと、漸く安心したやうな顔をして、『之で先ア冥土へ好い土産が出來た、』と笑ひながら丁度店員が應接室の外を通つたのを呼留めて申込書と共に百何圓の現金を切れるやうな紙幣で奇麗に支拂つた。

夫から彼是れ小一時間も悠然と腰を落付けて久し振で四方山の話をした。紅葉と私とは妙なイキサツから氣拙くなつてゐたが、恁うして胸襟を開いて語ればお互に何の蟠りもなく打解ける事が出來た。が、最早餘命の定つた渠、再び快く語る機會は恐らく最う與へられまいと思ふと何となく名殘が惜まれ、最後の會食を一緒にしたいやうな氣がしたが、病氣が病氣だから夫もならず、壯健の時と同じやうに平氣な顔をして談笑してゐても自づと憂愁に閉ざされて話を途切らし勝ちだつた。

『あア、あア、』と纔に平手で左の肩を叩きながら、『何しろ流動物ばかりだから、腹に堪へが無くて直き勞れる。カラキシ意氣地が無くなツちやつた。』

と云ひつゝ椅子を起つたので、一緒に席を離れて淋しい後影を店先まで送り出した。

『ぢやア君、頼むよ、一時間でも早く屆くやうに。』と待たして置いた俥に乘移つて、『片脚棺桶に掛つてるんだから氣が短かくなつた。』

と、病み衰へた顔に淋しい微笑を浮べ、梶棒の上ると共に互に默禮を換して訣れた。暫らくは涙ぐましく俥の跡を目送つたが、之が紅葉と私との最後の憶出の深い會見であつた。

夫から二タ月ほど經つて、愈々重態となつたと聞いて門口まで見舞に行つたが、其時は最うドツと枕に就いて普通の見舞人には面會を謝絶してゐた。

間もなく紅葉の訃は傳はつて、世を擧つて此の比ひ少ない天才の逝くを痛惜したが、訃を聞くと直ぐ、私は弔問して亡友の遺骸に訣別を告げた。晩年暫らく相乖離してゐたのを衷心遺憾に思ひながらも、最後の會見に釋然として何も彼も忘れ、笑つて快く一時間餘りも隔てなく話したのは切めてもの心遣であつた。が、暫らく交際が途絶えてゐたので、硯友社同人や門下の人々は私の許には死亡の通知さへ遣さなかつたが、永眠する前三月に紅葉と笑つて最後の訣別を敍した私は、如何に疎隔してゐても紅葉を親友の一人と見てゐた。

だが、自分の死期の迫つてるのを十分知りながら餘り豐かで無い財嚢から高價の辭典を買ふ

を少しも惜まなかつた紅葉の最後の逸事は、死の瞬間までも知識の欲求を決して忘れなかつた紅葉の器の大なるを證する事が出來る。此の紅葉の最後の頁を飾るに足る美くしい逸事は誰も知らぬと見えて誰の口からも世間に傳はらなかつた。

紅葉は決して豊かで無かつた。先年或る雜誌に、紅葉は生前三圓五十錢の畫だか骨董だかを買へなかつたほど窮してゐたといふ逸話が見えた。紅葉は豈夫に三圓五十錢やそこらのものを買へないほど窮してゐなかつたが、恁ういふ馬鹿々々しい誤聞が傳はるのも萬更で無いほど切詰めた生活であつた。然るに不起の病に罹つて、最早餘命幾何も無いのを知りつゝも少しも紊れないで、餘り餘裕の無い懐ろから百何十圓を支拂つて大辭典を買ふといふは知識に渇する心持の尋常で無かつた事が想像される。或は最後の床の上で、『ノートル・ダーム』の翻譯を推敲してゐたからであつたかも知れないが、夫ならば猶更、死の淵に瀕してすらも決して苟且にしなかつた製作的良心の盛んであつたを知るべきである。

普通ならば醫者から三月しか壽命の無いのを申渡されて死後を覺悟すべき時である。聊かでも餘財があれば家族の爲めに殘して置く乎、さらずば自分の爲めの養生喰ひをする乎、病氣の

爲めに食慾の滿足が得られないなら慰みになるものでも買ふのが普通である。病氣の爲めにも病床の慰みにも將た又死後の計(はかりごと)の足しにもならない恁ういふ高價の大辭典を瀕死の間際(まぎは)に買ふといふは世間に餘り聞かない咄で、著述家としての尊い心持を最後の息を引取る瞬間までも忘れなかつた紅葉の最後の逸事として後世に傳ふるを値ひしてをる。

有體に云ふと、私は紅葉の著作には世間が騷ぐほどに感服してゐなかつた。其の生活や態度や人物にも慊らくなく思ふ事が多かつた。私が文學の爲めといふよりは實は紅葉の爲めに常に苦言を反覆したのは畢竟紅葉の才の凡ならざるを惜んで玉成したかつた爲めであるが、之が爲めに紅葉から含まれて心にも無く仲違ひするやうになつた。が、瀕死の瀨戸際に臨んでも少しも挫けなかつた知識の向上慾の盛んなるには推服せざるを得なかつた。紅葉は眞に文豪の器で**あつて決して唯の才人では無かつた。**

——大正十四年三月補訂再記——

齋藤緑雨

『僕、本月本日を以て目出度死去仕候』といふ死亡の自家廣告を出したのは齋藤緑雨が一生のお別れの皮肉といふよりも江戸ッ子作者の最後のシャレの吐き仕舞ひをしたので、化政度戯作文學のラスト・スパークである。緑雨以後眞の江戸ッ子文學は絶えて了つた。

紅葉も江戸ッ子作者の流れを汲んだが、紅葉は平民の子であつても山の手の士族町に育つて大學の空氣を吸つた。緑雨は士族の家に生れたが、下町に育つて江戸の氣分にヨリ多く浸つてゐた。緑雨の最後の死亡自家廣告は三馬や一九や其他の江戸作者の死生を茶にした辭世と共通する江戸ッ子作者特有のシャレであつて、緑雨は死の瞬間までもイヽ氣持になつて江戸の戯作者の浮世三分五厘の人生観を歌つてゐたのだ。

此の緑雨の死亡自家廣告と旅順の軍神廣瀨中佐の海軍葬廣告と相隣りしてゐたといふは其後聞いた咄であるが、之こそ眞に何たる偶然の皮肉であらう。緑雨は恐らく最後のシャレの吐き

榮えをしたのを滿足して、眼と唇邊に會心の"Sneer"を泛べて苦下にニヤリと脂下つたらう。『死んでまでも「今なるぞ」節の英雄と同列したるは歌曲を生命とする綠雨一代の面目に候』とでも冥土から端書が來る處だつた。

綠雨の眼と唇邊に泛べる"Sneer"の表情は天下一品であつた。能く見ると餘り好い男振では無かつたが、此の"Sneer"が髯の無い細面に漲ると俄に活き〱と引立つて來て、人に由ては小憎らしくも思ひ、氣障にも見えたらうが、綠雨の千兩は實に此の"Sneer"であつた。ドチラかといふと寡言の方で、眼と唇邊に冷やかな微笑を寄せつゝ默して人の饒舌を聞き、時々低い沈着いた透徹るやうな聲でプツリと止めを刺すやうな警句を吐いてはニヤリと笑つた。

綠雨の隨筆、例へば『おぼえ帳』といふやうなものを見ると、警句の連發に一々感服するに遑あらずだが、綠雨と話してゐると、恁ういふ警句が得意の"Sneer"と共に屢々突發した。我々鈍漢が千言萬言列べても要領を盡せない事を綠雨は唯だ一言で窮處に命中するやうな警句を吐いた。警句は天才の最も得意とする武器であつて、オスカー・ワイルドもメーターランクも人氣の半ばゝ警句の力である。蘇峯も漱石も芥川龍之助も頗る巧妙な警句の製造家である。

が、緑雨のスツキリした骨と皮の身體つき、ギロリとした眼つき、絶間ない唇邊の薄笑ひ、惣てが警句に調和してゐた。何の事は無い、緑雨の風丰、人品、音聲、表情等一切がメスのやうに鋭どいキビ〳〵した緑雨の警句其儘の具象化であつた。

私が緑雨を知つたのは明治二十三年の夏、或る温泉地に遊んでゐた時、突然緑雨から手紙を請取つたのが初めてゞあつた。尤も其頃專ら稱してゐた正直正太夫の名は二十二年ごろ緑雨が初めて其名で發表した『小說八宗』以來知つてゐた。(此の『小說八宗』は『雨蛙』の卷尾に載つてゐる。)夫故、此の皮肉を賣物にしてゐる男がドンナ手紙を呉れたかと思つて、急いで開封して見ると存外改たまつた妙に取濟ました文句で一向無味らなかつた。が、其末に此頃は談林發句とやらが流行するから自分も一つ作つて見たと云つて、『月落烏啼霜滿天寒さ哉――息を切らずに御讀下し被下度候』と書いてあつた。當時は正岡子規がマダ學生で世間に顏出しせず、紅葉が淡島寒月にかぶれて『稻妻や二尺八寸ソリヤこそ拔いた』といふやうな字餘りの談林風を吹かして世間を煙に卷いてゐた時代であつた。此時代を離れては緑雨の此句の興味は無いが、月落ち烏啼いての調子は巧みに當時の新らしい俳風を罵倒したもので、殊に息を切らずに御讀下

し被下度　は談林の病處を衝いた痛快極まる冷罵であつた。

綠雨が初めて私の下宿を尋ねて來たのは其年の初冬であつた。當時は綠雨といふよりは正直正太夫であつた。私の頭に深く印象してゐるは『小說八宗』であつて、驚くべき奇才であるとは認めてゐたが、正直正太夫といふ名からして寄席藝人じみてゐて何といふ理由も無しに當時賣出しの落語家の今輔と花山文を一緒にしたやうな男だらうと想像してゐた。尤も恁ういふ風采の男だとは多少噂を聞いてゐたが、會はない以前は通人氣取りの扇をパチつかせながらヘタヤタラとシヤレを云ふ氣障な男だらうと思つてゐた。處が或る朝、突然刺を通じたので會つて見ると、斜子の黑の紋付きに白ツぽい一樂のゾロリとした脊の高いスツキリした下町の若檀那風の男で、想像したほど厭味が無かつた。キチンと四角に坐つたまゝ少しも膝をくづさないで、少し反身に煙草を燻かしながらニヤリニヤリして、餘り口數を利かずにジロ〳〵部屋の周圍を見廻してゐた。どんな話をしたか忘れて了つたが、左に右く初めて來たのであるが、朝の九時ごろから夕方近くまで話して歸つた。其間少しも姿勢をくづさないでキチンとしてゐた。一體行儀の好い男で、あぐらを搔くツてな事は殆んど無かつた。愈々坐り草臥びれると能く立膝を

した。あぐらをかくのは田舍者である、通人的で無いと思つてゐたのだらう。

夫が皮切で、夫から三日目、四日目、時としては續いて毎日來た。來れば必ず朝から晩まで話し込んでゐた。が、取留めた格別な咄も夫ほどの用事も無いのに怎うして怎う頻繁に來るのか實は解らなかつたが、一と月ばかり經つてから漸と用事が解つた。其頃村山龍平の國會新聞てのがあつて、幸田露伴と石橋忍月とが文藝部を擔任してゐたが、仔細あつて忍月が退社するので、(或は既に退社してゐたのか、ドッチだか忘れて了つたが、)其後任として私を物色して、村山の內意を受けて私の人物見屆け役に來たのださうだ。其時分綠雨は國會新聞の客員といふ資格で、村山の秘書といふやうな關係であつたらしく、國會新聞の機微に通じてゐて、編輯部內の內情やら村山の人物、新聞の經營方針などを來る度每に精しく話して聞かせた。此方から訊きもしないのに何故こんな內幕咄をするのか解らなかつたが、一と月ばかり經つて公然入社の交渉を受けた時初めて思ひ當つた。此交渉は相互の事情で夫ぎりとなつたが、綠雨と私との關係は夫が緣となつて一時は可成深く交際した。

尤も私は飲んだり喰つたりして遊ぶ事が以前から嫌ひだつたから、綠雨に限らず誰との交際

にも自づから限度があつたが、當時緑雨は國會新聞廢刊後は定つた用事の無い人だつたし、私も亦始終ブラ／＼してゐたから、懶惰といふ事がお互ひの共通點となつて、私の方からは遠い本所くんだりに餘り足が向かなかつたが、緑雨は度々やつて來た。來れば必ず一日遊んでゐた。時としては朝早くから私の寢込を襲うて午飯も晩飯も下宿屋の不味いものを喰つて夜る十一時十二時近くまで話し込んだ事もあつた。

其時分即ち本所時代の緑雨は中々紳士であつた。貧乏咄をして小遣錢にも困るやうな泣言を能く云つてゐても、いつでもゾロリとした常綺羅で、困つてるやうな氣振は少しも無かつた。が、家を尋ねると、藤堂伯爵の小さな長屋に親の厄介となつてる部屋住で、自分の書齋らしい室さへも無かつた。緑雨のお父さんといふは今の藤堂伯の先々代で詢蕘齋の名で通つてる殿樣の准侍醫であつた。此の詢蕘齋といふは文雅風流を以て聞えた著名の殿樣であつたが、頗る頑固な舊弊人で、洋醫の藥が大嫌ひで毎日持藥に漢方藥を用ひてゐた。此煎藥を調進するのが緑雨のお父さんの役目で、其の爲めの藥味箪笥が自宅に備へてあつた。其の藥味箪笥を置いた六疊敷ばかりの部屋が座敷をも兼帶してゐて緑雨の客も此座敷へ通し、外に定つた書齋らしい室が

無かつたやうだ。こんな長屋に親の厄介となつてゐたのだから無論氣樂な身の上では無かつたらうが、外出ける時はイツデモ常綺羅の斜子の紋付に一樂の小袖といふゾロリとした服裝をしてゐた。尤も一枚こつきりの所謂常上着の晴着なしであつたらうが、左に右くリウとした服裝で、看板法被に篆書崩しの齋の字の付いたお抱へ然たる俥を乘廻し、何處へ行つても必ず俥を待たして置いた。例へば私の下宿に一日遊んでる時でも、朝から夜る遲くまでも俥を待たして置いた。長尻の男だからドコへ行つても長かつたが、何處でも俥を待たして置いたから、綠雨の來てゐるのは伴待や玄關や勝手で長々と臥そべつてる綠雨の車夫で直ぐ解つた。綠雨の車夫は恐らく主人を乘せて駈ける時間よりも待つてて眠る時間の方が長かつたらう。綠雨は口先きばかりでなくて眞實困つてゐたらしいが、恁んな馬鹿げた虛飾を張るに骨を折つてゐた、綠雨と一緒に歩いた事も度々あつたが、綠雨は何時でもリウとした黑紋付で跡から俥がお伴をして來るといふ勢ひだから、精々が米琉の羽織に鐵欄の眼鏡の風采頗る揚らぬ私の如きは怎うしてもお伴の書生ぐらゐにしか見えなかつたであらう。

綠雨が一日私の下宿で暮す時は下宿の不味いお膳を平氣で喰べてゐた。シカモ鰍の味噌煮と

いふやうな下宿屋料理を小言云ひ〳〵奇麗に平らげた。が、率ざ何處かへ何か食べに行かうとなると中々嚴ましい事を云つた。三日に揚げずに來るのに毎次でも下宿の不味いものでもあるまいと、何處かへ食べに行かないかと誘ふと、鳥は濱町の筑紫でなけりやァ喰へんの、天麩羅は横山町の丸新でなけりやァ駄目だのと、ツイ近所で間に合はすといふ事が出來なかつた。家の惣菜なら不味くても好いが、餘所へ喰べに行くのは贅澤だから選擇みをするのが當然であるといふのが緑雨の食物哲學であつた。其頃は電車の無かつた時代だから、緑雨はお抱への俥が毎次でも待つてるから宜いとしても、此方はわざ〳〵高い宿俥で遠方まで出掛けるのは無駄だと思つて、近所の安西洋料理にでも伴れて行かうもんなら何となく通人の權威を傷つけられたといふやうな顏をした。『通人てものは旨い物ばかり知つてゐて不味い物が解らんやうでは駄目だ』と、或時近所の、今なら七錢均一とか十錢均一とか云ひさうな安西洋料理へ案内した時に云ふと、『だから君の下宿のお膳を一生懸命研究してゐるぢやァないか、』と拔からぬ顏をして冷ましてゐた。夫でも西洋料理は別格通で無かつたと見えて、一向通も云はずに鹽の辛い不味い料理を奇麗に片附けた。ドダイ西洋料理を旨がる田舍漢では食物の咄は出來ないといふのが

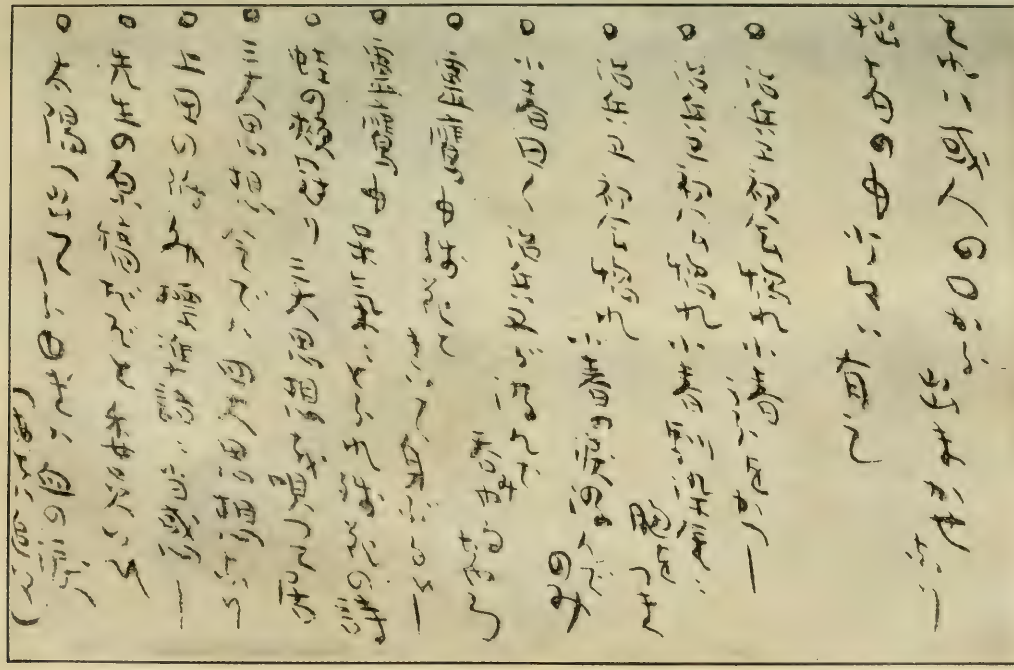
緑雨の食通であつたらしかつた。

本所を引拂つて、高等學校の先きの庭の廣いので有名な奥井といふ下宿屋の離れに轉居した頃までは緑雨はマダ紳士の格式を落さないで相當な贅を云つてゐた。丁度上田萬年博士が歸朝したてゞ、飛白の羽織に鳥打帽といふ書生風で度々遊びに來てゐた。緑雨は相應に影では惡語を云つてゐたが、夫でも新歸朝の秀才を竹馬の友としてゐるのが滿更惡い氣持がしなかつたと見えて、咄の序に能く萬年が恁う云つたとか、那ア云つたとか噂をしてゐた。

壹岐殿坂の中途を左へ眞砂町へ上るダラ／＼坂を登り切つた左側の路次裏の何とか云ふ下宿へ移つてから緑雨は俄に落魄れた。落魄れたと云つては語弊があるが、夫までは緑雨は貧乏咄をしても黒斜子の羽織を着てゐた。不味い下宿屋の飯を喰つてゐても牛肉屋の鍋を突つくやうな鄙しい所爲は紳士の體面上すまじきものゝやうな顔をしてゐた。が、壹岐殿坂時代となると飛白の羽織を着初して、牛肉屋の鍋でも下宿屋の飯よりは旨いなどゝ弱音を吹き初した。今は天麩羅屋か何かになつてるが、其頃は「いろは」と云つた坂の曲り角の安汁粉屋の團子を藤村ぐらゐに喰へるなぞと云つて、行くたんびに必ず團子を買つて出した。

壹岐殿坂時代の綠雨には紳士風が全で無くなつてスッカリ書生風となつて了つた。竹馬の友の萬年博士は一躍專門學務局長と云ふ勅任官に跳上つて肩で風を切る勢ひであつたから、公務も忙がしかつたらうが、二人の間に何か衝突もあつたらしく、綠雨の汚ない下宿屋には萬年博士の姿が餘り見えなかつた。何かにつけて綠雨は萬年博士を罵つて、愚圖愚圖云やア萬年泣拜といふ手紙を何本も發表してやると力んでゐた。其代りに當時はマダ大學生であつた佐々醒雪、笹川臨風、田岡嶺雲といふやうな面々が屢々綠雨のお客さんとなつて「いろは」の團子を賞翫した。醒雪は其時分鬱々たる黑い髯を垂れて大學生とは思はれない風采であつた。綠雨は佐々彈正と呼んで、『昨日彈正が來たよ、』などゝ能く云つたもんだ。綠雨の『おぼえ帳』に、「鮪の土手の夕あらし」と云ふ文句が解らなくて『天下豈鮪を以て築きたる土手あらんや』と力んだといふ批評家は誰だか忘れたが此の連中の一人であつた。綠雨は笑止しがつて私に話したが、到頭『おぼえ帳』の一節となつた。

上田博士が歸朝してから大學は俄に純文學を振つて『帝國文學』を發刊したり近松研究會を創めたりした。綠雨は竹馬の友の萬年博士を初め若い文學士や學生などゝ頻りに交際してゐた



綠雨の筆蹟

が、江戸の通人を任ずる緑雨の眼からは田舎出の學士の何にも知らないのが馬鹿げて見えたのは無理もなかつた。若い學士の方でも緑雨の社會通を相當に認めて、然ういふ方面の解らない事があると屡々緑雨の許に訊きに來たもんだ。萬年博士が『天網島』を持つて來て、『さんじやうばつからうんころとつころ』とは何の事だと質問した時は、有繋の緑雨も閉口して兜を拔いて降參した。其頃の若い學士達の馬鹿々々しい質問や樂屋落や内緒咄の剔抉きが後の『おぼえ帳』や『控へ帳』の材料となつたのだ。

何でも其時分だつた。帝國文學を課題とした川柳をイクツも陳べた端書を續いて三枚も四枚もよこした事があつた。端書だからツイ失くして了つて今では一枚しか殘つてゐないが、『上田の附文標準語に當惑し』、『先生の原稿だぞと委員云ひ』といふやうなのがあつた。前者は萬年博士が標準語に關する大論文を發表した際で、標準語といふ言葉が其頃の我々の仲間の流行語となつてゐた。又誰かの論文中 "Chopin" をチヨピンと書いてあつたので、『チヨピンとはおれが事かとショパン云ひ』といふ川柳が出來たが、此作者は緑雨であつたか萬年博士であつたか忘れて了つた。『門三味線』を作つたのも此の壹岐殿坂時代であつて、此文句が今の批評家さま

に解つたら一大事だなどゝ皮肉を云ひつゝ會心の文句を讀んで聞かした事があつた。

森川町の草津の湯の傍の藤藤といふ下宿屋に轉じたのは其後であつた。此の藤藤時代が綠雨の最後の文人生活であつた。(小田原時代や柳原時代は文壇とは餘程縁が遠くなつてゐた。)綠雨が一葉の家へしげしげ出入し初めたのは此時代であつて、同じ下宿に燻ぶつてゐた大野酒竹の關係から馬場孤蝶、戸川秋骨といふやうな『文學界』連と交際を初めたのが一葉の家へ出入する機會となつたのであらう。其頃から私とは段々疎遠となつて餘り往來しなくなつたゆゑ、其頃からの綠雨の晚年期に就ては殆んど何にも知らない。

餘り憚りなく云ふと自然暗黑面を暴露するやうになるが、綠雨は虛飾家と云へば虛飾家だが黑斜子の紋附きを着て抱へ俥を乘廻してゐた時代は貧乏咄をしてゐても氣品を重んじてゐた。下司な所爲は決して做なかつた。何處の家の物でなければ喰へないなどゝ贅を云つてゐた代りには通人を氣取ると同時に紳士を任じてゐた。

奧井から壹岐殿坂へ移つて、紳士風か拔けて書生風となつてからも矢張相當に見識を取つてゐて、時偶は鄙しい事を口にしても決して行ふ事は無かつた。且中學へ通ふ小さい弟(今は

醫學士となつてゐる）弟と一緒に暮してゐたから自然謹愼してゐた。緑雨の耽溺方面の消息は餘り知らぬから、或は其頃から案外コソ〳〵遊んでゐたかも知れないが、左に右く表面は頗る眞面目で、目に立つやうな遊びは一切愼しみ、若い人たちのタワイも無い遊び振を鼻頭で冷笑つてゐた。或る樓へ遊びに行つたら、正太夫といふ人が度々遊びに來る、今晩も來てゐますといふゆゑ、其の正太夫といふ人を是非見せて呉れと頼んで、廊下鳶をして障子の隙から竊と覗いて見たら、デク〳〵肥つた男が三枚も蒲團を重ねて木魚然と安座をかいて納まり返つてゐたと笑つてゐた。又或る人たちが下司な河岸遊びをしたり、或る人が三ツ蒲團の上で新聞小説を書いて得意になつて相方の女に讀んで聞かせたり、又或る大家が吉原は何となく不潔なやうな氣がすると云ひつゝも折々夫となく誘ひの謎を掛けたり、又或る有名な大家が細君にでもやるやうな手紙を女郎によこしたのを女郎が得意になつてお客に見せびらかしてるといふやうな話をして、所謂大家先生達も遊びに掛けると存外な野暮で、田舎臭くて垢ぬけがしないと嘲つてゐた。夫から比べると、文壇では大家ではないが、或る新聞小説家が吉原へ行つても女郎屋へ行かずに引手茶屋へ上つて、十二三の女の子を集めてお手玉をしたり毬をついたりして無邪氣

な遊びをして歸るを眞の通人だと稱揚してゐた。少くも綠雨は遊ぶ事は遊んでも此通人と同じ程度の遊びだと暗に匂はして他の文人の下等遊びを冷笑してゐた。壹岐殿坂時代の綠雨はまだ愡ういふ垢拔けした通人的氣品を重んずる風が殘つてゐた。

簾藤へ轉じてから此氣風が全で變つて了つた。服裝も書生風よりは寧ろ破落戶――といふと語弊があるが、同じ書生風でも墮落書生といふやうな氣味合があつた。第一、話題が以前よりは餘程低くなつた。物質上にも次第に逼迫して來たからであらうが、自暴自棄の氣味で夜泊が激しくなつた。昔しの綠雨なら冷笑しさうな下等な遊びに盛んに耽つたもので、『こんな遊びをするやうでは綠雨も駄目です、近々看板を卸して了ひます』と下等な遊びを自白して淋しさうに笑つた事があつた。其頃綠雨の艷聞が屢々噂された。以前の綠雨なら艷聞の傳はる人を冷笑して、あの先生も到頭戀の奴となりました、などゝ澄ました顏をしたもんだが、其頃の綠雨は安價な艷聞を得意らしく自分から臭はす事さへあつた。

小田原へ引越してから一度上京した序に尋ねて呉れた。生憎留守で會はなかつたので、手紙を送ると直ぐ遣したのが次の手紙で、夫ぎり往復は絕えて了つた。綠雨の手紙は大抵散逸した

が、不思議に此の一本だけが殘つてるから爰に掲げて綠雨を偲ぶたねとしやう。

「言文一致ニカギル、コウ思附イタ上ハ、基礎ヤ標準ヤニ頓着スル迄モアリマセヌ、タヾヤタラニオハナシ體ヲ振廻シサヘスレバ、ドコカラカ開化ガ參リマスサウデ、私モマケズニ言文一致デ此手紙ヲシタ、メテ差上ゲマス、今ニ三輪田君ノ梅見ニ誘フ文、高津君ノ悔ミノ文ナドヲ凌駕スルコト、思召シ下サイ

久シクオ目ニカ、リマセヌガ、コレハアナタニバカリデナク、ドナタニモ同ジコトデ、先日一寸露伴君ヲタヅネマシタノサヘ二年ブリト申スヤウナ譯デス、昔ハ御機嫌伺ヒトイフ事モアリマシタガ、今デハ御氣焔伺ヒデスカラ、蛙鳴ク小田原ツ子ノ如キハ、メツタニ都ヘハ出ラレマセヌ、コノゴロ御引越ニナリマシタサウデ、區名カラ申シマスト、アナタモヤハリ牛門ノ一傑デアラセラル、ヤウナ事デ、先ゴロ弟ヲ喪ヒマシタノデ、イロ／＼片附ケモノヲ致シマシタ、卽チ財政整理デ、其節我樂多文庫ヲ見出シマシタカラ、遲マキナガラ返上ニ及ビマシタノデ、仰セノ通リアノ時分ノコトヲオモヒマスト、何ダカヲカシクナリマス

病氣ヲオタヅネ下サイマシタガ、コレハ重イトイヘバ重イ、輕イトイヘバ輕イ、ドチラニモナリマスノデ、カノ本復スルカト思ヘバ全快スノ方ノ組デス、當所ヘ參リマス前、凡ソ半年ホドヲ鵠沼ニ辛棒シテ居リマシタガ、無論ドツトネテヰルトイフデハアリマセズ、ソレガ却テ苦痛デハアリマスガ、昨今デハマヅ〳〵健康ニチカイ方デス

文壇モ隨分妙ナモノニナツタデハアリマセヌカ、才人ゾロヒデ、豪傑ゾロヒデ、イヤハヤ我々枯稿連ハロヲ出ス場所サヘアリマセヌ、一ツ奮ツテナド、思フコトノナイデモアリマセヌガ、何分オソロシサガ先ニ立チマスノデ、ツイ〳〵遠クカラ拜見シテヰルトイフヤウナコトデ、コレデ無難ニ飯ガクヘレバ、コンナラクナ事ハアリマセヌ、慾ニハ私モ東京ニ居テ、文藝倶樂部ノ末ノ方ニアルヤウナ端唄ヲツクツテ、竹富久井アタリニ集會シテヰマシタラ、モウ一倍ラクナ事ダラウト思ヒマス

近ゴロノ私ノ道樂ハ、何デモオモヒ浮ンダコトヲ書ツケテオイテ、ソレガドレダケノ月日ヲ經タラ、フルクナルカト申スコトヲ試驗シテオリマス、何ヲオ隱シ申シマセウ私モ華族ノ二男ニハ生レマセヌノデ、白米氏ニ敗ラルヽ點ニ於テハ御同樣デス

何カ書クコトガモツトアツタツモリデシタガ、丁度妹ノモトカラ電報ガ今屆キマシテ、急ニ出立ノヨウイニカヽリマスノデ、コノ邊デヤメテ置キマス、シリキリトンボ。亂筆御用捨

三十日　　齋藤

内田様

コウ書イタマヽ、デ電車ニ飛乘リマシタノデ、今日マデ机ノ上ニ逗留シテヲリマシタ、昨夜歸宅イタシマシタバカリデ今又東京ヘ立チマスノデ書直スヒマガアリマセヌ、ナゼソンナニアワテルカトオ思召シマセウガ、ソレハ明後日アタリノ新聞廣告ニ出マス件ト、妹ノ方ノ件ト二ツノ急要ガアルタメデス、オユルシ下サイ

五日正午

緑雨の失意の悶々が此の冷靜を粧つた手紙の文面にもあり〳〵現はれてをる。夫から以後は全く疎縁になつて了つた。

其後再び東京へ轉住したと聞いて、一度人傳に聞いた淺草の七曲の住居を最寄へ行つた序に尋ねたが、ドウしても解らなかつた。誰かに精しく訊いてから出直すつもりでゐると、其中に

一と月ほど經つて、『小生事本日死去仕候』となつた。一代の奇才は死の瞬間までも世間を茶にする用意を失はなかつたが、一人の友人の見舞うものも無い終焉は極めて淋しかつた。夫ほど病氣が重くなつてるとは知らなかつたので、最一度尋ねるつもりでツイ夫なりに最後の皮肉を訊かずに了つたのを今猶ほ殘惜しく思つてゐる。葬儀は遺言ださうで營まなかつたが、綠雨の一番古い友達の野崎左文と一番新らしい親友の馬場孤蝶との肝煎で、駒込の菩提所で告別式を行つた。綠雨の竹馬の友たる上田博士も綠雨の第一の知己なる坪内博士も參列し、綠雨の最も莫逆を許した幸田露伴が最も悲痛なる祭文を讀んだ。丁度凩交りの雨がドシヤ／＼降つた日で、一代の皮肉家綠雨を弔ふには極めて相應しい意地の惡い天氣であつた。

綠雨の全盛期は國會新聞時代で、夫から次第に不如意となり、わざわざ世に背き人に逆らふを賣物としたので益々世間から遠ざかるやうになつた。元來綠雨の皮肉には憎氣が無くて愛嬌があつた。綠雨に冷笑されて綠雨を憎む氣には決してなれなかつた。が、世間から款待やされて非常な大文豪であるかのやうに持上げられて自分を高く買ふやうになつてからの綠雨の皮肉は冴を失つて、或時は田舍のお大盡のやうに横柄で鼻持がならなかつたり、或時は女に振棄て

られた色男のやうに愚痴ッぽく厭味であつたりした。緑雨が世間からも重く見られず、自らも世間の毀誉褒貶に頓着しなかつた頃は宜かつたが、段々重く見られて自分でも高く買ふやうになると自負と評判とに相應する創作なり批評なりを書かねばならなくなるから、苦しくもなり固くもなつた。同時に自分を案外安く扱ふ世間の聲が耳に入ると不愉快で堪らなくなつて愚癡を覆すやうになつた。緑雨の愚痴は壹岐殿坂時代から初まつたが、其以後失意となればなる程世間の影口に對する辯明即ち愚痴が愈々多くなつた。私が緑雨と次第に疎遠になつたのは緑雨の話柄が段々低級になつて嫌氣がさしたからであるが、一つは皮肉の冴を失つた愚癡を聞くのが氣の毒で堪らなかつたからだ。

緑雨は逍遙や鷗外と結んで新らしい流れに棹さしてゐた。が、根が昔の戲作者系統であつたから、人生問題や社會問題を文人には無用な野暮臭い穿鑿と思つてゐた。露骨に云ふと、恁ういふマジメな問題に興味を持つだけの根柢を持たなかつた。が、不思議に新らしい傾向を直覺する明敏な頭を持つてゐて、魯文門下の「江東みどり」から「正直正太夫」となると忽ち逍遙博士と交を訂し、續いて露伴、鷗外、萬年、醒雪、臨風、嶺雲、酒竹、一葉、孤蝶、秋骨と、絶えず向上

して若い新らしい知識に接觸するに少しも油斷が無かつた。根柢ある學問は無かつたが、不斷の新傾向の聰明なる理解者であつた。が、此の學問といふ點が綠雨の弱點であつて、新知識を振廻すものがあると痛く癪に觸るらしく、獨逸語や拉丁語を知つてるたつて端唄の文句は解るまいと空嘯いて、『君、和田平の鰻を食つた事があるかい？』などゝ敵を討つたもんだ。

綠雨の傑作は何と云つても『油地獄』であらう。が、綠雨自身は『油地獄』を褒めるやうな批評家さまだから力タキシお話しにならぬと云つて、『かくれんぼ』や『門三味線』を得意がつてゐた。『門三味線』は全く油汗を搾つて苦辛した眞に彫心鏤骨の名文章であつた。けれども苦辛といふは修辭一點張であつたゆゑ、私の如きは初めから少しも感服しないで明らさまに面白くないといふと、頗る不平で、『君も少し端唄の稽古でもし玉へ、』と面白く無い顏をした。綠雨のデリケートな江戶趣味からは言文一致の飜譯調子の新文體の或るものは氣障であつたり、或るものは田舍臭かつたりして堪らなかつたやうだ。

が、綠雨の傑作は矢張『油地獄』と『雨蛙』であらう。此の二つは何れも綠雨自身の不得意とする作で、人の褒めるのが癪に觸ると云つて喰つて掛つたものであるが、綠雨の自ら得意と

する『かくれんぼ』や『門三味線』よりは確に永遠の生命がある。聰明な眼識を持つてゐたが矢張江戸作者の系統を引いてシャレや小唄の粋を拾つて練りに練り上げた文章上の「穿ち」を得意とし、世間に通用しない「獨りよがり」が世間に認められないのを不滿としつゝも、誰にも理解されないのを却て得意がる氣味があつた。が、紅葉や露伴も飽かれた今日、綠雨だけが相變らず讀まれて、昨年縮印された全集が可成な部數を賣つたといふは綠雨の隨喜者が今でもマダ絶えないものと見える。綠雨は定めし苔の下でニヤリニヤリと脂下(やにさが)つてるだらう。だが、江戸の作者の傳統を引いた最後の一人たる綠雨の作は過渡期の畸兒の不遇の悶えとして存在の理由がある。綠雨の作の價値を秤量するにニーチエやトルストイを持出すは牛肉の香味を以て酢の物を論ずるやうなものである。綠雨の通人的觀察も亦屢々人生の一角に觸れてゐるので、シミツ垂れな貧乏臭いプロの論客が鼻を衝く今日綠雨のやうな小唄で人生を論ずるものも一人ぐらゐは有つてもイヽやうな氣がする。が、恁う世の中が世智辛(せちがら)くなつては綠雨のやうな人物はモウ出まいと思ふと何となく落寞の感がある。

——大正十四年三月一日補訂——

『杏の落ちる音』の主人公

——江戸の文明の落し子たる頽廢的通人の半面——

『杏の落ちる音』といふは明治四十五年一月發行の『ほとゝぎす』で發表されだ虛子の短篇である。虛子の傑作では無いが、可成に評判された作である。此作は其の少し前に物故したシロウトの狂言師岡田紫男をモデルとしたので、篇中の人物が總て實在の人であるは發表の翌々月の『ほとゝぎす』で紫男の親友たる林若樹に聲言され、夫から間もなく『日本及び日本人』の餘白の六號活字で篇中の人物に一々鍵(キイ)を與へたから、今日之を言明しても最早少しも差支は無いと信ずる。

岡田紫男と云つても今では誰も知るものはあるまい。在世時ですらが一部の好事家間にのみ知られた名で世間には餘り交渉が無かつた。が、極めて多才多藝で畫も描いたし狂歌も上手だつた。俗曲にも巧みで世事にも通じ、其上に圓轉滑脫の才氣があつて、行

く處として可ならざるは無い不思議の才人であつた。就中、狂言は山本東の高弟として堂に入り、シロウトでこそあれ專門家を凌ぐ技倆があるものとして能樂界に認められてゐた。紫男といふは狂言師としての名であつて本名は村雄であつた。

狂言を外にして、紫男は先代からの藏泉家であつて、古泉の歷史に精しく古錢の鑑識に長じてゐた。泉貨の研究が延長して自然和漢の金石にも及び、兼ねて考古學の大要にも通じ、先代からの叢柏居の名は全國古泉家及び好事家間に隱れもなかつた。

幸か不幸か知らぬが、紫男は親から讓られた資產があつて鹽酢の苦勞が無かつたので一生を狂言と古錢の道樂に隱れて世間に現れなかつた。此の隱れたる才人の面影が虛子の筆に載つて世に傳へられたのは何かの因緣であらうし、江戶の通人を偲ばせる紫男の面影は虛子の作に由て後世に殘るわけである。

が、紫男は虛子の作に現れたやうな恁うした道樂肌の通人ばかりでは無かつた。半面には生眞面目(きまじめ)な考古家の研究氣質があつた。元來虛子の短篇は小說として作られたのだから、紫男をモデルとして紫男の事實を材としたにしろ、多少の誇張や潤飾があるのは

當然であつて、尺牘體の下記の一篇は畢竟虛子の作に傍註を施こすツモリで虛子に寄せたものである。が、虛子の作を離れずに筆を着けた爲、紫男の肖像畫としては實は頗る不十分である。且虛子の作を讀んでからでないと解らんし、篇中の人物も一部少數好事家外には世間に餘り知られない人たちばかりだから、樂屋噺染みてゐて世間的には餘り興味も無い。到底虛子の作を離れて單獨に讀ませるものでは無いが、其中自づから江戶の頽廢的通人の名殘を偲ばしめるものがあらうと思ふ。

虛子の作に現れた紫男の周圍の人物中には林若樹や松根東洋城といふやうな筆豆な人があるから、紫男の畸行逸聞は是等の人々に由て後世に傳へられるだらう。紫男は江戶の爛熟時代の面影を傳へた多能多藝の才人であつて、決して單なるエロチック興味一點張の唯の通人では無かつたのだ。

（大正十三年十月追記。）

虛子君、『杏の落ちる音』は近頃面白く拜見しました。有體に云つたらアナクの作として傑作とは申上げ兼ねますが、主人公初め登場人物が大抵相識の間なので、モデルの興味に微笑もし

苦笑もしました。が、作家を友人に持つてるとイツ何時生捕られるか解らないと恐ろしくなりました。今日モデル問題を嚴しく持出す野暮は箱根から此方には最早有りますまいが、文人と往來してゐるものは片時も油斷がなりません。『杏の落ちる音』の主人公の平岡綠雨もモデルにされて怒る野暮ぢやァ無いから、極樂のドコかの隅で、『ハックサメ……嬉しいナア、娑婆で噂をしてゐやすぜ！』とでも嬉しがつてるでせう。

綠雨――といふと齋藤綠雨と紛らはしい。『杏の落ちる音』の綠雨が岡田紫男であるのは今では誰にも解つてるから、齋藤綠雨と紛らはしくないやうに玆には紫男と明らさまに書きませう。紫男は全く今の世に珍らしい面白い男でした。美術學校を中途で廢めて了つたが、ちよつと畫も描けた。狂歌も詠んだ。親の代からの古錢家で、考古の癖も相應にあつた。狂言はクロウトの域に入り掛けてゐた。いつも元氣に噪いで、身體を搖りながら、『面白いナア、嬉しいナア』を連發して誰とでも萬遍なく談話の調子を合はした。紫男の友の直樹は能く同好を招いて茶話會を催ほす事の好きな男だが、紫男は其席の缺く可からざる一人であつた。格別話題に富んでるのでも座を取持つのでも無いが、紫男がゐると妙に話がはづんだものだ。『嬉しいナア、面白い

ナア』を連發しつゝ紫男が手を拍つたり膝を叩いたりするのが席を賑かにした。紫男がゐなくなつた後の直樹の茶話會は較や淋しくなつた。

『杏の落ちる音』に鳥渡出てゐた、考古會の歸りに池の端の待合へ行つて双陸をしたといふ、其時の同伴者の一人は私であつた。

考古會の會衆が散じて僅か三四人が居殘つた時、人形の好きな岸澤西湖といふ大通が、『どうです、之から一つ何處かへ行つて、お夕飯を喰べてから双陸をするッてのは。』

私は餘り進まなかつたが、勸め上手の紫男が、『先生、先ア行つて御覽なさい、面白いもんですぜ、』と傍から勸めるのに乘せられて、何處で飯を喰つて何處で双陸をするのか解らずに一緒に隨いて行つた。

大通の西湖が先きへ立つて、池の端の只ある骨董舖の、半分格子で閉つてる店先きと並んだ三尺の格子戶をガラリと排けると、『呀、入らッしやいまし、』と仇な錆のある聲を先きに現れたのは粹な扮りの中年增であつた。西湖を先きに階子をトン〳〵と上ると、二階は乙ウ氣取つた待合風の座敷になつてゐた。襟の掛つたお召に白足袋の若い女が座蒲團を出す、箱火鉢を出す、

脇息を出す。挨拶から取なしから萬事が待合式であつた。東京に生れた田舍者の私は骨董屋の二階にしては餘り乙すぎると思つた。

西湖は殆んど主人のやうだつた。意氣な年增の女將然とした女は其傍に附き切りで、我々を欵待すよりは西湖の御機嫌を取るのに骨を折つてゐた。紫男はお馴染のやうで、いつものやうに洒落を云つたり手を拍いたりしてゐた。

直樹と私とは聊か質に取られた啞といふ鹽梅式だつた。が、大通の西湖と紫男だから少しもテレさせるやうな事はしないで、乙に氣取つたものでアッサリ夕飯を終つてから互に三四番双陸を闘はした。そんな事には格別興味の無い私は餘り面白いとも思はなかつたが、西湖と年增の女と紫男と、そこへ叩頭に來た道具屋の才取のやうな幇間風の男と、洒落を云つたりスッパ拔きを云つたり、私らには少しも解らぬ近所の藝者の噂をしたりする間に生ずる江戸の名殘の情緒が如何にも面白かつた。

此席で、四人して近い内に向島の隱士栗島山月居士を襲はうといふ相談をして、日を定めて此家を出たのが十時半頃だつた。外へ出て『妙な家だネ?』といふと、紫男は『あれは西湖の

小指でさアネ。中々味をやつてるのサ、』と肩を搖つて笑つた。表は骨董舖であるが、裏通りが待合となつてるのださうだ。

　夫から五六日經つて、直樹と一緒に約束の日に大川端の西淵を誘ひに尋ねると、紫男は俄に用事が出來たからと斷はつて來たさうで、三人して向島の隱士を尋ねて半日を暮した。『紫男君は來られますまいよ、』と、其時西淵は意味ありげな事を云つた。が、通人といふものは時々門外漢に解らぬ事を意味ありげに云ふから、格別氣にも留めなかつた。

　其時分であつた。或る珍本屋の二階で入札會があつた。紫男も來てゐた。其外に合田學士、平井博士、若松男爵といふやうな名代の珍本蒐集家の顏が六七人も見えた。紫男と懇意な若松男爵は紫男に向つて『オイ、君はいつ家にゐるんだい、先日ッから三度も四度も行くが、いつ行つてもゐた事が無い。朝ならゐるかと思つて起きぬけに出掛けても矢張ゐない。いつ行つたら會へるんだい？』

　紫男は何とも答へないでニヤ〳〵笑つてゐた。紫男は評判の朝寢坊で、午砲が鳴らなければ起きないといふ男である。此の朝寢坊の紫男を早起の若松男爵が起きぬけに尋ねても家にゐた

事が無いといふ。

『妙な事があるもんだ！』と私は思つた。

紫男は何とも答へないでニヤ〳〵笑つてゐた。珍本屋の主人の松江もニヤ〳〵して紫男の顔を見てゐた。

話は夫切りで濟んだが、四五日して此珍本屋へ行くと、主人の松江は曰く、『紫男さんも近頃はお樂みが出來たさうで、先日の大水（先年の下谷淺草から向島一圓が水に浸つた時である。）の時、向島の堤で紫男さんに會ひました、之から先きは怎うだいツてから、腰ぎりでさといふと、そいつは大變だと尻端折でボチャ〳〵水の中を行かれたが、何でもお樂みの家が水に浸つたらしいのです、』と。四五日前の晩に若松男爵の咄を聞いて松江がニヤ〳〵してゐたのは之を知つてるからで、此咄は『杏の落ちる音』の中にも鳥渡見えてましたネ。

此話を聞いて私は思つた。紫男の細君は世帶にかまけて化粧に關はないからでもあらうが、紫男よりは十歳も年長のやうに見えた。紫男は苦みばしつたスッキリした江戸前の好い男振であつたが、細君は容色も振はなかつたが恐ろしく老けてゐて、怎うしても紫男の姉さんか伯母

さんとしか見えなかつた。『杏の落ちる音』にもある通りな切貼だらけの煤けた障子の家と世帯窶れした老けた細君とは元氣な若々しい江戸前の紫男には頗る不似合であつた。澁いキリツとした服裝をして骨董も捻くれば狂言もやる金縁眼鏡金時計の紫男の半面だけを知つてるものは案外ジメジメした暗ぽツたい紫男の陰氣な家庭生活を想像する事は到底出來ないだらう。紫男は三十七の男盛りであつた。表面が澁くて内側が陽氣な江戸の生活に憧がれてる男であつた。況してや金に少しも不自由しない氣樂な身分だから、世帶の爲めになる細君ばかりに感謝してはゐられないだらう。淋しいジメ／＼した陰氣な家庭の不滿足を何處かで充たさねば迚も辛抱が出來まいと、紫男の女道樂を萬更無理も無いやうに思つて同情した。が、どんな女だらうと竊に憶測して、江戸ッ子の紫男が此頃のジャラクラした白粉の女に浮れてるかと思ふと、同情する事は同情するが、紫男の江戸前を内々危なツかしく思つた。

　直樹は消息を知つてるらしかつた。が、紫男が女の家にシケ込んで歸らんので家庭が揉めて困るといふ外の精しい咄を聞く機會が無かつた。直樹と紫男と私と三人一緒になる事は珍らしくなかつたが、いつでも刀だの布だのといふ咄ばかりで持切つてゐた。『杏の落ちる音』に出て

ゐる北京の古物商から古錢を買取つたのも、後に聞くと、紫男の尻を落付かせやうといふ細君の苦肉策だつたさうだ。然う云へば古錢を引取る時には私も同行したが、細君は頻りに紫男の好奇心を煽り立てゝ買入れを勸めてゐた。幸ひ此の苦肉策は中つて、其當座は毎日家にばかり引込んで買取つた秦漢の古銅片や刀布の拓摹を作つたり、青銹の手入をしたりしてゐた。で、刀布の考證や藏泉の譜を作りたいと云つて度々私の許へ相談に來た。

或日、雨のドシャ〳〵降つた時、朝寢坊の男が珍らしく朝ツぱらから最も祕藏の珍錢を持參して寫眞を撮つて呉れと云つて來た。其日は夕方近くまで殆んど一日を面白さうに古錢の咄をして暮したが、厭勝錢から閨帳錢の話が外れて歐羅巴に於けるエロチックの研究咄となつた時、紫男は乘氣になつて身體を搖り出しつゝ、『先生、日本の閨情文學といふヤツは、男の作者が女の心持を想像して書いたので眞の女の肉の經驗とは云へないでせう。西洋には怎うです、眞の女の肉の告白といふやうなものがありますかナ？』と云つた。

『さあ、そんなものが有るか無いか僕は知らないネ』といふと、紫男は仕たり顏をして、『實は先生、さういふものを書いて見やうツてんで。出來上つたら極彩色の畫入本として、何れ先生

にも御覧に入れます、』と云つた。

『だが、君が書くなら矢張男の想像で、女の告白ぢやア無い』と云ふと、『それが然うぢやア無いんですよ。先ア〳〵、出來上るまでは秘密にして置いて、今にアッと先生を驚かせますからナ、』と、身體を搖〳〵獨りで嬉しさうだつた。

虛子君、江戸の通人には恁ういふ特有のデカダン興味があつたもんだ。强ち淫蕩といふわけでは無いので、エロチックの興味を好むといふよりは寧ろ衒ふ氣味があつた。京橋の山城河岸の津藤と云へば『梅曆』にも名が見える鳴り響いた大通であつたが、私が曾て一見した津藤の手紙に、此頃は○○を集めたり妾と寢たりして暮してゐるといふ文句があつた。御一新少し前に、淺草の或る大通が自分と馴染の藝者の情話を本名を明らさまにした合卷物に作つて、剩つさへ卷尾に二人が一つ寢してゐる極彩色の挿畫を似顏で入れたのを繪双紙屋から出版さして女から呌り込まれたといふ馬鹿々々しい珍談があります。幕末の江戸にはこんな類の珍談は箒で掃出すほど澤山あつて、町人は勿論であるが、眞面目臭つた四角四面の武家の裡面にも恁ういふエロチックの消息が傳へられてゐます。つまり文明の爛熟に免かれない暗黒面で、今でも巴黎

あたりには較や似寄の裡面の消息があるやうに聞いてゐます。

紫男にも多分恁ういふデカダンな江戸の通人の血が通つてゐたものと見えます。恁んな噺を江戸ッ子の口から聞くのは一向珍らしくないから、紫男の所謂閨情文學をも左程深く氣にも留めないで聞流して了ひました。

事實また當時の紫男は閨情文學よりは泉貨學や吉金錄の研究に忙がしかつた。私は歐羅巴のニューミスマチクスに關する質問を度々受けて閉口し、紫男の質問に應ずる爲めにニューミスマチクスの一冊も買はうかと思つた位であつた。ラクーペリーの支那古泉譜を見たいと云つてました。自分の藏泉圖錄卽ち叢竹居藏泉譜を西洋風のハイカつた裝釘にしたいと、拓摹の臺紙にする木炭紙の輪廓の刷込を註文しました。私の所藏のオットオ・ユーベロードやピエーロンの藏書票譜の裝釘が氣に入つて其體裁に倣はうと云つてゐました。江戸前の通人であつて、支那の古物が好きで、其上にエキゾチックの興味を持つてゐて、古錢の本は矢張唐本仕立の帙入が一番適當してゐると云つても、西洋風が宜いのですよと、何と云つても諾かなかつた。そんな事に氣を取られて當分は女の事を忘れてゐるらしかつた。

十二月の初め紫男が病氣で寢てゐると誰からだか聞いた。が、インフルエンザだと云ふから氣にも留めずに見舞にも行かなかつた。暮の事で、忙がしいのに紛れて夫切となつたが、翌る春早々紫男が入院したと不斗聞込んだので、或る日直樹に會つて紫男の容體を聞くと、『何アに、インフルエンザを少しこぢらしたんで何でも無い、順天堂に入院してゐるが病氣よりは神經が過敏なんで、今にも死にさうにウン／＼云つてる。』と直樹は笑ひながら話した。餘り手輕い話だから其内見舞に行く積りでゐると、夫から三日目か四日目、夕方用達しから歸ると、今がた直樹さんが來られて紫男さんが歿くなられたと言殘されたと家人が話した。

掛違つて二タ月ばかりも會はなかつたが、二タ月前には元氣な紫男――ツイ三四日前に、『何でもない、騒ぎが仰山なんだ』と直樹が笑ひながら話した紫男が、ボツクリ逝つて了はうとは怎うしても思はれなかつた。が、そこ／＼に夕飯を濟まして紫男の家へ行くと、親戚や朋友がごたくさしてゐて、紫男は最早棺の中の人となつてゐた。直樹を初め恰も上京中の伊勢の隱士三浦竹翁、若松男爵などの紫男の莫逆の友が棺前に淋しく故人の噂をしてゐた。誰も彼も紫男の餘り飽氣ない最期を悲んで紫男の元氣な日を追懷してゐた。直樹は醫者でさへも危險を豫期

しなかつたほど病氣其物は決して重くなかつたと繰返してゐた。病院へ見舞に行かなかつたのは私ばかりでは無かつた。只見ると床の間には支那の古物商から買取つた古錢の一と箱が淋しさうに置いてあつた。

お通夜の歸るさ、直樹は話した。『紫男君には面白い遺稿があります。女の肉の告白を書いたもんで、「おしづ籠」といふ題です。』

『然う〳〵、开んな話をしてゐたツけ、』と過去つた雨の日の紫男の咄を不意に憶出した。『女の肉の告白は西洋にも無からうナンテ大分得意になつてゐたが、男が想像した女の肉の告白ぢや詰らんネ。』

『夫が紫男君の想像ぢや無いんで、眞實の女の肉の告白なんです。紫男君が圍つてゐた女ですナ、其女から肉の經驗咄をさせては、家へ歸るとコツ〳〵書溜めて置いたんで、紫男君が其女に陷つたのは一つは肉の經驗咄を聞くのが面白くて堪らなかつたのです。』

『ふウむ、』と餘り意外だつたので暫らくは何とも云ふ事が出來なかつた。『能く女が开んな閨中の咄を平氣で饒舌つたもんだネ。』

『紫男君も云つてました、恁ういふ祕中の祕とも云ふべき女の肉の祕密をアケスケに暴露けるのは散三男を喰ひ散らした、藝者にもなれば妾にもなつたといふバラガキでなければ出來んので、恁ういふお誂へ向きの女が水を向けるとベラ／＼饒舌るのを唯聞流して了ふは無駄だからと思つて、根堀り葉堀り饒舌らしては書いて置いたんですつて。』

『大變な事を考へたもんだネ。矢張江戸ッ子だナア。紫男の外には恁んな眞似を思付くものはあるまい。だが、一體其の女てのは怎ういふ素性なんだ？』

『以前は堀の藝者で、今は一中節の師匠をしてゐるお紫津といふ女です。』

『堀の藝者？　ぢやア最う好い婆アさんぢやないか。』

『婆アさんですとも、五十を最う餘程越してるでせう。』

直樹の咄は之だけで、夫以上を聞かなかつた。だが、紫男の女といふは老けた細君に飽足らない心の不滿を充たす爲めの若い女とばかり思つてゐたら、老けた細君よりも復た齡を老つた五十いくつの婆アさんだと聞いて意外な思ひをした。

紫男は堀の藝者といふ女の過去に逆上せてゐたのだ。垢抜けのした商賣人と云ふ條、色香の

失せた萎びた肌から昔の江戸の臭ひを嗅いで嬉しがつてゐたのだ。意氣とか通とかいふ皮一重の下に隱れてる廢頽した江戸の荒びた氣分を女の過去に求めて樂んでゐたのだ。

葬式の日、お紫津が來てゐたさうだが、お紫津の顏を知らない私は氣が付かなかつた。三十八の男盛りで、好きな江戸趣味も古錢の研究も猶だ十分に喰足りないで、一生の仕事に殘さうと云ふ叢竹居藏泉譜の一冊も出來ない内に、「おしづ箍」一冊の爲め健康の幾分を犧牲に供したとも云はゞ云はれる紫男の終焉は飽氣無かつた。

葬式が濟んでから十日ばかりして本所の大通の西湖を尋ねた。西湖もインフルエンザで床に就いてゐた。そゝくれた髯が頰から頤へ生えて顏色が青かつた。

『紫男さんも氣の毒な事をしました。いつか御一緒に双陸をしましたナ。あれ以來掛違つて會はなかつたのですが、あの時、山月さんの許へ四人して押掛けやうと約束して、其日になつて紫男君が斷はつて來ましたナ。あれは斷はつて來る筈で、山月さんの家の直ぐ傍に女が圍つてあるんだから、氣が障して來られなかつたンです。何しろ男殺しといふ札付になつてる名代の女で、あの女と關係したら軀に生血を吸取られるやうなもんで、石で作つた男だつて身體が續

きませんや。實は內々聞込みましたから何とか忠告したいと思つても、之ばツかりは外の事と違つて表面から露はに云へませんから、一度考古會の歸りに遠廻しに夫となく仄かしたんですが、ドウカ然ういふ目に會つて見たいもんで、てな紫男君の挨拶だから其以上何とも云ひやうが無い。あんな女といつまでも關係してゐては今に生命を吸取られて了うと、影では心配してゐたんですが、到頭……何しろお氣の毒でした。』と、西湖は紫男の最後の運命に同情しつゝ花柳界の一部に隱れもない男殺しの噂ばなしをした。

『杏の落ちる音』に出てゐる『お紫津の爲めに命を取られた』といふ紫男の病中の囈語は何を意味してゐるか知らんが、現代式の甘ツたるい白粉の女に眼も呉れないで、飽足らなく思つた年長の細君よりは更に齡を老つた女の萎びた肌から過去つた江戸の匂ひを臭がうとしたは江戸の通人の名殘としての紫男の價値であつた。が、江戸のデカダンの通有するエロチックの好奇を滿足させる爲めに三十八の男盛りを葬むつて了つたのは氣の毒なやうな感じが無いでも無いが、堀の藝者の肌に暖まつて江戸の趣味に飽滿しつゝ、肉の告白を聞いて瞑目した紫男の終焉は或は紫男の本望であり誇りであつたかも知れない。

だが、考へると、我々が一千年前の土偶を翫んで盛唐の文明を偲び、鐘鼎碑版の鳥跡や金石陶片の古鏽を愛撫するよりは、生殘つた江戸の藝者に命を捧げた紫男の生涯の方が遙に有意味でもあり、生き甲斐もあり死に甲斐もあつたかも知れません。紫男は資産家に生れて一生米鹽の眞の苦勞を知らずに死んで了つたが、毎月家賃と米代に追はれる我々よりも却て或は人生の一角に觸れてゐたかも知れません。

が、紫男を味氣なく思はせた世帶窶れした細君は所謂良妻賢母であつた。紫男が江戸趣味の飽滿に家を外に浮れ歩いた時も、紫男が死んでからも紫男の家はガタリともしなかつた。紫男の家藏の古泉は、人の家の不幸を附込んで手を換へ品を換へて讓受けを迫るモノマニヤック的好事家があるに關はらず、儼として猶ほ其家に襲藏されてをる。『杏の落ちる音』の『冷めたい影を投げる胸をはだけた細君』は紫男の死後を辱かしめない賢こい未亡人であつた。

直樹は此頃紫男の追善を營みたいと云つてゐる。紫男の遺愛の藏泉を靈前に陳べて紫男の友を會し、古錢の話でもして紫男を偲ばうと云ふのだが、古錢よりはお紫津の『都若葉萬歳』を手向ける方が紫男の遺靈を慰めるに足るかも知れない。虚子君、あなたも『ツルロンテッツン

テン………』でも紫男の靈前に手向けたなら、苔下の紫男は手を拍つて『旨エもんだ、』と嬉しがるでせう。

虚子君、以上は貴作の旁註として讀者の參考とならぬ事も無いでせう。若し之が餘白の埋草ともならば幸ひです。實は御無沙汰見舞ひ代りに書いたので、島田君を介しての豫ての約束を果すツモリの原稿ではありませんが、高作『杏の落ちる音』を讀むとスッキリした江戸前の男振の紫男の姿が眼の前に躍出し、狂言訛りの錆びた調子の較や頓興な紫男の聲が耳の底に聞えます。之れ以上にダラ〳〵した蛇足の旁註を加へる必要は有りませんが、薄曇りのシットリと靜かな寒い今夜、こんな淋しい晩に杏の落ちる音が何處からか聞えさうなもんだと、紫男を追懷するの情に堪へません。

（明治四十五年三月號『ほとゝぎす』所載。
大正四年八月補修。大正十三年十月再補訂。）

追記

虚子の作が發表されて後數日、直樹の林若樹は紫男を知る友人を會して亡友の爲めの追善を催した。虚子は病氣で參會しなかつたが、手向けの句を寄せて來た。『紫阿彌佛河豚に

似たもの召されけん、』と。

紫男の家の杏の花はハタのある變り花であつた。旗櫻と云つて櫻には普通であるが、杏の花に旗のあるは珍らしいさうで、紫男が沒する二三年前の丁度花盛りの頃、著名な植物學者の牧野富太郎氏が偶然通り合はして見付けて、是非標本にしたいからと二三輪持つて歸つたさうだ。虛子の俳味を動かして此の一篇の題名となつた杏は植物學上からも奇種であつた。夫から以來紫男を中心とした交友間では「杏」といふ言葉が流行つて、「誰それは杏を喰過ぎたらしい」ナド、云つたもんだ。

紫男の家の前の溝は幅四五尺ばかりの泥臭いボウフラの棲處であるが、紅葉堀とか紅葉川とか溝不相應の風雅な舊名がある。此溝の石垣に生へる特殊の齒朶から命名されたので山の手の名物の一つに數へられてゐた。此齒朶は今は全く絕えて了つたのが不思議に紫男の家の前ばかりに殘つてゐた。紫男は江戸の名物の名殘だと云つて悅んでゐた

紫男の家は今は男爵となつてる上州の岩松家(今の新田男)の家臣で、昔しは金井之恭と竝んで新田の四天王と稱された家柄であつた。新田の岩松萬次郎といふは今でも猶ほ新田

の鼠除けの猫と稱して養蠶家に大切に祀られる八方睨みの不思議な形をした猫の畫を描く殿樣であつた。此の不思議な狂言趣味ある猫のキャリケーチュアの家元たる殿樣の家の子に紫男のやうな奇人物を生じたは偶然で無いやうな氣持がする。

紫男は江戸の繁昌を偲ぶ料に江戸名物の商牌を集めた。商牌の蒐集家としても紫男の名は好事家間に聞えてゐた。若樹は紫男の記念として紫男が嘗て考證した商牌集『紫艸』を出版した。明治大正年間を通じて凝つた出版の一つで、後世珍本としてもてはやされべきものだ。其卷頭に若樹の筆に成つた紫男の小傳と百穗が描いた肖像がある。江戸前のスッキリした紫男の風丰が躍如としてをる。

紫男の友達には若樹を初め隨筆家が多いから、紫男の奇行逸事の數々は必ず是等の隨筆家に由て永久に傳はるであらう。

紫男の健康を心配した本所の大通の西澤仙湖は夫から以來段々宿痾が重つて殆んど床へ就いたぎりだつた。大正四年の秋、丁度小康を得た時だつたと見え、仙湖は看護婦附添で一生憂身を扮した人形の展覽會に出て來た。聲も嗄れ〳〵に衰へ切つてゐたが、偶然の咄

の序に紫男を追懐して、『あの女と關係するとミンナ身體がヘナ〳〵になります。紫男さんの後釜に或る男が此頃生捕られてゐますが、何れ復た命を吸取られる事でせう。』と淋しく笑つた。『私くしも最う長い事は無い。直きお暇乞ひでせうが、アナタの御心配なすつた池の端へは最う行きませんから、ドウカ御安心なすつて。私くしの「杏の落ちる音」も其中にアナタの材料にユックリ話してお聞かせしませう。』

仙湖は翌る大正五年の春、目出度く大通の生涯を終つた。餘り深い交際で無かつたから、偶然唯つた一度池の端の隱れ家に案内された外には仙湖の『杏の落ちる音』の消息を知る機會が無かつた。が、仙湖は曾て我々同人が精養軒で催ほした會合にコテ〳〵塗つた若い女を伴れて來て、ニーチエやワグネルを論じたり六朝や印度を批評する連中の前で、若い女の絃で上方唄を歌つて聞かした度胸のある通人であつた。恁ういふ江戸前の通人生活には必ず『杏の落ちる音』の背景が伴ふものである。仙湖に案内された池の端の女といふは一と頃何錢園洲とか鳴らした公園の役者の女房の果であつて、海に千年山に千年の履歷のある女ださうだから、紫男の女と恐らく好一幅對であつたらう。『實は私くしも杏を喰過

ぎましたんで………』と仙湖は病床で痩せ細つた腕を撫りながら述懐した事があつたが、大方極樂で紫男と再會して、蓮飯に舌打ちしながら娑婆の杏の味を憶出しては手を拍つて嬉しがつてる事だらう。

早いもんで、今年は紫男の十三回忌になるさうだ。恁うした紫男の半面には極めて生眞面目な考古趣味があつたので、父から傳承した泉貨學には可成深い造詣を持つてゐた。私の古錢に關する些かの知識は紫男に負ふてゐるので、北京の古物商から引取つた古錢の中から分けて貰つた若干の刀布は今でも匣底に祕藏してをる。時々出して見る度毎に紫男が一々講釋して聞かせた事を憶出す。紫男が健在してゐたら私の泉貨學も最う少し進歩したらうと、折々紫男を追懷するに堪へない。

——大正十三年十月再追記——

淡島椿岳

――過渡期の文化が產出した畫界のハイブリッド――

震火で灰となつた記念物の中に史蹟といふのは仰山だが、燒けて了つて惜まれる小さな遺跡や建物がある。淡島寒月の向島の舊庵の如き其の一つである。今では其跡にバラック住ひをして舊廬の再興を志ざしてゐるが、再興されても先代の椿岳の手澤の存する梵雲庵が復活するのでは無い。

向島の言問の手前を堤下に下りて、牛の御前の鳥居前を小半丁も行くと左手に少し引込んで黄蘗の禪寺がある。牛島の弘福寺と云へば鐵牛禪師の開基であつて、白金の瑞聖寺と聯んで江戸に二つしか無い黄蘗風の佛殿として江戸時代から著名であつた。此の向島名物の一つに數へられた大伽藍が松雲和尚の刻んだ拈華微笑の本尊や鐵牛血書の經卷や其他の

寺寶と共に盡く灰となつて了つたが、此の門前の椿岳舊棲の梵雲庵も亦劫火に亡び、玄關の正面の梵字の圓い額も左右の柱の「能發一念喜愛心」及び「不斷煩惱得涅槃」の兩聯も、訪客に異樣な眼を睜らした小さな板碑や五輪の塔が苔蒸してる小さな笹籔も、小庭を前にした椿岳舊棲の四疊半の畫房も皆焦土となつて了つた。此畫房は椿岳の亡い後は寒月が禪を談じ俳諧に遊び泥畫を描き人形を捻る工房となつてゐた。椿岳の傳統を破つた飄逸な畫を鑑賞するものは先づ此の舊棲を訪ふて、畫房や前栽に漾ふ一種異樣な蕭散の氣分に浸らなければ其畫を身讀する事は出來ないが、今ではバラックの假住居で、故人を偲ぶ舊觀の片影をだも認められない。

寒月の名は西鶴の發見者及び元祿文學の復興者として夙に知られてゐたが、近時は畫名が段々高くなつて、新富町の燒けた竹葉の本店には襖から袋戸や扁額までも寒月づくめの寒月の間といふのが出來た位である。寒月の放膽無礙な畫風は先人椿岳の衣鉢を承けたので、寒月の畫を鑑賞するものは更に椿岳に遡るべきである。

椿岳の畫の豪放洒脫にして傳統の畫法を無視した偶像破壞は明治の初期の沈滯萎靡した

畫界の珍とする處だが、更に此畸才を産んだ時代に遡つて椿岳の一家及び環境を考ふるのは明治の文化史上頗る興味がある。

加ふるに椿岳の生涯は江戸の末季より明治の初期に渡つて新舊文化の渦動に觸れてゐる故、其一代記は最もアイロニカルな時代の文化史的及び社會的側面を語つてをる。夫故に椿岳の生涯は普通の畫人傳や畸人傳よりはヨリ以上の興味に富んで、過渡期の畸形的文化の特徴が椿岳に由て極端に人格化された如き感がある。言換えれば椿岳は實に此の不思議な時代を象徴する不思議なハイブリツドの一人であつて、其一生は恰も江戸末季より明治の初めに到る文明急轉の繪卷を展開する如き興味に充たされてをる。椿岳小傳は亦明治の文化史の最も興味の深い一斷片である。

（大正十三年十月補記。）

椿岳の名は十年前に日本橋の畫博堂で小さな展覽會が開かれるまでは今の新らしい人たちには餘り知られてゐなかつた。展覽會が開かれても、案内を受けて參觀した人は極めて小部分に限られて、シカモ多くは椿岳を能く知つてる人たちであつたから、今だに其畫をも見ず其名を

すらも知らないものが決して少なくないだらう。先年或る新聞に、和田三造が椿岳の畫を見て、日本にも恁んな豪い名人がゐるかと云つて感嘆したといふ噂が載つてゐた。此噂の虚實は別として、此の新聞を見た若い美術家の中には椿岳といふ畫家は恁んな豪い藝術家であつたらうと好奇心を焰やしたものも亦決なして少くないだらう。椿岳は芳崖や雅邦と爭ふほどな巨腕では無かつたが、世間を茶にして描き擲つた大津繪風の得意の泥畫は『俺の畫は死ねば値が出る』と生前豪語してゐた通りに十四五年來著るしく随喜者を增し、書捨ての斷片をさへ高價を懸けて爭ふやうにもてはやされて來た。

椿岳の畫は今の展覽會の繪具の分量を競爭するやうにゴテゴテ盛上げた畫とは本質的に大に違つてゐる。大抵は惡紙に描きなぐつた泥畫であるゆゑ、田舍のお大盡や成金やお大名の座敷の床の間を飾るには不向きであるが、惡紙惡墨の中に燦めく奔放無礙の稀有の健腕が金屏風や錦襴表裝のピカ〱光つた畫を睥睨威壓するは、丁度墨染の麻の衣の禪匠が役者のやうな緋の衣の坊さんを大喝して三十棒を喰はすやうなものである。

此の椿岳は如何なる人物であつた乎。椿岳を語る前に先づ此の不思議な人物を出した淡島氏

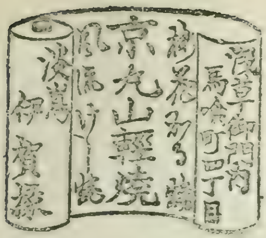
の家系に遡つて一家の來歷を語るは、江戸の文化の斷片として最も興味に富んでゐる。

（一）淡島氏の祖――馬喰町の輕燒屋

椿岳及び寒月が淡島と名乘るは維新の新政に方つて町人も亦苗字を戸籍に登錄した時、屋號の淡島屋が世間に通りがイヽといふので淡島と改稱したので、本姓は服部であつた。且椿岳は維新の時、事實上淡島屋から別戸して小林城三と名乘つてゐたから、本當は淡島椿岳でなくて小林椿岳である筈だが、世間は前身の淡島屋を能く知つてるので淡島椿岳と呼び、椿岳自身も亦淡島と名乘つてゐた。が、實は小林であつたか、淡島であつたか、ハツキリしない處が椿岳らしくてイヽ。此の離籍一條は後に讓るとして先づ淡島屋の祖先に就て語らう。

淡島氏の祖の服部喜兵衛は今の寒月から四代前で、本とは上總の長生郡の三ケ谷（今の鶴枝村）の農家の子であつた。次男に生れて新家を立てたが、若い中に妻に死なれたので幼ない兒供を殘して國を飛出した。性來頗る器用人で、影畫の紙人形を切るのを賣物として、鋏一挺で日本中を廻國した變り者だつた。擧句が江戸の馬喰町に落付いて旅籠屋の「ゲダイ」となつた。此の

「ゲダイ」といふは馬喰町の郡代屋敷へ訴訟に上る地方人の告訴狀の代書もすれば相談對手にもなる、走り使ひもすれば下駄も洗ふ、逗留客の屋外圍の用事は何でも引受ける重寶人であつた。其頃訴訟の爲め度々上府した幸手の大百姓があつて、或年財布を忘れて歸國したのを喜兵衞は大切に保管して、翌年再び上府した時、財布の縞柄から金の員數まで一々細かに尋ねた後に返した。之が緣となつて、正直と才氣と綿密を見込まれて一層親しくしたが、或時、國の親類筋に亭主に死なれて困つてる家があるが入夫となつて面倒を見て貰へまいかと賴まれた。喜兵衞は納得して幸手へ行き、若後家の入夫となつて先夫の子を守育て、傾き掛つた身代を首尾よく



盛返した。其家は今でも連綿として榮え、初期の議會に埼玉から多額納稅者として貴族院議員に撰出された野口氏で、喜兵衞の位牌は今でも此の野口家に祀られてゐる。然るに喜兵衞が野口家の後見となつて身分が定つてから、故鄕の三ケ谷に殘した子の十一歲となつたを幸手に引取つた處が、繼の母との折合が面白くなくて間もなく江戸へ逃出し、親の緣を手賴に馬喰町の其地此地を放浪いて働いてゐた。其中に

同じ故郷人が小さな輕燒屋の店を出してゐたのを讓り受け、親の名を繼いで二代目服部喜兵衛と名乘つて輕燒屋を初めた。其時が十六歳であつた。屋號を淡島屋と云つたのは喜兵衛が附けたのか、或は以前からの屋號であつたか判然しない。商牌及び袋には淺草御門内馬喰町四丁目淡島伊賀掾菅原秀慶謹製とあつた。之が名物淡島輕燒屋の抑もであつた。

（二）　江戸名物輕燒——輕燒と疱瘡痲疹

輕燒といふ名は今では殆んど忘られてゐる。輕燒の後身の風船霰でさへ此頃は忘られてゐるので、場末の駄菓子屋にだつて滅多に輕燒を見掛けない。が、昔は江戸の名物の一つとして頗る賞翫されたものだ。

輕燒は本と南蠻渡りらしい。通稱丸山輕燒と呼んでるのは初めは長崎の丸山の名物であつたのが後に京都の丸山に轉じたので、輕燒も亦他の文明と同じく長崎から次第に東漸したらしい。尤も長崎から上方に來たのは可成古い時代で、西鶴の作にも輕燒の名が見えるから天和貞享頃には最う上方人に賞翫されてゐたものと見える。江戸に渡つたのはいつ頃か知らぬが、享保板

の『續江戸砂子』に輕燒屋として淺草誓願寺前茗荷屋九兵衞の名が見える。めうが屋の商牌は今でも殘つてゐて好事家間に珍重されてゐるから、享保頃には相應に流行つてゐたものであらう。二代目喜兵衞が讓り受けた輕燒屋はいつごろからの店であつたか、之も解らぬが、其頃は最早輕燒屋の店は其處にも此處にもあつて左して珍らしくなかつたやうだ。

が、長崎渡りの珍菓として賞でられた輕燒が普ねく世間に廣がつたは疱瘡痲疹の流行が原因してゐた。江戸時代には一と口に痲疹は命定め、疱瘡は容貌定めと云つたくらゐに此の二疫を小兒の健康の關門として恐れてゐた。尤も今でも防疫に警戒してゐるが、衞生の屆かない昔は殆んど一年中間斷なしに流行してゐた。就中疱瘡は津々浦々まで種痘が行はれる今日では到底想像しかねるほど猛烈に流行し、大名高家は魯か將軍家の大奥までをも犯した。然るに此病氣は何れも食戒が嚴しく、間食は絕對に禁じられたが、今ならカルケツトやウエーフアーに比すべき輕燒だけが無害として許された。殊に輕燒と云ふ名が病を輕く濟ますといふ緣喜から喜ばれて、何時からとなく疱瘡痲疹の病人の間食や見舞物は輕燒に限られるやうになつた。隨つて此病氣が流行れば流行るほど、恐れられゝば恐れられるほど輕燒は益々繁昌した。輕燒の賣れ

行は疱瘡痲疹の流行と終始してゐた。

（三）　二代目喜兵衛の商才

二代目喜兵衛は頗る商才があつた。輕焼が疱瘡痲疹の病人向きとして珍重されるので、疱瘡痲疹の呪ひとなつてる張子の赤い木兎や赤い達磨を一緒に賣出した。店頭には四尺ばかりの大きな赤達磨を飾りつけて目標とした。

其頃は醫術も衛生思想も幼稚であつたから、疱瘡や痲疹は人力の及び難ない疫神の仕業として、神佛に頼むより外に手當の施こしやうが無いやうに恐れてゐた。夫故に醫藥よりは迷信を頼つたので、赤い木兎と赤い達磨と輕焼とは唯一無二の神劑であつた。

疱瘡の色彩療法は醫學上の根據があるさうであるが、いつ頃からの風俗か知らぬが蒲團から何から何までが赤いづくめで、枕許には赤い木兎、赤い達磨を初め赤い翫具を列べ、疱瘡ッ子の讀物として紅摺の繪本までが出板された。輕焼の袋も之に因んで木兎や達磨の紅摺であつたが、喜兵衛は更に袋の新らしい工風をした。其頃は何に由らず彩色入の摺物は繪双紙屋組合に

加入しなければ作れなかつたもので、喜兵衞は之が爲めに組合へ加入して、世間の輕燒の袋が紅一遍摺であるに反して、板下に念を入れた數遍摺の美くしい錦繪のやうな袋を作つた。疱瘡痲疹の患者は大抵兒供だから、此袋が忽ち大評判となつて一層繁昌した。(椿岳の代となつて自から下畫を描いた事があるさうだ。輕燒屋の袋は一時好事家間に珍がられて俄に市價を生じたが、就中淡島屋のは最も珍重されて菓子袋としては馬鹿げた高價を呼んだ。今では一時ほどではないが、矢張相當の價を持つてるさうだ。)

喜兵衞の商才は淡島屋の名を廣めるに少しも油斷が無かつた。其頃は神佛參詣が唯一の遊山であつて、流行の神佛は參詣人が群集したもんだ。今と違つて遊山半分でもマジメな信心氣も相應にあつたから、必ず先づ御手洗で手を淸めてから參詣するのが作法であつた。隨つて手洗ひ所が一番群集するので、喜兵衞は思附いて淺草の觀音を初め深川の不動や神田の明神や柳島の妙見や、其頃流行つた諸方の神佛の手洗ひ所へ矢車の家紋と馬喰町輕燒淡島屋の名を染め拔いた手拭を納めた。納め手拭はいつ頃から初まつたか知らぬが、少くも喜兵衞は最も早く率先して盛んに之を廣告に應用した最初の一人であつた。

左らねだに淡島屋の名は美くしい錦繪のやうな袋で廣まつてゐたから、淡島屋の輕燒は江戸一だといふ評判が益々高くなつて、大名高家の奥向きから近郷近在のものまで語り傳へてわざ〳〵馬喰町まで買ひに來た。淡島屋のでなければ輕燒は風味も良くないし、疱瘡痲疹の咒ひにもならないやうに誰云ふとなく言ひ囃したので、疱瘡痲疹の流行時には店前が市をなし、一々番號札を渡して札順で賣つたもんだ。自然遲れて來たものは札が請取れないから、前日に札を取つて置いて翌日に買ひに來るといふほど繁昌した。丁度大學病院の外來患者の診察札を爭うやうな騷ぎであつたさうだ。

淡島屋の輕燒の袋の裏には次の報條が摺込んであつた。餘り名文では無いが、淡島輕燒の賣れた所以が略ぼ解るから、當時の廣告文の見本旁々全文を揭ける。

私店けし入輕燒の義は世上一流被爲有御座候通疱瘡はしか諸病症いみもの決して無御座候に付享和三亥年はしか流行の節は御用込合順番札にて差上候儀は全く無類和かに製した候故御先々様にてかる〳〵やき又は水の泡の如く口中にて消候ゆゑあはかるやき且私家名淡島燒などゝ廣く御風聽被成下店繁昌仕難有仕合に奉存製法入念差上來候間年增し御疱瘡流

行の折ふし御輕〳〵御仕上被遊候御言葉祝ひのかる〳〵やき水の泡の如く御いものあとさへ取候御祝儀御進物にはけしくらゐほどのいもあとも殘り不申候やうにぞんじけしをのぞき差上候處文政七申年はしか流行このかた御用重なる御重詰御折詰もふんだんに達磨の繪袋賣切らし私念願かな町のお稻荷樣の御利生にて御得意旦那のお子さまがた疱瘡はしかの輕々燒と御評判よろし此度再板達磨の繪袋入不相變御風味被成下候樣奉希候以上

以上の文句の通りに輕々と疱瘡痲疹の大厄を濟まして芥子ほどの痘痕さへ殘らぬやうといふ緣喜が輕燒の賣れた理由で、淡島屋の屋號のあはのやうに消えるといふも亦淡島屋が殊に繁昌した所以であらう。

此文句に由ると順番札で賣つたのは享和三年が初めらしいが、其後も疱瘡痲疹大流行の時は何度も此繁昌を繰返し、喜兵衞の商略は見事に當つて淡島屋はメキ〳〵肥り出した。

初代の喜兵衞も晩年には度々江戸に上つて、淡島屋の帳場に座つて天稟の世辭愛嬌を振播いて商賣を助けたさうだ。初代も中々苦勞人で且人德があつたが、淡島屋の身代の礎を作つたのは全く二代目喜兵衞の力であつた。

（四）狂歌師岡鹿樓笑名

前記の報條は多分喜兵衛自作の案文であらう。餘り名文では無いが、喜兵衛は商人としては文雅の嗜みがあつたので、六樹園の門に入つて岡鹿樓笑名と號した。狂歌師としては無論第三流以下であつて、笑名の名は狂歌の専門研究家にさへ餘り知られてゐないが、其名は『狂歌鑄』に殘つてるさうだ。

喜兵衛は狂歌の才をも商賣に利用するに抜目が無かつた。毎年の淺草の年の市（暮の十七八の兩日）には暮の餅搗に使用する團扇を輕燒の景物として出したが、此團扇に『景物にふくの團扇を奉る、おまめで年の市のおみやげ』といふ自作の狂歌を摺込んだ。此狂歌が呼び物となつて、誰言ふとなく淡島屋の團扇で餅を煽ぐと運が向いて來ると云ひ傳へた。昔は大抵な家では自宅へ職人を呼んで餅を搗かしたもんで、就中、下町の町家では暮の餅搗を吉例としたから淡島屋の團扇は無ければならぬものとなつて、毎年の年の市には景物目的のお客が繁昌し、魚河岸あたりの若い衆は五本も六本も團扇を貰つて行つたさうである。

（五） 神樂坂路考

之ほどの才人であつたが、笑名は商賣に忙がしかつた乎、但しは註文が難かしかつた乎して、緣が遠くてイツまでも獨身で暮してゐた。

其頃牛込の神樂坂に榎本といふ町醫があつた。毎日門前に商人が店を出したといふほど流行したが、賣收の多いに任して榮耀に暮し、何人も妾を抱へて六十何人の兒供を產ました。其の何番目かの娘のおらいといふは神樂坂路考と云はれた評判の美人であつて、妙齡になつて御殿奉公から下がると降るほどの緣談が申込まれた。淡島輕焼の笑名も美人の噂を聞いて申込んだ一人であつた。

然るに六十何人の大家族を抱へた榎本は、表面は贅澤に暮してゐても內證は苦しかつたと見え、其頃は長袖から町家へ緣組する例は滅多に無かつたが、家格よりは身代を見込んで笑名に札が落ちた。商賣運の目出度い笑名は女運にも果報があつて、老の漸く來らんとするころ到頭一の富を突き當てゝ妙齡の美人を妻とした。

尤も笑名(わらひな)は其時は最早唯の輕燒屋では無かつた。將軍家大奥の臺一式の御用を勤めるお臺屋の株を買つて立派な旦那衆となつてゐた。天保の饑饉年(ききんどし)にも、普通の平民は餘分の米を蓄へる事が許されないで簞笥に米を入れて祕(かく)したもんだが、淡島屋だけは幕府のお臺を作る糊の原料といふ名目で大びらに米俵を積んで置く事が出來る身分となつてゐた。が、富は界隈に並ぶ者なく、妻は若くして美くしく、財福艷福が一時に集まつたが、半世の奮闘の勞れは功成り意滿つると共に俄に健康の衰へを來した。加ふるに艷妻が祟(たゝり)をなして二人の娘を擧げると間もなく歿したが、若い美くしい寡婦は賢にして能く婦道を守つて淡島屋の暖簾(のれん)を傷つけなかつた。

（六）川越の農家の子――椿岳及び伊藤八兵衛

爰に川越在の小ヶ谷村に内田といふ豪農があつた。（今でも其家は歴〻とした豪農である。）其の分家の矢張内田といふ農家に三人の男の子が生れた。總領は兒供の時から膽略があつて、草深い田舍で田の草を取つて老朽ちる器でなかつたから、之も早くから一癖(ひとくせ)あつた季の弟の米三郎と二人(ふたり)して江戸へ乘出し、小石川は傳通院前の伊勢長と云へば其頃の山の手切つての名代の質商伊勢屋長兵衛

方へ奉公した。此兄が後に伊藤八兵衛となり、弟が椿岳となつたので、川越の實家は二番目の子が相續して今でも猶ほ連綿としてをるさうだ。

椿岳の兄が伊藤の養子婿となつたは怎う云ふ緣故であつたか知らないが、伊藤の屋號を矢張伊勢屋と云つたので推すと、或は主家の伊勢長の一族であつて、主人の肝煎で養子に行つたのかも知れない。

伊藤といふは其頃京橋十人衆と云はれた幕府の勢力ある御用商人の一人で、家柄も宜かつたし、資産も持つてゐた。が、天下の大富豪と仰がれるやうになつたのは全く椿岳の兄の八兵衛の奮闘努力に由るので、幕末に於ける伊藤八兵衛の事業は江戸の商人の掉尾の大飛躍であると共に、明治の商業史の第一頁を作つてをる。

椿岳の米三郎が淡島屋の養子となつたは兄伊藤八兵衛の世話であつた。「出雲なる神や結びし淡島屋、伊勢八幡の惠み受けゝり」といふ自祝の狂歌は緣組の徑路を證明してをる。（伊勢八幡といふは伊藤八兵衛の通り名な伊勢八と稱したからである。）媒合はされた娘は先代の笑名と神樂坂路考のおらいとの間に生れた總領のおくみであつて、二番目の娘は分家させて質屋を營ませ、其の養子婿に淡島屋嘉兵衛と

名乘らした。本家は風潮に隠れて了つたが、分家は今でも馬喰町に繁昌してゐる。地震の火事で丸焼けとなつたが、再興して依然町内の老舗の暖簾と云はれてゐる。

椿岳の米三郎は早くから繪事に志ざした風流人であつて、算盤を彈いて身代を肥やす商賣人肌では無かつた。初めから長袖を志望して、ドウいふわけだか神主になる意でゐたのが兄貴の世話で淡島屋の婿養子となつたのだ。であるから、金が自由になると忽ちお掛屋（今の銀行業のやうなもの。）の株を買つて、町人ながらも立派に木劍、刺叉、袖がらみを列べて、唯の輕焼屋の主人で滿足してゐなかつた。丁度兄の伊藤八兵衛が本所の油堀に油會所を建て、水藩の名義で金藏其他の運上を扱ひ、業務上水府の家職を初め諸藩のお留守居、勘定役等と交渉する必要が有つたので、伊藤は專ら椿岳の米三郎を交際方面に當らしめた。

伊藤は牙籌一方の人物で、眼に一丁字無く、曾て應擧の王昭君の幅を見て、『椿岳、これは八百屋お七か』と訊いたといふ奇拔な逸事を殘したほどの無風流漢であつた。隨つて商賣上武家と交渉するには多才多藝な椿岳の斡旋を必要としたので、八面玲瓏の椿岳の才機は伊藤を助けて算盤玉以上に伊藤を儲けさしたのである。

伊藤八兵衞の成功は幕末に頂巓に達し、江戸一の大富限者として第一に指を折られた。元治年中、水戸の天狗黨が愈々旗上げしやうとした時、八兵衞を後樂園に呼んで小判五萬兩の賦金を命ずると、小判五萬兩の才覺は難かしいが二分金なら三萬兩を御用立て申しませうと答へて、即座に二分金の耳を揃へて三萬兩を出したさうだ。御一新の御東幸の時にも、三井の獻金は三萬兩だつたが八兵衞は五萬兩を獻上した。又怎ういふ仔細があつたか知らぬが、維新の際に七十萬兩の古金銀を石の蓋匣に入れて地中に埋藏したさうだ。八兵衞の富力は怎ういふ事實から推しても大抵想像される。其割合には名前が餘り知られてゐないが、一生の事業と活動とは維新の商業史の重要な頁を作つてゐる。今では堀田伯の住邸となつてる本所の故宅の庭園は伊藤の全盛時代に椿岳が設計して金に飽かして作つたもので、一木一石が八兵衞兄弟の豪奢と才氣の名殘を留めてゐる。地震でドウなつたか知らぬが大方今は散々に荒廢したらう。（八兵衞の事蹟に就ては某の著はした『天下之伊藤八兵衞』といふ單行の傳記がある、又『太陽』の第一號に依田學海の『伊藤八兵衞傳』が載つてゐる。實業界に德望高い某子爵は素と八兵衞の使用人であつて、先年物故した夫人はタシカ八兵衞の遺子であつた。）

（七）小林城三

椿岳は晩年には世間離れした奇人で名を賣つたが、若い時には相當に世間的野心があつて唯の町人では滿足しなかつた。油會所時代に水戸の支藩の廢家の株を買つて小林城三と改名し、水戸家に金千兩を獻上して葵の御紋服を拜領し、帶刀の士分に列して唯の輕燒屋の主人では無くなつた。椿岳が小林姓を名乘つたは妻女と折合が惡くて淡島屋を離別されたからだといふ說があるが全く誤聞である。椿岳が小林姓を名乘つたのは名聞好きから士族の廢家の株を買つて再興したので、小林城三と名乘つて別戸してからも多くは淡島屋に起臥して依然主人として待遇されてゐたので、小林城三でもあり又淡島屋でもあつたのだ。

尤も其頃は武家ですらが蓄妾を許され、町家は猶更家庭の道德が弛廢してゐたから、左らぬだに放縱な椿岳は小林城三と名乘つて別に一戸を構へると小林家にも亦妻らしい女を迎へた。今なら重婚であるが、其頃は門並が殆んど一夫多妻で、妻妾一つ家に顏を列べてるのが一向珍らしくなかつたのだから、女房を二人持つても格別不思議とも思はれなかつた。然ういふ時勢

であつたから椿岳は二軒懸持の旦那で頤を撫でゝゐたが、淡島屋の妻たるおくみは男勝りの利かぬ氣であつたから椿岳の放縱氣隨に慊らないで自然段々と疎々しくなり、勢ひ椿岳は小林の新らしい妻にヨリ深く親むやうになつた。且淡島屋の身代は先代が作つたので、椿岳は天下の伊藤八兵衞の幕僚であつても、身代を作るよりは減らす方が上手で、養家の身代を少しも伸ばさなかつたから、恁ういふ破目となると自然淡島屋を遠ざかるのが當然であつて、維新後は互に往來してゐても家族的關係は段々と薄らいで來た。

夫故、維新後は本姓の服部よりは世間に通りの好い淡島と改稱して、世間からも淡島と呼ばれてゐたが、戸籍面の本姓が小林であるばかりでなく、事實上淡島屋を別戸してゐた。隨つて椿岳の後繼は二軒に支れ、正腹は淡島姓を繼ぎ、庶出は小林姓を名乘つたが、二軒は今では關係が絕えて小林の跡は盛岡に住んでるさうだ。

が、小林にしろ淡島にしろ椿岳の畫名が世間に歌はれたのは維新後であつて、維新前までは馬喰町四丁目の輕燒屋の服部喜兵衞、又の名を小林城三と云つた油會所の手代であつた。が、伊藤八兵衞の智囊として圓轉滑脫な才氣を存分に振つたにしろ、根が町人よりは長袖を望んだ

風流人肌で、算盤を持つのが本領で無かつたから、維新の變革で油會所を閉ぢると同時に伊藤と手を分ち、淡島屋をも去つて全く新らしい生活に入つた。之からが滿幅の奇を思ふまゝに發揮した椿岳の眞生活であつて、輕燒屋や油會所時代は椿岳の先史時代であつた。

（八）淺草生活――大眼鏡から淡島堂の堂守

椿岳の淺草生活は維新後から明治十二三年頃までであつた。此時代が椿岳の最も奇を吐いた盛りであつた。

伊藤八兵衞と手を分つたのは維新早々であつたが、其頃は伊藤もまだ盛んであつたから椿岳の財嚢も亦可成豐からしかつた。淺草の傳法院へ度々融通したのが緣となつて、其頃の傳法院の住職唯我敎信と懇ろにした。此の敎信は好事の癖ある風流人であつたから、椿岳と意氣投合して隔てぬ中の友となり、日夕往來して數寄の遊びを侶にした。其頃椿岳はモウ世間の名利を思切つた顏をしてゐたが、油會所の手代時代の算盤氣分がマダ拔けなかつたと見えて、世間を驚かしてやらうといふ道樂五分に慾得五分の算盤玉を彈き込んで一と山當てるツモリの商賣

氣が十分有つた。其頃どこかの氣紛れの外國人がヂオラマの古物を横濱に持つて來たのを椿岳は早速買込んで、唯我教信と相談して傳法院の庭續きの茶畑を拓き、西洋型の船に擬へた大きな小屋を建て、舷側の明り窓から西洋の景色や戰爭の油畫を覗かせるといふ趣向の見世物を拵へ、那破烈翁や羅馬法王の油畫肖像を看板として西洋覗眼鏡と云ふ名で人氣を煽つた。何しろ明治二三年頃、江漢系統の洋畫家ですら西洋の新聞畫をだも碌々見たものが少なかつた時代だから、忽ち東京中の大評判となつて、當時の新らし物好きの文明開化人を初め大官貴紳までが見物に來た。人氣の盛んなのは今日の帝展どころで無かつた。油畫の元祖の川上冬崖は有繋に名稱を知つてゐて、片假名で『ダイオラマ』と看板を書いて與れた。泰山前に頽るゝともビクともしない大西鄕どんさへも評判に釣込まれてワザ〳〵見物に來て、大に感服して『萬國一覽』といふ大字の扁額を揮つて與れた。恁ういふ大官や名家の折紙が附いたので益々人氣を湧かして、淺草の西洋覗眼鏡を見ないものは文明開化人で無いやうに云はれ、我も〳〵と毎日見物の山をなして椿岳は一擧に三千圓から儲けたさうだ。

今なら三千圓ぐらゐは素丁稚でも造作もなく儲けられるが、小川町や番町あたりの大名屋敷

や旗下屋敷が御殿ぐるみ千坪十圓ぐらゐで拂下げ出來た時代の三千圓は決して容易でなかつたので、此奇利を易々と攫んだ椿岳の奇才は天晴伊藤八兵衛の弟たるに恥ぢなかつた。が、世間を思切つて利慾を捨てた椿岳は、猿が木から木へと木の實を捜して飛んで行くやうに、金儲けから金儲けへと慾一方で固まるのを欲しなかつた。

明治七八年頃、淺草の寺内が公園となつて改修された。椿岳の住つてゐた傳法院の鄰地は取上げられて代地を下附されたが、代地が氣に入らなくて俺の居る所が無くなつて了つたと苦情を云つた。傳法院の唯我教信が調戲半分に『淡島椿岳だから寧そ淡島堂に住つたら怎うだ？』と云ふと、洒落氣と茶番氣タップリの椿岳は忽ち乘氣となつて、好きな事仕盡して後のお堂守も面白からうと、夫から以來椿岳は淡島堂のお堂守となつた。

淡島堂といふは一體何を祀つたもの乎祭神は不明である。彥少名命を祀るとも云ふし、神功皇后と應神天皇とを合祀するとも云ふし、或は女體であるとも云ふが、左に右く紀州の加太の淡島神社の分祠で、裁縫其他の女藝一切、女の病を加護する神さまには違ひない。だが、此の寺內の淡島堂は神佛混交の遺物であつて、佛具を飾つて僧侶がお勤めをしてゐたから、椿岳も

亦頭を剃圓めて法體し、本然と名を改めて暫らくは淡島様のお守をしてゐた

此の淡島堂のお堂守時代が椿岳本來の面目を思ふ存分に發揮したので、奇名が忽ち都下に喧傳した。當時朝から晩まで代る〴〵に訪づれるのは類は友の變物奇物ばかりで、共に畫を描き骨董を品して遊んでばかりゐた。大河内子爵の先代や下岡蓮杖や假名垣魯文は其頃の重なる常連であつた。參詣人が來ると殊勝な顏をしてムニャ〳〵〳〵と出放題なお經を誦しつゝお蠟を上げ、歸ると直ぐ吹消して了う本然坊主のケロリとした顏は隨分人を喰つたもんだが、今度のお堂守さんは御奇特な感心なお方だといふ評判が信徒の間に聞えた。

椿岳が淺草に住つてゐたは維新後から十二三年頃まででであつた。此時代が最も椿岳の奇才を發揮して奇名を賣つた時で、椿岳と淺草とは離れぬ緣の聯想となつた。淺草を去つたのは明治十二三年以後で、夫から後は牛島の梵雲庵に梵唄雨聲と琵琶と三味線を樂んでゐた。

(九)　椿岳の人物——狷介不羈なる半面

椿岳の出身した川越の内田家には如何なる天才の血が流れてゐたかは知らぬが、長兄の伊藤

八兵衛は末路は餘り振はなかつたが、一度は天下の伊藤八兵衛と鳴らした巨富を作つたし、弟の椿岳は天下を愚弄した不思議な畫家の生涯を送つた。

だが、椿岳は根からの風流人でも奇人でも無かつた。實は衒氣五分市氣三分の覇氣滿々たる男で、風流氣は僅に二分ほどしかなかつた。生來の虚飾家、エラがり屋で百姓よりも町人よりも武家格式の長袖を志ざし、伊藤八兵衛のお庇で水府の士族の株を買つて得意になつて武家を氣取つてゐた。が、幕府が瓦解し時勢が一變し、順風に帆を揚げたやうな伊藤の運勢が下り坂に向つたのを看取すると、天性の覇氣が脱線して桁を外れた變態生活に横流した。椿岳の生活の理想は俗世間に凱歌を擧げて豪奢に傲る乎、でなければ俗世間に拗ねて愚弄する乎、二つの路のドツチかより外無かつた。

椿岳は奇才縱横圓轉滑脱で、誰にでもお愛想を云つた。決して人を外らさなかつた。召使ひの奉公人にまでも如才なくお世辭を振播いて、『家の旦那さんぐらゐお世辭の上手な人は無い』と奉公人から褒められたさうだ。伊藤八兵衛に用ひられたのは此の圓轉滑脱な奇才で、油會所の外交役となつてから益々練磨された。晩年變態生活を送つた頃は年と共に愈々益々老熟して

誰とでも如才なく交際し、初對面の人に對してすらも百年の友のやうに打解けて、苟にも不快の感を與へるやうな顏を決してしなかつたさうだ。

が、此の圓轉滑脫は天稟でもあつたが、長い歲月に段々と練上げたので、故更に他人の機嫌を取る爲めでは無かつた。其上に餘り如才が無さ過ぎて、兎角一人で取持つて切廻し過ぎるので却て人をテレさせて、『椿岳さんが來ると座が白ける』と度々人に云はれたもんだ。圓轉滑脫振が餘りに傍若無人に過ぎてゐた。海に千年、山に千年の老巧手だれの交際上手であつたが、人の顏色を見て空世辭追從笑ひをする人では無かつた。

淡島家の養子となつても、後生大事に家付き娘の女房の御機嫌ばかり取る入聟形氣は微塵も無かつた。隨分內を外の勝手氣儘に振舞つてゐたから、奉公人には內の旦那さんは好い旦那と褒められたが、細君には餘り信用されもせず大切がられもしなかつた。

殊にお掛屋の株を買つて多年の心願の一端が協つてからは木劍、刺股、袖搦を玄關に飾つて威儀堂々と構へて軒並の町家を下目に見てゐた。世間並のお世辭上手な利口者なら町內の交際ぐらゐは格別辛くも思はない筈だが、每年の元旦に町名主の玄關で叩頭をして御慶を陳べるの

を何よりも辛がつてゐた、負け嫌ひの意地ッ張が恁んな處に現はれるので、心からの頭の低い如才無い人では決して無かつた。小林城三となつて後、金千兩を水戸様へ献上して葵の時服を拜領してからの或時、此の御紋服を着て馬上で町内へ乘込むと偶然町名主に邂逅した。其頃はマダ葵の御紋の御威光が素晴らしい時だつたから、町名主は御紋服を見ると周章てゝ土下座をして恭やしく敬禮した　毎年の元旦に玄關で平突張らせられた忌々しさの腹愈せが漸とこさと出來て、溜飲が下つたやうなイヽ氣持がしたと嬉しがつた。表面は圓轉滑脱の八方美人らしく見えて、其實椿岳は容易に人に下るを好まない傲岸不屈の利かん坊であつた。

（十）椿岳の畸行

作さんの家内太夫入門◎東京で初めてのピヤノ彈奏者◎椿岳名譽の琵琶◎山門生活とお堂守◎淺草の畸人の一群◎椿岳の着物◎椿岳の住居◎天狗部屋◎女道樂◎明治初年の廢頹的空氣

負け嫌ひの椿岳は若い時から誰でも呑んで掛つて人を人臭いとも思はなかつた。其頃横山町に家内太夫と云ふ清元のお師匠さんがあつた。椿岳は此のお師匠さんに弟子入りして清元の稽

古を初めたが、家族にも祕密ならお師匠さんにも淡島屋の主人であるのを穩して、手代か職人であるやうな顔をして作さんと稱してゐた。夫から暫らく經つて椿岳の娘（寒月の姉）が同じお師匠さんに入門すると、或時家内太夫は『あなたのお店の作さんは大層出世をしたと見えて此頃は馬に乘つてますネ。』と云つた。作さんといふ人は店に在ないから、椿岳の娘は不思議に思つて段々作さんと云ふ人の容子を聞くと、馬に乘つてるといふ事から推しても父の椿岳に違ひないので、そんならお父さんですと云ふと、家内太夫は初めて知つて喫驚したさうだ。椿岳は萬事が恁う云ふ風に人を喰つてゐた。

淺草以來の椿岳の傍若無人な畸行は恁ういふ人を喰つた氣風から出てゐるのだ。明治四五年頃、ピヤノやヴァイオリンが初めて横濱へ入荷した時、新らし物好きの椿岳は早速買込んで神田今川橋の或る貸席で西洋音樂機械展覽會を開いた。今聞くと極めて珍妙な名稱であるが、其頃は頗るハイカラに響いたので、當日は所謂文明開化の新らしがりがギシと詰掛けた。此の滿場爪も立たない聽衆の前で椿岳は嚴乎らしくピヤノの椅子に腰を掛け、無茶苦茶に鍵盤を叩いてボン／＼鳴らした。何しろ洋樂と云へば少數の文明開化人が横濱で赤隊（英國兵）の喇叭を聞いた

ばかりの時代であつたから、滿場は面喰つて眼を白黑しながら聽かされて煙に卷かれてピシヤ〱と拍手大喝釆をした。文部省が音樂取調所を創設した頃から十何年も前で、椿岳は恐らく公衆の前でピヤノを彈奏した、と云ふよりは叩いた最初の日本人であらう。(此のピヤノは後に吉原の彥太樓尾張屋の主人が買取つた。此の彥太樓尾張屋の主人といふは藐庵や文樓の系統を引いた當時の廓中第一の愚慢大人で、白無垢を着て御前と呼ばせた程の豪奢を極め、萬年靑の名品を五百鉢から持つてゐた物數寄であつた。ピヤノを買つたのも音樂好きよりは珍らし物好きの愚慢病であつた。が、日本の洋樂が椿岳や彥太樓尾張屋の樓主から開拓されたといふは明治の音樂史研究者の餘り知らない頗る變挺な秘史である。)

椿岳は諸藝に通じ、蹴鞠の免狀までも取つた多藝者であつた。お玉ケ池に住んでゐた頃、或人が不斗尋ねると、都々逸端唄から甚句カツポレのチリカラカツポウ大陽氣だつたので、必定お客を呼んでの大酒宴の眞最中と、暫らく戶外に佇立つて躊躇してゐたが、どうも然うらしくも無いので、軈て玄關に音なうと、ピツタリ三味線が止んで現れたのはシラフの眞面目な椿岳で、『イヤ是は〱、今日は全家が出拂つて餘り徒然なので、番茶を淹れて單りで浮れてゐた

處サ。』と。多藝も多藝であつたが、恁ういふ世間を茶にする眞似もした。椿岳は平素琵琶を愛して片時も座右を離さなかつたので、椿岳の琵琶と云へば可成な名人のやうに聞えてゐた。が、實はホンの手解きしか稽古しなかつた。其頃福地櫻癡が琵琶では鼻を高くし、櫻癡の琵琶には惱まされながらも感服するものが多かつた。負けぬ氣の椿岳は業を煮やして、櫻癡が彈くなら俺だつて彈けると、誰の前でも怯めず臆せずベロン／＼と掻鳴らし、勝手な節をつけては盛んに平家を唸つたものだ。意氣込の凄まじいのと態度の物々しいのとに呑まれて、聽かされたものは大抵巧いもんだと出鱈目を感服したので、到頭椿岳は琵琶の名人といふ事になつた。椿岳は諸藝に通じてゐたに違ひないが、中には恁ういふ人を喰つた藝も多かつた。

椿岳の山門生活も有名な咄である。覗目鏡を初める時分であつた。椿岳は何處にも居る處が無いので、日鏡の工事の監督旁々傳法院の許しを得て山門に住ひ、昔から山門に住つたものは石川五右衛門と俺の外には有るまいと頗る得意になつてゐた。或人が、嘸御不自由でせうと訊いたら、何にも不自由は無いが毎朝虎子を棄てに行くのが苦勞だと云つたさうだ。有繋の椿岳

も山門住居では夜は虎子の厄介になつたものと見える。
淡島堂のお堂守となつたは之から數年後であるが、一夜道心の俄坊主が殊勝な顏をして、ムニャ〳〵とお經を誦んでお蠟を上げたは山門に住んだと同じ心の洒落から思立つたので、信仰が今日よりも一層墮落してゐた明治の初年の宗教破壞氣分を想像される。

淺草は今では活動寫眞館が軒を並べてイルミネーションを耀かし、地震で全滅しても忽ち復興し、十二階が崩壞しても階下に巣喰つた白首は依然隱顯出沒して災後の新らしい都會の最も低級な享樂を提供してゐる。が、地震では眞先きに亡ぼされたが、維新の破壞の手は一番遲れて淺草に及んだので、明治十四五年ごろまでは江戶の氣分がマダ淺草には漂つてゐた。一つは椿岳や下岡蓮杖や鵜飼三次といふやうな江戶の遺老が不思議に寺內に集つて盛んに江戶趣味を發揮したからであつた。此の鵜飼三次といふは學問の造詣も深く鑑識にも長じ、蓮杖などよりも卒先して寫眞術を學んだほどの奇才で、一と頃町田久成の古物顧問となつてゐた。此の拗者の江戶の通人が耳の垢取り道具を揃へて元祿の昔に立返つて耳の垢取り商賣を初めやうと云ふと、同じ拗者仲間の高橋由一が負けぬ氣になつて何處からか志道軒の木陰を手に入れて來て辻

談義を目論見、椿岳の淺草繪と鼎立して大に江戸氣分を吐かうと計畫した事があつた。當時の印刷局長得能良介は鵜飼老人と心易くしてゐたので、此噂を聞くと眞面目になつて心配し、印刷局へ自由勤めとして老人を聘して役目で縛りつけたので、結局此計畫は中止となり、高橋の志道軒も頓挫して了つた。マジメに實行するツモリであつたかドウか知らぬが、此時分は恁うした茶氣滿々な計畫が殆んど實行され掛つたほどシャレた時代であつた。

椿岳は普通の着物が嫌ひであつた。身幅の狹いのは職人だと云つてダブ〳〵した着物ばかり着てゐた。或時は無地物に泥繪具でやたら縞を描いたのを着てゐた。晩年には益々昂じて舶來の織出し模樣の敷布を買つて來て、中央に穴を明けてスッポリ被り、左右の腕に垂れた個處を袖形に裁つて縫ひつけ、恰で酸漿のお化けのやうな服裝をしてゐた事があつた。此服裝が一番似合ふと大に得意になつて寫眞まで撮つた。服部長八の漆喰細工の肖像館といふ見世物に陳列された椿岳の浮彫塑像は此寫眞から取つたのであつた。

椿岳は着物ばかりでなく、そこらで賣つてる仕入物が何でも嫌ひで皆手細工であつた。紙入や錢入も決して袋物屋の出來合を使はないで、手近に有合せた袋で間に合はしてゐた。何でも



椿岳庵畫房の一部
（今燒失）

個性を發揮しなければ氣が濟まないのが椿岳の性分で、時偶市中の出來合を買つて來ても必ず何かしら椿岳流の加工をしたもんだ

猶更住居には意表外の數寄を凝らした。地震で燒けた向島の梵雲庵は即ち椿岳の舊廬であるが、玄關の額も聯も自製なら、前栽の小笹の中へ板碑や塔婆を無造作に排置したのも亦椿岳獨特の工風であつた。此の小房の緣に踞して前栽に對する時は誰でも一種特異の氣分が湧く。就中椿岳が常住起居した四疊半の壁に篏込んだ化粧窓は蛙股の古材を兩斷して合掌に組合はしたのを外框とした火燈型で、木目を洗出された時代の錆のある板扉の中央に取附けた鎌倉時代の鐵の鰕錠が頗る椿岳氣分を漂はしてゐた。更にヨリ一層椿岳の個性を發揮したのは、モウ二十年も前に毀たれたが、此室に續く三方壁の明り窓の無い部屋であつた。周圍を杉の皮で張つて泥繪具で枝を描き、疊の隅に三日月形の穴を開け、下から微かに光線を取つて晝尚ほ暗き大森林を偲ばしめる趣向で、之を天狗部屋と稱してゐた。此の人の顏さへ定かならぬ薄暗い室に端座してベロン／＼と祕藏の琵琶を掻鳴らす時の椿岳會心の微笑を想像せよ。恐らく今日の切迫した時代では到底思ひ泛べる事の出來ない畸人傳中の最も興味ある一節であらう。

椿岳の女道樂も亦畸行の一つに數ふべきである。が、爰に一つ註釋を加へねばならないのは元來江戸の所謂通人間には情事を風流とする傳襲があつたので、江戸の通人の女遊びは一槪に不品行呼ばはりする事は出來ない。此のデカダン興味は江戸の文化の爛熟が産んだので、江戸時代の買妓や畜妾は必ずしも淫蕩で無くて、其中に極めて詩趣を掬すべき情味があつた。今の道德から云つたら人情本の常套の團圓たる妻妾の三曲合奏といふやうな歡樂は顰感すべき沙汰の限りだが、江戸時代には富豪の家庭の美くしい理想であつたのだ。

が、諸藩の勤番の田舍侍（ゐなかざむらひ）やお江戸見物の杢十田五作の買妓には此の江戸情調が缺けてゐたので、芝居や人情本では恁ういふ田五作や田舍侍は無粹な執深（しつぶか）の嫌はれ者となつてゐる。維新の革命で江戸の洗練された文化は田舍侍の跋扈するまゝに荒され、江戸特有の遊里情調も亦根底から破壞されて殺風景な唯の人肉市場となつて了つた。畜妾も亦、勝誇つた田舍侍が分捕物の一つとして扱つたから、昔の江戸の武家のお部屋（へや）や町家の圍女（かこひめ）の情緒は丸で失（な）くなつて、丁度今の殖民地の「灣妻」や「滿妻」を持つやうな氣分になつて了つた。當時の成上りの田舍侍どもが鄕里の糟糠の妻を忘れた新らしい婢妾は權妻（ごんさい）と稱されて紳士の一資格となり、權妻を度々取換

へれば取換へるほど人に羨まれもしたし自らも誇りとした。

恁ういふ道義的アナーキズム時代に於ける人の品行は時代の背景を斟酌して考慮しなければならない。椿岳は江戸末季の廢頽的空氣に十分浸つて來た上に、更に恁ういふ道義的アナーキズム時代に遭逢したのだから、さらぬだに世間の毀譽褒貶を何の絲瓜とも思はぬ放縦な性分に江戸の通人を一串した風流情事の慾望と、淫蕩な田舍侍に荒らされた東京の廢頽氣分とが結び付いて勢ひ女道樂とならざるを得なかつた。椿岳は取換へ引換へ妾を持つて、通り掛りに自分の妾よりも美くしい女を見ると直ぐ換へたといふほど盛んに取換へて、一生に百六十人以上の妾を持つたといふは亦時代の惡瓦斯に毒された畸行の一つであつた。だが、此の椿岳の女道樂を單なる漁色とするは時代を無視した謬見である。

椿岳は物故する前二三年、一時千束に假寓してゐた。其頃女の斷髮が流行したので、椿岳も妻女（小林家の）の頭髮を五分刈に短く刈らして、客が來ると紹介して云ふ、之は同庵の尼でムいますと。大抵のお客は挨拶にマゴ〳〵して了つた。其頃であつた、或る若い文人が椿岳を訪ねると、椿岳は開口一番『能く來なましたネヱ』と。禪の造詣が相當に深い此の若い文人も

椿岳の『能く來なましたネエ』には老禪匠の一喝よりもタデ〳〵となつた。

椿岳の畸行は書立てれば殆んど際限が無いくらゐ朝から晩までが畸行の連續であつた。藝術即生活は椿岳に由て眞に實現されたので、椿岳の全生活は放膽自由な椿岳の畫其儘の全藝術であつた。夫故に椿岳の畫を見るには先づ其生活を知らねばならないので、其生活を知つて然る後に初めて其畫の眞趣を理解する事が出來る。椿岳の畫の妙味は其畸行と照應して愈々妙味を深くする感がある。

（十一）畫人椿岳

椿岳の畫才及び習畫の動機

椿岳の實家たる川越の内田家には藝術の血が流れてゐたと見えて、椿岳の生家にも其の本家にも畫人があつたさうだ。椿岳も兒供の時から畫才があつて、十二三歲の頃に描いた襖畫が今でも川越の家に殘つてるさうだが、怎んな田舍の百姓家にしろ、襖畫を描くといふはヘマムシ入道や「へゝのゝもへじ」の凸坊の自由畫で無かつた事は想像される。椿岳の畫才は蓋し天稟

でゐつたらう。
が、正式に畫を習ひ初めたのは淡島屋の養子となつてから後であつた。小さい時から長袖が志望であつたといふから、或は畫師となつて立派に門戸を張る心持が丸きり無かつたとも限ら



ないが、其頃は淡島屋も繁昌してゐたし、椿岳の兄の伊藤八兵衛は飛ぶ鳥を落す勢ひであつたから、畫を生活のたつきとする目的よりは矢張金持の道樂として好きな道から慰みに初めたのであらうと思ふ。

椿岳の畫の系統

椿岳が師と仰いで贄を執つたのは大西椿年であつた。當時椿年は藏前に畫塾を開いてゐたので、椿年の畫風を喜んだといふよりは馬喰町の家から近かつたので其門に入つたのだらう。椿

岳の號は即ち師の一字を許されたのであつた。椿年は南岳の弟子で、南岳は應擧の高足源琦に學んだのだから、椿岳は應擧の正統の流れを汲んだ玄孫弟子であつた。

馬喰町時代の椿岳の畫は克明に師法を守つて少しも疎そかにしなかつた。其の時代の若書きとして殘つてるもの、例へば先年の椿岳展覽會に出品された淡島嘉兵衛舊藏の飛燕凝粧の圖の如きは純然たる椿年派であつて奔放無礙の晩年の畫ばかり知つてるものは一見して僞作と思ふだらう。が、其家に傳はつたもので、畫は面白くなくても椿岳の師傳を證する作である。（此の畫は先年淡島家の賣立てに出たので今は誰の所有に歸してゐるか解らぬ。）椿年歿して後は高久隆古に就き、隆古が死んでからは專ら倭繪の粉本に就て自得し、旁ら容齋の敎を受けた。隆古には殊に傾倒してゐたと見えて、隆古の筆意は晩年の作にまで現れてゐた。所謂淺草繪の奔放遒勁なる筆力は椿年よりは寧ろ隆古から得たのであらう。が、師傳よりは寬猷、蕪村、大雅、巢兆等の豪放洒落な畫風を學んで得る處が多かつたのは一見直ちに認められる。

且何でも新らしもの好きで、維新後には洋畫を學んで水彩は本より油畫までも描いた。明治の初年に渡來した英國人の畫家ワグマンとも深く交はつた。特にワグマンに就て眞面目に傳習

したとは思はれないが、ブラシの使ひ方や繪具の用法等、洋畫のテクニックの種々の知識を敎へられた事はあるやうだ。明治八九年頃の畫家番附に淡島椿岳の上に和洋畫とあるのを以て推すと、洋畫家としても亦相應に認められてゐたものと見える。今、殘つてる椿岳の水彩や油畫は何れも極めて幼稚な作であるが、番附面に於ける如く洋畫家としても亦多少認められてゐたとすると、椿岳の名は日本の洋畫史の先驅者の一人としても亦傳へられべきである。

且椿岳の水彩や油畫は歷史的興味以外に何の價値が無い幼稚の作であるにしろ、洋畫の造詣が施彩及び構圖の上に淸新の創意を與へたは隨所に認められる。其の著るしきは先年の展覽會に出品された廣野健司氏所藏の花卉の圖の如き、之を今日の若い新らしい水彩畫家の作と一緒に陳列しても裕に淸新を爭ふ事が出來る作である。

椿岳の畫は此の如く淵原があつて、椿年門とは云へ好む處のものを廣く究めて盡く自家薬籠中の物とし、流派の因襲に少しも縛られないで覺猷も蕪村も大雅も應擧も椿年も皆椿岳化して了つた。且此の如く縱横無礙に勝手氣儘に描いてゐても、根柢には多年の研鑽工風があつたの

で、決して初めから出鱈目に描きなぐつて達者になつたのでは無かつた。

椿岳の畫家生活

椿岳の畫を學ぶや賣る爲めで無かつた。畫家の交際をしてゐても畫家と稱されるのを欲しなかつた。其頃の書家や畫家が賣名の手段は書畫會を開くが唯一の策であつた。今日の百畫會は當時の書畫會の變形であるが、展覧會が無かつた時代には書畫會以外に書家や畫家が自ら世に紹介する道が無かつたから、今日の百畫會が無名の小畫家の生活手段であると反して、當時の書畫會は畫を賣るよりは名を賣るを目的として屢々高名な書家や畫家にすらも主催された。書畫會を開かない畫家文人は殆んど一人も無かつた。

此の書畫會の肝煎をするのが今の榛原や紀友のやうな書畫の材料商であつて、當時江戸では今の榛原よりは一層手廣く商賣した馬喰町の扇面亭といふが專ら書畫會の世話人をした。同じ町内の交誼で椿岳は扇面亭の主人とは到つて心易く交際つてゐて、恁ういふ便宜があつたにも拘らず、曾て一度も書畫會を開いた事が無かつた。

尤も椿岳は富有の商家の旦那であつて、畫師の名を賣る必要は無かつたのだ。が、其頃に限

らず富が足る時は名を欲するのが古今の金持の通有心理で、賣名の爲めには隨分馬鹿げた眞似をする。殊に江戸文化の爛熟した幕末の富有の町家は大抵文雅風流を衒つて下手な發句の一つも捻くり拙い畫の一枚も描けば直ぐ得意になつて本職を氣取るものもあつた。其中で左に右く畫家として門戸を張るだけの技倆がありながら畫名を賣るを欲しないで、終に一囘の書畫會をだも開かなかつたといふは市井町人の似而非風流の賣名を屑しとしない椿岳の見識であらう。富有な旦那の冥利として他人の書畫會の爲めには千圓からの金を棄てゝも自分は丐乞畫師の仲間となるのを甘じなかつたのであらう。

此の寛濶な氣象は富有な旦那の時代が去つて淺草生活をするやうになつてからも失せないで、畫は矢張風流として樂んでゐた、畫を賣つて糊口する考は少しも無かつた。椿岳の個性を發揮した泥畫の如きは賣る爲めの畫としては迚も考へ及ばないものである。

椿岳の泥畫

椿岳の泥畫といふは繪馬や一文人形を彩色するに用ゆる下等繪具の紅殼、黄土、丹、群青、胡粉、綠青等に少量の墨を交ぜて描いた畫である。夫ばかりでなく泥面子や古煉瓦の破片を碎

いて溶かして繪具とし、枯木の枝を折つて筆とした事もあつた。其上に琉球唐紙のやうな下等の紙を用ひ、興に乘ずれば塵紙にでも淺草紙にでも反古の裏にでも竹の皮にでも折の蓋にでも何にでも描いた。泥繪具は絹や鳥の子には却て調和しないで、惡紙粗材の方が却て泥繪具の妙味を發揮した。

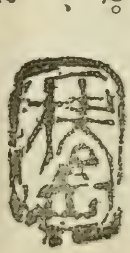


　此の泥畫に就て一笑話がある。ツイ二十年ほど前まで日本橋の海運橋の袂に楢屋といふ老舗の紙屋があつた。此の楢屋の主人は其頃マダ若かつたが、先代からの江戸の通人で、文人墨客と廣く交際してゐた。或時椿岳がフラリと來て、主人に向つて云ふには、俺の處へ畫を頼みに來るものも多いが、紙ばつかりでトンと絹を持つて來ない、怎うだい、一つ絹に描かして呉れないかと。そんなら羽織の胴裏にでも描いて貰ひませうと、楢屋の主人は早速白羽二重を取寄せて頼んだ。椿岳は常から弱輩のくせに通人顏する楢屋が氣に入らなかつた乎、或は羽織の胴裏といふのが癪に觸つた乎して、例の泥繪具で一氣呵成に地獄變相の圖を描いた。頗る見事な出來だつたので楢屋の主人も大に喜んで、早速此畫を胴裏として羽織を仕立てゝ着ると、故意乎、偶然乎、膠が利かなかつたと

見えて、絵具がベッタリ着物に附いて了つた。椿岳さんの畫には最う懲り〳〵したと、楢屋は其後椿岳の噂が出る度に頭を搔き〳〵苦笑した。

淺草繪と淺草人形

椿岳の所謂淺草繪といふは淡島堂のお堂守をしてゐた頃の徒然のすさびで、大津繪風の泥畫である。多分又平の風流に倣つたのであらう。十二枚袋入が唯つた一朱であつた。袋の文字は大河内侯の揮毫を當時の淺草區長の町田今輔が雕板したものださうだ。慾も得も無い書放しで、徹塵も匠氣が無いのが好事の雅客に喜ばれて、淺草繪の名は忽ち好事家間に喧傳された。が、素人眼には下手で小汚なかつたから、自然粗末に扱はれて今日殘つてるものは極めて稀である。椿岳歿後、下岡蓮杖が淺草繪の名を繼いで泥畫を描いてゐたが、蓮杖のは椿岳の眞似をしたばかりで椿岳の洒脫と筆力とを缺き、同じ淺草繪でも椿岳のとは似て非なるものであつた。が、其の蓮杖も二三年前故人となつて、淺草繪の名は今では全く絶えて了つた。



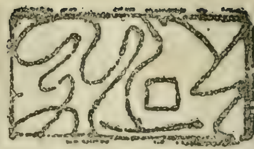
椿岳の淺草人形といふは向島に隱棲してから後、第二博覽會の時、工藝館へ出品した伏見燒

のやうな姉様や七福神の泥人形であつて、一個二十五錢の札を附けた數十個が一つ殘らず賣れて了つた。伏見人形風の彩色の上からニスを塗つたのが如何にも生々しくて、椿岳の作としては餘り感服出來ないものである。が、椿岳の奇名が鳴つてゐたから、椿岳の作と云へば何でも風流がつて此人形も亦相應に評判されたもんだ。今でも時偶は殘つてゐて、先年の椿岳展覽會にも二三點見えたが、椿岳の作では一番感服出來ないものであつた。尤もニスを塗つた處が椿岳の自慢で、當時は矢張新らしかつたのである。

椿岳の畫料

椿岳は畫を賣つて糊口したのでは無かつた。貧乏しても畫を賣るを屑しとしなかつた。淺草繪は淺草紙に泥繪具で描いたものにしろ、十二枚一と袋一朱ではナンボ其頃でも繪具代の足しにもならなかつたは明かである。

其頃何處かの洒落者の惡戯であらう、椿岳の潤筆料五厘以上と吹聽した。すると何處からか聞きつけて『伯父さん、繪を描いてお呉れ』と五厘を持つて來る兒供があつた。コイツ面白いと、恭やしく五厘を奉書に包んで賴みに來る洒落者もあつた。椿岳は喜んで受けて五厘の潤筆



料の爲め繪具代を損するを何とも思はなかつた。

　尤も其頃は今のやうな途方も無い畫料を拂ふものは無かつた。隨つて相場をする根性で描く畫家も、株を買ふ了簡で描いて貰ふ依頼者も無かつた。時勢が違うので強ち直ちに氣品の問題とする事は出來ないが、當時の文人や畫家は今の小說家や美術家よりも遙かに利慾を超越してゐた。椿岳は晩年畫かきの仲間入りをしてゐたが畫かき根性を最も脫してゐた。

椿岳の作品

が、畫かき根性を脫してゐて、畫料を貪るやうな卑しい心が微塵も無かつた代りに、製作慾も亦薄かつたやうだ。アレ丈けの筆力も造詣もありながら割合に大作に乏しいのは畢竟藝術慾が風流心に禍ひされたのであらう。椿岳を大ならしめたのも風流心であるが、小ならしめたのも亦風流心であつた。

　椿岳を應擧とか探幽とかいふ巨匠と比較して藝術史上の位置を定めるは無用である。椿岳は畫人として應擧や探幽と光を爭ふやうな巨人では無い。が、應擧や探幽の大作の全部を集めて

捜しても決して發見されない椿岳獨特の一線一畫がある。椿岳には小さいながらも椿岳獨自の領分があつて、此領分は應擧や探幽のやうな巨匠が曾て一度も足を踏入れた事の無い處女地であつた。縱令此地域は狹隘であり磽确であつても儼として獨立した一つの王國であつた。椿岳は實に此の椿岳國といふ新らしい王國の主人であつた。

此の椿岳國の第一の名産たる畫はどんな作である乎、先年の椿岳展覽會は一部の好事家間に計畫されたので、平生相知る間を集めて展觀したのだから、此展覽會で椿岳の畫の全部を知る事は出來なかつたが、略ぼ其畫風を窺ふ事は出來た。

椿岳の畫は大津繪でも鳥羽繪でも無い、蕪村でも大雅でも無い。尺寸の小幀でも椿岳一個の生命を宿してゐる。古人の先蹤を追つた歌舞伎十八番のやうなものでも椿岳獨自の個性が自づから現はれてをる。多い作の中には不快の感じを與へられるものもあるが、此不快は椿岳自身の性癖が禍ひする不快であつて、因襲の追隨から生ずる不快では無い。此の瑜瑕並び蔽はない特有の個性の有の儘を少しも飾らずに暴露(ぶちま)けた處に椿岳の畫の偉さがある。

椿岳の畫は大抵小品小幀であつて大作と見做すべきものが殆んど無い。尤も其頃は今の展覽



忠臣藏七段目（椿岳木筆畫）

會向きのやうな大畫幅を滅多に描くものは無かつたが、殊に椿岳は畫を風流とする心に累せられて、壽命を縮めるやうな製作を嫌つてゐた。十日一水を畫き五日一石を畫くといふやうな煩瑣な勞作は椿岳は屑しとしなかつたらしい。が、椿岳の畫は書放しのやうに見えてゐても實は決して書放しでは無かつた。椿岳は一つの畫を作る爲めには何枚も何枚も下畫を描いたので、死後の筐底に殘つた無數の下畫や粉本を見ても平素の細心の尋常で無かつたのが解る。椿岳の畫は大抵一氣呵成であるが、椿岳の一氣呵成には人の知らない多大の準備があつたのだ。



　椿岳が第一回博覽會に出品した畫は恐らく一生に一度の大作であらう。一體椿岳が博覽會に出品するといふは奇妙に感ずるが、性來珍らし物好きであつたから畫名を賣るよりは博覽會が珍らしかつたのである。俺は貧乏人だから絹が買へないと云つて、寒冷紗の裏へ黄土を塗つて地獄變相圖を極彩色で描いた。尤も極彩色と云つても泥畫の小汚ない極彩色で、故更に寒冷紗へ描いた處に椿岳獨特のアイロニイが現れてゐる、此畫は守田寶丹が買つた筈だから、今でも

寶丹の家藏になつてるわけだが、地震の火事で怎うなつた乎。池の端に有つたなら此の椿岳の一世一代の畫も大方燒けて了つたらう。

第二回だか第三回だかの博覽會にも橋辨慶を出品して進歩二等賞の銅牌を受領した。此畫は今何處にあるか、所有者は不明である。元來椿岳といふやうな旋毛曲りは今なら帝展に等しい博覽會へ出品して賞牌を貰ふといふは少し滑稽の感があるが、之に就て面白い咄がある。丁度賞牌を貰つて歸つて來た時、下岡蓮杖が來合はした。こんなものよりか金の一兩も貰つた方が宜かつたと、椿岳が云ふと、そんなら一兩で買ひませうと、一圓出して蓮杖は銅牌を貰つて歸つた。橋辨慶の行衞は不明であるが、此の辨慶が分捕りした銅牌は今でも蓮杖の家に殘つてる筈だが、之も多分地震で怎うかして了つたらう。

今戸の大河内家には椿岳に似つかはしい奇妙な大作があつた。大河内家の先代輝聲侯といふは頗る風流の貴族で常に文墨の士を近づけた。就中、椿岳の恬淡洒落を愛して方外の友を以て遇してゐた。此の大河内家の客座敷から横手に見える羽目板が目觸りだと云ふので、椿岳は工風をして廂を少し突出して、羽目板へ直接にパノラマ風に天人の畫を描いた。椿岳獨特の奇才

は恁ういふ處に發揮された。此の天人の畫は椿岳の名物の一つに數へられてゐたが、惜しい哉羽目板だから破損したか或は雨晒しになつて散三になつて了つたらう。幸ひ無事に保存されてゐても今戸は震害地だつたから地震の火事で燒けて了つたらう。

椿岳は晩年には徒然草を好んで、屢々徒然草を畫題とした。堀田伯爵の爲めに描いた徒然草の貼交ぜ屛風一雙は椿岳晩年の作として傑作の中に數ふべきものであつて、其下畫らしいものが先年の椿岳展覽會にも二三枚見えた。依田學海翁の漢文の椿岳傳が屛風の裏に貼つてあつたさうだが、學海の椿岳傳は『譚海』の中にも載つてゐない。定めし椿岳の面目を躍如たらしめた奇文であつたらうと思ふ。が、伯爵邸は地震の中心の本所であつたから、屛風其物からして多分燒けて了つたらうし、學海の逸文も亦失はれて了つたらう。

圓福寺の椿岳の畫

椿岳の大作とも云ふべきは牛込の圓福寺の本堂の格天井の蟠龍の圖である。圓福寺といふは紅葉の舊棲たる横寺町の、本との藝術座の直ぐ傍の日蓮宗の寺である。此寺の先々住の日照といふが椿岳の岳父榎本氏の出であつたので、俗縁の關係上、明治十七八年ごろ本堂が落成した

時、椿岳は頼まれて本堂の格天井の畫を描いた。

椿岳は此依頼を受けると殆んど毎日東京の諸寺を馸巡つて格天井の蟠龍を見て步いた。愈々着手してから描き終るまでは誰にも會はないで、此畫の爲めに亡師椿年から讓られた應擧傳來の秘藏の大明墨を使用し盡して了つたさうだ。椿岳が一生の大作として如何に此畫に精神を注いだかは想像するに餘りがある。幸ひ此畫は地震の禍ひをも受けずに今猶ほ殘つてゐるが、畫が畫だからマジメに傳統の法則を守つた作で、椿岳獨自の畫境を見る事は出來ない。が、椿岳の畫の深い根柢や豪健な筆力を窺ふ事が出來る大作である。

此の本堂の內陣の土藏の扉にも椿岳の麒麟と鳳凰の畫があつたさうだが、惜しい哉、十數年前修繕の際に取毀たれて了つた。

圓福寺の方丈の書院の床の間には光琳風の大浪、四壁の欄間には林間の羅漢の百態が描かれてゐる。何れも椿岳の大作に數ふべきものゝ一つであるが、就中大浪は柱の外、框の外までも奔浪疊波が滔れて椿岳流の放膽な筆力が十分に現はれてをる。

圓福寺に傳ふる椿岳の諸作の中で最も見るべきものは方丈の二階の一室の九尺二枚の大襖で

ある。圖は四條の河原の涼みであつて、仲居と舞子に圍繞かれつゝ歡樂に興ずる一團を中心として幾多の遠近(をちこち)の涼み臺の群れを模糊として描き、京の夏の夜の夢のやうな歡樂の軟かい氣分を全幅に漲らしてをる。が、惜しい哉、十年前一見した時既に雨漏や鼠の爲めの汚損が甚だしくして見る影も無かつた。當時案內の雛僧を通じて補修して大切に保存すべき由を住職に傳へたが、今ほドウなつたか知らん。



圓福寺の畫には何れも落款が無いので椿岳の作たるを忘れられてをる。椿岳の洒々落々たる畫名を市るの鄙心が無かつたのは之を以ても知るべきである。が、落款が有つても淡島椿岳が如何なる畫人であるかを知るものは極めて少なく、縱令名を知つてるても藝術的價値を認むるものが更に愈々少ないのだから、圓福寺に限らず、ドコにあつても椿岳の畫は粗末に扱はれて兒供の翫弄(おもちや)となり鼠の巢となつて亡びて了つたのが可成多いだらう。

が、椿岳の畫は大津繪や繪馬のやうに單なる趣味一遍で鑑賞すべきものでは無い。僅に數筆を塗抹した泥畫の寸紙の中にも藝術的詩趣が横溢してゐる。造詣の深さと創造の力とは誠に近

世に双び無い妙手であつた。

（十二）　終焉及び內外人の椿岳蒐集熱

椿岳は餘り旅行しなかつた。晩年大河內子爵のお伴をして俗に柘植默で通つてる千家の茶人と、同氣相求める三人の變物揃ひで東海道を膝栗毛の氣散じな旅をした。天龍まで來ると川留で　半分落ちた橋の上で座禪をしたのが椿岳の最後の奇の吐き仕舞であつた。

臨終は明治二十二年九月二十一日であつた。牛島の梵雲庵に病んで愈々最後の息を引らうとするや、呵々大笑して口吟んで曰く、『今まではさま〴〵の事して見たが、死んで見るのは之が初めて』と。六十七歲で眠るが如く大往生を遂げた。天王寺墓域內、「吉梵法師」と勒された墓石は今猶ほ飄々たる洒脫の風丰を語つてをる

椿岳は生前畫名よりは奇人で聞えてゐた。一風變つた畫を描くのは誰にも知られてゐたが、極彩色の土佐畫や花やかな四條派や或は潑墨淋漓たる南宗畫でなければ氣に入らなかつた當時の大多數の美術愛好者には大津繪風の椿岳の泥畫は餘り喜ばれなかつた。椿岳の畫を愛好する



椿岳晩年の寫影

少數好事家ですらが丁度朝顏や萬年靑の變り種を珍らしがると同じ心持で藝術のハイブリッドとしての椿岳の奇の半面を鑑賞したに過ぎなかつたのだ。

椿岳の畫が俄に管待やされ初して市價を生じたのはマダ漸く十年かそこらである。其の市價を生じた直接の原因は、商賣人の咄に由ると矢張外國人が頻りに感嘆して買出したからであるさうだ。日本人はいつでも外國人に率先される。寫樂も歌麿も國政も春信も外國人が買出してから騷ぎ出した。外國人が褒めなかつたなら、或は褒めても高い價を拂はなかつたなら、古い錦繪は既くの昔し張拔物や、屛風や襖の下張乃至は乾物の袋にでもなつて、今頃は一枚殘らず失くなつて了つたらう。少くも貧乏な好事家に珍重されるだけで、精々が黃表紙並に扱はれる位なもんだらう。今でこそ寫樂々々と猫も杓子も我が物顏に感嘆するが、外國人が折紙を附けるまでは日本人は可成な浮世繪好きでも寫樂の寫の字も知らなかつたものだ。其通りに椿岳の畫も外國人が買出してから俄に市價を生じ、日本人は恰も魔術者の杖が石を化して金とするを驚異する如くに眼を睜つて忽ち椿岳蒐集熱を長じた。

因襲を知るものは勢ひ因襲に俘はれる。日本人は畫の理解が有れば有るほど狩野派とか四條

派とか南宗とか北宗とかの在來の各派の畫風に規矩され、雪舟とか光琳とか文晁とか容齋とか云ふ昔しの巨匠の作に泥んだ眼で杓子定規に鑑賞するから、偶々藝術上のハイブリッドを發見しても容易に藝術的價値を與へやうとしない。外國人は因襲を知らないから少しも因襲に累はされないで、自己の鑑賞力の認めるまゝに直ちに藝術的價値を定める。此の通弊は單に畫のみの問題でなく、又獨り日本ばかりの問題でもない。總ての公平な判斷や眞實の批評は常に民族的因襲や國民的偏見に累はされない外國人から聞かされる。就中、藝術の眞價が外國人の批評で確定される場合の多いは啻に日本の錦繪ばかりでは無いのだ。

二十年前までは椿岳の舊廬たる梵雲庵の畫房の戸棚の隅には椿岳の遺作が薦縄搦げとなつてゐた。餘り澤山あるので椽の下に投り込まれてゐたものもあつた。寒月の噺に由ると、呉れろといふものには誰にでも與つたが、餘り澤山あつたので與り切れず、其頃は欲しがるものも亦餘り無かつたさうだ。處が椿岳の市價が出ると忽ちバッチラがひで持つてつて了つて、梵雲庵には書捨ての反古すら殘らなかつた。椿岳から何代目かの淡島堂のお堂守は椿岳の相場が高くなつたと聞いて、一枚ぐらゐはドコかに貼つてありさうなもんだと、お堂の壁張を殘る隈なく

引剝がして見たが、到頭一枚も發見されなかつたさうだ。

だが、椿岳の市價は西洋人が買出してから俄に高くなつたのだが、夫より以前に椿岳の畫の價値を認めたものが日本人に丸切り無いわけでは無かつた。洋畫界の長老長原止水の如きは最も早くから椿岳を隨喜した一人であつた。ツイ昨年易簀した洋畫界の羅馬法王たる黑田淸輝や好事の聞え高い前の暹羅公使の松方正作の如きも亦早くから椿岳を蒐集してゐた。が、椿岳の感嘆者又蒐集家としては以上の數氏よりも遲れてゐるが、最も熱心に蒐集したのは銀座の天狗居であつた。天狗居と云つては誰も餘り知るまいが、天金と云つたら東京の名物の一つとしてお上りさんの赤ゲツトにも知られてる旗亭の主人である。天狗居は風雅の好事家で、珍書稀本書畫骨董の蒐集家として聞えてゐるが、近年殊に椿岳に傾到して天狗店の買占が椿岳の相場を狂はして俄に騰貴したと云はれるほど金に絲目を附けないで集めたもんで、瞬く間に百數十幅以上を蒐集した。啻だ數量ばかりでなく優品をも收得したので、天狗居は追ては蒐集した椿岳の畫集を出版する計畫があつたが、此計畫が實現されない中に、惜い哉、此の比類の無い蒐集は大震災で烏有に歸した。天狗居が去年の夏、複製して暑中見舞として知人に頒つた椿岳の畫

短冊は劫火の中から辛うじて拾ひ出された椿岳蒐集の記念の片影であつた。

が、椿岳の最も勝れた蒐集が烏有に歸したと云つても遺作はマダ散在してゐる。椿岳の傑作の多くは下町に所藏されてゐたから、大抵震火に亡びて了つたらうと想像されるが、椿岳獨特の畫境は大作よりは寧ろ尺寸の小幀に發揮されてるから、再び展覽會が開かれたら意外の名幅がドコからか現れるかも知れない。且高價を支拂はれて外國へ流出したものも澤山有るらしいから、追付けクルトやズツコのお仲間が日本人の餘り知らない傑作の複製を挿圖した椿岳畫傳を出版して歐洲讀書界を動搖する事が無いとも限られない。『俺の畫は死ねば値が出る』と傲語した椿岳は苔下に會心の微笑を湛へつゝ、『そウら見さつしやい、印象派の表現派のとゴテ付いてるが、ゴークやセザンヌは疾つくに俺がやつてる哩』とでも脂下つてるだらう。

（大正十四年三月補訂）

鷗外博士の追憶

若い蘇峰の『國民之友』が思想壇の檜舞臺として今の『中央公論』や『改造』よりも重視された頃、春秋二季の特別附錄は當時の大家の顔見世狂言として盛んに評判されたもんだ。其の第一回は美妙の裸蝴蝶で大分前受けがしたが、第二回の『於母影』は珠玉を滿盛した和歌漢詩新體韻文の聚寶盆で、目先きの變つた、丁度果實の盛籠を見るやうな色彩美と清新味で人氣を沸騰さした。S・S・Sとは如何なる人だらう、と、未知の署名者の謎が愈々讀者の好奇心を惹起した。暫らくしてS・S・Sといふは一人の名で無くて、赤門の若い才人の盟社たる新聲社の羅馬字綴りの冠字で、軍醫森林太郎が頭目であると知られた。

鷗外は早熟であつた。當時の文壇の唯一舞臺であつた讀賣新聞の投書欄に『蛙の說』といふを寄稿したのはマダ東校（今の醫科大學）に入學したばかりであつた。當時の大學は草創時代で、今の中學卒業程度のものを收容した。殊に鷗外は早熟で、年齡を早めて入學したからマダ

全くの少年だつた。が、少年の筆らしくない該博の識見に驚嘆した讀賣の編輯局は必ずや世に聞ゆる知名の學者の覆面か、或は隱れたる篤學であらうと想像し、敬意を表し旁々今後の寄書をも仰ぐべく特に社員を鷗外の假寓に伺候せしめた。處が社員は恐る〳〵刺を通じて早速部屋に通され、肅々如として恭やしく控へてると、軈てチョコ〳〵と現はれたは少くも口髯ぐらゐ生やしてる相當年配の紳士と思ひの外なる極めて無邪氣な紅顏の美少年で、『私が森です』と挨拶された時は讀賣記者は呆氣に取られて、暫らくは開いた口が塞がらなかつたといふ逸事がある。（此噺は櫻木町時代に鷗外自身の口から直接に聽いたのである。）

鷗外は幼時神童と云はれたさうだ。虛實は知らぬが、『十ウで神童、ハタチで才子、二十以上はタヾの人と云ふお約束通り、森の子も行末はタヾの人サ、』と鄉人の蔭口するのを洩れ聞いて發憤して益々力學したといふ說がある。左に右く天稟の才能に加へて力學衆に超え、早くから頭角を出した。萬延元年の生れといふは大學に入る時の年齡が足りない爲めに戶籍を作り更へたので實は文久二年であるさうだ。『蛙の說』を讀賣へ寄書したのは大學在學時代で、夫から以來も折々新聞に投書したといふから、一部には既に名を認められてゐたらうが、洽く世間に

知られたのは『國民之友』のS・S・Sからである。

S・S・Sの名が世間を騒がした翌る年、タシカ明治二十三年の櫻の花の散つた頃だつた。谷中から上野を拔けて東照宮の下へ差掛つた夕暮、偶つと森林太郎といふ人の家は此邊だナと思つて、何心となく花園町を軒別門札を見て歩くと忽ち見附けた。出來心で名刺を通じて案內を請ふと、暫らくして夫人らしい方が出て來られて、『ドウいふ御用ですか？』

何しろ社交上の禮儀も何も辨へない駈出しの書生ツぽで、ドンナ名士でも突然訪問して面會出來るものと思ひ、又訪問者には面會するのが當然で、謝絕するナゾとは以ての外の無禮と考へてゐたから、何の用かと訊かれてムッとした。

『何の用事もありませんが、そんなら立派な人の紹介狀でも貰つて上りませう、』とブッキラ棒に答へてツウと歸つた。

其頃私は神田小川町に下宿してゐた。忌々しくてならないので、歸ると直ぐ『鷗外を訪ふて會はず』といふ短文を書いて、其頃在籍してゐた國民新聞社へ宛ててポストへ入れに運動旁々自分で持つて出掛けた。で、直ぐ近所のポストへ投り込んでからソコラを散歩して彼是れ三十

分ばかりして歸ると、机の上に「森林太郎」といふ名刺があつた。ハッと思つて女中を呼んで聞くと、ツヒ唯つた今おいでになつて、先刻は失禮した、宜しく云つて呉れといふお言ひ置きで御座いますと云つた。

考へるとコッチはマダ無名の青年で、突然紹介狀も無しに訪問したのだから一應用事を尋ねられるのが當然であるのに、さも侮辱されたやうに感じて向ッ腹を立てた。然るに先方は既に一家を成した大家であるに、ワザワザ遠方を夜更けてから、(丁度十時半頃であつた、)挨拶に來られたといふは禮を盡した仕方で、誠に痛み入つて竊に赤面した。

早速社へ宛てて、今送つた原稿の掲載中止を葉書で書き送つて其晩は寢ると、翌る朝の九時頃には鷗外からの手紙が屆いた。時間から計ると、前夜私の下宿へ來られて歸ると直ぐ認めて投郵したらしいので、(此頃の郵便は恁う早くは屆かないが、其頃は今よりも迅速だつた。)文面は記憶してゐないが、其意味は、私のペン・ネエムは知つてゐても本名は知らなかつたので失禮した、アトで偶つと氣がついて取敢へずお詫びに上つたがお留守で殘念をした、ドウカ惡く思はないで復た遊びに來て呉れといふ、慇懃な、但し率直な親みのある手紙だつた。

MAETERLINCK その後少く読み進みて其のMYSTIKを
素人哲学なることと見ればなるべしと雖も論文中の譬喩
などいふことも観照的なる人にのみわかるとおもはせるとこ
ろある處所と存候

二月二十七日

林

森鷗外の筆蹟

折返して直ぐ返事を出し、夫から五六日して或る夕刻、再び花園町を訪問した。すると生憎運動に出られたといふので、仕方が無しに門を出やうとすると、入れ違ひに門を入らうとして歸り掛ける私を見て、垣に寄添つて躊躇してゐる着流しの二人連れがあつた。一人はデップリした下脹れの紳士で、一人はゲッソリ頬のこけた學生風であつた。容子がドウモ來客らしく無いので、若しやと思つて、佇立つて『森さんですか、』と聲を掛けると、紳士は帽子に手を掛けつつ、『森ですが、君は？』

『内田です、』と云ふと、

『然うか、』と立ちながら足を叩いて頽れるやうに笑つた。『宜かつた、宜かつた、最少し遲れやうもんなら復た怒られる處だつた。さあ、來給へ、』と先きへ立つて直ぐ二階の書齋へ案内した。『こなひだは失敬した。君の名を知らんもんだからね、どんな容子の人だと訊くと、鞄を持つてる若い人だといふので、（取次が其頃私が始終提げてゐた革の合切袋を鞄と間違へたと見える。）テッキリ寄附金勸誘と感違ひして、何の用事かと訊かしたんだ。處が、そんなら立派な人の紹介狀を持つて來ようとツウと歸つたといふのが如何にも皮肉なので、誰か知らん

と色々考へてる中に偶つと浮んだのは君だ。ドウモ君らしい。コイツ失敗つたと、直ぐ詫びに君の許へ出掛けると今度は君が留守でボンヤリ歸つたやうなわけさ。イヤ失敬した、失敬した……』と初めから碎けて一見舊知の如くであつた。

其晩はドンナ話をしたか忘れて了つたが、十時頃まで話し込んだ。學生風なのは其頃マダ在學中の三木竹二で、兄弟して歡待されたが、三木君は餘り口を開かなかつた。

鷗外はドチラかといふとクロース・ハアテツドで、或る限界まで行くと夫から先きは嚴として人を容れないといふ風があつた。が、官僚氣質の極めて偏屈な人で、容易に人を近づけないで門前拂ひを喰はすを何とも思はないやうに噂する人があるが、夫は鷗外の一面しか知らない說で、極めてオォプンな、誰に對しても城府を撤して奧底もなく打解ける半面をも持つてるたのは私の初對面でも解る。若い人が常に峇いて集まつたので推しても、一部に噂されるやうな偏屈な狹隘な人で無かつたのは明白である。

だが、極めて神經質で、學德をも人格をも累するに足らない些事でも決して看過しなかつた。

十數年以往文壇と遠ざかつてからは較や無關心になつたが、『しがらみ草紙』や『めざまし草』で盛んに辯難論爭した頃は、六號活字の一行二行の道聽塗說をさへも決して看過しないで堂々と論駁もするし辯明もした。

夫に就き鷗外の性格の一面を窺ふに足る一挿話がある。或る年の國民新聞に文壇逸話と題した文壇の樂屋咄が毎日連載されて可成な呼物となつた事があつた。蒙求風に類似の逸話を對聯したので、或る日の逸話に鷗外と私と二人を列べて、堅忍不拔精力人に絕すと同じ文句で並稱した後に、但だ異なるは前者の口舌の較や謇澁なるに反して後者は座談に長じ云々と、看方に由れば多少鷗外を貶して私を揚げるやうな筆法を弄した。此逸話の載つた當日の新聞を讀んだ時、誰が書いたか知らぬがツマラヌ事を書いたもんだと竊に鷗外の誤解を恐れた。果せる哉、鷗外は必定私が自己吹聽の爲め、故更に他人の短と自家の長とを對比して書いたものと推斷して、怫然としたものと見える。

其の次の『柵草紙』を見ると、イヤ書いた、書いた、僅か數行に足らない逸話の一節に對して百行以上の大反駁を加へた。要旨を摘むと、凡そ辯論の雄といふは無用の饒舌を弄する謂

では無い、鷗外は無用の雜談冗辯をこそ好まないが、曾てザクセンの建築學會で日本家屋論を講演した事がある、邦人にして獨逸語を以て獨逸人の前で演說したのは余を以て嚆矢とすといふやうな論鋒で、一々國民新聞所載の文章を引いては、此處筆者の風丰彷彿として見はると疊掛けて、暗に私に諷てつけて散三に當り散らした。處が、此の文壇逸話の筆者は私でなくて山田美妙であつたのだ。私は昔から人の反駁なぞは餘り氣に掛けない方で、大抵は雲煙過眼して了うし、鷗外の氣質は大凡呑込んでるから、威丈高に何を云はうと格別氣にも留めなかつたが、誰だか鷗外に注意したものがあつたと見えて、其後偶然フラリと鷗外を尋ねると、私の顏を見るなり『イヤ失敬した、失敬した、アレは美妙が書いたんだつてね、君かと思つたのでツヒ失敬した、まあ勘辨して呉れたまへ、』と氣の毒さうに云つた。鷗外は向腹を立てる事も早いが、惡いと思ふと直ぐ詫まる人だつた。

鷗外は人に會ふのが嫌ひで能く玄關拂ひを喰はしたといふ噂がある。晩年の鷗外とは疎縁であつたから知らないが、若い頃の鷗外は寧ろ客の來るのを喜んで、鷗外の書齋はイツモお客で賑はつた。

私が最も頻繁に訪問したのは花園町から太田の原の千駄木時代であつた。イツデモ大抵夜るだつた。隨分十時過ぎから出掛けた事もあつた。或る晩、大分夜が更けたらしく思つたので、丁度茶を持つて來た少婢に向つて、『何時になります？』と訊くと、少婢は眠さうな眼をしつつ、『モウ十二時で御座います、』と云つた。

すると鷗外は大喝して、『モウ十二時とは何だ、マダ十二時とナゼ云はん、』と叱りつけた。私は氣の毒になつて徐に起ち掛けやうとすると、『マダ早いよ、僕の處は夜るが晝だからね。眠くなつたらソコの押入から夜具を引摺出してゴロ寢をするさ。賀古なぞは十二時が打たんけりや來ないよ、』と云つた。

賀古翁は鷗外とは竹馬の友で、葬儀の時に委員長となつた特別の間柄だから格別だが、成程十二時を打つてからノソノソやつて來られたのに數回邂逅つた

こんな鹽梅で、其頃鷗外の處へ出掛けたのは大抵九時から十時、歸るのは早くて一時、隨分二時三時の眞夜中に歸る事も珍らしくなかつた。私ばかりぢやなかつた、晝は役所へ出勤する人だつたからでもあらうか、鷗外の訪客は大抵夜るで、夜るの千朶山房は品詩論畫の盛んなる

釋難に更けて行つた。

鷗外は睡眠時間の極めて少ない人で、五十年來の親友の賀古翁の咄でも四時間以上寢た事は無いさうだ。少年時代からの親交であつて度々鷗外の家に泊つた事のある某氏の咄でも、イツ寢るのかイツ起きるのか解らなかつたさうだ。

鷗外の花園町の家の傍に私の知人が住んでゐて、自分の書齋と相面する鷗外の書齋の裏窓に射す燈火の消えるまで競爭して勉強するツモリで毎晩夜を更かした。が、どうしても夫まで起きてゐられないので燈火の消える時刻を突留める事が出來なかつた。或る晩、深夜に偶と眼が覺めて寢つかれないので、何心なく窓をあけて見ると、鷗外の書齋の裏窓はまだボツカリと明るかつた。『先生マダ起きてゐるな、』と眺めてゐると、其中にプツと消えた。急いで時計を見ると拂曉の四時だつた。『之ぢやァ迚も競爭が出來ない、』と其後私の許へ來て話した。

尤も二時三時まで話し込むお客が少くなかつたのだから、書齋のアカリの消えるのが白々明けであるのは不思議で無い。『人間は二時間寢れば澤山だ、』といふ言葉は度々鷗外から聞い

た。『邪破烈翁は四時間しか寢なかつたさうだが、四時間寢るのを豪がる事は無いさ、』と平氣な顏をして、明け方トロトロと眠ると直ぐ眼を覺まして、定刻に出勤して少しも寢不足な容子を見せなかつたさうだ。

鷗外は甘諸と筍が好物だつたさうだ。肉食家といふよりは菜食黨だつた。野菜料理は日本が世界一である。歐羅巴の野菜料理てのは鶯のスリ餌のやうなものばかりだから、「ヴエジテラニヤン・クラブ」へ出入する奴は皆青瓢箪のやうな面をしてゐる。が、日本では菜食黨の坊主は皆血色のイイ健康な面をしてゐる。日本の野菜料理が衞養に富んでるのは何より之が第一の證據だ。」といふのが鷗外の持論であつた。

『牛や象を見たまへ、皆菜食黨だ。體格から云つたら獅子や虎よりも優秀だ。肉食でなければ營養が取れないナゾと云ふのは愚論だよ。』

が、鷗外は非麥飯主義で、消化がイイといふ事は衞養分が少ないといふ事だと云ふ理由から固く米飯説を主張し、米の營養は肉以上だと云つてゐた。

或る時、その頃私は痩せてゐたので、ドウしたら肥るだらうと訊くと、『夫は容易い事だ。毎日一度大飯を喰つて、日比谷の原（其頃はマダ公園で無かつた）を早足で三遍も廻れば直き肥る。夫には牛肉で飯を喰ふのが一番だ。肉が營養があるといふわけでは無いので、食慾を刺戟するのは肉が一番だから、肉で喰ふのが一番飯が餘計喰へる。』と大食と食後の早足運動を力說した。

鷗外の日本食論、日本家屋論は有名なものだ。イツだつけか忘れたが、此頃は馬鹿に忙がしいと云ふから、何が忙がしいかと訊くと、毎日〳〵壁土の分析ばかりしてゐると云つた。此研究が卽ち日本家屋論の一部であつた。此の日本食論と日本家屋論の或るものは獨逸文で書かれて獨逸の學界で發表されたから日本よりは獨逸で有名である。

獨逸と云へば、或る時鷗外を尋ねると、近頃非常に忙がしいと云ふ。何で忙がしいかと訊くと、或る科學上の問題で北尾次郎と論爭してゐるんで、其の下調べに骨が折れると云つた。其頃の日本の雜誌は專門のものも目次ぐらゐは一と通り目を通してゐたが、鷗外と北尾氏との論爭はドノ雜誌でも見なかつたので、ドコの雜誌で發表してゐるかと訊くと、獨逸の何とかいふ

學會の雜誌（今は其名を忘れた）でだと云つた。日本人同士が獨逸の雜誌で論難するといふは如何にも世界的で、之を以ても鷗外が論難好きで、シカモ其志が決して區々日本の學界や文壇の小蝸殼に跼蹐しなかつたのが證される

鷗外の博覽强記は誰も知らぬものは無いが、學術書だらうが、通俗書だらうが、手當り任せに極めて多方面に渉つて集めもし讀みもした。或る時尋ねると、極細い眞書きで精々と寫し物をしてゐるので、何を寫してゐるかと訊くと、其頃地學雜誌に連揭中の『鑛物字彙』であつた。ソンナものを寫すのは馬鹿馬鹿しい、近日丸善から出版されると云ふと、然うか、イイ事を聞いた、無駄骨折をせずとも濟んだと云つた。（夫から一と月ほどして出版されたのを寄送すると、大遍喜んだ禮狀をよこした。）

其時、そんなものを寫してドウすると訊くと、『何かの時には役に立つさ、』と云つた。『何でも書物は一生の中に一度役に立てば夫で澤山だ。然ういふ意味で學術的に貴いものなら何でも集めて置く、』と書棚の中から氣象學會や地震學會の報告書を出して見せた。憖ういふものまでも

一と通りは眼を通さなければ氣が濟まなかつたらしい。が、權威的の學術書なら別段不思議は無いが、或る時俗謠か何かの咄が出た時、書庫から『魯文珍報』や『親釜集』の合本を出して見せた。『魯文珍報』は黎明期の雜誌文學中、較や特色があるからマダシモだが、『親釜集』が保存されてるに到つては驚いて了つた。

一と頃江戸圖や武鑑を集めてゐた事があつた。本郷の永盛の店頭に軍服姿の鷗外を能く見掛けるといふ噂を聞いた事もある。其頃偶つと或る會で落合つた時、恰も私が手に入れた貞享の江戸圖の咄をすると、そんな珍本は集めないよ、僕のは安い本ばかりだと、暗に珍本無用論を臭はした。が、其の口の端から澁江抽齋の寫した古い武鑑（？）が手に入つたと云つて歡喜と得意の色を漲らした。

鷗外が抽齋や蘭軒等の事跡を考證したのは是等の古書校勘家と一縷の相通ずる共通の趣味があつたからだらう。晩年一部の好書家が被齋展覽會を催したらドウだらうと鷗外に提議した處が、鷗外は大賛成で、博物館の一部を貸してもイイといふ咄があつた。鷗外の賛成を得て話は着々進行しさうであつたが、好書家ナンテものは蒐集には極めて熱心であつても、展覽會ナゾ

は氣紛れに思立つても皆ブシャウだから其計畫も捗取らないで到頭實現されなかつた。（此咄に就ては『明星』掲載當時或る知人から誤解であると手柬して訂正されたが、之も亦鷗外自身の口から聽いたのだから、鷗外の思違ひかも知れぬが取消さずに置く。）

若い人たちの中には鷗外が晩年考證に沒頭して純文藝に遑さなかつたのを惜んで、鷗外を追懷するにつけて再び文藝に歸る期が失はれたのを遺憾とするものがあつた。

が、私の思ふままを有體に云ふと、純文藝は鷗外の本領では無い。劇作家又は小説家としては縱令第二流を下らないでも第一流の巨匠で無かつた事を肯て直言する。何事にも率先して立派なお手本を見せて吳れた開拓者では有つたが、決して大成した作家では無かつた。

が、考證はマダ僅に足を踏掛けたばかりであつても、其の博覽癖と穿鑿癖とが他日の大成を十分約束するに足るものがあつた。『帝諡考』の如き立派な大著を貢献されたのは鷗外の偉大な業績の一つである。考證家の極めて少ない、又考證の極めて幼稚な日本の學界は鷗外の巨腕に待つものが頗る多かつた　鷗外が董督した改訂六國史の大成を見ないで逝つたのは鷗外の心

殘りでもあつたらうし、又學術上の恨事でもあつた。

鷗外が博物館總長の椅子に坐るや、世間には新館長が積弊を打破して大改革をするといふ風說があつた。丁度其頃、或る處で鷗外に會つた時、夫となく噂の眞否を尋ねると、中々ソンナわけには行かないよ、傍觀者は直ぐ何でも改革出來るやうに思ふが、責任の位置に坐つて見ると物置一つだつて歷史があるから容易に打壞す事は出來ない、改革に焦つたら一日だつて勤めてゐられるもんぢや無いと云つた。

だが、鷗外時代になつてから目に見えない改革が實現された。陳列換へは前總長時代からの豫ての計畫で、鷗外の發案では無かつたともいふし、刮目すべきほどの入換へでも無かつたが、左に右く鷗外が就任すると即時に斷行された。研究報告書は經費の都合上十分抱負が實現されなかつたが、とにかく鷗外時代となつて博物館から報告書が發行されるやうになつたのは日本の博物館の一進步である。鷗外は各國博物館の業績に深く潛思して、就任後一二回落合つた偶然の咄の序にも抱負の一端を洩らしてゐた。若し長く其椅子に坐してゐたら必ず新生面を拓く

種々の胸算があつたらうと思ふ。正倉院の門戸を解放して民間篤志家の拜觀を許されるやうになつたのも亦鷗外の盡力であつた。此の貴重な祕庫を民間奇特者に解放した一事だけでも鷗外のやうな學術的藝術的理解の深い官界の權勢者を失つたのは藝苑の恨事であつた。

鷗外は早くから筆蹟が見事だつた。晩年には益々老熟して蒼勁精嚴を極めた。夫にも拘らず容易に揮毫の求めに應じなかつた。殊に短冊へ書くのが大嫌ひで、日夕親炙したものの求めにさへ短冊の揮毫は固く拒絶した。何でも短冊は僅か五六枚ぐらゐしか書かなかつたらうといふ評判で、短冊蒐集家の中には鷗外の短册を懸賞したものもあるが獲られなかつた。

日露戰役後、度々部下の戰死者の爲め墓碑の篆額を書かせられたので篆書は堂に入つた。本人も得意であつて『篆書だけは稽古したから大分上手になつた。』と自任してゐた。私は今人の筆蹟なぞに特別の興味を持つてるのでは無いが、數年前に知人の筆蹟を集めて屛風を作らうと思立つた時、偶然或る處で鷗外に會つたので一枚書いて呉れといふと、又冷かしの種にするんだらうと笑つて應じて呉れさうも無かつた。『そんな事を云はずに墓碑の篆額を書くツモリで

書いて呉れ』と重ねて云ふと、『墓碑なら書くよ、生きてる中は險呑だから書かんが、死んだら君の墓石へ書いてやらう、』と云つた。

『調戯ぢや無い。君と僕とドッチが先きへ死ぬか、年から云つたつて解るぢやないか。』

『そりやア解つてるさ。君のやうに無暗と藥を飮むカラダぢやないからね。年なんかアテにならん。僕がアトへ殘るのは知れ切つてる。こりやあマジメだよ、君が死ねば屹と墓石へ書いてやる。森に墓銘を書かせろと遺言狀に書いて置いてもイイ、』と眞顏になつて云つた。

一度冠を曲げたら容易に直す人で無いのを知つてるから其咄は夫切り打切とした。が、萬一自分が鷗外に先んじたら此の一場の約束の實現を遺言する筈だつたが、鷗外が死んで了つたので其希望も空しくなつた。之は數年前、故和田雲邨翁が新收稀覯書の展觀を兼ねて少數知人を招宴した時の食卓での對談であつた。之が鷗外と款語した最後で、夫から後は懸違つて一度も會はなかつたから、此の一場の偶談は殊に感慨が深い。

私が鷗外と最も親しくしたのは小倉赴任前の古い時代であつた。近時は鷗外へのみならず他

の文壇の友人）とも疎縁となつて、折々の會合で同席する位に過ぎなかつたが、夫でも憶出せば限り無い追懐がある。平生往來しない仲でも、僅か二年か三年に一遍ぐらゐしか會はないでも、昔し親しくした間柄は面と對つた時に云ひ知れないなつかしさがある。滅多に會はないでも永い別れとなると淋しい感がある。

殊に鷗外の如き一人で數人前の仕事をして猶ほ餘りある精力を示した人豪は、一日でも長く生き延びさせるだけ學界の慶福であつた。六十三と云ふ條、實はマダ還暦で、永眠する數日前までも頭腦は明晳で、息の通ふ間は一行でも餘計に書殘したいといふほど元氣旺勃としてゐた精力家の易簀は希望に輝く青年の死を哀むと同樣な限りない恨事である。

（大正十一年七月十六日記、翌月「明星」掲載、大正十三年十月補筆）

最後の大杉

(一)

大杉とは親友といふ關係ぢや無い。が、最後の一と月を同じ番地で暮したのは何かの因緣であらう。大杉が初めて來たのは赤旗事件の監房生活から出獄して間もなくだつた。淀橋へ移轉してから家が近くなつたので頻繁に來た。思想上の話もしたし、社會主義の話もしたが、肝膽相照らしたといふわけでもないから多くは文壇や世間の噂ばなしだつた。

大杉は興味が可成廣くて話題にも富んでゐた。近年ファーブルのものを頻りに飜譯してゐたが、此種の文學的乃至學術的興味を早くから持つてゐて、主義者肌よりは寧ろ文人肌であつた。小說も好きなら芝居も好き、性的研究などにも興味を持つて、性的研究に率先した小倉清三郎の『相對』の會などにも每次出席して、能く『相對』の會の噂をした。

百人町を移轉してから家が遠くなつたので自然足が遠のいた。加之ならず、神近や野枝さん

との自由戀愛を大杉自身の口から早く聞かされたが、常から放縱な戀愛を彈劾する自分は大杉の可成に打明けた正直な告白に苦蟲を潰さないまでも餘り同感しなかつたのを氣拙く思つたと見えて、家が遠くなると同時に足が遠のいて了つた。日蔭の茶屋の事件があつた時、早速見舞の手紙を送ると直ぐ自筆の返事を遣したが、事件が落着しても夫ぎり會はなかつた。夫から程經つて野枝さんと二人で銀座をブラ／＼してゐる處へ偶然邂逅し、十五分ばかり立話しをした事があつたが、夫以來最近の數年間は唯新聞で噂を聞くだけであつた。

大杉が佛蘭西から追返され、神戸へ歸着して出迎への家族と一緒に一等寢臺車で東上した記事が寫眞入りで新聞を賑はしてから間もなくだつた。或る朝突然大杉さんが入らしつたと家人が取次いだ。大杉何といふ人だと訊くと、大杉榮さんで皆さん御一緒ですと云つた。近頃何年にも顏を見せた事が無い大杉が、シカモ家族を伴れて來るといふは餘り思掛けなかつたが、左も右く二階へ通せと半信半疑で云ふと、軈てトン／＼楷段を上つて來たのは白地の浴衣の紛れもない大杉であつた。數年前の大杉と少しも違はない大杉であつた。その踵から兒供を抱いて大きなお腹の野枝さんと新聞の寫眞でお馴染の魔子ちやんがついて來た。

野枝さんとは數年前に銀座で邂逅つた時に大杉が紹介して呉れた。が、十分か十五分の立話中、大杉から遠く離れてゐたから此日が初對面同様であつた。之が魔子で、之がルイゼで、此外にマダ二人、近日お腹を飛出すのもマダあると云つて笑つた。以前から見ると面差が穩かになつて、取別けて兒供に物を云ふ時は物柔しく、恁うして親子夫婦並んだ處は少しも危險人物らしくも革命家らしくも無かつた。

『イヽお父さんになつたネ、』と覺えず云ふと、野枝さんと顏を見合はしてアハヽヽと笑つた。

（二）

久し振で全家お揃ひは珍らしいといふと、昨日同番地へ移轉して來たと云つた。ツイそこの酒屋の裏だと云ふから段々訊くと、近頃まで何とかいふ女醫が住んでゐた家だ。

『あの家は本とはお醫者さんで、移轉したてに家の塀の角へ看板を出さしてくれとタウルを半ダース持つて賴みに來た、』と云ふと、『そんなら僕も看板を出さして貰はうかナ』と云つた。

『アナーキストの看板ぢやタウルの半ダースぐらゐぢや引受けられない』と云つて笑つた。

魔子は臆面の無い無邪氣な子で、來ると早々私の子と一緒に遊び出した。野枝さんの膝に抱かれたぎりのルイゼはマダあんよの出來ない可愛いゝ子で、何を云つても合點々々ばかりしてゐた。アッチもコッチもとお菓子を慾張つて喰べこぼすのを野枝さんが一々拾つて世話する處は矢張世間並のお母さんであつた。エンマ・ゴルドマンを私淑する危險な女アナーキストとは少しも見えなかつた。『日本ばかりぢや騷がし足りないと見えて、佛蘭西までも騷がして來たネ。雀百まで躍りやまずで、コンナに多勢の子持になつても矢張浮氣は止まんと見えるネ』と云ふと、『矢張時代病かも知れない』と大杉は吃りながら云つた。

『夫でも』と野枝さんは微笑みつゝ、『尾行が申しましたよ。兒供が出來てから大變温和しくなつたと。』

大杉が兒供を見る眼にイツモ柔和な微笑を帶びて、一見して誰にでも兒煩惱であるのが點頭かれた。野枝さんも兒供が產れる度に、兒供が長きくなる每に青鞜時代の鋭どい機鋒が段々と圓くされたらうと思ふ。

野枝さんは兒供を伴れて先きへ歸つたが、大杉は久し振でユックリと腰を落付けた。正午に

なつて迎へが來ても根を生やして、有合の午飯を一緒に濟まして三時ごろまでも話し込んだ。佛蘭西から歸りたてなので、巴黎で捕縛されて監獄へ投り込まれた咄をボツ／＼話した。尤も纏まつた話でなく、斷れ／＼で思想上の立入つた問題には觸れなかつた。路傍演說をして捕縛された咄はしたが、其演說の內容は訊きもしなかつたし話しもしなかつた。唯佛蘭西人は一般に案外日本人よりも無知で、何しに來たといふから社會學を勉強に來たといふと、其の社會學といふ言葉の意味の解るものが少かつたといふ事や、佛蘭西の巡査が人格も知識も日本の巡査よりも低劣で、第一言語からして野卑で、教養ある佛語が全く通じないといふ事や、佛蘭西の監獄が不整頓で不潔で、囚人の食事が粗惡で分量が少く、どの點から見ても日本の監獄以下であるといふ事や、何くれとなく佛蘭西を貶した話ばかりした。

「たゞ佛蘭西の監獄で便利なのは差入の自由です。日本同樣監獄の前に差入物屋があつて、錢さへ出せばどんなウマイものでも、酒でも煙草でも買う事が出來ます。僕は餘り酒を喫らんが、書物は格別持たず、面會に來るものは無いし、退屈で堪らんから白葡萄酒を買つてゴロゴロしながらチビ／＼飲む。三日で一本明けたが、終日陶然としてイイ心持でした。錢さへあれば佛

蘭西の監獄は左程苦しくない。當てがひの食物が足りなくても不味くて差入物屋から取りさへすれば相當な贅澤が出來ます。氣樂に讀書でもしてゐるやうてには佛蘭西の監獄は贅澤が出來て氣が散らんから持つて來いですよ。』

そんな話をして半日を何年振りで語り過ごした。

（三）

夫から四五日して錢湯で會つた。魔子を伴れて洗粉や石鹼や七ツ道具を揃へて流しを取つた此の兒煩惱のお父さんが、官憲から鬼神のやうに恐れられてる大危險人物だとは恐らく番臺の娘も流しの三助も氣が付かなかつたらう。が、表へ出て見ると湯屋の角の交番で飛白の羽織の尾行が張番をしてゐた。

ツイ眼と鼻との間にをりながら夫ぎり大杉は來もしなかつたし、私もお産があつたと聞いたが見舞にも喜びにも行かなかつた。が、大杉は始終乳母車へ兒供を乘せて近所を運動してゐたから、能く表で出會つては十分十五分の立話しをした。魔子は毎日遊びに來たから全家が馴染

になり、姿を見せない日は殆んど無かつたから、大杉や野枝とは餘り顏を合はせないでも一家の親しみは前よりは深かつた。

九月一日の地震のあと、近所隣りと一つに凝まつて門外で避難してゐると、大杉はルキゼを抱いて魔子を伴れてやつて來た。

『どうだつたい。エライ地震だネ。君の家は無事だつたかネ?』と訊くと、

『壁が少し落ちたが、大した被害は無い。だが、吃驚した。家が潰れるかと思つた。』

『下町はヒドからうナ。安政ほどぢやなからうが二十七年のよりはタシカに大きい。之で先づ當分は目茶苦茶だ。』

『だが僕は、毎日々々セツ付かれて困つてたんだから、地震のお庇で催促の手が少しは緩むだらうと地震に感謝してゐる。』と輕く笑つた。何でも大杉は改造社とアルスから近刊する著書の校正や書足しの原稿に忙殺されてゐたのださうだ。

彼是れ小一時間も自分達と一緒に避難してゐたらう。餘震の絶間なく搖る最中で、新宿から火事が出たとか、帝劇が今燃えてるとかいふ警報が頻りであつたので、近所隣りの人々がソワ

くして往つたり來たりしてゐた。

そこへ安成二郎がコダックを下げて來て、イゝ獲物もがなとソコラココラの避難の集まりを物色してゐた。

『ドウだい。』と私は安成に向つて云つた。『大杉に何處かソコラの木の下に立つて貰つてアナーキストの避難は面白からう。』

大杉は笑つてゐた。安成が此寫眞を撮つたら好い記念だつたらうに、惜しい事をした。(後に聞くと、夫から大杉の自宅へ行つて大杉夫妻を庭前で撮したのだが、名人だから光線が入つたのださうだ。)

其晩は恐怖に明けて翌る朝、近所の川本の原に大勢避難してゐると聞いて容子を見に行つた戻りに大杉の家を尋ねると、マダ寢てゐたが私の聲を聞くと起きて來た。

『能く家の中に寢たネ。』と云ふと、

『大抵大丈夫だらうと度胸をきめて家の中で寢た。尤も、』と塀の外を指して、『彼處へ避難所を拵いて置いて、率さと云へば直ぐ逃げ出す用意はしてゐた。アナーキストでも地震の威力に

は協はない。』と笑つた。

九月の上半は恐怖時代だつた。流言蜚語は間斷なく飛んで物情恟々、何をするにも落付かれないで仕事が手に付かなかつた。大杉も引籠つて落付いて仕事をしてゐられないと見えて、日に何度となく乳母車を押しては近所を運動してゐたから、表へ出るとは番毎に邂逅つた。遠州縞の湯上りの尻絡げで、プロの生活には不似合ひな金紋黑塗の乳母車を押して行く容子は抱への車夫か門番が主人の赤ちやんのお守をしてゐるとしか見えなかつた。地震の當座、私の家の裏木戸は大抵明け放しになつてゐたので、能く裏木戸からヒヨツコリ兒供を抱いてノツソリ入つて來ては緣端へ腰を掛けて話し込んだ。

日は忘れたが或る晩、夜警の提灯を持つて家の角に立つてると、買物歸りらしい野枝さんが通り掛つて聲を掛けた。左の手には大きな部厚の洋書を二冊抱へ、右には新聞と小さな風呂敷包を下げてゐた。

『報知の夕刊を御覽なすつて？』

『否ェ。』其頃はマダ新聞が配達されなかつた。

『鎌倉は大變ですワ。八幡さまが潰れて大佛さまが何寸とか前へ搖り出しましたつて。御覽なさいまし、』と手に持つ新聞を見せた。

提灯の照明ではハツキリ解らなかつたが、鳥渡覗いて直ぐ返すと、

『お宅へ持つてらしつて御覽なさいまし、』と頻りに云つたが、野枝さんも今買つて來たばかりでマダ讀まないらしいので無理に押返した。

『夜警は大變ですワネ。家から椅子を持つて參りませうか。イクラもありますから。』

『イエ、家にも持つてくれば有るんですが、面倒だもんですから。』

『然うですか。でもお草臥れでせうネ。大杉も御近所同士で家の角へ夜警に毎晩出てをりますワ。町内のお附合ひですもの、』と野枝さんは云つた。

能く大杉は夜警に出ると思つたが、實際毎晩ステツキを持つて、自宅の曲り角へ夜警に出てゐたのを見た。

（四）

鮮人襲來の流言蜚語が八方に飛ぶと共に、鮮人の背後に社會主義者があるといふ聲がイッとなく高くなつて、鮮人狩が主義者狩となり、主義者の身邊が段々危うくなつた。此騷ぎを餘所に大杉は相變らず從容として兒供の乳母車を推して運動してゐた。

『用心しなけりやイカンぜ』と或時邂逅つた時に云ふと、

『用心したつて仕方が無い。捕まる時は捕まる』と笑つてゐた。後に聞くと、大杉に注意したものは何人もあつたが、事實此頃の大杉は社會運動からは全く離れて子守ばかりしてゐたから、危險が身に迫つてるとは夢にも思つてないらしかつた。

或る夕方、夜警に出てゐると、警官が四五人足早に通り過ぎながら、今二人伴れて來るから毆つちやア不可んぞと呼ばはつた。其頃の自警團は氣が立つてゐて、警吏が檢擧して來たものにさへ暴行を加へて憚らなかつたからだ。

誰か擧げられるナ、主義者だらうと、誰云ふとなく豫覺して胸を躍らしてゐると、軈て七八人の警吏が各々弓張を照らしつゝ中脊の浴衣掛けの尻端折の男と、浴衣に引掛け帶の女の前後左右を圍んで行く跡から四五十人の自警團が各々提灯を持つてゾロ／＼從いて行つた。

提灯の薄明りで夜目にはシカと解らなかつたが、脊恰好が何となく似てゐたので、『大杉ぢや無いか知らん、』と、ハッと思つて急に不安になつたので、大杉の家へ曲る角の夜警の集まりへ行つた。そこにはいつでも警吏がゐた。

『今のは鮮人ですか？』と訊くと、『鮮人ぢやない、』と誰かゞ答へた。

『ドコで擧げられたんですか、』と重ねて訊くと、『直ぐソコの自宅で擧げられたんだ』と同じ人が答へた。

『大杉ぢや無いですか、』と思切つて明らさまに訊くと、

『イヤ、大杉ぢや無い。大杉は家にゐる、』と警察官らしいのが答へた。

夫でヤッと安心したが、マダ何となく不安で、家へ歸つて床に就いてからも警吏と自警團に護送されて行く男女の後姿が眼にチラクラした。（後に聞くと、此男女は直ぐ近所の近頃檢擧された或る社會主義者の家の留守番をしてゐる某雜誌記者で、女は偶然居合はした主義にも何にも關係の無いものださうだ。此の男は沖繩人で相貌が内地人らしくないので疾うから覘はれてゐたのださうだと、當人が後に來ての話である。）

其頃から大杉に對する界隈の物騒な噂が度々耳に入つた。大杉は外國の無政府黨から資金を持つて來て革命を起さうとしてゐるとか、大杉は毎晩子分を十五六人も集めて隱謀を密議してゐるとか、『あんな危險人物が町内にゐては安心が出來ないからヤツつけてやれ』とか、或る近所の自警團では大杉を目茶苦茶に毆つてやれといふ密々の相談があるとか、嘘か實か知らぬが然ういふ不穩の沙汰を度々耳にした。隨分相當分別のある人までが然ういふ虚聞を信じて、私と大杉とが交際あるのを知らないで、『アナタのお宅の裏には大變な危險人物がゐて、毎晩多勢集つて隱謀を企らんでるさうです。』と告げたものもあつた。同じ近所の或る口利きの男は、之も大杉と私と友人關係であるのを知らないで、『柏木には危險人物がある、大杉一味の主義者を往來へ列べて置いて、片端からピストルでストン〳〵打つたら小氣味が宜からう』とパルチザン然たる氣焔を吐いてイヽ氣持になつてるものもあつた。

恁ういふ危險な空氣が一部に釀されてるのを知つてるのか知らないのか、大杉は一向平氣で相變らず毎日乳母車を押してゐた。近所に住む大杉の或る友達が夫となく警戒したが、迫害に馴れてる大杉は平氣な顏をして笑つてゐたさうだ。唯笑つてるばかりならイヽ、が、『俺を捕まへ

やうてには一師團の兵が要る」ナド、大言してゐた。大杉には恁ういふ見供けた見得を切つて空言を吐く癖があつたので、此の見得を切るのが大杉を花やかな役者にもしたが、同時に奇禍を買う原因の一つともなつた。

（五）

九月の十六日の朝九時頃、大杉は野枝さんと二人連れで、二人とも洋裝で出掛けるのを家人は裏庭の垣根越しにチラと見た。直ぐ近くの聖書學院の西洋人だらうと思つてると、丁度遊びに來てゐた魔子も後影を見ると周章てて垣根の外へ飛び出したが、すぐ戻つて來て、『家のパパとママよ』と云つた。

其日の午後魔子は來て『パパとママは鶴見の叔父さん許へ行つたの。今夜はお泊りかも知れないのよ』と云つた。

夫ぎり大杉は姿を見せなかつた。が、自分も其頃餘り表へ出なかつたから大杉を見掛けないでも格別氣にも留めなかつた。

二三日經つと大杉が檢擧されたといふ風說が立つた。其前にも地方から來た或る男が、大杉は拘留されて留置檻へ入れられたまゝ火事で燒死んださうだネと云ふから、大杉は直ぐ此の近所にゐて、每日乳母車を押して運動してゐると云つて無根の風說を笑つた事があるので、復た例の風說かと一笑に附してゐた。

すると其の翌る晚、十一時過ぎに安成が來て、『大杉が行方不明となりました、』と痛く昂奮して、十六日鶴見へ行つたぎりで歸つて來ません。家でも心配して八方搜してゐるがサッパリ蹤跡が解りません。檢擧されたなら檢擧されたでドコかの警察にゐさうなもんですが。ドコの警察にもゐません。警察では檢擧したものを檢擧しないと祕す事は絕對に無いので、全く警察にはゐないやうです。』と滿面不安の色を湛へて昂奮して話した。

血腥い噂がそこら中に廣がつてる時である。女のやうな美術家が袋叩きにされて半死半生になつたといふ噂も聞いてゐる。溫厚玉のやうな君子が歷とした官職の肩書附きの名刺を示しても聞かれないで警察へ拘留されたといふ話も聞いてゐる。況してや大杉のやうな官憲からも睨まれ民衆の一部からも呪はれてる人間は何時どんな處で奇禍を買はないとも限らんから、行方

不明になつたと聞くと不安に堪へられなかつた。

安成は、其日恰も戒嚴軍司令官を初め二三の陸軍の重職が交迭し、一大尉一特務曹長が軍法會議に廻されたといふ明日發表される軍憲の移動を話して、恁ういふ重職の交迭は決して尋常事では無い。餘程の重大な原因が無ければならない。當局者の言明に由れば數日前に突發した事件に關聯するといふが、その突發事故といふのは何だか、マダ發表を許されないと堅く緘默してゐる。が、ウツカリ當局者が滑らした口吻に由ると不法殺人であつて、殺されたものは支那人や朝鮮人で無いのは明言するといふのだ。

『どうも夫が大杉らしいのです、』と安成は痛く昂奮してゐた。

ヨモヤとは思ふが、大杉は野枝と一緒に鶴見の弟の家から季の妹の子を伴れて、弟に送られて川崎まで歸つて來たのはタシカで、夫から先きが行方不明なのださうだ。マサカに足弱を連れて交通の不便な此際に野越え山越え行方を晦ましたとは思はれない。ドコかに拘留されてるに違ひないが、ドコの警察にもゐないとすれば陸軍より外には無い。が、陸軍では知らないといふ。が、支那人でも朝鮮人でも無いものを殺した不法殺人で戒嚴軍司令官初め二三の重職が

解職され、一二の軍憲が司法へ廻されたといふ此日の突發事件はヨモヤとは思ふがドウも大杉と關聯してゐるらしいといふのが安成の憶測であつた。

が、其の翌る日も、其の又翌る日も魔子は相變らず遊びに來た。兒供の事で周圍の不安には一向感じないらしく、毎日來ては家の兒供と一緒に歌を歌つたりダンスをしたりして無邪氣に遊んでゐた。大杉の家もヤヽ人出入が繁く取込んでるらしく想像されたが、安成も夫ぎり見えないので、不安を感じながら身邊の雜事に紛れてゐると、或時魔子がイツモの通り遊びに來てゐると家から迎へが來て歸つた。暫らくすると復た來て、新聞社の人が來て寫眞を撮つたのよと云つた。新聞社が兒供の寫眞を撮りに來たといふは尋常では無いので、恐ろしい悲痛な現實に面する時が刻々迫つて來たやうな感じがした。

其翌日である、大杉の非業の最期が公表されたのは。恐ろしい豫感が刻々迫つて來て、恁ういふ悲慘を聞く日があるのを豫期しない事は無かつたが、其日の朝刊の第一面の大活字を見た時は何とも云ひ知れない悸きが身體中を走るやうな心地がした。殊に軍憲から發表された大杉外二名の一人がマダ可憐な小兒であると思ふと、三族を誅する時代の軍記物語か小説かでなけ

れば見られない餘りの殘虐に胸が潰れた。

朝の食卓は大杉夫婦を知る家族の沈痛な沈默の中に終つた。今日も魔子は遊びに來るかも知れないが、『魔子ちやんが來ても魔子ちやんのパヽさんの噂をしてはイケナイよ、』と小さい兒供を戒めた。何にも解らない小さい兒供達も何事か恐ろしい事があつたのだといふ顏をして、默つて點頭いてゐた。

暫らくすると魔子は果して平生の通り裏口から入つて來た。家人を見ると直ぐ『パパもママも死んぢやつたの。伯父さんとお祖父さんがパヽとマヽのお迎へに行つたから今日は自動車で歸つて來るの。』と云つた。お祖父さんといふのは東京より地方へ先きに廣がつた大杉の變事を遠い鄕里の九州で聞いて倉皇上京した野枝さんの伯父さんである。

茶の間へ來て魔子は私の妻を見て復た繰返した。『伯母さん、パパもママも殺されちやつたの。今日新聞に出てゐませう。』

私は兒供達に『魔子ちやんのお父さんの噂をしてはイケナイよ、』と固く封じて不便な魔子の小さな心を少しでも傷めまいとしたが、怜悧な魔子は何も彼も承知してゐた。が、物の辨へ

も十分で無い七歳の子である。父や母の悲慘な運命を知りつゝもイツモの通り無邪氣に遊んでゐた。同い年の私の兒供は麗子を不便がつたと見えて、大切にしてゐた姉樣や千代紙を殘らず麗子に與つて了つた。

（六）

其日は大杉の遺骸が歸るといふので、留守番だけの大杉の家へ二度も三度も容子を聽きに行つた。此晩は大杉に親しいものだけが遺骸の前で通夜するといふ豫定だつたので、午後からは待受けしてポツ〳〵集まるものがあつた。自働車の音の響く度毎に耳を傾けたが、イツまで待つても歸つて來なかつた。其中に遺骸は直ちに自宅へ引取る筈だつたが、餘り腐爛してゐるので餘儀なく直ちに火葬場へ送棺したと知らせて來た。

其の夕方、遺骸を引取つて火葬場まで送つた近親同志が歸つて來た。待受けた我々は官憲の口から語られたといふ大杉の殺害された顚末や、引渡された遺骸が腐爛して臭氣が鼻を衝いて近寄る事さへ出來なかつたといふ咄を聞いた。大杉の思想の共鳴者で無くとも其の悲慘な運命

には同情せずにはゐられなかつた。

其の翌々日の朝、大杉外二名の遺骨は小さな箱へ入れられて自宅に迎へられた。大杉は無宗教であつたが、遺骨の箱の前に三人の寫眞を建て、祭壇を設けて好きな葡萄酒と果物を供へた。其晩は近親と同志とホンの少數の友人だけが祭壇の前に團居して、生前を追懷しつゝ香を手向けて形ばかりの告別式を營んだ。門前及び附近の要所々々は物々しく警官が見張つて出入するものに一々眼を光らした。折惡しく震災後の交通がマダ常態に復さないので、電車の通ずる宵の中に散會したが、罪の道伴れとなつた不運の宗一の可憐な寫眞や薄命の遺子の無邪氣に遊び戯れるのを見ては誰しも涙ぐまずにはゐられなかつた。大杉の一生を花やかにした野枝さんとの戀愛の犧牲となつた先妻の堀保子も、イヤで別れたので無い大杉に最後の訣別を告げに來て愼ましやかに控へてゐたが、戀と生活とに瘦れた姿は淋しかつた。(大杉と別れた後の堀保子は大杉は必ず再び自分の懷ろに戻つてくるものと固く確信して孤獨の清い生涯を守つてゐたが、大杉が敢果なくなつた後は其希望も絶えて、同棲時代からの宿痾が俄に重つて、去年の春終に大杉の跡を追つて易簀した。大杉の生涯は革命家の生血の滴たる戰鬪であつたが、同時に二人

の女に纏れ合ふ戀の三つ巴の一代記でもあつた。）

告別式の済んだ跡の大杉の家は淋しかつた。遺子を中心として野枝さんの伯父さん老夫妻と大杉の實弟と、大杉の異體同心たる數四の同志に守られてゐた。刑事の眼は門前に光つて看慣れぬものは一々誰何したから、誰もイ、氣持がしないで尋ねるものが餘り無かつた。愈々明日は一と先づ郷里へ引上げるといふ其前夜、長い汽車の旅の兒供の眠氣ざましにもと些かの餞けを持つて私の妻が玄關まで尋ねた時も誰何され、何の用事かと訊問された。

十月二日だつた。五人の遺子は野枝の伯父さん老夫婦に伴はれて此の恨の多い父の家を跡に郷里へと旅立つた。親しい友や同志に送られて行つたが、魔子は先きへ立つて元氣よく『さよなら、さよなら！』と云つて駈けて行つた。パパもママも煙のやうに消えて了つた悲みをも知らぬ顏の無邪氣の後ろ姿が涙ぐましかつた。

（大正十二年九月記〇大正十三年十月補筆〇改造社出版『大正大震火災誌』中所掲「甘粕對大杉事件」參照）

追記

大杉が警察のスパイであつて主義者の祕密を供給してゐたので、大杉殺害が警察と陸軍との

反目になつたといふ噂が當時或る一部に廣がつた。近頃また警視廳の特高課とスパイの關係が暴露されて問題となつたに就て、警視廳のスパイには往々意外の人があるといふ話から大杉も亦スパイであつたやうに臭はした或人の談話が某紙に載つてをる。

一體噂ぐらゐアテにならぬものは無いので、大抵な噂の出處が出鱈目である。出鱈目で無い筈の當事者や關係者の話からしてアテにならぬのが多い。大杉が果してスパイであつた乎否乎の謎は大杉自身が鍵を握つてるので、餘人の推測は餘りアテにならないが、大杉が若し果して眞にスパイであつたなら問題の何とかいふ男のやうに月給何百圓も貰つて自働車で出入しないまでも最う少し貧乏しないでも濟んだらう。貧乏してまでも同志を欺く苦肉の謀をしてお上の御用を勤めてゐたといふなら、夫こそ楠正成ほどで無くとも赤穗の義士ぐらゐに値踏み出來る國家の功勞者である。沖や横川と一緒に招魂社に祀られてもイヽわけだ。

大杉は時偶金が手に入ると無暗と自働車を飛ばしたりして不相當な贅澤をするので同志者の反感を買つた。此贅澤の資本が若しスパイの報酬として請取つた金なら公々然と同志の前で札びらを切る事は豈夫出來なかつたらう。大杉は一時は米鹽にも事缺いた苦境に苦んでゐた事も

あつたが、最後の柏木に落付いた時は八十圓の家賃を拂ひ、奉公人も置き、夫婦から兒供までが洋裝で可成贅澤な生活をしてゐた。が、之が若しスパイの餘得であつたなら同志を欺く爲めにも恁ういふ不當所得の看え透かされるやうな眞似は決して做なかつたらう。

大杉が誰の口入であつたか又恁ういふ名目であつたか知らぬが後藤子爵から若干金（タシカ三百圓だと思つた）を貰つたのは大杉自身から聞いてゐる。私に話したくらゐだから公々然と誰に話しても差支ない金であつたのだらう。又大杉が警視廳に頼まれて佛譯の法華經の賃譯をした咄も矢張大杉から聞いた。一體佛典を歐洲語から邦譯するといふも逆な話であるし、第一警視廳が何の必要があつて法華經を譯させたのか、頗る變挺な話であるが、之は大杉を窮地に陥れて自暴自棄させない爲めの生活の便宜を與へる高等政策であつたらう。後藤子爵が何等かの名目で金を與へたのも矢張同じ意味で、大杉を手馴づけて犬とするツモリでもなかつたらうし、又高が三百圓かそこらの僅かばかりの目腐れ金に尻尾を振る大杉でも無かつた。（危險人物の激發を緩和する手段としての此種の高等政策は一向珍らしくないので、幸德秋水も長い肺患の療養費を或る筋から給せられてゐた筈である。）

大杉の巴黎へ行つた洋行費が問題となつた。後藤子爵から或る中間者を通じて與へられたといふ説があるが、大杉が子爵から何百圓かを貰つたのはモウ十四五年も前で、二者の關係が今まで長く繼續してゐた乎否乎は疑問である。大杉が柏木へ移轉して來て久し振で會つた時、私が第一に訊いたのは亦此の洋行費の出處であつた。『本屋へ出鱈目のウソをついて七處借をしたのサ、』と大杉は云つた。大杉の本が賣れるにした處で二軒や三軒の本屋で歐羅巴へ出掛ける旅費が調達出來るかと其時は疑つたが、死後に大杉が本屋に殘した負債が一萬圓以上ある事を聞いて打明け咄の丸きりウソで無かつた事が解つた。大杉が愈々歸朝するからと送金を打電した時に野枝が調達に奔走して七處借をして漸とこさと工面したといふ咄は大杉の歸朝前に聞いてゐる。其以外に領事館からも汽船賃其他を立換えて貰つたさうだ。神戸へ歸着してから出迎への野枝や兒供と共に一等寢臺車で東京へ歸つた汽車賃は大杉の自由行動を防止して同志から遮斷する必要上官憲が支辨したのである。前後の事情から考へて見ても此の疑問の渡歐費は全部が本屋から調達したので無くとも、後暗い金の出場が別に有つたとは思はれない。

歴史上の事實には、今だに眞相が解らなくて黑白のハツキリしない人物が少くない。大杉が

果してスパイであつた乎否乎はマダ謎であるが、大杉の人物性行や日常生活から推してスパイであつたとはドウしても考へられない。大杉は直情徑行でスパイの勤まる柄では無い。若し其の一本氣な肝癪や傍若無人な傲岸が世間や同志を欺くの假面であるなら、夫は芝居が餘り巧み過ぎる。ワザ〳〵旅費を遣つて佛蘭西まで行つて、佛蘭西の監獄に入れられて佛蘭西人までを欺く必要も無かつたらう。

芝居乎何乎は知らぬ大杉はがアナーキストとして死んだ。百年稀に見る自然の大破壞を背景として大陸軍を背後に控へる一軍憲の手でアナーキストに相應しい最後の幕を閉ぢた。歐洲戰の開幕の血祭となつたジョーレスの運命は恰も之に等しいもので、殺害當時大杉は屢々ジョーレスと比較されたが、ジョーレスの遺骸は今やパンテオンに祀られやうと騒がれてるをさうだ。骨となつてまでも宙宇にさまよつた大杉は永久に浮ぶ瀨はあるまいが、鼠色でも鳶色でも歷史上の大立物となつたのは切めてもの滿足であらう。

（大正十三年十月追記）

三十年前の島田沼南

一

島田沼南は大政治家として葬られた。清廉潔白百年稀に見る君子人として世を擧げて哀悼された。棺を蓋うて定まる批評は燦爛たる勳章よりもヨリ以上に沼南の一生の政治的功績を顯揚するに足るものがあつた。

沼南には最近十四五年間會つた事が無い。其以前とて會へば寒暄を叙する位の面識で、私邸を訪問したのも二三度しか無かつた。シカモ其の二三度も、待たされるのがイツモ三十分以上で、漸く對座して十分かソコラで用談を濟ますと直ぐ定つて『ドウゾ復たお閑の時御ユックリとお遊びに入らしつて下さい』と後日の再訪を求めて打切られるから、勢ひ即時に暇乞ひせざるを得なくなつた。隨つて會へば萬更路人のやうに扱はれもしなかつたが、親しく口を利いた正味の時間は前後合して二三十分ぐらゐなもんだつたらう。

が、沼南の『復たドウゾ御ユックリ』で巧みに撃退されたのは我々通り一遍の面識者ばかりぢや無かつた。沼南と仕事を侶にした提携者や門下生的關係ある昵近者さへが『復たユックリ來給へ』で碌々用談も濟まない中に撃退されてブックサ云ふのは珍らしくなかつた。

尤も沼南は極めて多忙で、地方の有志者などが頻繁に出入してゐたから、我々閑人にユックリ坐り込まれるのは迷惑だつたに違ひない。且天下國家の大問題で充滿する頭の中には我々閑人のノンキな空談を容れる餘地は無かつたらうが、應酬に巧みな政客の常で誰にでも共鳴するかのやうに調子を合はせるから、イイ氣になつて知己を得たツモリで愚談を聽いて貰はうとすると、忽ち巧みに受流されて『復たおヒマの時に御ユックリ』で撃退されて了う。

由來我々筆舌の徒ほど始末の惡いものは無い。談ずる處は多くは實務に緣の遠い無用の空想であつて、シカモ發言したら娓々として盡きないから對手になつてゐたら際限が無い。沼南のやうな多忙な政治家が日に接踵する地方の有志家を撃退すると同じコツで我々閑人を過するは決して無理は無い。ブックサ云ふものが誤つてをる。

が、沼南の應對は普通の社交家の上ツ滑りのした如才無さと違つて如何にも眞率に打解けて

對手を首服さした。いつもニコ〳〵笑顔を作つて僅か二三回の面識者をさへ百年の友であるかのやうに遇するから大抵なものはコロリと參つて知遇を得たかのやうに感激する。政治家や實業家には得て恁ういふ人を外らさない共通の如才無さがあるものだが、世事に馴れない青年や先輩の恩顧に渇する不遇者は感激して忽ち腹心の門下や昵近の知友となつたツモリに獨りで定めて了つて同情や好意や推輓や斡旋を求めに行くと案外素氣なく待遇はれ、合力無心を乞ふ苦學生の如くに擊退されるので、昨の感激が消滅して幻滅を感じ、敵意を持たないまでも不滿を抱き反感を持つやうになる。沼南ばかりぢや無い。

二

沼南は終始一貫清廉を立通した。少くも利權割取を政治家の餘得として一進一退を總て金に換へて怪まない今の政界にあつては沼南は實に鷄群の一鶴であつた。

が、清廉を看板にし賣物にする結果が貧乏をミエにする奇妙な虛飾があつた。無論、沼南は金持では無かつた。が、其の社會的位置に相應する堂々たる生活をしてゐたので、濁富で無い

までも清貧を任ずるには餘りブールジョア過ぎてゐた。夫にも拘らず、何かといふと必要も無いのに貧乏を揮廻してゐた。

沼南が今の邸宅を新築した頃、偶然訪問して『大層立派な御普請が出來ました、』と挨拶すると、沼南は苦笑ひして、『此家も建築中から抵當に入つてるんです』と云つた。何の必要も無いのに然ういふ世帶の繰廻しを誰にでも吹聽するのが沼南の一癖であつた。其後沼南昵近のものに訊くと、成程、抵當に入つてるのはホントウだが、之を抵當に取つた債權者といふは岳父であつたさうだ。

之も或る時、ドウいふ咄の連續であつたか忘れたが、例の通り淸貧咄をして『黑くとも米の飯を食し、綿布でも綿の入つた着物を着てゐれば僕は夫で滿足してゐる』と得々として云つた。沼南が平生綿服を着てゐるかドウかは知らぬが、其時の沼南はリウとしたお召か何かでゾロッとしてゐたのだから挨拶に窮した。

其後、沼南昵近の或る男に會つた時、其話をして、『何だつてアンナに貧乏振るんだらう、』と云ふと、

『アレは沼南の癖だよ。』と云つた。『ツイ此頃も社（毎日新聞社）で沼南が、何かの話の序に僕はマダ抱へ俥を置いた事が無い、イツデモ辻俥で用を足すと云ふンのだ。沼南の金紋護謨輪の抱へ俥が社の前にチャンと待つてるんだからイ、ぢやないか。社の者が沼南の俥を知らないとはマサカに思つてもゐまいが、他の者が貧乏咄をすると自分も釣られて負けない氣になつてウツカリ云つて了うんだネ。お目出度い咄サ。こんな處はマア低能だネ。』

沼南の清貧咄は強ち貧乏を衒う爲めでも又借金を申込まれる防禦線を張る爲めでも無かつたが、場合に由ると聽者に悪感を抱かせた。其頃毎日新聞社に籍を置いたG・Yといふ男が或る時、來て話した。『僕は社の會計から煙草錢ぐらゐ融通する事はあるが、個人としての沼南には一錢だつて借りた覺えが無い。處が此頃退引ならない事情があつて沼南に相談すると、君の事情には同情するが金があればいゝがネ、と袂から蟇口を出して逆さに振つて見せて、「無い、同情するには同情するが生憎僕にも金が無い」といふ、恁ういふ挨拶だ。貸す氣が無いなら貸さんでもいゝ、無理に借りやうとは云はない。何も同情呼ばゝりして逆さに蟇口を振つて見せなくても宜からう。』と、プン／＼怒つて沼南を罵倒した事があつた。

其頃の新聞社はドコも貧乏してゐた。取別け毎日新聞社は最も逼迫して社員の給料が極めて少かつた。妻子を抱へてゐるものは勿論だが、獨身者すらも糊口がし兼ねて社長の沼南に増給を哀願すると、『僕だつて社からは十五圓しか貰はないよ』といふのが定つた挨拶であつた。増給は魯か、ドンナ苦しい事情を打明けられても逆さに蟇口を振つて見せるだけだ。『十五圓であの生活が出來るかい。十五圓はウソぢやアあるまいが、沼南の收入は社の月給ばかりぢや無からう。コッチは社から貰ふ外にドコからも金の入る道は無いンだぜ、』と、沼南に逆さに蟇口を振つて見せられた連中は沼南の口先きだけの同情をブックサ云つてゐた。

三

夫でも當時の毎日新聞社にはマダ嚶鳴社以來の沼間の氣風が殘つてゐたから、當時の國士的記者氣質から月給なぞは問題としないで天下の木鐸の天職を樂んでゐた。が、新たに入社するものは此の傳統の社風に同感するものでも、又必ずしも沼南の人物に推服するものばかりでも無かつたから、暫らくすると沼南の節度に慊らないで社員は絶えず代謝して、解體前の數年間

はシツキリなしにガタビシしてゐた。

就中、社員が度々不平を鳴らし、且實際に困らせられたのは沼南の編輯方針が常にグラ〳〵して朝令暮改少しも一定しない事だつた。例へば甲の社員の提言を容れて直ぐ實行してくれと命じたものを乙の社員の意見でクルリと飜へして肝腎の提言者に通告もしないで止めて了う。そんな事とは知らないから前に命ぜられた社員は着々進行して率ざ實現しやうとなると、『アレは止めにした。』とケロリと冷ました顔をしてゐる。自分ばかりが呆氣に取られるだけなら我慢もなるが、社外の人に手數を掛けたり多少の骨折をさせたりした事をお關ひなしに破毀されて了つては、中間に立つ社員は板挾みになつて窮して了う。或は又、同じ仕事を甲にも乙にも丙にも一人々々に『君が適任だから骨を折つてくれ』と命ずる。自分だけが命ぜられたツモリで各々一生懸命になつて骨を折つてると、イツカ互に同士討してゐる事が解るから誰も皆厭氣がさして手を引いて了う。手を引くばかりでなく反感を持つやうになる。沼南統率下の毎日新聞社の末期が惰氣滿々として一人も本氣に働くものが無かつたのは之が爲めであつた。

松隈内閣だか隈板内閣だかの組閣に方つて沼南が入閣するといふ風說が立つた時、毎日新聞

社に會て在籍して猶の目のやうにクル／＼變る沼南の朝令暮改に散三ッ原苦しまされた或る男は曰く、『沼南の大臣になるなら俺が第一番に反對運動する、國家の政治が沼南のお天氣模様で毎日グラ／＼變られて堪るもんか、』と。

每日新聞社が他へ讓り渡された時、世間では十日も前から噂があつたが、社員は燈臺下暗しで、沼南の腹心は或は知つてゐたかも知らぬが、平の社員は受渡しの濟んだ當日になつても知らなかつた。中には薄々感づいて沼南の口占を引いて見たものもあつたが、其日になつても何とも沙汰が無いので、一日社務に服して家へ歸ると、留守宅に社は解散したから明日から出社に及ばないといふ葉書が屆いてゐるんだから呆氣に取られて了つた。

荀くも沼南は信誼を重んずる天下の士である。每日新聞社は南風競はずして城を明渡さなくてはならなくなつても安い月給を甘んじて惡錢苦鬪を續けて來た社員に一言の挨拶もなく解散するといふは嚶鳴社以來の傳統の遺風から云つても許し難い事だし、自分の物だからと云つて多年辛苦を侶にした社員をスッポかして、タヾの奉公人でも追出すやうな了簡で葉書一枚で解職を通知したぎりで冷ましてゐるといふは天下の國士を任ずる沼南に有るまじき不信であると

いふので、葉書一枚で馘首された社員は皆カン〳〵になつて結束して沼南に迫つた。其結果が沼南のイツモ逆さに振つて見せる蟇口から社を賣つた身代金の幾分を吐出して目出度く無事に落着したさうだ。然うかと思ふと一方には、代がはりした毎日新聞の翌々日に載る沼南署名の訣別の辭のゲラ刷を封入した自筆の手紙を友人に配つてゐる。何人に配つたか知らぬが、僅に數回の面識しか無い淺い交際の私の許へまで遣したのを見ると可成多數の知人に配つたらしいが、新聞社を他へ讓渡すの止むを得ない事情を縷々と訴へた可成長い手紙を印刷もせず代筆でも無く一々自筆で認めて何十通(或は夫以上)も配つたのは大抵ぢや無かつたらう。平生の知己に對して進退行藏を公明にする態度は間然する處無く、我々後進は餘り鄭重過ぎる通告に痛み入つたが、近い社員の解職は一片の葉書の通告で濟まし、遠いタヾの知人には頗る慇懃な自筆の長手紙を配るといふ處に沼南の政治家的面目が仄見える心地がする。

沼南の五十年の政治家生活が終に臺閣の椅子を酬ひられなかつたのは沼南の志が世俗の權勢で無かつたからばかりでは無い。アレだけの長い閱歷と、相當の識見を擁しながら次第に政友と離れて孤立し、賴みになる腹心も門下生も無く、末路寂寞として僅に廓淸會長として最後の

幕を閉ぢたのは啻に清廉な狷介が累ひしたばかりでも無かつたらう。

四

沼南は廢娼を最後の使命として鬪つた。が、若い時には相應に折花攀柳の風流に遊んだものだ。其時代の沼南の消息は易簀當時多くの新聞に傳へられた。十年前だつた、塚原靖島田三郎合譯と署した代數學だか幾何學だかを偶然或る古本屋で見附けた。餘り畑違ひの著述であるのを不思議に思つて、夫から間もなく塚原老人に會つた時に訊くと、『大變なものを見附けられた。アレはネ……』と澁柿園老人は例の磊落な調子で、『島田の奴が馬を引張つて來たので、仕方が無いから有合ひのものを典じて始末をつけたが、其の穴埋をしなけりやならん。そこで島田が或る本屋を口說いた處が、數學の本を書いて呉れるなら金を出さうといふので、夫から島田がドコからか原書を借出して來て、二人して一週間ばかりで書上げたのがアノ本サ。早速金に換へて懷ろが溫まつたので、サア繰出せと二人して大豪遊を極めた處が、島田の奴はイツマデもブン流して歸らうと云はんもんだから、到頭遣ひ果して復た馬を伴れて戻るといふわけサ。其

時分の島田はソリヤアでれ〱して尻が腐つて了うンだからカラ始末に行かなかつた」と昔を憶出して塚原老人はカラ〱と笑つた。此頃の或る新聞に、沼南が流連して馴染の女が病氣で臥てゐる枕頭にイツマデも附添つて手厚く看護したといふ逸事か載つてゐるが、沼南は心中の仕損ひまでした遊蕩兒であつた。が、夫程情が濃やかだつたので、同じ遊蕩兒でも東家西家と花を摘んで轉々する浮薄漢では無かつたやうだ。

沼南は本姓鈴木で、島田家の養子であつた。先夫人は養家の家附娘だともいふし養女だともいふが、ドチラにしても若い沼南が島田家に寄食してゐた時、懷はれて緣組した戀婿であつたさうだ。沼南が大隈參議と進退を倡にし、今の次官よりも重く見られた文部權大書記官の榮位を弊履の如く一蹴して野に下り、矢野文雄や小野梓と並んで改進黨の三領袖として聲望隆々とした頃の先夫人は才貌双絕の艷名を鳴らしたもんだつた。

其頃私は番町の島田邸近く住つてゐたので、度々島田夫人と途中で行逢つた。今なら女優といふやうな眩しい粉黛を凝らした島田夫人の美裝は行人の眼を集中し、番町女王としての艷名は隱れなかつた。良人沼南と同伴で無い時はイツデモ小間使をお伴につれてゐたが、其頃流行

した前髪を切つて前額に垂らした束髪で、嬌態を作つて桃色の小さいハンケチを揮り〳〵香水の香ひを四邊に薫じてゐた。知らないものは藝者でも無し、娘さんでも無し、官員さんの奥樣らしくも無しと眼を睜つて美貌と美裝に看惚れたもんだ。其時分はマダ今ほど夫婦連れ立つて歩く習慣が流行らなかつたが、沼南は此の艶色滴たる夫人を出來るだけ極彩色させて、近所の寄席へ連れてつたり緣日を冷かしたりした。孔雀のやうな夫人の此の盛粧はドコへ行つても目に着くので沼南の顔も自然に知られ、沼南夫人と解つて益々夫人の艶名が騷がれた。

九段の坂下の近角常觀の說敎所は本とは藤本といふ此邊での落語席であつた。或る晩、誰だかの落語を聽きに行くと、背後で割れるやうな笑ひ聲がした。ドコの百姓が下らぬ低級の落語に見つともない大聲を出して笑うのかと、顧盻つて見ると諸方の演說會で見覺えの島田沼南であつた。例の通りに白壁のやうに塗り立てた夫人とクッつき合つて、傍若無人に大きな口を開いてノベツに笑つてゐたが、其間夫人は沼南の肩を叩いたり膝を搖つたりして不行儀を極めてゐるので、衆人の視線は自然と沼南夫妻に集中して高座よりは沼南夫妻のイチャツキの方に氣を取られた。沼南の傍若無人の高笑ひや夫人のヒッ〳〵と擽ぐられるやうな笑ひが餘り耳觸り

になるので、「百姓、靜かにしろ」と罵聲を浴びせ掛けられた。

數年前物故した細川風谷の親父の統計院幹事の細川廣世が死んだ時、九段の坂上で偶然其の葬列に邂逅はした。其頃はマダ合乘俥といふものがあつたが、沼南は夫人と共に一つ俥に同乘して葬列に加はつてゐた。一體合乘俥といふは其頃の川柳や都々逸の無二の材料となつたもので、狹い俥に兩性がピツタリ粘着き合つて一つ膝掛に纏まつた容子は餘り見つともイヽものではなかつた。搗てゝ加へて沼南夫人の極彩色にお化粧した顏はお葬ひ向きでなかつた。其上に間斷なくニタ／\笑ひながら沼南と喃々私語して行く體たらくは柩を見送るものを顰蹙せしめずには措かなかつた。政界の名士沼南とも知らない行人の中には目に餘つて、或は岡焼半分に無禮な罵聲を浴びせ掛けるものもあつた。

其頃は既に鹿鳴館の歐化時代を過ぎてゐたが、歐化の餘波は當時の新らしい女の運動を惹起した。沼南は當時の政界の新人の領袖として名聲藉甚し、キリスト教界の名士としても亦儕輩に推されてゐたゆゑ、主としてキリスト教側から起された目覺めた女の運動には沼南夫人も加はつて、夫君を背景としての勢力はオサ／\婦人界を壓してゐた。

丁度巖本善治の明治女學校が創立された時代で、教會の奥に隱れたキリスト教婦人が街頭に出でゝ活動し初めた。九十の老齢で今猶ほ病を養ひつゝ女の頭領として仰がれる矢島揖子刀自を初め今は疾くに鬼籍に入つた木村鐙子夫人や中島湘煙夫人は皆當時に崛起した。國木田獨歩を戀に泣かせ、有島武郎の小說に描かれた佐々木のぶ子の母の豐壽夫人は其頃のチャキ〳〵であつた。沼南夫人は亦實に其頃の若い新らしい側を代表する花形であつた。

今日の女の運動は社交の一つであつて、貴婦人階級は勿論だが、中產以下、プロ階級の女の集まりでも兎角に着物やおつくりの競爭場になり勝ちであるが、其頃のキリスト教婦人は今の普通の婦人は勿論、教會婦人と比べても數段ピューリタニツクであつて、若い婦人の集りでも喪に包まれたやうで色彩に乏しかつた。其中で沼南夫人は百舌や鴉の中のインコのやうに美しく飾り立てゝ脂粉と色彩の空氣を漂はしてゐた。

此の五色で滿身を飾り立つたインコ夫人が後に沼南の外遊不在中、沼南の名譽に泥を塗つたのは當時の新聞の三面種ともなつたので誰も知つてる。今日之を繰返しても決して沼南の德を累する事はあるまい。德を累する處か、此の家庭の破碇を處理した沼南の善後策は恐らく沼南

の一生を通ずる美徳の最高發現であつたらう。

五

沼南のインコ夫人の極彩色は番町界隈や基督教界で誰知らぬものは無かつた。羽子板の押繪が抜け出したやうで餘り目に立ち過ぎたので、鈍色（にびいろ）を女徳の看板とする教徒の間には顰蹙するものもあつた。歐化氣分がマダ殘つてゐたとは云へ、沼南が此の極彩色の夫人と衆人環視の中でさへも綢繆纏綿するのを苦笑して竊かに沼南の名譽の爲め危むものもあつた。果然、沼南が外遊の途に上つてマダ半年と經たない中に餘り面白くない噂がボツ〱聞えて來た。アヽいふ人目（ひとめ）に着く粧ひの婦人に對しては兎角に有らぬ評判をしたがるもんだから、我々は沼南夫人に顰蹙しながらも餘りに耳を傾けなかつた。が、沼南の歸朝が近くなるに從つて次第に風評が露骨になつて、二三の新聞の三面に臭はされるやうになつた。

其頃沼南の玄關にYといふ書生がゐた。文學志望で夙くから私の家に出入してゐた。沼南が外遊してからは書生の雜用が閑（ひま）になつたからと云つて、殊にシゲ〱と遊びに來た。寫字をし

たり口授を筆記したりして私の仕事の手傳ひをしてゐた。面胞だらけの小汚ない醜男で、口は重く氣は利かず、文學志望だけに能書といふほどでは無いが筆札だけは上手であつたが、其外には才も働きも無い朴念人であつた。

沼南が歸朝してから間もなくだつた。Yは私の仕事の手傳ひをしに大抵毎日、朝から來ては晩まで殆んど一日を私の家で過ごしたが、或る時、『鳥渡故鄕へ歸りますから今日ぎり暫らくお暇を戴きたい』と云つた。

餘り突然だつたので、故鄕に急な用事でも出來たかと訊くと、脚氣だと云つた。ソンナ氣振は夫まで無かつたのだから嘘とは思つたが、其日ぎりで來なくなつて了つた。

それから二三日過ぎて、偶然沼南夫妻の在籍する教會の牧師のU氏を尋ねると、U氏は鳥渡した咄の途切れに、『Yは此頃君のとこへ行くかい？』と云つた。

『二三日前に來て近々故鄕へ歸ると云つてました。』

『其他に一身上の咄は何もしなかつたかい？』

『イイヤ、何にも。』

『困つたよ、』U氏は首を掉つて一と言云つたぎり顔を顰めて固く唇を結んで了つた。

『Yがドウかしましたか?』

『困つたよ、』と、U氏は兩手で頭を抱へて首を掉り／＼苦しさうに髮の毛を搔き挘つた。『君はYから何も聞かなかつたかい?』

『何にも聞きません。』

『こんな弱つた事は無い、』と、U氏は復た暫らく默して了つた。軈て、『君は島田のワイフの噂を何處かで聞いたらう?』

『どんな話をです?』と、氏の問が能く呑込めないので訊き返したが、其時偶つと胸に浮んだのは沼南外遊中からの夫人の芳ばしからぬ噂であつた。ツイ其の數日前の或る新聞にも、『開國始末』で寃を雪がれた井伊直弼の亡靈がお禮心に沼南夫人の孤閨の無聊を慰めに夜な／＼通ふといふやうな探ぐつたい記事が載つてゐた。今なら女優を想はしめるジヤラクラした沼南夫人が長い留守中の孤獨に堪へられなかつたといふは、左も有りさうな氣もするが、マサカに世間で評判するやうなソンナ不品行もあるまいと、U氏の島田のワイフの噂といふのが何とも計り

かねてU氏の口の開くのを待つてると、

『君も薄々知つてるだらうが、島田のワイフが飛んでもない不品行をやつてネ……』

私はハツとした。豫期した事が實現されたやうでもあるし、自分の疑心で迎へてU氏の言葉を聞違へたやうにも思つて、『ホントウですか、』と反問すると、

『ホントウとも、ホントウとも、』とU氏は早口に點頭いて、『ホントウだから困つて了つた。』

U氏が最初からの口吻ではYが此事件に關係があるらしいので、Yが夫人の道に外れた戀の取持ちでもした乎、或は逢曳の使ひか手紙の取次でもしたかと早合點して、

『夫ぢやアYが夫人の逢曳のお使ひでもしたんですか？』と云ふと、

『そんな幇助罪ならマダ輕いが、不品行の對手の本人なんだ。』

『えツ？』と私は丸で狐に魅まれたやうな氣がした。

沼南夫人のジヤラクラした姿態や極彩色の化粧を一度でも見た人は貞操が足駄を穿いて玉乘をするよりも危なツかしいのを誰でも感ずるだらう。が、世界の美人を一人で脊負つて立つたツモリの美貌自慢の夫人が擇りに擇つて面胞だらけの不男のYを對手に戀の綱渡りをしやうと

は誰が想像しやう。孔雀が豚を道連れにするエソツプにでもありさうな圖が憶出された。

『あの奥さんがYと？』と私は何度も何度も一つ事を繰返して『然うだよ、ホントウだよ』とU氏に何度も云はれても自分の耳を疑はずにはゐられなかつた。

六

駿馬痴漢を乘せて走るといふが、夫にしてもアノ美貌を誇る孔雀夫人が擇りに擇つて面胞面の不男を對手にするとは餘り物好き過ぎる。尤も一と頃倫敦の社交夫人間にカメレオンを鍾愛する流行があつたといふが、カメレオンの名代ならYにも勤まる。

然う云へばYの衣服が近來著るしく贅澤になつて來た。新裁下しのセルの單衣に大巾縮緬の兵兒帶をグル／＼巻きつけた此頃のYの服裝は玄關番の書生としては分に過ぎてゐた。奥さんから貰つたと自慢さうに見せた繻ひつぶしの紙入も書生に呉れる品ぢや無い。疑へば疑はれる事も丸きり無いぢや無かつたが、あのモヅ／＼した無愛想な男、シカモ女に緣の無さゝうな薄汚ない面をした男が沼南夫人の若い燕にならうとは夢にも思はなかつたから、夫人の芳ばし

くない噂を薄々小耳に入れてもYなぞはテンから問題としなかつた。

『女が惡いんだ。女の方から持掛けたんだ、』とU氏は澁面を作つて苦々しい微笑を唇邊に寄せつゝ、『あの女は先天的に墮落の要素を持つてる。僕は裁判をして此方が羞恥を感じて赤面したが、女はシヤア〳〵したもんで、平氣でベラ〳〵白狀した。職業的墮落婦人よりは一層厚顏だ。口の先では濟まない事をした、申譯がありませんと云つたが、腹の底では何を思つてるか知れたもんぢや無い。良心が丸で曇つてる。』

『Yも平氣でしたか？』

『イヤ、Yは小さくなつて悄れ返つてゐた。アレは誘惑されたんだ、オモチヤにされたんだ。』

と、U氏はYの悔悛に多少の同情を寄せてゐたが、夫には違ひなくても主人なり恩師なりの眼を掠めて其の最愛の夫人の道ならぬ遊戲のオモチヤになつたYの破廉恥を私は憤らずにはゐられなかつた。Yは私の門生でも何でも無かつた。が、日夕親しく出入してゐただけに私までが馬鹿にされたやうな不快を感じた。

『Yはマダ人間が出來てをらんから直ぐ誘惑される。チンコロのやうにオモチヤにされたんで

罪を犯す了簡があつたんぢや無い。島田の許へ連れてつて詫まらせたが、オイ〳〵聲を揚げて泣き出した。』

U氏がコンナ事でYを免すやうな口吻があるのが私には齒痒かつた。Yは果してU氏の思ふやうに腹の底から悔悛めたであらう乎。此騷ぎが持上つてる最中でもYは平氣な顏をして私の家へ來て仕事の手傳ひをしてゐた。沼南と私とは親しい知り合ひで無かつたにしろ、沼南夫妻の屬するU氏の教會と私とは何の交渉が無かつたにしろ、良心が働いたなら神の名を以てする罪の裁きを受ける日にノメ〳〵恥を包んで私の前へは出て來られない筈であるのを、サモ天地に恥ぢない公明正大の人であるかのやうな平氣な顏をして私の前に現れた。之が神を畏れ罪を恥ぢて悔悛めた人であらう乎。

U氏YもＹの罪を免しつゝも其態度にはマダ慊らないものがあつたのであらう。『君には何にも話さなかつたかい？　變つた素振は見えなかつたかい？』と云つた。

『そんな不名譽な話は無論する氣遣ひはありませんが、シカシ妙だと思ひましたよ、二三日前に來た時急に國へ歸るつてましたから。』

『夫は君、島田が歸らせるんだよ。島田には實に感服したよ。Yがオイ〳〵聲を出して泣いて詫まつた時にダネ。人間てものは誰でも誤つて邪路に踏迷ふ事があるが、心から悔悛めれば罪は奇麗に拭ひ去られると懇々說諭して、俺はお前に顏へ泥を塗られたからつて一端の過失の爲めに前途にドンナ光明が待つてるかも解らないお前の一生を葬つて了ひたく無い。猶更之から先きも手許に置いて面倒を見てやりたいが、夫では世間が承知しない。俺は決してお前を惜むのでは無いが暫らく餘焰の冷めるまで故鄕へ歸つて謹愼してゐて貰ひたいと云つて、旅費其他の纏まつた手當を呉れた。其外に、修養の爲めの書籍を二三十冊わざ〳〵自分で買つて來てYの退先きへ屆けて呉れたさうだ。普通の常識では豪いか馬鹿か烏渡判斷が出來ないが、左に右く島田は普通の人間の出來ない事をするよ――』

『夫にはYも心から感謝して、其話を僕にした時ボロ〳〵淚を滯して島田の恩を一生忘れないと泣いてゐた。』とU氏は暫らくしてから再び言葉を續け、『が、Yはマダ人間が出來てをらんから、恩に感ずる事も早いが恩を忘れる事も早い。君も若しYに會つたら能く訓誡してやつて呉れ給へ。二度と再び島田に裏切るやうな不品行をしたなら、最う世の中へ出て來られない。

一生の廢れ者になつて了う。」

七

其頃私はマダ沼南と交際が無かつた。沼南の味も率氣も無い實無し汁のやうな政治論には餘り感服しなかつた上に、其處此處で見掛けた夫人の響感すべき娼婦的媚態が妨げをして、沼南に對しても亦餘りイイ感じを持たないで、敬意を拂ふ氣になれなかつた。

が、此の不しだらな夫人の爲めに泥を塗られても少しも平時の沈着を喪はないで穩便に濟まし、恩を仇で報ゆるに等しいYの不埒をさへも寛容して、諄々と訓誡した上に歸國の旅費まで惠み、剩つさへ自分に罪を犯した不義者を心から悔悛めさせる爲めの修養書を買つて與へたといふ沼南の大雅量は普通人には眞似ても出來ない襟度だと心から嘆服した。

『全く君子だ。古聖賢に恥ぢない德人だ。』と夫まで沼南に對して抱いた誤解を一掃して、世間尋常政治家には容易に匹を求め難い沼南の人格を深く感嘆した。

夫にしてもYを心から悔竣めさせて、切めては世間並の眞人間にしなければ沼南の高誼に對

して濟まぬから、年長者の義務としても門生でも何でも無くても日頃親しく出入する由緣から十分訓誡して目を覺ましてやらうと思ひ、一つはYを四角四面の謹嚴一方の青年と信じ切らないまでも恩人の顏に泥を塗る不義な人間とも思はなかつたのが裏切られたイマ〳〵しさから思ふさま油を搾つてやらうとYの來るのを待構へてゐた。が、二三日經つても何の沙汰も無いので、葉書を出して呼寄せたが、返事も來なければ終に顏も見せなかつた。

二ケ月ほどして國元から手紙を遣したが、紋切形の無沙汰見舞であつた。半歲ほどして上京したが、其時も何れ參上するといふ手紙を遣したゞけで矢張顏を見せなかつた。U氏から後に聞くと、U氏が私にYの話をした翌る日に、歸國の前にモ一度私の許へ行けと云つたさうで、YはU氏が私に祕密を話したのを悟つて、キマリが惡くて來られなかつたらしい。

Yは其後も度々故鄕へ行つたり上京したりしたが、傷持つ足の自づと閾が高くなつて、いつも手紙をよこすだけで夫ぎり私の家へは寄り附かなくなつた。が、手紙で知らして來た容子に由ると、其後も續いて沼南の世話になつてゐたらしく、中國邊の新聞記者となつたのも沼南の口入なら、最後に脚氣か何かの病氣でドコかの病院に入院して終に死んで了つた病院費用から

死後の始末まで萬端皆沼南が世話をしてやつたのださうだ。

私が沼南と心易くなつたは其後であつた。Ｙが私の家へ出入してゐたのを沼南は能く知つてゐたが、私も沼南もＹの名は一度でも噯にも出さなかつた。

沼南の先夫人の不しだらは當時二三の新聞の三面を賑はしたから誰も知つてゐる。が、不義の對手の忘恩者を赦した沼南の大雅量は直接事件に交渉したもの丶外は餘り知らない。使用人同様の玄關番の書生の身分で主人なり恩師なりの眼を竊んで其名譽に泥を塗る云はうやう無い忘恩の非行者を當の被害者として啻に寛容するばかりでなく、若氣の一端の過失の爲めに終生を埋もらせたくないと訓誡もし、生活の道まで心配して死ぬまで面倒を見てやつたといふは世間に餘り例を聞かない何といふ美談であらう。中には沼南が顏に泥を塗られた見にくさを箔でゴマカさうとする爲めのお化粧的僞善だといふものもあるが、僞善でも何でも忘恩の非行者に對して恁ういふ寛容な襟度を示したものは滅多に無い。

沼南には其後段々近接し、沼南門下のものからも度々噂を聞いて、Ｙに對する沼南の情誼に感奮した最初の推服を次第に滅じたが、沼南の百の缺點を知つても自分の顏へ泥を塗つた門生

の罪過を憎む代りに憐んで生涯面倒を見てやつた沼南の美德に對する感嘆は毫も減ずるものでは無い。が、有體に云ふと沼南は度量海の如き大人格でも、清濁併せ呑む大腹中でも無かつた。夫よりは寧ろ小惡微罪に觸れるさへ忍び得られないで獨りを潔うする潔癖家であつた。濁流の渦卷く政界から次第に孤立して終にピューリタニックの使命に潜れるやうになつたは畢竟此の潔癖の爲めであつたらう。が、ドウしてYに對してのみ寛大であつたらう。U氏は『沼南は不可解だ、神乎愚人乎』と其後屢々私に話したが、私にも實はマダ謎である。

沼南が議政壇に最後の光焔を放つたのはシーメンス事件を彈劾した大演說であつた。沼南の直截痛烈な長廣舌は此種の彈劾演說に掛けては近代政治界の第一人者であつた。不義を憎む事蛇蝎よりも甚だしく、惡政暴吏に對しては挺身搏鬪して滅ぼさゞれば止まなかつた沼南は孤高清節を全ふした一代の潔士でもあり又鬪士でもあつた。が、沼南の淸節は縕袍弊袴で怒號した田中正造の操守と違つて可成有福な贅澤な淸貧であつた。沼南社長時代の毎日新聞社員は貧乏が通り相場である新聞記者中でも殊に抽んでゝ貧乏であつた。毎月の月給が晦日の晩になつても集金人が金を持つて歸るまでは支拂へなくて、九時過ぎまでも社員が待たされた事が珍らし

くなかつた。隨つて社員は月末の米屋酒屋の勘定どころか煙草錢にも屢々差支へた。が、社長沼南は位置相當の門戶を構へる必要があつたとは云へ、堂々たる生活をしながら社員が急を訴へても空々しい貧乏咄をしてテンから相談對手にならなかつた。

沼南は又晚年を風紀の廓淸に捧げて東奔西走廢娼禁酒を侃々するに寧日無かつた。が、壯年の沼南は廢娼よりは寧ろ拜娼で艷名隱れも無かつた。が、其頃は偎紅倚翠を風流として道德上の問題としなかつた。忠孝の結晶として神に祀られる乃木將軍さへ若い頃には盛んに柳暗花明の巷に馬を繫いだ事があるので、若い沼南が流連荒亡した半面の消息を剔抉しても毫も沼南の德を傷つける事は無いだらう。沼南はウソが嫌ひであつた。『私はウソを云つた事が無い』と沼南自身の口づから聞いたのは數回に留まらない。瑜瑕並び覆はざる赤裸々の沼南の有の儘を正直に語るのは、沼南を唐偏木のピューリタンとして偶像扱ひするよりも苔下の沼南は微笑を含んで却て滿足するであらう。

二葉亭四迷の一生

二葉亭の歿後、坪内、西本兩氏と謀つて故人の語學校時代の友人及び故人と多少の交誼ある文壇諸名家の追憶又は感想を乞ひ、集めて一冊として故人の遺靈に手向けた。其折諸君のまち〳〵の憶出を補ふ爲めに故人の一生の輪廓を描いて卷後に附載したが、草率の際序述屢々先後し、且故人を追懷する感慨に失して無用の冗句を累ね、故人の肖像のデッサンとして頗る不十分であつた。即ち煩冗を去り補修を施こし、且更に若干の遺漏を書足して再び爰に收錄するは二葉亭四迷の如何なる人であるか一世に紹介する爲めであつて、肖像畫家としての私の技術を示す爲めでは無い。且私が二葉亭と最も深く往來交通したのは『浮雲』發行後數年を過ぎた官報局時代であつて幼時及び青年期を知らず、更に加ふるに晩年期には互ひに俗事に累はされて往來漸く疎く、肝を把つて深く語るの機會を多く持たなかつたから、二葉亭の親友の一人ではあるが、其のボスウェルとなるには最も親密に交際した期間が限られてゐた。

且此一篇は初めからデッサンのつもりで書いたゆゑ、如何に改竄補修を加へてもデッサンは終にデッサンたるを免かれない。勿論二葉亭の文學や事業を批評したのではなく、云はゞ履歷書に註釋

加へたに過ぎないので、平板なる記實に若し幾分たりとも故人の人物を想到せしむるを得たなら此の一篇の目的は達せられてゐる。更に進んで故人の肉を描き血を流動せしめて全人格を躍動せしめやうとするには勢ひ内面生活の細事にまでも深く突入しなければならないから、生前の知友としては却て能くし難い私情がある。故人の瑕瑾並び蔽はざる全的生活は他日再び傳ふる機會があるかも知れないが、今日はマダ其時機でない。且自づから別に傳ふる人があらう。本篇は唯僅かに故人の一生の輪廓を彷彿せしむる爲めのデッサンたるに過ぎないのである。下記は大正四年八月の舊稿を改竄補修をしたもので、全く新たに書直し、或は書足した箇處もあるが、大體は總て舊稿に由る。

一　生ひたちから青年まで

二葉亭が明治二十二年頃自ら手錄した生ひたちの記がある。未完成の斷片であるが、其幼時を知るには之に如くものは無からう。曰く、

『余は元治元年二月二十八日を以て江戸市ヶ谷合羽坂尾州分邸に生れたり。父にておはせし人は其頃年三十を踰え給はず、また母にておはせし人も尚ほ若かりしかば、さのみは愛し給ひしさも聞かざれど、祖母なる人のいさめでいつくしみ給ひて、父の叱り給ふ時は機嫌よろしからぬほどなれば、おのづから

氣韻におひたてり。されど小兒の時余の尤もおそれたるは父さ家に藏する鍾馗の畫像なりしさぞ。

『幼なかりしころより叨りに他人に親まず、所謂人みしりをせしが、親しくゆきかよへる人などにはいさ打解けてませたる世辭など云ひしと叔母なる人常にの給ひき。』

『六歳のころ父なる人自ら手本をものして取らし給ひつ。されど習字よりは畫を好みて、夜は常に木偶の形など書き散らして樂みしが、ただみづから畫くのみならで、繪卷物（註、錦繪の事なり）など殊の外よろこびて常に玩べりさか。

『畫の外余の尤も好みしは昔物語りにて、夜に入ればいつも祖母なる人の袖引きゆるがして舌切雀のはなしし玉へさせがみしといふ。

『されどこれらは幼き時のこさなれば今は覺えなし。たゞ祖母なる人の物語り給ひしを記せるのみなり。

『上野戰爭後諸藩引拂ひの時余の一家は皆尾州へおもむきたれど、只父なる人のみは尙ほ留まりて江戸の邸を守り給へり。

『尾州に到りてのちに初めて學に就けり。組外れに漢學塾ありたりしが、その門に入りて漢學を修めり。又余の叔父なる人にも就きて素讀を修めり。藩に學あり、英佛兩語を教授す。余亦之に　りて佛語を修めり。

『余は常に學校に行くを樂みとせしが、學問するが面白きにはあらで、學校にて衆童さ游戲嬉笑するが面白きゆゑなりき。

『余のすめる近傍の兒童は皆余の朋友なりき。但し何人も經驗したる事ならんが、余の朋友中年たけたるもの二人ありたり。件の兩人相親しむ時は余らは皆其麾下に屬してさまぐ\なる惡戲をして戯れしが兩人仲違ひしたる時は余らも亦仲間割れをせり。余は到つて臆病なりしかばかゝる時は常に兩人中余の尤も懼るゝ方に附き隨ひて媚を獻じて其機嫌を取れり。

『余は此の如く他人に對して臆病なりしかど、家人に對して大膽にて所謂濶泊を極めたりき。余は甚だしき癇性にて毎朝衣服を母なる人に着せて貰ひしが、常に一度にては濟まず、何處か氣持惡しければ二三度も着かへるを常とせるなもて、是に由りて母なる人を苦めたる事もありき。

『概して云へば當時の余の心狀は卑劣なりしなり。』

以上は其全文である。取出でゝ云ふほどの奇は無いが、二葉亭の一生を貫徹した潔癖、俗に云ふ氣難かし屋の氣象と天才肌の「シヤイ」、俗に云ふ羞恥み屋の面影が兒供の時から仄見えてをる。且此自傳の斷片は明治二十二年ごろの手記であるが、自ら『當時の余の心狀は卑劣なりしなり』と明らさまに書く處に二葉亭の一生鞭撻して止まなかつた心の艱みが見えてをる。

尾州から父に伴はれて父の任地島根に行き、殆んど幼時の大部分を島根に暮した。其頃の父の同僚であつて叔姪同樣に親しくした鈴木老人其他の話に由ると、頗る持餘しの茶目であつた

さうだ。軍人志願で、陸軍大將を終生の希望とし、亂暴して放屁するを豪いやうに思つてゐたと、二葉亭自身の口から聞いた。

二葉亭の伯父で今猶ほ名古屋に健在する後藤老人は西南の役に招集されて、後に內相として辣腕を揮つた大浦兼武（當時軍曹）の配下となつて戰つた人だが、西郷贔負の二葉亭は此伯父さんが官軍だといふのが氣に喰はないで、度々伯父さんを捉まへては大議論をしたさうだ。二葉亭の東方問題の抱負は西郷の征韓論あたりから胚胎したらしい。こんな鹽梅に兒供の時分から少し變つてゐたので、二葉亭を可愛がつてゐた祖母さんは『此子は金鍔指すか薦被るかだ、』と能く人に語つたさうだ。（金鍔指すか薦被るかといふは大名となるか乞丐となるかといふ意味の名古屋附近に行はれる諺。）

十五歲の時、島根から上京して四谷の忍原横町の親戚の家に寄食した。其時分もヤンチヤン小僧で、竹馬の友たる山田美妙の追懷談に由ると、お神樂の馬鹿踊が頗る得意であつて、兒供同士が集まると直ぐトツピキピを初めてヤンヤと云はせたさうだ。間もなく芝の愛宕下の高谷塾に入塾した。高谷塾といふは『日本全史』といふ可成浩瀚な大著述をした其頃の一と癖ある漢學者高谷龍洲の家塾であつて、可成多數の書生を集めて東京の重なる私塾の一つに數へられ

てゐた。大阪朝日の舊社員の土屋大作や、今は故人となつた帝劇の座付作者の右田寅彦兄弟も同塾であつたさうだ。然るにイタヅラ小僧の茶目の二葉亭は高谷塾に入塾すると不思議に俄に打つて變つた謹直家となつて眞面目に勉強するやうになつた。知らない顔の他人の中へ突き出されて、持前の羞恥み屋から小さくなつたのでもあらうが、一つは今なら中學程度に當る東京の私塾の書生となつたので、俄に豪くなつて大人びたのでもあらう。

其時代、一番親しくしたは二葉亭の易簀當時暹羅公使をしてゐた西源四郎と陸軍大尉で早世した永見松太郎の二人であつた。殊に永見は同時に上京した同郷人であるし、同じ軍人志願であつたから猶更深く交際した。然るに永見は首尾よく陸軍の試驗に合格したが、二葉亭は其頃からの強度の近視眼の爲め不合格となつた。（永見は其後參謀部の有數な秀才と歌はれてゐたが、惜しい事に大尉で若死にして了つた。福島大將と同時代であつたさうだ。二葉亭は運惡く最初の首途に失敗なつて了つたが、首尾よく合格して軍人となつても狷介不羈の性質が累をなして到底長く軍閥に寄食してゐられなかつたらう。

其頃二葉亭は既に東亞の形勢を觀望して遠大の志を立て、他日の極東の風雲を豫期して舞臺

の役者の一人とならうとしてゐた。陸軍を志願したのも、幼時は左に右く其頃では最早唯軍服が着たいといふやうな幼い希望では無かつた。夫故に軍人志望が空しくなると同時に外交官を志ざして舊外國語學校の露語科に入學した。其頃高谷塾以來の莫逆たる西源四郎も同じ語學校の支那語科に在籍してゐたので、西は當時の露語科の教師古川常一郎の義弟であつたから猶更益々交誼を厚くした。其後間もなく西が外務の留學生となつて渡支してからも山海數千里を距てゝ二人は片時も往復の書信を絕やさなかつた。其頃の二葉亭の同窓から聞くと、暇さへあると西へ遣る手紙を書いてゐたさうで、其手紙がイッデモ國際問題に關する侃々諤々の大議論で、折々は得意になつて友人に讀んで聞かせたさうだ。二葉亭の露西亞語は日露の衝突を豫想しての國家存亡の場合に活躍する爲めの準備として修められたのだから、『君は支那公使となれ、我は露國公使とならん』と云ふが二人の青年の燃ゆる如き抱負で、殆んど天下の英雄は使君と操とのみの意氣込であつた。二葉亭が死ぬまでも國際問題を口にしたのは決して偶然では無いので、マダ二十歲になるかならぬかの青年時代から血を湧かした希望であつたのだ。（二葉亭の歿後、或人が西を訪問して其頃の二葉亭の遺事を聞きたいと云つた處が、西は頗る冷然とし

て二葉亭とはホンの同窓といふだけの通り一遍の淺い關係だから其頃の事は大抵忘れて了つたと云ふ到つて率氣ない挨拶だつたさうだ。御當人が然ういふ健忘性だから世間からも西といふ公使が有つたか無かつたか今では全く忘られてゐる。）

明治十八年の秋、舊外國語學校が閉鎖され、一ツ橋の校舍には東京商業學校が木挽町から引越して來て、佛獨語科の學生は高等中學校に、露清韓語科は商業學校に編入される事になつた。當時の東京商業學校といふは本と商法講習所と稱し、主として商家の子弟を收容した今の乙種商業學校程度の頗る低級な學校だつたから、士族氣質のマダ失せない大多數の語學校學生は突然の廢校命令に不平を勃發して、何の丁稚學校がといふ勢ひで商業學校側を睥睨した。今なら恁んな專制的命令が行はれる筈もなく、然ういふ場合學生は聯合して示威運動でもする處だが、當時の學生は尙だ然ういふ政治運動をする考がなく、硬骨連が各自に思ひ思ひに退校屆を學校へ叩きつけて飛出して了つた。二葉亭も亦其の一人で、一時は商業學校に學籍を轉じたが、翌十九年一月、到頭辛抱が仕切れないで怫然袂を拂つて退學して了つた。最う二三月辛抱すれば卒業出來るのだし、二葉亭は同學中の秀才だつたから、其儘缺席して試驗を受けないでも免狀

いふ事は從來戲作視した小說の文學的位置を重くもし、世間の好奇心を一層喚びもした。其頃までは青年の青雲の希望は政治に限られ、下宿屋から直ちに參議となつて太政官に乘込まうといふのが青年の理想であつた時代であつたから、天下の最高學府の出身者が春廼舍朧といふ粹な雅號で戲作の眞似をするといふは辯護士の娘が女優になつたり、華族の冷飯がキネマの興行師となるよりも一層意外で、『書生氣質』が天下を騷がしたのは其の藝術的効果よりも實は文學士の肩書の威力であつた。

夫故世間は半信半疑で、初めは矢張政治家の小說と同じ一時の流行カブレで、堂々たる學士がマジメに小說家にならうとは誰も思はなかつた。處が高田半峰が長々しい批評を書き、春廼舍も亦矢繼早に『小說神髓』（此頃『書生氣質』と『小說神髓』とドツチが先きだらうといふ疑問が若い讀書子間にあるらしいが『神髓』はタシカ早稻田の機關誌の中央學術雜誌に初め連載されたのが後に單行本となつたので『書生氣質』以後であつた。）から續いて『妹と脊鏡』を發表し、スモレツト、フヰールディング、ディツケンス、サツカレー等の英國小說家が大文豪として紹介され、戲作の低位から小說が一足飛びに文明に寄與する重大要素、堂々たる學者の使命としても恥かしくない立派な事業に跳上つて了つた。夫まで政治以外に青雲の道が無いやうに思つてゐた天下の青年は此の

新らしい世界を發見し、俄に目覺めたやうに翕然として皆文學に奔つた。美妙や紅葉が文學を以て生命とする志を立てたのも、動機は春廼舍の成功に衝動されたのだ。

二葉亭は之より先き語學校の科目としてゴンチャローフやゴーゴリやレルモントフやドストエフスキー等の大文學を研究し、進んでビェリンスキー、ドブロリューボフ、ヘルチェン等の論文集を耽讀し、殊に深くビェリンスキーに傾倒してゐた。尤も半ば語學研究の必要の爲めに外ならなかつたが、當時の語學校の教師グレーといふが中々な文學家であつて、其の露文學を講ずるや微に入り細に渉つて批評し、且エロキューションに極めて巧妙で、身振聲色交りに手を振り足を動かし眼を剝き首を掉つてゴンチャローフやドストエフスキーを朗讀して聞かしたのが作中のシーンを眼前に彷彿せしめて、一ト度グレーの講義を聞くものは皆語學の範圍を超えて其の藝術的妙趣を感得し、露西亞文學の熱心なる信者とならずにはゐられなかつた。二葉亭も亦此の一種の天才ある教師の指導を受けて何時とはなしに藝術的興味を長じ、進んで專門文人となるまでの斷乎たる決心は少しも無かつたが、知らず識らずに偶然文人の素地を作つてゐた。時も時、學校を罷めて何をすると云ふ方角もなく、滿腔の不平を抱いて放浪してゐた時、卒然

として此の文學勃興の機運に際會したは全く何かの因緣であつたらう。

當時の春廼舍朧の聲望は旭日昇天の勢ひで、世間の『書生氣質』を感歎するや恰も凱旋將軍を迎ふる如くであつた。が、世間が驚嘆したのは實は威力ある肩書の爲めであつて、其實質は生殘りの戲作者流に比べて多少の新味はあつても決して餘り多く價値するに足らなかつたのは少しく鑑賞眼あるものは皆認めた。況してや偉大なる露國文學の一とわたりを究めた二葉亭が何條肩書に嚇かされやう。世間が『書生氣質』や『妹と脊鏡』や『小說神髓』を感嘆する幼稚さを呆れると同時に、文學上の野心が俄にムヅムヅして來た。尤も進んで春廼舍と競爭しやうといふほど燃上つたのではなかつたが、左に右く春廼舍の技巧や思想の齒癢さに堪へられなくなつた結果が『小說神髓』の疑問の箇處々々に不審紙を貼つたのを携へて突然春廼舍の門を叩いた。語學校を罷めてから間もなくであつた。

二葉亭が春廼舍を訪問したのは、昔の武者修行が道場破りをするツモリで他流試合を申込むと多少似通つた意氣込が無いでは無かつた。が、二葉亭は極めて狷介な負け嫌ひであると同時に又極めて謙遜であつて、如何なる人に對しても必ず先づ謙虛して教を待つの禮を疎かにしな

かつた。春廼舎を慊らなく思つてゐたには違ひないが、訪問したのは先輩を折伏して快を取るよりは疑問を晴らして益を享くるツモリであつたのだ。が、ビェリンスキーに傾倒しゴンチャローフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー等に飽滿した二葉亭が『書生氣質』の著者たる當時の春廼舎に教へられる事が餘り多く無かつたのは明かに想像し得られる。

が、其以後屢々往來して文學上の思想を交換すると共に文壇の野心を鼓吹(インスパヤ)された事は決して尋常(ひとゝほり)でなかつた。矢崎鎭四郎を春廼舎に紹介したのも矢張二葉亭であつた。矢崎は明治十九年の十月には處女作『守錢奴の肚』を公けにし續いて同じ年の暮れに『ひとよぎり』を出版し、二葉亭に先んじて逸早く嵯峨の屋お室の文名を成した。

二葉亭の初めての試みはゴーゴリの飜譯であつた。が、世間には發表しなかつた。其の發表しなかつた理由は不明であるが、多分性來の自重心が輕々しく公けにするを欲しなかつたのであらう。其時分またビェリンスキーの美論の一部を飜譯した事があつた。尤も此飜譯は春廼舎を初めビェリンスキーを知らない友人に示す爲めであつて、公けにするツモリは無かつたのであるが、其中の一部分が飜譯後暫らく經つてから冷々亭主人の名で前記した早稲田の機關誌の

「中央學術雜誌」に掲載された。が、ビェリンスキーの美論は當時の讀書界には少し高尙過ぎたから、誰にも碌々讀まれず、殆んど注意されずに終つたが、今から三十年前に恁ういふ深邃な美學論が飜譯されたといふは恐らく今の若い人たちの思掛けない事であらう。其時分二葉亭は冷々亭杏雨、率性堂、又は翕々亭と稱してゐた。

其頃二葉亭は學校を罷めて了つて、之から先き怎うでも一本立ちにならねばならない場合であつた。親代々家祿で衣食しる士族出の官吏の家では官吏を最上の階級とし、官吏と名が附けば腰辨でも一廉の身分があるやうに思つてゐたから、兩親初め周圍のものは皆二葉亭の仕官を希望してゐた。が、二葉亭は決然袂を揮つて退學した餘勇が猶ほ勃々としてゐた處へ、春廼舍からは盛んに文學を煽り立てられ、弟分に等しい矢崎ですらが忽ち文名を揚ぐるを見ては食指動くの感に堪へないで、周圍の仕官の希望を無視して、砂を嚙んでも文學をやると意氣込んでゐた。其時分の文學的覇心は殆んど天に冲する勢ひであつた。

三　「浮雲」及び其時代の生活

「浮雲」の第一編が發行されたは明治二十年七月であつた。此の第一編は今も昔も變らぬ書肆の商略から表紙にも扉(タイトルページ)にも春廼舍朧著と署して二葉亭の名は序文に見えるだけだから、世間は春廼舍をのみ嘖々して二葉亭の存在を少しも認めなかつた。二葉亭の名が一般讀書人に知られて來たは公然其名を署した第二編の發行以後である。が、夫すら世間は春廼舍の別號或は傀儡である如く信じて二葉亭の存在を認めるものは殆んど稀れであつた。

尤も第一編は春廼舍の加筆が可成多かつたから多分の春廼舍臭味があつた。世間が二葉亭を無視して春廼舍の影法師と早呑込みしたのも萬更無理では無かつた。が、誰でも處女作を發表する時は臆病で、著作の經驗上一日の長ある先輩の教へを聞くは珍らしくない。況してや謙遜な二葉亭は文章の造詣では遙に春廼舍に及ばないのを認めてゐたから、已れを空うして春廼舍の加筆を仰いだ。春廼舍臭くなつたのも止むを得なかつた。が、一端發表して後は自信を強くし、第二編には思ふ存分に大膽な言文一致を試みて自個の天地を開き、具眼の讀書子をして初めて春廼舍以外に二葉亭あるを承認せしめた。

言文一致の創始者としては山田美妙が多年名譽を獨占し、今では美妙と言文一致とは離る可

からざるもの〻如く思はれてをる。」が、美妙の『夏木立』は明治二十一年八月の出版で、『浮雲』第一編よりは一年遲れてる。尤も『夏木立』中の『武藏野』は初め讀賣新聞に載つたのであるが、矢張『浮雲』の方が先んじてゐた。或は『浮雲』第一編は嚴密な意味の言文一致でないといふ人があるかも知れぬが、『武藏野』も亦頗る雅文臭いもので、時代の先後を云つたら二葉亭の方が當然其試みに率先した名譽を荷ふべき筈である。不思議な事には美妙と二葉亭とは親たちが同じ役所の同僚であつて、兒供の時からの朋友であつた。尤も竹馬の友といふだけで、中ごろは交際が絶え、相談したのでも申合はしたのでも無かつたが、相期せずして幼友達同士の此の二人が言文一致體を創めたといふは頗る不思議な因緣であつた。尤も之より以前、漢字廢止を高調した假名の會の創立當時から言文一致は識者の間に主張され、極めて簡單な記事文や論說を言文一致で試みた者もあつた。同時に之より三四年前に發明された速記術が其頃漸く實際に應用されて若林玵藏の速記した圓朝の『牡丹燈籠』が出版されて活きた口話の實例を示したのが俄に言文一致の機運を早めたのは爭へない。美妙も二葉亭も此の圓朝の口話の速記に負ふ處が多かつたのは想像するに餘りがある。明治の文章史を作る者は圓朝の『牡丹燈籠』と速記者

若林玵藏の功勞とを無視する事は出來ない。

且又美妙と二葉亭との文體は等しく言文一致であつても著るしい語系の差異がある。美妙は本とが韻文家であつて韻語に長じ、兼ねて戯文の才が有つたから、夫だけ從來の國文型が拔け切れない處があつた。二葉亭も院本や小說に沈潛して好んで馬琴や近松の眞似をしたが、根が漢學育ちで國文よりは寧ろ漢文を喜び、且深く露西亞文に親んでゐたから、容易に國文の因襲を脫して思切つて大膽なる言文一致を試みる事が出來た。春廼舍の加筆した『浮雲』第一編は別として、第二編となると全然從來の文章型を無視した全く新らしい文體を創めた。二葉亭の直話に由ると、愈々行詰つて筆が動かなくなると露文で書いてから飜譯したさうだ。二葉亭の露文は學生時代からグレエ敎師が感嘆したといふ位で、後にダンチエンコが來朝して能見物に案內した時、ダン君に示す爲めの當日の能の筋書を前夜の中に露譯したといふほどの腕達者だから、露文で書いて邦譯したといふのも强ち英雄人を欺くの放言だとは思はれない。ゴンチヤローフの眞似をして出來損なつたとは二葉亭が能く人に話した謙遜のやうな自得のやうな追懷であつた。『浮雲』の文章に往々多少の露臭があるのは之が爲めであらうが、そこが在來の文章

型を破つた獨創の貴とさである。美妙のは花やかにコツテリして故とらしい厭味のある歐文の摸倣に充ちてゐた。丁度油をコテ〳〵塗つて鬘のやうに美くしく結上げた束髪が如何にも日本臭いと同様の臭味があつた。二葉亭のは根本から歐文に醇化され、極めて樂に日常用語を消化して全く文章離れがしてゐたが、美妙のはマダ在來の文章型を脱し切れない未成品であつた。美妙の功勞を十分認めるとしても、又創始者たる名譽は二人の中のドッチとも定められないとしても、今日の言文一致の宗とするは美妙よりは寧ろ二葉亭である。

扨て此の『浮雲』の構案であるが、一體此構案を何處から得て來たかは不明である。二葉亭は自分の性格の一部を極端に誇張したもの（卽ち文三）を中心として兩親や周圍の人物の性格を同じく極端に延長したものを配して新舊思想の衝突を描いたのであると、極めて漠然たる話をした事があつた。大雜駁に云へばツルゲーネフ等に倣つて時代の葛藤を描かうとしたのは爭はれないが、多少なりとも之に類した事實が作者の視聽內に有つた乎否乎は二葉亭は曾て明言しなかつた。但だ其頃の作家は自分の體驗を有の儘に書き周圍の人物をモデルとするやうな事は餘り做なかつたから、『浮雲』のモデルや事實は先づ無かつたらうと信ずる。

二葉亭から直接聞いた咄に、二葉亭の家の直ぐ近所にA・Nといふ其頃若い書生間に評判な新らしい女が住んでゐたが、强て云へば此女が『浮雲』のお勢のモデルであつたさうだ。女學生ではあるが學校へは行かないで弟と二人で世帶を持つて、國から送る學費で氣隨氣儘に暮してゐた。少とばかり洋書が讀めて多少の新らしい趣味を解し、時偶は洋服を着る當時の新らしい女で、男とばかり交際してゐた。其頃は今より一層甚だしい歐化熱の頂上に登り詰めた時代であつて、青年男女の交際が盛んに鼓舞され、本郷神田邊の學生間に□□會、△△倶樂部など稱する男女交際を唯一の目的とする。今なら不良扱ひされる青年の團體がイクツもあつた。Nは恁ういふ團體の何處へでも顏を出して跳廻つてゐたから、御面相は頗る振はなかつたが若い男の中には顏が賣れてゐた。當時のチヤキ／＼の新らしい男たる硯友社の中にも此女と親しいものがあつた筈である。其上に此女は弟と二人ぎりの氣隨氣儘の暮しをしてゐて、遠慮氣兼をする者が一人もゐなかつたから、若い男は好い遊び場にして間斷なしに出入して、毎晩十二時一時ごろまでもキヤツ／＼と騷いでゐた。小説家となるツモリになつてゐても志士氣質の失せない二葉亭は、女と交際するやうな事は決して無かつたが、ツイ眼と鼻の間だから近所の評判

となつてる此女の噂を聞いてゐたので、愈々小説を立案するに方つて偶然憶付いたのが此女であつた。そこで此女をモデルとして當時の新らしい女を描かうとし、此目的の爲めに屢々此女の住居の近所を徘徊して容子を瞥見し、或る晩は軒下に忍んで障子に映る姿を見たり、戸外に洩れる聲を竊み聽いたりして、此女の態度から起居振舞、口吻までをソツクリ其儘に寫したのがお勢であるさうだ。無論外形の一部分をモデルとしたので、全體を描いたのでは無かつた。第一、此女は隨分マヅイ御面相で、お勢のやうな美人でなかつた。且お勢よりもお轉婆であり引摺であつた。其上に御面相の振はないのを自覺してゐた爲であらうが、男と交際してゐてもお勢のやうな *coquettish* な容子は少しも無かつた。假に此女と本田と取組ましたなら、お勢のやうに本田の翫弄にならないで却て本田を翫弄にしたかも知れない。恐らく此女は當時の世評嘖々たる『浮雲』を讀んだに違ひないが、自分がお勢のモデルであるとは氣が附かなかつたであらう。お政にも昇にもモデルがあると云つて、誰それであらう、揣摩する人もあるが、作者自身の口からは絶えてソンナ咄を聞かなかつた。勿論、文三が作者自身の性格の一部を極端に誇張して作爲したのが爭はれないと同様に、作者に近接する人物の性格の一部をモデルとした

に違ひなからうが、二葉亭はお政や昇に就ては何にも咄さなかつた。

全體として評すれば『浮雲』の文章及び構作は共に未成品たるを免かれない。が、『浮雲』を評するものは今より殆んど四十年前の作、二十四歳の青年の作である事を記憶せねばならない。之より以後多くの文人が續出して、代る〴〵に文壇を開拓して佛露の自然主義まで漕付けるに凡そ二十年を費やしてゐる。少くも『浮雲』の作者は二十年、時代に先んじた先驅者であると云はねばなるまい。單に文章の一事だけでも、今日行はれてる小說文體の基礎を築いた功勞者であると云はねばなるまい。何の道、春廼舍の『書生氣質』や硯友社連の諸作と比べて『浮雲』が一頭地を挺んづる新興文藝の第一の曙光であるは爭ふ事は出來ない。中には文學史上の著名の傑作が時代といふ考を去ると屢々價値が乏しくなる幾多の例から推して、『浮雲』をも亦時代の產物以上の價値が無いものゝやうに輕視するものがあるが、外國の名著と比べたら或は餘り多くを價値する事が出來ないかも知れないが、日本のとなら同時代のものは扨置き、今日嘖々される諸作と比べても決して軒輊する處が無い。但し『浮雲』は二葉亭の思想動搖の過程に跨がつて作られてるから、第一編と第二編と第三編と、各々箇立してゐて一貫する脈絡を缺いて

ゐる。が、各々獨立した箇々の作として見ても現代屈指の名作たるを少しも妨げない。強て評價すれば、第一編はマダ未熟であり、第三編は脂が拔けて少しくタルミがあるが、第二編に到つては全部が緊張してゐて、一語々々が活き〳〵と生動してをる。未成品であつても明治の文學史に燦爛たる頁を作るエポック・メーキングの名著である。

四　『あひゞき』及び『めぐりあひ』

丁度同時代であつた。德富蘇峰は『將來之日本』を挈げて故山から上〻て帝都の論壇に突入し、續いて『國民之友』を創刊して文名隆々天下を壓する勢ひがあつた。當時の青年は皆其風を望んで蘇峰に傾倒し、『國民之友』は殆んど天下の思想界に號令する觀があつた。二葉亭も亦蘇峰が高調した平民主義に共鳴し、臂を把つて共に語る友と思込んで、辭を低うし禮を盡して蘇峰を往訪した。が、熱烈なる天才肌の二葉亭と冷靜なる政治家氣質の蘇峰と相契合するには餘りに距離があり過ぎたから、應酬接見數回を重ねた後はイツとなく疎遠となつて了つた。が、天下の英才を集めて『國民之友』を賑はすのを片時も怠らなかつた蘇峰は此間に二葉亭のツル

ゲーネフの飜譯を紙面に紹介して讀書界の耳目を聳動した。『浮雲』は初め春廼舍の作として迎へられ、二葉亭の名が漸く知られて來てからも矢張春廼舍の影武者であるかのやうに思はれてゐた。二葉亭の存在が初めて確實に世間に認められたのは『浮雲』よりは寧ろ『國民之友』で紹介された飜譯の『あひゞき』であつた。

其頃の飜譯は皆筋書であつた、大體の筋さへ通れば勝手に省略したり刪潤したり、甚だしきは全く原文を離れて梗概を祖述したものであつた。且飜譯家の多くは邦文の造詣に貧しい唯の語學者であつたから、飜譯文なるものは大抵ゴツ〳〵した漢文崩しや或は舌足らずの直譯や或は半熟の馬琴調であつて、西文の面影を偲ぶに足らないは魯か邦文としても亦讀むに堪へないものばかりだつた。此の非藝術的濫譯横行の中に在つて、二葉亭の『あひゞき』は殆んど原作の一字一句をも等閑にしない飜譯文の新らしい模範を與へた。後年盛んに飜譯し出した頃二葉亭は『あひゞき』時代を追懷して、「あの時分はツルゲーネフを崇拜して句々皆神聖視してゐたから一字一句どころか言語の排列までも原文に違へまいと一語三禮の苦辛をした、あんな馬鹿骨折は最う出來ない、今ならドシ〳〵直してやる、」と笑つた事があつた。『あひゞき』の譯文

の價値は人に由て區々の議論があらうが、苦辛慘澹は實に尋常一樣で無かつた。

が、餘り原文に忠實であり過ぎた爲め、外國文章の句法辭法に熟する人でなくては迚も理解されない難かしいものとなつた。尤も當時のタワイない低級小說ばかり讀んでる讀者に對して一足飛びにツルゲーネフの鑑賞を要求するは豚に眞珠を投げるに等しい無謀であつて、大抵な讀者は最初の五六行から消化し切れないで降參して了つた。此の難解の譯文を平易に評釋して世間に示し、口を極めて原作と譯文との妙味を嘖々激稱したは石橋忍月であつた。當時の一般讀者が『あひゞき』の價値を略ぼ了解してツルゲーネフを知り、且二葉亭の譯文の妙を確認したは忍月居士の批評が與かつて大に力があつた。

續いて『都之花』の發刊と共に『めぐりあひ』が五號に渉つて連載された。『あひゞき』に由てツルゲーネフの偉大と二葉亭の譯筆の價値とを確認した讀者は崑山の明珠を迎ふる如くに珍重愛惜し、細さに一字一句を玩味研究して盛んに嘖々した。が、普通讀者間には矢張豚に眞珠であつて、當時に在つて此の二篇の價値を承認したものは眞に寥々晨星であつた。が、同時に此の二篇に由て初めて崇高なる文學の意義を了解し、堅實なる新らしい文學の基礎を固め、

若くは感激して新文藝の開拓を志すに至つたものは決して少くなかつた。國木田獨歩の如きは實に其の一人であつて、獨歩一派の自然主義運動は實に此の『あひゞき』と『めぐりあひ』とに發途してをる。短かい飜譯であるが啻だ飜譯界の新生面を開いたばかりでなくて、新らしい文藝の路を照すの光輝ともなつた。其の文壇に與へた効果は『浮雲』よりも却て偉大であつたかも知れない。時代の先駈者としての二葉亭の名譽は今から三十餘年前にツルゲーネフを飜譯した功績だけでも十分承認しなければなるまい。

五　『浮雲』時代の失意煩悶

『浮雲』著作當時の二葉亭は覇氣欝勃として、僅に春廼舍を友とする外は眼中人なく、文學を以てしては殆んど天下無敵の慨があつた。が、一面から見れば得意時代であつたが、其の得意といふは周圍及び社會を白眼傲睨する意氣であつて、境遇上の滿足でも又精神上の安心でも又思想上の矜持でも無かつた。

其頃の二葉亭は生活上の必要と文藝的興味の旺盛と周圍の壓迫に對する反抗とからして文學

を一生の生命とする熱火の如き意氣込があつた。が、二葉亭の文學と云ふは人生に基礎を置く文學であつて、單なる藝術一天張の享樂主義や遊蕩三昧や人情趣味の文學では無かつた。即ちビェリンスキーの文學、ゴンチャローフの文學、ドストエフスキーの文學、ツルゲーネフの文學であつて、京傳の文學、春水の文學、三馬の文學では無かつた。

然るに當時の文壇は文藝革命家をもて他(ひと)も許し自らも任ずる春廼舍主人の所説ですらが根本の問題に少しも觸れてゐない修辭論であつて、人生問題の如きは全く文學と交渉しないものと思はれてゐた。例へば『浮雲』に對する世評の如き、口を揃へて嘖々稱讃したが、渠等の稱讃は皆見當違ひ或は枝葉末梢であつて、凡近卑小の材を捉へて人生の機微を描かうとした作者の觀照的態度に對して批判を加へた者は殆んど一人も無かつた。尤も此の二葉亭の目的は失敗してゐたが、其失敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは作者自身であつて、世間一般の讀者は（文壇の審判官たる批評家でさへも）作者が油汗を流した人生の觀照には全く無關心沒交渉であつた。如何に感嘆されても稱讃されても藪睨みの感嘆や色盲的の稱讃では甘受する事が出來ないで、先つ出發の門出(かどで)からして不滿足を感ぜざるを得なかつた。

加之ならず、初めは覇心欝勃として直ちに西歐大家の壘を衝かうとする意氣込であつたが、愈々着手するとなると第一に遭逢したのは文章上の困難であつた。如何に因襲の舊型を根本的に破壞するツモリであつても、日本文で書く以上は日本の在來の文章語や俗談口語の一と通りを究めねばならなかつた。二葉亭は漢學仕込で魏叔子や壯悔堂を愛讀し、國文俗文の一と通りにも通じてゐたが、愈々文學を生命とするとなると、夫迄は閑餘の漫讀に過ぎなかつた群書の渉獵にヨリ一層進んで深く造詣しなければならぬから骨が折れた。然るに二葉亭の志ざす文學は道樂氣分の遊戲でなくして眞劍命掛けであつたから、如何に文章を研究する爲めでも、日本の在來の遊戲文章を眞面目になつて研究する馬鹿々々しさに堪へられなかつた。二葉亭の當時の日記に、「我れ今まで藥袋もなき小説を油汗にひたりて書き來りしが、是れよりは將た如何にすべき、我が筆は誠に稚なし、若し之よりも小説を書きて世を渡らんとせば先づ文を屬する事を習はざる可からず、迷惑がらるゝを目をねぶつてこらへ、人の藏書を借りて讀まざる可からず、その書は如何なる類ひかといへば、粹とか通とかいひて此世を遊び暮せし人々の食はうが爲め呼吸をしやうが爲めに書散らしたる有りても益なく無くとも不自由にも無きつまらぬ書物

のみなり、斯る書類に眼を勞らせ肩をはらし命を捞り取られて一世を送るも豈心外ならずや』云々とあるは當時の心事を洩らした述懐であつて、二葉亭は此の文章上の困難に一と通りならない苦辛をした。取別け自己を批判するに極めて苛酷な人の癖として十目の見る處『浮雲』が文章としても亦當時の諸作に一頭地を挺んづるにも係らず、深く自ら恥ぢ且懼れて『自分には小説は書けない、自分は文人たる資格が無い』とまで氣を腐らせて了つた。

且又二葉亭の爲めには文學夫れ自身よりは根本の人生問題の方が重大であつた。ツマリ人生の爲めの文學といふが、抑も人生を怎うしやうといふの乎。人生の歸趣とか目的とかいふものが果して有るのだらう乎。安心とか信仰とかいふものが果して得られるのだらう乎。知識で究めるのは果しが着かないといふなら、科學や哲學に何の權威がある乎。科學や哲學で究めても解らないものなら文學や宗教で怎うして滿足出來る乎。そんな疑問が推究すれば推究するほど後から〳〵と生じて終には文學其物の價値までが危なつかしくなり、ツルゲーネフやドストエフスキーの後光が段々薄くなり出すと、是等の文豪に比べて遙に天分薄い日本の文人亞流——自分も其一人として——の文學三昧は小兒の飯事同樣の遊戲であつて、人生の爲めの文學

などゝは片腹痛い心地がして堪へられなかつた。

然るに又一方には物質上の逼迫がヒシ〳〵と日に益々加はつて來た。尤も其頃二葉亭マダ部屋住であつて、一家の事情は二葉亭の自活又は扶養を要求するほど切迫してゐるとは岡目には見えなかつた。左に右く土藏附きの持家に住つてゐた。シカモ餘り廣くはなかつたが、木口を選んだシツカリした普請で、家財道具も小奇麗に整然と行屆いてゐた。親子三人ぎりの家族で、誰が目にも窮してゐるどころか、寧ろ氣樂さうに見えてゐた。が、其頃の――恐らくは今でも――總ての人の親は、家に資産が有ると否とを問はず一家の運命希望を我が子の立身出世に繫いでゐるから、滞りなく無事に學校を卒業してドコへか就職して呉れなければ安心もし滿足もしなかつた。折角卒業の間際まで漕付けながら袴を脱ぐ如く暢氣に學校を罷めて了ひ、シカモ罷めて了つて後に何をする見當もなく、何にもしないで懷手をしてブラ〳〵遊んでゐると外思はれない二葉亭の態度や心持を慊らなく思ふは普通の人の親としての當然の人情であつた。昔の士族氣質から唯一の登龍門と信ずる官吏となるのを嫌つて、碌でもない小說三昧に耽るは昔者の兩親の目から見れば苦々しくて默つてゐられなかつた。

尤も『浮雲』に由て一躍大家數に入つた二葉亭の成功に就ては老親初め周圍のものは皆驚嘆もし滿足もした。丁度ドストエフスキーの『虐げられた人々』中のイユメニエフといふ老人が靑年作家たる若い甥の評判高い處女作を讀んで意外な作才に驚くと同　の趣きがあつた。が、文名の齎らし來る收入はといふと幾許も無かつたので、感嘆も滿足も唯の一時であつた。加之ならず、二葉亭は一足飛びに大家班に入つたに係らず、文學を職業とする氣が有るか無いか解らぬくらゐノンキであつて、文名の籍甚に乘じて文壇に躍り出すでもなく、然うかと云つて他に相當な生活の道を求める手段を講ずる氣振もなかつたから、一圖に我が子の出世に希望を繋ぐ親心からは齒痒くも思ひ呆れもして不滿たらざるを得なかつた。

搗てゝ加へて一家の實際の事情は岡目で見るほど決して氣樂でなかつた。氣樂どころか寧ろ逼迫してゐた。之より二三年前、二葉亭の先人は官を罷めて聊かの恩給に衣食し、二葉亭の每月の學費も最後の一二年は蓄財を割いて支辨しつゝ萬事の希望を二葉亭の卒業後の榮達に期してゐたのである。であるから二葉亭は卒業するとしないとに論なく、學校を罷めた其日から直ぐ一家を脊負つて立たねばならない實際上の責任があつた。二葉亭の日記に由ると、父の恩給

高は十一圓であつたさうだ。如何に物價の安い四十年前でも又如何に小人數でも十一圓で一家を維持するといふは容易でなかつたから、岡目から見るやうに氣樂でなかつたのは想像されるので、此窮狀を子として拱手して知らぬ振する事は出來なかつた。尤も公債もあり蓄財もあり、家屋も自分の所有であつて、正味十一圓こつきりの身代では無かつたが、割合に氣樂な官吏の生活を送つたものが多年儉約して剩した蓄財を日に〳〵減らして行くは、骨を削り肉を刻むに等しい堪へ難い苦痛であるのが當然で、何かにつけて愚痴の出るのも無理では無かつた。且恰も少年時代から友達同士の山田美妙が同じ文壇に立つて名聲籍甚し、『以良都女』や『都之花』の主筆として收入も亦豐かであるのを見ては、二葉亭の生活上の癡え切らない態度が戾かしくなつて、何かにつけては『山田の武さんを御覽』と云ひ〳〵した。

二葉亭が若し「山田の武さん」の眞似をするツモリなら、生活問題の如きは造作も無く解決されたのである。が、二葉亭の文學といふは滿身に力瘤を入れて大上段に振りかぶる眞劍勝負であつて、矢聲ばかりを壯んにする小手先劍術の見せ物試合でなかつたから、美妙や紅葉と共に轡を駢べて小手先きの藝頭を競爭するやうな眞似は二葉亭には出來なかつた。文學の立場は

に云はしむれば生活の血の滲まない製作は文學を冒瀆する罪悪であつたのだ。『あんな器用な眞似は出來ない、自分には才が無い』と二葉亭は謙遜してゐたが、出來る出來ない、才の有る無しよりは自分の信奉するツルゲーネフやドストエフスキーやゴンチャローフの態度と違つた行き方をして生活の方便とするを内心竊に爪彈きしてゐた。其頃、二葉亭の交際した或る文人が或る雜誌に頼まれて寄稿した小説が頗る意に滿たないツマラヌ作であるを頻に慚愧しながらも、原稿料を請取ると大いに滿足して直ぐ何處へか旅行しやうと得意になる心のさもしさを賤んじて日記に罵つてゐる。自信の無い作を與へて報酬を請取るを罪惡の一つとしてゐた二葉亭は、之では迚も文學でパンを得る事は覺束ないと將來を掛念したばかりでなく、實は『浮雲』で多少の收入を得たをさへ耻ぢてゐた。文壇的野心の鬱勃としてゐた當初は左も右く、自分の文學的才能を危ぶみ出してからは唯一の生活手段とするつもりの文學に全く絶望して、父の溢面、母の愚痴、人生問題の紛糾疑惑、心の隅の何處かに尚だ殘つてる政治的野心の餘燼等の不平やら未練やら慚愧やら悔恨やら疑惑やらが三方四方から押寄せて來て、恰も稻麻竹葦と包圍

された中に籠城する如くに拔差ならない煩悶苦吟に苛まれてゐた。

二葉亭の日記の數節を引いて、其當時の煩悶焦慮を二葉亭自身をして語らしめやう。

「白石先生の折焚柴の記を讀みて坐ろに感ずる所あり、先生が若かりし日、人のさかしらに仕を罷めて浪人の身となりさがりたる時、老いたる父母を養ひかねて心苦しく思ふを人も哀れと見て、或は富家の女婿になれと勸められ、或は醫を學びて生業を求めよといさめらる、並々の人ならましかば、老いたる父母の貧しうくらすを看過しがたしとて志も挫け氣の衰ふるにつけ、我に便よき說をも案じ出して、かゝる折なほ獨善の道を守らば彌々道に背かんなど自らも思ひ人にも云ひて節を折るべきに、さはなくて飽くまでも道を守りて其節を渝へず、父なる人も並々の武士にはあらで卻りて之を嬉しと思ひたり、アゝ此父にして此子あり、新井父子の如きは今の世には得がたし、われ顧みてうら耻かしく思ふ。」

「嗚呼我が氣力は衰へたる哉、學校を出でしより以來一日として心の霽るゝ事なければ樂しとおもひたることもなし、今の我が身の上をひし〱と思ひつむる時、生きて斯る憂目見んより死して此苦を免かるる方はるかに勝るべしなど思ひたるは幾度もありたれど、その頃はまだ氣

力衰へたれど漸滅するには到らざりしをもて、筆を執りて文を草することも出來しなり、されどこのごろは筆を執るも慵くてたゞおもひくづをれてのみくらす、誠にはかなきことにこそあれ。』

『反譯叢書は本月うちに發兌せんといひしを如何にせしやらん、今に於て其事なし、此雜誌には余も賴まれて露文を反譯せしにより、其飜譯料をもて本月の費用にあてんと思ひをりしに今は空だのめとなりしか、人事齟齬多し、覺えず一歎を發す。』

『此頃は新聞紙を讀みて、何某は剛毅なり薄志弱行の徒は慚死すべしなどいふ所に到れば何となく我を誹りたるやうにおもはれて、さまざまに言譯めきたる事を思ふなり、かくまでに零落したる乎。』

當時の二葉亭の煩悶は此數節に由るも明かであらう。進んで小說家たる覺悟も勇氣もなく、左ればとて退いて欲するまゝに靜かに讀書硏究するをも許されない境涯であつた。二葉亭の日記に、『公債を買ひたい買ひたいといふゆゑ周旋していよ／＼となるといやになり、借家を買ひたい買ひたいといふゆゑ周旋していよ／＼となると之もまた二の足を踏む人は周旋人が迷惑す

とかや云ひたり、旨き事をいひたるものなり」とあるは當時の二葉亭が右すべきや左すべきやと迷つた心状を自ら罵つた冷嘲であらう。二葉亭は人のする事が何でも面白くなつて常に氣が變るを到底事を成すに堪へざる性格として同じ日記中に自ら嘆息してゐるが、恁ういふ性格も多少は手傳つたのであらうが、當時の境遇上處世の方向に迷つたのは無理も無かつた。

其間に試みたのがツルゲーネフの『あひゞき』の飜譯であつた。が、此飜譯は前にビェリンスキーが飜譯したと同じく、自ら傾倒するツルゲーネフを紹介して公衆に興味を頒たうとしたので、原稿料を取る爲めでは無かつた。勿論、民友社は報酬を支拂つたが、其報酬は何ほどのものでも無いから生活を補ふ資にはならなかつた。

今の女子學院の前身の櫻井女學校に聘されて文學を講述したのも此時代であつた。ツイ先頃歐羅巴から歸朝する早々腦栓塞で急死した著名の英語學者長谷川喜多子女史や女子學院の學監三谷民子女史はタシカ當時の聽講生であつたと思ふ。が、ビェリンスキーやドブロリューボフを祖述する二葉亭の文學論は當時の女學生の耳には(恐らくは今の女學生にも)餘りに高遠深邃であつて、滿堂殆んど耳を傾くるものが一人も無いのに失望して幾何もなく罷めた。が、之も

亦生活の爲めではなかつたので、自分の信奉する說を一人にだも多く——うら若い婦人に對してすらも——講演して新らしい思想を鼓吹する機會を得たのを喜んで應じたのであるから、此の窮乏の間に處りながら初めから報酬を辭して受けなかつた。

六　『浮雲』第三篇及び官報局出仕

『浮雲』第三篇の發表されたのは之より少し後であつた。此の三篇を書いてゐた時は恰も胸中の悶々に堪へなくて努力も功名も消えて了つた眞最中であつた。日記に、『余は今日に到るまで小說家にて世を送る望みなしといひつゝも尙ほ小說家とならんことをのみつとめり、他より見ればをかしく見ゆべし』とあるは每月書肆から若干宛資給されてゐた義理合上餘儀なくされて澁り勝なる筆を呵しつゝ據ろなしに机に向つてゐた消息を洩らしたのであらう。

二葉亭は何をするにも眞劍勝負であつた。襷鉢卷に股立取つて、滿身に力瘤を入れつゝ起上つて、右からも左からも打込む隙が無い身構へをしてから、曳やツと氣合を掛けて打込む命掛けの勝負であつた。追取刀でオイ來たと起上る小器用な才に乏しかつた。「間に合はせ」とか

「好い加減」とかいふ事が嫌ひであつたし、又出來ない人であつた。談話するにさへ一言一句を考へ〳〵腹の底から搾出し、口先きでお上手や胡麻化しをいふ事が決して出來なかつた。夫故、文藝上の興味が冷沒、生活上の苦勞に苛まれてゐても一夜漬けの書流しで好い加減に鬼をつけて肩を拔いて了ふといふ事は出來ないで、イヤイヤながらも矢張同じ苦辛を重ねてゐた。が、實は最う小說どころで無かつた。根本の人生の大問題が頭の中で渦を卷いてゐた。身に迫る生活上の苦勞がヒシ〳〵と押寄せて來た。惰力で筆を執つてゐてもイツマデ經つても油が乘つて來なかつた。イクラ悶いても焦つても少しも緊張して來なかつた。眞劍勝負でなければ何にも出來ない人が怎うしても眞劍勝負の意氣込になれなかつた。

『浮雲』第三篇は作者の日記の端に書留めた腹案に由ると、お勢の墮落と文三の絕望とに終るのだが、發表されたものを見ると、腹案の半ばにも達しないで中途から尻切とんぼに打切られてをる。恐らくはマダ發表するを欲しない未定稿であつたらうと思ふ。尤も此の悶々の場合に之より以上に玉成する事は迚も出來なかつたらう。且、二葉亭の性質として決して好い加減に書擲つたものではないだらうが、三方四方の不平不滿が一時に殺殺する心的葛藤に忙殺されて

ゐては、虚心坦懐に沈着いて推敲鍛練してゐられないのが當然であつた。恐らく書肆に對する義理合上據ろなしに自分でも滿足しない未成の原稿をイヤ〳〵ながら引渡したに違ひないのは前後の事情から明瞭に推斷される。

二葉亭の日記に由ると、第三篇の發表された『都之花』を請取つた時は手がブル〳〵慄へて、歩きながら讀んで行く中に忽ち顏色が變つて、『之ほど拙ないとは思はなかつた、印刷して見ると我ながら拙なくて讀むに堪へない』と、讀終つた時は心が早鐘を突く如くワク〳〵して容易に沈着いてゐられなかつたとある。

成程、前にも云つた通り、第三篇は油の十分乘つた第二篇に比べると全部に弛みがあつて氣が抜けてをる。が、同じ時代の他の作家の作と比べて決して見劣りしなかつたが、己れの疵瑕を感ずるに餘りに鋭敏な作者は、丁度神經過敏家が卵の毛で突いたほどの負傷でも血を見ると直ぐ氣絶するやうに、自分の作が意に滿たないと坐ても起つても居られなかつたらしい。聰明に過ぐるものは自信を缺くと昔から云ふが、二葉亭の如きは其の適切な一例であつた。自分を局外に置いて見る時は群小作家皆豆粒よりも小さかつたが、自分を其中の一人として比較する

時は豆粒よりも小さく思ふ人よりも更に一層自分が小さく思はれて堪へられなかつたやうだ。其時の日記にも『今までは某々らの作る小說は拙なくして讀むにたへずと思ひつるが、余の作に比ぶれば彼らの作は遙に勝れり、余は元來小說家にも非ず、又小說家とならんとも思はず、』云々とあるやうに、之より以前から文學に絶望して衣食の道を他に求めるべく考へてゐたのが此の不快な絶望に愈々益々沮喪して斷然文學を思切るべく決心した。

だが、世間は作者自身が失望する如くに此の第三篇にも失望しないで、文人は交を求め書肆は原稿を乞ふて益々止まなかつたので、文學を思切つた二葉亭は是等の文人交際や本屋の應接に堪へられなかつた。日記の一節に曰く、『吉岡書店よりまた新著百種をおくりこす、是は第三卷なり、かう發刊の都度々々におくりこすは予にも筆を執らせんとの下心あればなるべし、夫を知りつゝ取り置くは愚なり、辭みやらんとは思へども流石に打付けに左云はんも何となく氣の毒にてそのまゝに打過ごす、余はかほどまで果斷なき乎、歎ず可き事の第一なり、』と。又曰く、『書肆某來りて四方山の物語をす、余はかゝる射利の徒と交はるだも心苦しけれども之も交際と思ひ返してよきほどにあしらへり、若し心に任せたる世ならましかば彼等如き輩を謝し

て明窓淨几の下に靜に書を讀むべきを、」と。二葉亭が全く文壇から遠ざからうとして苦悶してゐたは之を見ても明かである。

此決心は第三篇の執筆中から萠してゐた。飽くまでも自分の天分を否定し、文學では迚も生活する能力は無いものと斷念め、生中天分の乏しいのを知りつゝも文學三昧に沈湎するは文學を冒瀆する罪惡であると思詰め、何とかして他に生活の道を求めて學問才藝を潰しに投賣しても一家の經濟を脊負つて立たうと覺悟した。が、此覺悟はありながら、一面には極めて狷介で人に下るを好まないと同時に、一面には人に對して頗る臆病であつて、傳を求めて權門貴戚に伺候するは魯か、先輩朋友の間をすらも奔走して賴んで廻るやうな小利口な眞似は生得出來得なかつた。怎うにかしなければならないと思ひつゝも怎うにもする事が出來ないで獨りで窘窮煩悶してゐた。此苦境を見るに見兼ねて、若し仕官する希望でもあるならと片肌拔いで呉れたのが語學校の舊師の古川常一郎であつた。二葉亭は此間の消息を日記に洩らして、官吏は元來心に染まぬが今の場合聊かなりとも俸錢を得て一家を支へる事が出來るなら幸ひであると古川に賴んで、扨てそのあとで、『何となくうら恥かしきやうに心落ちゐず。白石先生の事など憶

出せば背に冷汗を流す」と書いてをる。二葉亭の自卑自屈を餘儀なくされる窘窮煩悶の狀が此の二三行の文字に見えるやうである。

が、結局古川の斡旋で、古川部下の飜譯官として官報局に出仕したのが明治二十二年の夏であつて、之から以後の數年は生活の保障に漸く安心して暫らく官途に韜晦し、文壇からは全く緣を絶つて讀書に沒頭する事が出來た。

七　官報局及び雌伏時代

露語の兩川●高橋時代の官報局●精神心理の研究●罪惡心理と下層研究●最初の家庭生活の失敗●片戀●官報局を去る

二葉亭の仕官を說く前に先づ其恩師古川常一郎を語らねばならない。古川は今から十四五年前に不遇の中に易簀して了つたが、今でも猶ほ健在である筈の市川文吉と聯んで露語學界の二大先輩であつた。此の兩川に二葉亭即ち長谷川を加へて露語の三川と稱されてをる。不思議な事には兩川とも功名心が薄く、各々數年露國に留學して歸朝した後、屢々先進の大官から重要の椅子を薦められても決して肯んじないで、一は終生微官に安んじ、一は早くから仕官を辭し

て、功名榮達を白眼冷笑してゐた。殊に古川は留學前は大隈侯の書生であつて、義弟西源四郎は伊藤公の知遇を受けて終に公の駙馬となつた淺からぬ緣故があつたから、若し些かでも野心が有つたらドンナ方面にでも活躍出來たのである。が、富貴顯榮を見る土芥に等しく、舊外國語學校廢止後は官報局の一屬僚を甘んじて世の榮達を冷笑してゐた。市川文吉は多少の資產があつたからでもあらうが、早くから官途を退隱して釣道樂に韜晦してゐた。二葉亭は此の兩川の薰陶を受けたが、就中古川に親近して古川門下の顏淵子路を任じてゐた。其の性格の一部が古川に由て作られたのは爭はれない。

當時の官報局は頗る異彩があつた。局長が官界の逸民たる高橋健三で、翻譯課長が學界の隱者たる濱田健次郎、其下に古川常一郎、陸實等、何れも聞ゆる曲者（くせもの）が顏を列べ、而して表玄關の受附には明治の初年に海外旅行免狀を二番目に請取つて露國の腦脊髓系を縱斷した大旅行家の嵯峨壽安が控へてゐた。揃ひも揃つて氣骨稜々たる不遇の高材逸足の集合であつて、大隈侯等の維新の當時の築地の梁山泊は知らず、吏臭紛々たる明治の官界史に在つては恐らく當時の官報局ぐらゐ自由の空氣の橫流してゐたは蓋し類を絕してゐるだらう。

高橋健三は官報局の局長室に坐してゐる時でも從五位勳何等の局長閣下でなくて一個の處士自特庵主人であつた。濱田は簡撲質素の學究、古川は卓落不覊の逸民、陸は狷介氣を吐く野客であつた。而して玄關番は高田屋嘉兵衞、幸太夫に繼いでの露國探險者たる一代の奇矯兒壽安老人であつた。局長と云ひ課長と云ひ屬官と云ふは職員錄の紙の上の空名であつて、堂々たる公衙は恰も自大相下らざる書生放談の下宿屋の如く、局長閣下の左右一人として吏臭あるものはなく、煩瑣なる吏務を執るよりは寧ろ詩を品し畫を評し道德を說き政治を談じ、大は世界の形勢より小は折花攀柳の韻事まで高談放論珍說贅議を鬪はすに日も足らずであつた。

二葉亭は此中に投じた。虛文虛禮便佞諂諛を賤しとして仕官するを欲しなかつた二葉亭も此の意外なる自由の空氣に滿足して、局長閣下と盛んに人生問題を論じて大得意であつた。左に右く此間は衣食の安定を得たので、思想を追究する恰も餓ゆるが如き二葉亭は安心して盛んに讀書に沒頭した。殊にダーウヰン、スペンサー等の英國進化論を專ら硏究したが、本來ヘーゲルの流れを汲む露國の思想に養はれてゐたから、到底是等の唯物論だけでは滿足出來ないで、終にコントに走つて爰に初めて一道の曙光に接する感があつた。恐らく二葉亭の思想の根本基礎

を作つて終生を支配したのはコントのポジティヴキズムであつたらう。

此時代の愛讀書であつて、二葉亭の思想を豊かにし根柢を固くしたのはモーヅレーの著述であつた。殊に其の "Pathology of Mind" は最も熱心に反覆翫味して巨細に細究した。此時分の二葉亭の議論の最後の審判官は何時でもモーヅレーであつて、何かにつけてはモーヅレーを引合に出した。『浮雲』に二箇處まで見えるサリーやベインも愛讀書であつて、サリーの所説は屢々議論の典據となつたが、殊に傾倒してゐたのはモーヅレーの研究法であつた。

が、二葉亭は如何なる場合にも批評家であつた。科學を除いては總ての研究は空理であると云ひつゝも科學にも亦不滿足であつて、科學に偏するスペンサーの哲學の如きも或る程度以上は決して推服してゐなかつた。且常に曰く、『科學となると全然無識だから、勢ひ兜を脱いで降參しなけりやならぬが、例へば２２が４といふは欺くべからざる確實の數理であつても、科學者が天體を觀測するに方つて毫釐の違算が屢々何千萬億の錯誤を來すと同樣に、眼前の研究にも亦同じ誤算が無いとは限らない。數其物は確實であつても數を算出する運算の方式は必ずしも正しいとは信じられない』と。此理由からして科學者の說を有力な參考としてゐても或る

程度以上は矢張餘り信仰しなかつた。『科學者といふものは枝振や花ばかりを氣にして根を枯らすを忘れる素人植木屋のやうなものだ。』と云つてゐた。

吳秀三博士の『精神啓微』や『精神病者の書態』を愛讀して、親しく吳博士を訪うて蘊蓄を叩いたのは矢張其頃であつた。續いてロンブロゾー派の著書を搜つて、白痴教育、感化事業、刑事人類學等に興味を持ち、日本の現時の教育家や宗教家が是等の科學的知識を缺く爲め渠等の手に成る救濟事業が往々無用の徒勞に終るを遺憾とし、自ら感化院を創めて不良少年の陶冶や罪人の矯正をしやうといふ計畫を立てた事もあつた。

無論書齋の空想で、實行する意があつたとも思はれ無かつたが、計畫は頗る科學的であつた。當時の二葉亭の說を簡單に掻摘むと、善と云ひ惡と云ふは精神の健全不健全の謂で、所謂敗德者、墮落者、惡人、罪人等は皆精神の缺陥を有する病人である、其の根本の病因を醫さないで訓誡、懲罰、刑辟を加へても何の効が有る筈が無い。今日の感化院が科學の教養の無い道學先生に經營され、今日の監獄が牛頭馬頭に等しい無智なる司獄官に一任される間は百年河淸を待つも惡人や罪人の根を絕やす事は決して出來ない。夫よりも先づ一種の特殊精神病院を建設して

所謂不良少年や罪人を收容し、最新科學の研究を應用して渠等の感覺缺如や精神缺陷を精査し、根本の病因を究めて之を醫療するのが科學的でもあり且有効でもある。尤も今日の科學はマダ研究が足りないから、罪人や不良少年に對する根本的精神療法もマダ十分に攻究されてゐないが、先づ一つの實驗所を作るツモリで科學的手段を應用する感化院や監獄を設置し、恰も病人に對する醫者の態度で渠等の犯罪や惡癖に對する對症療法を研究するが社會政策上最も急務である。之までの所謂哲學や宗教や道德や法律は皆此の根本の人間の疾患に立到らない空理空文である。若し此の精神的缺陷に對する心理療法が完成したなら古今の聖賢の教訓は總て皆廢紙となつて了うと云ふのが其頃の二葉亭の說であつた。

此說はモーヅレーやロンブロゾから得たので、二葉亭自身の創見では無かつた。且近世心理學の片端(かたはし)をだも嚙つてるものなら誰でも心得てる格別目新らしくも無い說であるし、今では此一派の學說は古臭くなつてる。が、二葉亭は總て此見地から人を見てゐた。例へば下層社會の低劣な品性の如きも教育の不備よりは寧ろ精神缺陷に歸し、一時好んで下層社會に出入するやライフの研究者を任ずると共に下層社會に共通する惡俗汚習の病因たる精神缺陷を救ふの教師

を自任し、細さに下級の生活狀態を究めて種々の自己流の精神醫療の方法を案出して試みた。尤も此試みは大抵失敗して、傍觀者からは頗る滑稽に思はれた事もあつたが、當人自身は一生懸命で、此失敗を來す所以は畢竟科學の素養を缺くから應病與藥の適切な方法を案出する事が出來ないのだと考へて益々研究に深入した。一時は其の手段の一つとしての禪の研究を思ひ附き、『禪門法語集』や『白隱全集』を頻りに精讀し、禪宗の雜誌まで購讀し、熱心鋭意して禪の工風に耽つてゐた。が、衞養療法や靜座法を研究する意で千家の茶事を學ぶに等しい二葉亭の態度では禪に滿足出來る筈が無いのが當然で、結局禪には全く失望した。禪は思想上のキューリオ、精神上の催眠劑であつて、今日の紛糾錯綜入亂れた文化の葛藤を解決し制馭する威力のないものであると云ふのが二葉亭の禪に對する斷案で、何かの茶咄の序に一休は賣僧、白隱は落語家、桃水和尙はモーヅレーの研究資料だと茶かした事があつた。

結局書齋の研究ばかりでは滿足出來ないで、學者の畑水練は何の役にも立たぬからと、實際に人事の紛糾に觸れて人生を味はうとし、此好奇心に煽られて屢々社會の暗黑面に出入した。役所に遠いのを假托に、猿樂町の親の家を離れて四谷の津の守の女の寫眞屋の二階に下宿した

事もあつた。神田の皆川町の桶屋の二階に同居した事もあつた。奇妙な風躰をして――例へば洋服の上に羽織を引掛けて肩から瓢箪を提げるといふやうな變挺な扮裝をして田舍の達磨茶屋を遊び廻つたり、印袢纏に彌藏をきめ込んで職人の仲間へ入つて見たり、然うかと思ふと洋服に高帽子で居酒屋に飛込んで見たり、垢染みた綿服の尻からげか何かで立派な料理屋へ澄まして入つて見たり、大袈裟に威張散らして一文も祝儀をやらなかつたり、態と思切つて奢つたれた眞似をした擧句に過分な茶代を氣張つて見たり、シンネリムッツリと佛頂面をして置いて急に噪ぎ出して騷いで見たり、故更に桁を外れた馬鹿々々しい種々雜多な眞似をして一々其經驗を味つて見て、之が人生だよと喜んでゐた。

殊に其頃は好んで下層社會に出入し、旅行をする時も立派な旅館よりは商人宿や達磨茶屋に泊つたり、東京にゐても居酒屋や屋臺店へ飛込んで八さん熊さんと列んで醤油樽に腰を掛けて酒盃の獻酬をしたりして、人間の美くしい天眞はお化粧をして綾羅に包まれてゐる高等社會には決して現はれないで、垢面襤褸の下層者に却て眞のヒューマニチィを見る事が出來ると云つてゐた。此の斷案の中に眞理が無い事は無いか、此の偏寄つた下層興味に屢々誤まられて、例へ

ば婦人を觀察するに方つても、英語の出來るお孃さんや女學校出の若い奧さんは人形同樣で何の役にも立たないと頭から蔑しつけ、下等女の阿婆摺を活動力に富んでると感服したり、貧乏人の娘が汚ない扮裝をして怯めず憶せず平氣な顏をしてゐるのを虛榮に俘はれない天眞爛漫と解釋したり、飛んでもない見當違ひをする事が度々で有つた。

同じ見當違ひからして罪人や墮落漢や敗德者に極端に同情し、時としては同情を通り越して矢鱈と讃美し、宛も渠等の總てが皆ショーペンハワーやニーチエのやうな天才であつて、社會の壓迫に餘儀なくされ、或は求めて反抗して誤まつて岐路に奔つた氣の毒な犧牲であるやうに考へてゐた。少くも渠等が世間の道德に背いたには疚しくも恥かしくもない立派な哲學的根據があるやうに思つてゐた。此考察も萬更見當違ひでなく、世には確かに二葉亭の信ずるやうな據ろない境遇の犧牲となつて墮落した天才や、立派な主張を持つてる敗德者も有るには有るが、二葉亭は一切の罪人や墮落者の罪惡を強て肯定する氣味合があつた。殊に貧民に對しては異常な同感を拂つて、若し人間から學問技藝等のお化粧を奪つて裸一貫の露出しとしたなら、貧乏人の人格の方が遙かに高等社會に勝つてゐると常に云つてゐた。此說も亦必ずしも見當違ひで

なく、無知文盲なる貧民階級に往々縉紳貴族に勝るの立派な人格者を見出す事も稀には有るが二葉亭は強てイリュージョンを作つて總ての貧民を理想化して見てゐた。

此見地からして二葉亭は無知なる腹掛股引の職人を紳士と見て交際し、白粉を塗つた淪落の女を貴夫人同様に待遇し、渠等に恩惠を施しつゝ道德を說き、渠等を罪惡の淵から救ふて眞人たらしむべく種々の手段を講じた。が、實行に就ては全く失敗した。晩年或る時、此の時代の誤解や失敗の經驗を語つて曰く、「あの時代、無暗と下層社會が戀しかつたのは、矢張露國の小說に誤まられたのだ。スラヴ人は元來空想に耽る國民性だから、無教育者の中にも意外な推理力や想像力を蓄へて人生をフヰロソファイズするものがある。露西亞は階級制度の嚴重な國だから立派な學問權識があつても下層に生れたものは終生下層に沈淪してをらねばならない。其結果が意外な根柢ある革命的煽動が下層社會に初まつたり、美くしいヒューマニチーが貧民の間に發現されたりする。露國の小說には此間の消息が屢々洩らされて下層社會の爲めに氣を吐いてゐる。恁ういふ小說に讀耽つたもんだから自然下層社會に興味を持つやうになつたが、日本の下層社會は根本から駄目だ。精神の缺乏が物質の不足以上だから、何を說いても空々寂々で

少しも理解しない。倫理も哲學もあつたもんぢや無い、根柢からして腐敗し切つてゐて到底救ふ可からずだ――」と日本の下級者の無知無恥に愛想を盡かしてゐた。恁ういふ見當違ひをしたのはツマリ理想負けがしたので、二葉亭の面目は恁ういふ失敗に却て躍如してをる。

官報局に出仕する間もなく二葉亭は家庭を作つて兩親と別居した。初めは仲猿樂町に新居を構へたが、其後眞砂町、皆川町、飯田町、東片町と屢々轉居した。皆川町から飯田町時代は兒供が二人となつた上に細君(先妻)の妹を二人までも引取り、兩親にも仕送つてゐたから、家計は常に不足勝ちであつた。其上に二葉亭は、ドチラかといふと浪費家であつて、衣服や道具には無頓着であつたが食物には可成な贅澤をした。加之ならず、其頃の先妻は家政を料理する才が缺けてゐて、二人が二人とも揃つて經濟に無茶であつたから、左らぬだに不足勝ちの家計が一層紊亂して、内證は岡目に解らぬほどの不如意を極めてゐた。

且加ふに夫婦の間が始終折合はないで、沈默の衝突が度々繰返された。其間の紛糾んだ事情は餘り深く立入る必要は無いが、左に右く夫妻の身分教養が著るしく懸隔して、互に相理解し相融合するには餘りに距離があり過ぎたのが原因であつた。公平に見たなら二葉亭の方が暴君

で。細君の方は極めて柔順な奴隷であつたらうが、夫婦の間が暴君と奴隷との關係では互に滿足出來る筈がないから、恰も利刄を揮つて泥土を斬るに等しい何等の手答への無い葛藤を何年か續けた後に、二葉亭は終に力負け根負けがして草臥れて了つた。二葉亭の爲めにも勿論不幸であつたが、細君の方にも同情すべき氣の毒な事情があつた。到頭最後が破緣となつて、善後の處分をする爲めに二葉亭は金を作らねばならなくなつた。

其時分、文壇の機運は愈々益々爛熟し、紅露は相對壘して互に覇を稱し、鷗外は千朶山房に群賢を集めて獅子吼し、逍遙は門下の才俊を率ひて早稻田に威武を張り、樗牛は新たに起つて旗幟を振ひ、四方の英才俊髦一時に崛起して雄を競うてゐた。二葉亭は『浮雲』以後全く韜晦して此の文壇の氣運を白眼冷視し、一時莫逆を結んだ逍遙とも音信を絕してゐたが、丁度其頃より少し以前、逍遙と二葉亭とは偶然私の家で邂逅して久濶を叙し、夫から再び往來するやうになつてゐた。其頃『早稻田文學』を根城として專ら新劇の鼓吹に腐心してゐた逍遙は頻りに二葉亭の再起を促がしつゝあつたが、折も折、時なる哉、二葉亭は此の一家の葛藤の善後處分を逍遙に謀つた結果、終に再び筆を操るべく餘儀なくされたのがツルゲーネフの『アーシャ』

即ち『片戀』の飜譯であつた。

其時は明治二十九年の十二月、即ち『浮雲』第三篇發表後八年目であつた。世間は恰も暫らく消息不明であつた遠征將軍が萬里の旅から凱旋したのを迎へるやうに歡呼した。が、二葉亭自身は一時の經濟上の必要の爲め據ろなく筆を操つたので、再び文壇に歸るツモリは毫しも無かつた。文學に對する態度も亦隨つて以前とは全く違つて、一生の使命とするといふやうな意氣込も理想や抱負も全で失くなつてゐた。以前は重く感じた責任をも感じなくなつて、『自分は文人で無い』と文學とは絶縁した意でゐたから、ツルゲーネフを譯したのも唯の一時の融通の爲めの據ろないドラッジェリーで、官報局で外字新聞を翻譯した時と同じ心持であつた。尤も二葉亭は外字新聞を翻譯するにも矢張相當な苦辛をした。如何にドラッジエリーのツモリでもツルゲーネフを外字新聞並に片附ける事は二葉亭の性分として出來得なかつた。が、其心持は以前と違つて遙かに氣楽であつた。夫ゆゑ『片戀』一册ぎりで再び彗星の如く隱れて了ふ意であつたが、財政上の必要が『片戀』一册の原稿料では充たすに足りなかつたので、恰も凱旋將軍を迎へる如くに爭ひ集まる書肆の要求を無下に斥ける事も出來なかつた。

折から恰も官報局長は更任して、卓落不覊なる處士高橋自恃庵は去つて、晨亭門下の叔孫通たる奥田義人が代つて其椅子に坐した。奥田は東京市の名市長として最後の光榮を柩に飾つたが、本來官僚の寵兒で、禮儀三千威儀三百の官人氣質の權化であつたから、豪放洒脱な官界の逸人高橋自恃庵が作つた放縱自由な空氣は忽ち一掃されて吏臭紛々たる官場と化して了つた。陸や濱田は早くも去つて古川一人が自恃庵の殘壘に據つてゐたが、區々たる官僚の規矩を守るを屑よくしないスラヴの變形たる老書生が官人氣質の小叔孫通と容れる筈が無いから、暫らく無言の睨み合ひをした後終に引退して了つた。二葉亭は本來狷介不羈なる性質として迎合屈從を一要件とする俗吏を甘んじてゐられないのが當然であつて、八年の長い間を官報局吏として辛抱してゐたのは、上に自由なる高橋健三を戴いて、恩師古川の下に吏務に服してゐたからであつた。高橋が去り古川か罷める以上はイツマデ腰辨を甘んずる義理も興味も無いので、古川が罷めると間もなく自分も辭職して了つた。二葉亭の一生中、其位置に滿足して碌々として職務を樂んでゐたは官報局の雌伏時代のみであつた。

八　放浪時代から語學校教授

原稿生活・實業熱・海軍編修・語學校教授

官報局を罷めてから暫らく放浪してゐた。其間に海軍の編修書記ともなり陸軍の囑托教師ともなつたが、ドレも之も一時の腰掛であつて、初めから其椅子に安んずる意は少しも無かつたのだ。ツルゲーネフの『ルージン』を初めゴーゴリやガルシンの短篇の飜譯にクツクツとなつて『新小說』や『太陽』や『文藝俱樂部』に寄稿したのは其時代であつた。

が、文壇的活動は元來本志でなく、一時の方便として餘義なくされたのだから、其日々々を糊口する外には何の野心が無かつた。『浮雲』第三編が發表された『都の花』を請取つた時は手が慄へたといふほどの神經質にも似合はず、此時代は文壇的には無關心であつて世間の毀譽褒貶は全く風馬牛であつた。同じ飜譯をするにも『あひゞき』や『めぐりあひ』時代と違つて餘り原文には拘束されないで、自由氣儘にグン〳〵譯し、『昔のやうな糞正直な所爲はしない、拙い處はドン〳〵直してやる』と、屢々豪語してゐた。が、興に乘じた氣焰の飛沫で豪さうな

事を云つても、根が細心周密な神經質の二葉亭には勝手に原文を拔かしたり變へたりするやうな不誠實な所爲は決して出來ないので、『無暗と譯しなぐるんだ』と云ひつゝも世間の尋常翻譯と比べては矢張忠實に原文に從つてゐた。

が、イクラ譯しなぐるツモリでゐても、世間の賃譯をするもののやうな無責任にはなれないのが二葉亭の性分であつた。例へば『浮草』の如き丁度關節炎を患ひて足腰が起たないで臥てゐた最中で、病床に腹這になつて病苦と鬪ひながらポツ〳〵譯し、三十枚四十枚と譯し了ると直ぐ讀返しもしないで金に換へたものであるが、それでも二葉亭の飜譯としては可成不手際であつても、英譯本と對照するに矢張擅に原文を拔いたり變へたりした箇處は少しも無かつた。イクラ譯しなぐる意でも二葉亭には譯しなぐる事は出來なかつた。

二葉亭が官報局を罷めた直接の原因は局長の更任に續いて恩師古川の理由なき罷免に對する不滿であつたが、其以外に何時かは俗吏の圈內を脫して自由の天地に翺翔しやうとする豫ての志望が幇助つてゐた。本と〳〵二葉亭は軍事であれ外交であれ、左に右く何であらうとも東亞の舞臺に立つて活動したいのが夙昔の志であつた。軍人たらんと欲して失敗し、外交家たらん

と願うて亦躊躇し、據ろなしに一時横道に外れて文學三昧に遊んでゐたが、夙昔の志望は決して消磨したのでは無かつた。官報局に在職中、哲學や精神生理に頻りに興味を持つて研究してゐたが、東亞の國際關係や産業等の調査は之が爲めに少しも怠たらないで繼續してゐたので、一度は東亞の舞臺に躍り出して一と芝居打たうとする念は片時も絶えなかつた。官報局を罷めたのは偶然であるが、退職すると同時に此野心が俄に活火山の如く燃上つて來た。

然るに野心を充たす爲めの計畫は浮んで來ても、何をするにも先立つ金を作るは決して容易で無かつた。一家の葛藤を處理する爲めの聊かの金ですらが筆の稼ぎでは手取早く調達し難いのを染〴〵と感じた渠は、『文學では迚も駄目だ。金儲け、金儲け！』と心の底から叫ぶやうになつた。加之ならず、語學校時代の友人の多くは實業界に投じ、中には立派に成功して財界の頭株に數へられてるものもあるので、折に觸れて渠等と邂逅して渠等の辣手を振ふ經營振を目のあたりに見る度毎に自分の經濟的手腕の實は餘り頼りにならないのを内心危なッかしく思ひながらも髀肉に堪へられなかつた。其度毎に獨語して『金儲け、金儲け！』と呟きつゝ金儲け専門の實業界に乘出さうとした。

其必要からして、官報局を罷めた後の二葉亭は俄に邊幅を飾るやうになつた。一體衣服には少しも頓着しない方で、親讓りの古ぼけた銘仙にメレンスの兵兒帶で何處へでも押掛けたのが、俄に美服を新調して着飾り出した。『之が資本だ、コンナ服裝をしないと相手になつて呉れない』と常綺羅で押出し、學校以來疎縁となつた同窓の實業家達と盛んに交際し初めて、隨分待合入りまでもして渠等と提携する金儲けの機會を覘つてゐた。が、二葉亭の方は心の底から眞劍であつても、對手の方は少しもマジメに請取つて呉れなかつた。

『右の手に算盤を持つて、左の手に劍を把り、背ろの壁に東亞圖を掛けて、懷ろには刑事人類學を入れて置く、之でなければ不可ん。』などと頻りに空想を談じてゐた。尤も座興の戲れで、如何に二葉亭が世間に暗くても之ほど空想的では決して無かつた。が、恁ういふ座興の戲れが折角實業界へ飛込まうとするマジメな希望をどれほど妨げたかは解らなかつた。且又、之ほど空想的で無かつたにしろ、極めて平凡な常識一點張の實業家氣質から見れば二葉亭の實業論が非常な空想を加味してゐたのは爭はれなかつた。第一、實業家の金儲けは金を儲ける爲めの金儲けであつて、金を以て始まり金を以て終るが、二葉亭の金儲けは何時でも人道又は國家の背

景を脊負つてゐるのが不用意の座談の中にも現はれてゐたから、實業界に飛込むマジメな志はあつても對手になつて機會を與へて呉れるものは一人も無かつた。

加之ならず、一方には生活上據ろなしに續々翻譯し、心にも無い文學上の談話が度々雜誌に載せられて文名が日に益々高くなるので實業界の友人からは愈々文人扱ひされ、マジメに實業談を試みても一笑に附されて了つた。『小説なんぞを書いてちやァ迚も駄目だ、至で對手にして呉れない、』と度々不平を洩らしてゐた。

二葉亭を海軍編修書記に推薦したは矢張舊友の一人たる鈴木某（其頃海軍主計大監）の斡旋であつた。鈴木は極めて粗放な軍人肌であつて、二葉亭の人物や抱負を理解もしなければ理解しやうとも思はず、但だ二葉亭が浪人してゐるのを氣の毒がつて斡旋して呉れたので、『丁度君には適當の位置だ。恁うして辛抱してゐれば追々高等官になれる、』と大いに兄貴振を發揮して二葉亭に辛抱を勸告した。

『親切な好い男だが、高等官になれば誰でも滿足するものと思つてる、』と二葉亭は苦り切つてゐた。（鈴木は日露戰爭後は海軍を引退して實業界の諸方面に頭を突込んでゐたが、位階勳等

を持つてる軍人だから、置き物に祭り上げられるだけで一向花々しい成功もしなかつたやうだ。今はドウしてゐるかサッパリ消息を聞かない。)

語學校の教授となつたのは夫から間もなく、明治三十二年の九月であつた。高等官の教授を榮としたわけでは無いが、露語科の主任たる恩師古川の推擧を滿足して喜んで就任した。古川は其後幾何もなく病氣の爲め辭職したので、二葉亭は代つて主任の椅子に坐した。

教師としての二葉亭は極めて叮寧親切であつて、諸生の頭に徹底するまで反覆教授して少しも倦まなかつた。だが、夫よりも猶ほヨリ多く諸生を心服さしたのは二葉亭の鼓吹した學風であつた。凡そ語學は先づ民族の研究から初めなければならない必要と、日露の地理的關係から生ずる露語學者の特殊の使命といふやうな事を語學を教授する傍ら常に怠らず力說し、尋常語學の學習以上に露語學者としての特殊の氣風を作るに少からず腐心した。同時に露語に交涉する各會社各事業から浦鹽の商人にまで連絡をつけて卒業生の生活の便宜まで心配した。二葉亭が語學校に在任したは僅かに三年であつたが、其人格は遍く露語學生を薰化して、先進市川及び古川と聯んで露語の三川と仰がれるまで悅服された。日露戰爭に參加して拔群の功績を擧

けた露語通譯官の多くは二葉亭の薫陶を受けたものであつた。

九　哈　爾　賓　行

二葉亭獨特の實業論。支那屋論。哈爾賓の生活及び書簡

が、二葉亭は長く語學校の椅子に安んずる事が出來なかつた。本と〳〵教職に就いたは恩師の推薦を德とした爲めで、教育家を一生の仕事とするツモリは無かつたのだから、暫らくすると一時鎭靜した實業熱が再び沸熱して來た。

恰も其時分、暫らく西比利亞に滯留してゐた舊同窓の佐波が浦鹽から歸朝して屢々二葉亭を訪問し、新たに薩哈連から浦鹽へ渡航した一人の友人からも度々手紙が來て、浦鹽方面の消息が頻りに耳に入るので、機會を待構へてゐた實業上の野心は忽ちムク〳〵と頭を擡上げて食指俄に動くの感に堪へなかつた。

二葉亭の實業といふは單なる金儲け一天張では無かつた。實業側の友人から餘り對手にされなかつたは之が爲めであつたが、二葉亭の夙昔の希望から云へば一貫した國際的興味を有する

問題であつた。二葉亭に云はせると、日本人が浦鹽あたりで盛んに商賣するのは、當人自身は金儲けより外考へないでも、之が卽ち日本の勢力を扶植する所以であるから、商賣の種類は何であらうとも關はぬ、海外の金儲けは卽ち國富の膨脹、國權の伸長、國威の宣揚である。極端な例を擧げれば、醜業婦の渡航を國辱である如く騷ぐは短見者流の島國的愛國論であつて、醜業婦の行く處必ず日本の商品を伴ひ日本の商業を發達させ日本の地盤を固めて行く。東露に若干たりとも日本の商業を擴げる事が出來たのは全く醜業婦のお庇である。露國は自國の商工業を保護する爲に外國貨物に重稅を課し、例へば日本の燐寸(マッチ)の如き一本イクラに賣らねばならぬほどの準禁止稅を賦課してゐる。が、恁ういふ極端な保護政策を取つて外國貨物を塗絕しやうとしてゐるが、獨り外國醜業婦の移入に限つては殖民政策の必要から非常に歡迎し、上陸後も亦頗る好遇して營業の安全及び利益を隱然保護してゐる。浦鹽に於ける日本の商賣が盛んに發展しつゝあるは畢竟醜業婦の背後に隱れて活動する結果であるから、此特惠に乘じて愈々益々多數の醜業婦を輸出するは取も直さず益々日本の商業を振ふ所以である、といふのが其頃屢々二葉亭に力說された醜業婦論であつた。

二葉亭の醜業婦論は一時交友間に有名であつた。其頃二葉亭の家に出入したものは大抵一度は醜業婦論を聞かされた。二葉亭の說に由ると、日本の醜業婦の勢力は露人を風化して次第に日本雜貨の使用を促がし、例へば鰹節が極めて滋味あり衞養ある食料品として露人の間に珍重されて、近年俄に鰹節の輸出を激增したのは露人が日本の醜業婦に敎へられた結果である。且日本の醜業婦の露人に落籍されるものが益々多く、中には案外なる上流階級の主婦となるものさへあつて、之が爲めに日本風の生活が露人間に流行し、日本品でなければ上等でないやうに思ふものが段々殖えて來た。其結果が日本の商品の販路擴張となり、日露兩國民の相互の理解となり、國際上の無言の勢力となるから、若し資本家の保護があれば國際上の最良政策としても浦鹽へ行つて女郎屋を初めると云つてゐた。此女郎屋論は座興の空談でなくして案外マジメな實行的基礎を持つてるらしかつたが、餘り突梯だから誰もマジメに聞かなかつた。二葉亭と實業といふさへも大抵な人の耳には奇怪に響いた。況してや二葉亭と女郎屋といふに到つては小說の趣向を聞くと同じ與味を以て聞くより外無かつた。

左に右く二葉亭の實業といふは女郎屋に限らず、總て單なる金儲けでは無かつた。金に逼迫

してゐたから金も儲けたかつたらうが、金を儲ける以外に大なる經綸があつた。其經綸が實業家の眼から見ると云ふべくして行ふべからざる空想であつたから、偶々其方面の有力者に話しても聞棄てにされるばかりで話に乘つて呉れなかつた。

然るに浦鹽の友なる佐波武雄か浦鹽の商人徳永と一緒に歸朝して偶然二葉亭を訪問したのが二葉亭の希望を果す機會となつた。佐波は夫まで二葉亭から度々浦鹽渡航の希望を洩らされても、文人の性格と商賣とは一致しないといふ理由から不理を說いてゐたが、怎ういふキッカケからか三人が相會して一夕の交歡を盡した席上、徳永商店の顧問として二葉亭を聘さうといふ相談が熱した。其頃浦鹽で最も盛んに商賣してゐたのは杉浦龍吉で、杉浦が露國に於ける日本の商人を代表してゐた。徳永は新進であつたが、杉浦と拮抗して大いに雄飛しやうとし、恰も哈爾賓に手を伸ばして新たに支店を開かうとする際であつたから、怎ういふ方面に二葉亭の力を煩はす意があつたか知らぬが、哈爾賓の支店に遊び半分來て呉れないかと云つた。二葉亭は徳永とは初對面であつたが、徳永の人物が臂を把つて共に語るに足ると思込み、其報酬は漸く東京の一家を支ふに過ぎない位であつたが、極めて束縛されない寛大な條件を徳として、[illegible]

の素志を貫ぬく足掛りには持つて來いであると喜んで快諾した。且恰も語學校の校長高楠と衝突して心中不愉快に堪へられなかつた際だつたから、決然語學校の椅子を拋棄して出掛ける氣になつた。多くの友人の中には折角足場の固くなり掛けた語學校の椅子を棄てるを惜んで切に忠告するものもあつた。家族は前途を危ぶんで餘り進まなかつた。加之ならず語學校の僚友及び學生は留任を希望して嘆願した。が、二葉亭は寶の山へ入る如き希望を抱いて、三十五年の五月末に斷然語學校を辭職すると直ちに東京を出發した。

　此の西比利亞行に就ては色々な說がある。啻に德永商店の招聘に應じたばかりでなく、別に或筋からの使命を受けてゐたといふ說もある。が、恐らくは一個の想像說であらう。二葉亭は早くから國際的興味を有して或る場合には隨分熱狂してゐた。が、祕密の使命を果すに適當な人物では決して無かつた。二葉亭の人物を見立てゝそんな使命を托する人もあるまいし、托せられて輕率に應ずる二葉亭でも無かつた。且若しそんな使命を受けてゐたなら、二葉亭は最少し豊かであるべき筈であつたが、哈爾賓到着後は萬事が豫想と反して思ふやうにならなかつたのみならず、財政上にも亦頗る窮乏して自分自身は猶更、留守宅への送金も亦豫期の如くなら

ざるほど頗る困迫してゐた。

東京を出發する前、二葉亭は暇乞ひに來て、「何も特別の用務は無いので、唯來てさへ呉れれば宜いといふのだ。露西亞では官憲の交渉が七面倒臭いから、多分そんな方面にでも向ける意(つもり)だらう。左に右く來いといふから行つて見るので、其中に面白い仕事が見付かつたら其方(そつち)へ行つて了ふのサ。」と無造作に云つた。

が、哈爾賓へ行つて何をした？　縱令聊かにもせよ旅費まで出して呼ぶからには必ず何かの思はくが德永にあつたに違ひない。が、二葉亭が着くと間もなく哈爾賓では猛烈な虎疫が流行して毎日八百五十人といふ新患者を生じ、シカモ防疫設備が成つてをらんので患者の大部分が斃れて了ふといふ騷ぎであつたから、市民は驚慌して商賣は殆んど閉止して了つた。搗てゝ加へて其頃から外國人、殊に日本人に對して嚴しく警戒し、動やともすると軍事探偵視して直ぐ逮捕した。或る日本人は馬車の中で寺院の寫眞を見てゐた處を警吏に見咎められて十日間抑留された。又他の或る日本人は或る工事を請負つて職工を搜す爲め浦鹽哈爾賓間を數度往復したので三ヶ月の禁錮に處された。日本人といふ日本人は皆恁ういふ常識では理解されない無法な

壓迫を受けたから手も足も出せなくなつた。大いに發展するツモリの德永商店も手を伸ばす處か壓迫されて縮少しなければならなくなつた。

搗てゝ加へて哈爾賓へ着く草々詰らぬ奇禍を買つて拘留された。當時哈爾賓では畜犬箝口令が布かれ、箝口せざる犬は野犬と見做されて撲殺された。然るに德永商店では數頭の飼犬の中の一頭だけ轡を施こして鎖で繫いだが、殘りの何頭は野犬として解放して了つた。すると或日、其中の一頭が巡査に吠付き、追はれて元の飼主たる德永商店に逃込んだのを巡査は追掛けて來て、店から引摺出して店前で撲殺し、且德永を飼主と認定するゆゑ卽時に始末書を警察へ出せと嚴命した。丁度二葉亭は居合はしたので不法を詰つて彼是れ押問答をすると、無法にも二三人の巡査が一度に二葉亭に躍り蒐つて戸外へ突飛ばし、四の五の云はさず拘引して留置檻へ投げ込んで了つた。德永店員を初め在留日本人は此報を得て喫驚し、重立つものが數人警察署へ出頭して嘆願し、二葉亭が德永店員で無い事を說明したので一時間經たない中に放還され、同時に二葉亭の身分や位置が解つたので、其晩巡査部長が態々來訪して全く部下の一時の誤解であつたから何分穩便にして吳れと平詑まりに陳謝して、事件は何でもなく容易に落着したが、

詰らぬ事で飛んだ目に會つた。二葉亭が軍事探偵の嫌疑で二タ月か三月も拘禁されたやうに噂され、之に關聯して祕密の使命を受けてゐたかのやうな想像說まで生じたのは多分此事が訛傳されたのであらう。事實は犬の間違であつたのだ。

こんな咄にもならない馬鹿々々しい目に會つて二葉亭は幾分か氣を腐らせた。もと〳〵初めから德永商店に長く粘り着いてる心持は無く、德永を踏臺にして他の仕事を見付ける意でゐたのだから、日本人の仕事が一も二もなく抑へつけられて手も足も出せない當時の哈爾賓の事情を見ては、此上永く沈着く氣になれなくなつた。そこで哈爾賓を中心として北滿一帶東蒙古に到るの商工業、物產、貨物の集散、交通輸送の狀況等を細さに調査した後、終に東淸鐵道沿線の南滿各地を視察しつゝ大連、旅順から營口を經て北京へ行つた。

十　北京時代

川島浪速と佐々木照山。提調時代の生活。衝突歸朝

北京へ行つた目的は極東の舞臺の中心たる北京の政情を視察する傍ら支那を知る爲めの必要

上、本場の支那語を勉強するツモリであつたのである。幸ひ舊語學校の同窓の川島浪速が其頃警務學堂監督として北京に在任して聲望隆々日の出の勢ひであつたので、久し振で訪問して舊情を煖め旁々志望を打明けて相談した處が、一夕の歡談が忽ち肝膽相照らして終に川島の配下に學堂の提調に就任する事となつた。

川島浪速の名は今では知らないものは無い。滿洲朝滅亡後北京の舞臺を去つて歸朝し、近年淺間の山莊に雌伏して靜かに形勢を觀望してゐるが、川島の名は肅親王の姻親として復辟派の日本人の巨頭として嵎を負ふの虎の如くに今でも恐れられてをる。舊語學校の支那語科出身で、若い東方策士のグループの一人として二葉亭とは學校時代からの親交であつた。舊語學校廢校後は左らでも需要の少ない支那語科の出身は皆窮乏してゐたが、殊に川島は三國志か水滸傳から でも抜け出して來たやうな豪傑肌だつたから他にも容れられず自らも求めやうともしないで陋巷に窮居し、一時は朝夕にも差支へて幼き弟妹が饑に泣くほどのドン底に落ちた。團匪事件の時、陸軍通譯として招集され、從軍中屢々清廷の宗室大官と親近する中に計らずも肅親王の知遇を得たのが青雲の機緣となつた。事件落着後清廷が目覺めて改革を行はんとするや、川島

は粛親王府に厚聘されて警務學堂を創設し、每期四百名の學生を養ふて淸國警察を補充し、實に學堂敎務を統ぶるのみならず學堂出身者の任命の詮衡及び進退黜陟等總てを委任するといふ重い權限で監督に任じた。當時の（或は今でも）支那の軍制は極めて不備であつて、各省兵勇は恰も烏合の無頼漢のやうなものだつたから、組織的に訓練された學堂出身の警吏は兵勇よりも信頼されて事實上軍務をも帶びてゐた。隨つて之を統率する川島の威權は我が警視總監以上であつて、粛親王を背後の力として聲威隆々中外を壓する勢ひであつた。

提調といふは監督の下に總敎習と聯び立つ學堂事務の總轄者であつた。出納庶務から人事の一切を綜べ、學堂の機密にも參じ外部の交渉にも當つて、恰も大藏と內務と外務とを兼掌してゐたから、任務は頗る重くて極めて困難であつた。二葉亭は生中文名が高く在留日本人間にも聞えてゐたので、就任の風說あるや學堂の面々は皆小說家の提調を迎ふるを喜ばなかつた。就中、總敎習稻田穰の如きは當初から不信任を公言して抗議を持出さうとした。然るに愈々新任提調として出頭するや、一同は皆瀟洒たる風流才人を見るべく想像してゐたに反して、意外にも狀貌魁偉なる重厚沈毅の二葉亭を迎へて一見忽ち信服して了つた。

川島の妹婿たる佐々木照山も蒙古から歸りたての鬱骨稜々として北京に傲睨してゐた大元氣から小說家二葉亭が學堂提調に任ぜられたと聞いて太く激昂し、虎髯逆立つて川島公館に怒鳴り込んだ。『小說家を提調にして怎うする』と厲聲川島に喰つて蒐ると、『先ア左も右くも一度會つて見るサ』と云はれて川島の仲介で二葉亭と會見し、鼎座して相語つて忽ち器識の凡ならざるに嘆服し、學堂の爲めの良提調、川島の爲めの好參謀を得たるを滿足し、夫から以來は度々往來して互に相披瀝して國事を談ずるを快としたさうだ。

二葉亭の提調生活は當時私に送つた次の手紙に髣髴としてをる。

『拜啓、今日は支那の十二月二十八日にて學校も冬期休業中ゆゑ至て閑散なるべき理窟なれど小生の職務は學堂庶務會計一切の事宜を辨理するに在りと支那流にては申す職掌ゆゑ日曜も祭日も滅茶苦茶に忙がしく、一昨夜なども徹夜して所謂事宜を辨理候始末ほと〳〵閉口致候うちに自ら一種のおもしろみ流石になきにしもあらず、このおもしろみ讀書の面白味にもあらず談理のおもしろみにもあらで一種變挺なおもしろみに候、小生惟ふに學者の樂しむ所は理のおもしろみ、詩人の樂しむ所は情のおもしろみ、事務家の樂しむ所は action

のおもしろみ、事の趣にあらんか、元來當學堂は表面は清國の一學堂なれど裏面は日本の勢力扶植の一機關たれば自ら志士集合所の如き趣ありて公使館あたりの純然たる官吏社會より觀れば頗る危險の分子を含みたる一團體の如く目さるゝ傾有之、爲に隨分迷惑を感じ候事も有之候へど、そこが卽ち一種の面白味の存する所にて學堂の仕事常に必しも學堂らしからず、時ありて梁山泊の豪傑連が額を鳩めて密に勢力擴張策を講ずるなど隨分變挺來な事ありて其都度提調先生私かに自ら當代の蕭何を以て處るといふ、こんな學堂が世間にまたと有るべくも覺えず候、然れどもおもしろみの在る所は又くるしみの伏在する所にて其間一種いふべからざる苦痛も有之、此苦痛最初は至て輕微なりしも仕事に深入すればするほど重且大になりゆきて時には殆んど耐へがたき事も有之候、小生の力能く此苦痛に克ち四圍の困難を排除する事を得ば他日多少の事功を成就し得んも、此苦痛と困難とに打負くれば最早それまでにて滅茶々々に失敗致すべく、さうなつたら已むを得ず日本へ遁歸りて再び生命を一枝の筆に托せざるを得ざるべきも、先づそれまでは死力を盡して奮鬪の覺悟に候、北京の町の汚なさお話になつたものにあらず、官中厠と中候共同便所の如きも

の往來の兩側に處々散在すれども日本の共同便所と同日に談ずべくもなし、唯大道上に一空地を劃し低き土壁を繞らしたるのみにて糞壺もなければ小便溜もなく皆垂流しなり、然れども警察の取締皆無の爲め往來の人隨所に垂流すが故に往來の少し引込みたる所などには必ず黃なるもの累々として堆く、黃なる水滿々として窪みに溜りをりて臭氣紛々として人に逼る、その癖大通に在つては兩側に櫛比せる商戶金色燦爛として遠目には頗る立派なれど近く視れば皆芝居の書割然たる建物にて誠に安ツぽきものに候、支那は爆竹の國にて冠婚葬祭何事にも之を用ゐ、每夜殆んどパチ〳〵ポンの音を聞かざるはなし、日本の花火は之が進化したるものにはあらざるべきか、其他衣食住に於て日本に類似せる點多く、流石昔は東洋文明の卸元たりし面影どこかに殘り居候――」

天晴東洋の舞臺の大立物を任ずる水滸傳的豪傑が寄つて集つて天下を論じ、提調先生昂然として自ら蕭何を以て處るといふ得意の壇場が髣髴として此の文字の表に現はれてをる。眞實、提調時代の二葉亭は一生の中最も得意の時であつた。俸祿も厚く、信任も重く、細大の事務盡く掌裡に歸して裁斷を待ち、監督川島不在の時は處務を代理し、隱然副監督として仰

がれてゐた。然るに此の得意の位置を怎うして拋棄するやうになつた乎、其原因が判然しないが、左に右く止むに止まれない或る事情があつて、監督川島及び友僚が頻りに留任を勸告するをも固く謝して、決然辭任して歸朝した。此間の事情は當時の消息を知るもの丶間にも種々の說があつて判然しないが、假に川島或は友僚との間に多少の面白からぬ衝突があつたとしても、其衝突は決して辭職に値ひするほどの大事件では無かつたらしい。ツマリ二葉亭の持前の極端な潔癖からして夫ほどでもない些細な事件に殉じて身を潔くする爲めらしかつた。二葉亭自身も此事に就ては餘り多く語らなかつた。『腹を立てるほどの事でも無かつたので、少と早まり過ぎたのサ、』とばかり輕く云つてゐた。

間もなく日露の國交が破裂した。北京に在留中から露西亞の暴狀を憤つて、同志と共に屢々公使館に詰掛けて本國政府の斷乎たる決心を迫つた事もあり、豫てから此の大破裂の生ずべきを待設けて晴れの舞臺の一役者たるを希望してゐたから、此の國交斷絕に際して早まつて提調を辭して北京を去つたのを內心窃かに殘念に思つてゐたらしかつた。『怎う早く戰爭が初まるなら最う少し北京に辛抱してゐるのだつた、』とは開戰當時私に洩らした述懷であつた。

十一　朝日新聞社に入る

北京から歸朝したのは三十六年の七月で、歸ると間もなく腦貧血症に罹つて田端に閑居靜養した。三十七年の春、日露戰爭が初まると間もなく三月の初め内藤湖南の紹介で大阪朝日新聞社に入社し、東京出張員として東露及び滿州に關する調査と、露國新聞の最近情報の翻譯とを擔任した。滿洲及び北京から歸朝したての意氣込もあり、豐富に資料も蓄へてゐたし、此調査には頗る興味を持つて大に滿足して職務を服した。

然るに新聞紙の材料は巧遲なるよりは拙速を重んじ、堂々たる大論文よりは新鮮なる零細の記事、深く考慮すべき含蓄ある說明よりは手取早く呑込む事の出來る記實、噛占めて益々味の出るものよりは舌の先きで甞めて直ぐ賞翫されるものが讀者に受ける。新聞紙の壽命は唯一日であつて、各項記事に對する讀者の興味を持つは唯二分間か三分間である。此の二分間三分間の興味を持たしめるのが新聞記者の技倆であつて、十日一水を描き五日一石を描く苦辛は新聞記事には無用の徒勞である。此點に於て何事も深く考へ細さに究め右から左から八方から見て

一分の隙も無いまでに作り上げた二葉亭の原稿は新聞材料としては勿體無さ過ぎてゐた。折角苦辛慘澹して拵へ上げた細密なる調査も、故池邊三山が二葉亭歿後に私に語つた如く參謀本部向き外務省向きであつて新聞紙向きではなかつた。例へば當時朝日新聞に連揭された東清及び滿洲輸送力の調査の如きは參謀本部の當局者をさへ驚嘆せしめたほどに周到細密を究めたが、讀者には少しも受けないで誰も振向いても見なかつた。新聞紙は一に讀者の興味を標準として材料の價値を定めるゆゑ、如何なる貴重の大論文でも讀者の大多數が喜ばないものは編輯局も亦冷遇する。折角油汗を流して苦辛した二葉亭の通信が屢々大阪の本社で冷遇されて往々沒書となつたのは、二葉亭の身にすれば苦辛を認められない不平は道理であるが、新聞記事としては止むを得なかつたのだ。加ふるに東京出張員とは云ひながら東京に定住して滅多に大阪へ行かなかつたから、自然大阪本社との意志の疏通を缺き、相互の間に面白からぬ感情の行違ひを生じ、或時は斷然辭職するとまで憤激した事もあつた。此間に立つて調停する揖取役を勤めたのは池邊三山であつて、三山は力を盡して二葉亭を百方慰撫するに努めた。が、二葉亭が自ら本領を任ずる國際又は經濟的方面の研究調査には矢張少しも同感しないで、二葉亭の不平を融

和する旁ら、機會ある毎に力を文學方面に伸ばさしめやうと婉曲に慫慂した。二葉亭は厚誼には感謝したが、同時に頗る慊らなく思つてゐた。

が、三山の親切に對して强て爭ふ事も出來ずに不愉快な日を暮す間に、大阪の本社とは日に乖離するが東京の編輯局へは度々出入して自然親みを增し、折々編輯を助けて意外な新聞記者的技倆を示した事もあつた。ポーツマウスの條約に擧國の不平が沸騰した時に偶然東京朝日の編輯局で書いた『ひとりごと』と題する桂首相の心理解剖の如きは前人未着手の試みで、頗る讀者に受けたもんだ、（此一編は全集第四卷に載つてゐる。）或は前人未着手で無いかも知れぬが、之ほど巧みに之ほど小氣味能く窮所を穿つたものは恐らく先人未言であつたらう。二葉亭が直覺力と洞察力と政治的批評眼とが無ければ迚も書けないものであつた。或は不滿足なる媾和に憤慨した餘りの昂奮で筆が走つたので、平素の冷靜な二葉亭では却て書けなかつたかも知れない。恁ういふ方面に專ら力を注いだなら新聞記者としても亦必ず前人未拓の領土を開き得たらうと、朝日の僚友は皆二葉亭が一度ぎりで此種の試みを止めたのを惜んでゐた。が、二葉亭は却て之を耻ぢて、『あんな輕佻な眞似をするんぢや無かつたつけ、』と悔いてゐた。

十二　『其面影』と『平凡』

其中に戰爭は熄んだ。讀者は最早露西亞や滿洲の記事には飽き〳〵した。二葉亭の熱心なる東露の產業の調査は益々新聞に向かなくなつた。そこで三山初め有力なる朝日の社員は二葉亭をして愈々力を文學方面に伸ばさしめやうと百方勸說した。其度每に苦い顏をされたが、何遍苦い顏をされても少しも尻込しないで口を酸くして諄々と說得するに努めたのは社中の弓削田秋江であつた。秋江は二葉亭の熱心なるアドマヤラーの一人として、朝日の忠實なる社員として、我儘な華族の殿樣のお守りをするやうな氣になつて、氣を長くして機嫌を取り〳〵到頭退引ならぬ義理づくめに餘儀なくさしたのが明治三十九年の秋から朝日に連載した『其面影』であつた。續いて翌年の十月は『平凡』を續載して二葉亭の最後の文藻を輝かした。此二篇の著はされたのは全く秋江の熱心なる努力の結果であつた。

有體に云ふと『其面影』も『平凡』も惰力的勞作であつた。勿論、何事にも眞劍にならずにゐられない性質だから、筆を操れば前後を忘れるほどに熱中した。が、肝腎の藝術的興味が既

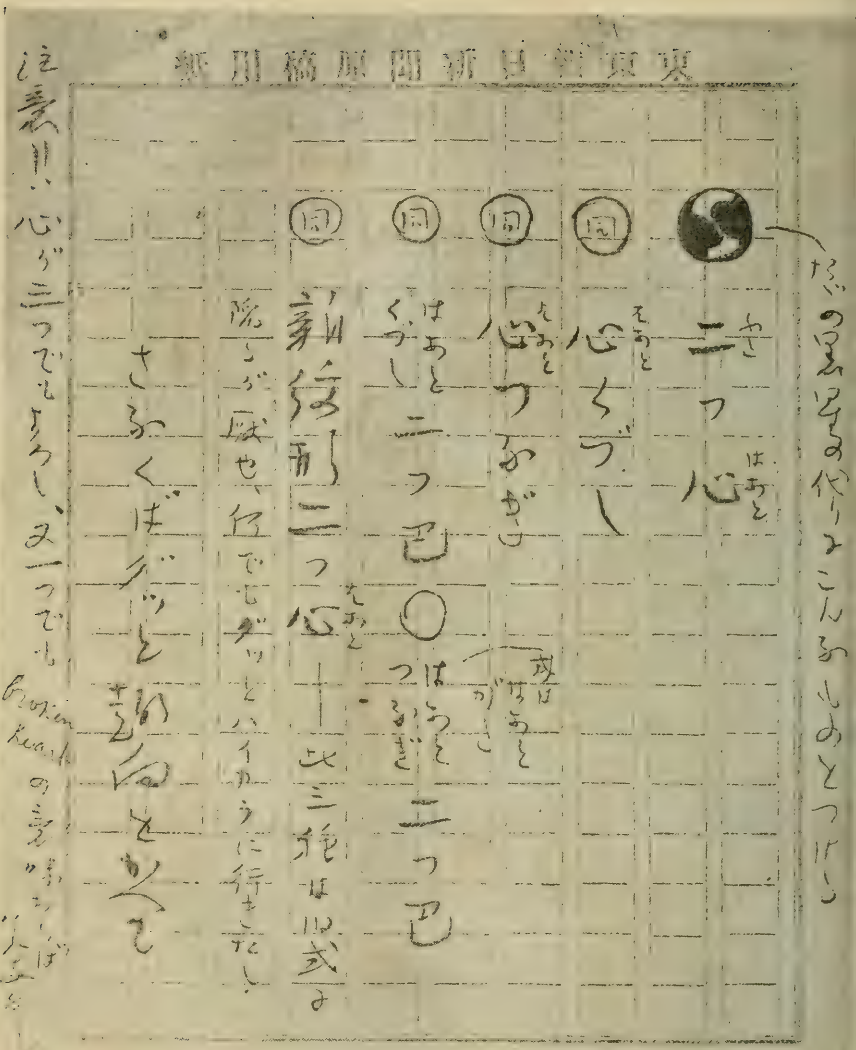
くの昔に去つてゐて、氣の拔けた酒のやうな氣分になつてゐたから、苦辛したのは構造や文章の形式や外殼の修飾であつて、根本の內容を組成する材料の採擇、性格の描寫、人生の觀照等に到つては『浮雲』以後の進境を見る事が出來なかつた。

殊に『其面影』は三十年振の創作であつたから、恰も處女作を發表する場合と同じ疑懼心が手傳つて、眼が窪み肉が瘠せるほど苦辛し、其間は全く訪客を謝絕し、家人が室に入るをすら禁じ、眼が血走り顏色が蒼くなるまで全力を傾注し、千鍜萬練して日に幾十遍となく書き更めた。夫故兎角に每日の締切時間を遲らし勝ちなので、編輯局から容子を見屆けに度々社員を派したが、苦辛慘憺する現狀を見るものは誰でも氣の毒になつて催促し兼ねたさうだ。池邊三山が評して『造物主が天地萬物を產出す時の苦み』と云つたは當時の二葉亭の苦辛を能く語つてをる。が、苦辛したのは外形の修辭だけであつて肝腎の心棒が拔けてゐたから、二葉亭に多くを期待してゐたものは期待を裏切られて失望した。

『其面影』を發表するに先だちて二葉亭は新作の題名に就て相談して來た。『二つ心』とか『心くづし』とか『新紋形二つ心』とか云ふやうな人情本臭い題名であつて、シカモ此の題名の上

にニツ巴の紋を置くとか、或は『破れヰオリノ』といふ題名として絃の切れたヰオリンの畫の上に題名を書くといふやうな鼻持ならない黴臭い案だつたから、即時にドレも之も都々逸文學の語であると遠慮無く貶しつけてやつた。彼是れ往復二三囘もした、最後に『其面影』でモウ我慢して呉れと云つて來た。此相談を受けた時、二葉亭の頭の隅ツコにマダ三馬か春水の血が殘つてるんぢやないかと、內心成功を危ぶまずにはゐられなかつた。

愈々『其面影』が現れて、囘一囘と重ぬるに從つて益々此懸念が濃くなつた。『其面影』の妙處といふは二十年前の『浮雲』で味はされたものよりもヨリ以上何物をも加へなかつた。加之ならず『浮雲』の若々しさに引換へて極めて老熟して來ただけ夫だけ或る一種の臭みを帶びてゐた。言換へると『浮雲』の描寫は直線的に極めて鋭どく、色彩や情趣に缺けてゐる代りには露西亞の作風の新らしい匂ひがあつた。之に反して『其面影』の描寫は婉曲に生溫く、花やかな情味に富んでる代りに新らしい生氣を缺いてゐた。幸田露伴は嘗て『浮雲』を評して地質の斷面圖を見るやうだと云つたが、『其面影』は斷面圖の代りに橫濱出來の輪出向きの美人畫を憶出させた。更に繰返すと『其面影』の面白味は近代人の命の遣取をする苦みの面白味でなく


東京朝日新聞原稿用紙
二つ心
心くづし
二つ巴
新派刷
二つ心
此三種は旧式
注意 心が三つでもよろし、又一つでも
Broken heart の意味ならば

二葉亭の筆蹟

て、澁い意氣な俗曲的の面白味であつた。
『平凡』は復活後の二度目の作であるだけ、『其面影』よりは筆が樂に伸んびりしてをる。無論『其面影』と同じ洗錬を經たので、決して等閑に書きなぐつたのでは無いが、『其面影』のやうな細かい斧鑿の跡が見えないで、自由に伸び〳〵した作者の洒落な江戸ツ子風の半面が能く現れてをる。ツマリ『其面影』の時は『文人で無い』と云ひつゝも久し振での試みに自づと筆が固くなつて、餘りに細部の雕琢にコセ〳〵したのが意外の累ひをした。が、『平凡』の時は二度目の經驗で筆が練れて來たと同時に『文學はドウでも宜い』といふ氣になつて、技術の慾を離れて自由に思ふまゝを發揮したから、前者に比べると荒削りではあるが活き〳〵した生氣に富んでをる。文人としての二葉亭の最後を飾るに足る傑作である。
が、何れも『浮雲』の精力的勞作であるは爭はれなかつた。『浮雲』以後の精神的及び物質的苦悶に富んだ二葉亭の半世の生活からは最少し徹底した近代的悲痛が現れなければならない筈であつたが、案に相違して極めて平板な不徹底な家常茶飯的葛藤しか描かれてゐなかつたのは畢竟作者の根本の藝術的興味が去つて了つたからであらう。

十三　第二期の失意煩悶

朝日社内に於ける葛藤不平

◦國際的危機◦『平凡』前後◦實際的抱負

が、夫にも拘らず、世間は盛んに嘖々して歡迎し、東朝編輯局は主筆から給仕に到るまでが擧つて感歎した。前には滿蒙に關する二葉亭の論策研究を虐待した大朝の編輯局が二葉亭の籍が大阪に在るを名として當然大阪の紙上にも載すべきものだと抗議を持出した。各文學雜誌は爭つて文學及び思想に關する論文又は談話を請ふて載せ、社會の公人としての名は益々文人として輝いた。

二葉亭は益々不平だつた。半世の夙志が總て成らずに、望みもしない文人としての名が愈々輝くのが如何にも不愉快で堪らなかつた。が、世間は如何に見やうとも、自分の使命は國際的舞臺にあるを飽くまでも任じて、少しも志望を曲げずに極東時局に關する内外の著書は得るに隨つて精讀し、内外新聞の外交に關する事項は細さに究めて切拔きを保存し、殊に『外交時報』

は隅から隅までを反覆細讀してゐた。(二葉亭は『倫敦タイムス』『ノーウ・オウレーミヤ』『モスコー・ウエドモスチ』等の英露及び支那日本の外字新聞數十種に常に眼を晒らしてゐた。『外交時報』は第一號から全部を取揃へて少しも座右から離さなかつた。)

此の如く全力を傾倒して國際問題を鋭意研究したのは本と〳〵青年時代からの夙志であつたが、一時人生問題に沒頭して全く忘れてゐたのが再燃したには自づから淵源がある。日淸戰爭の三國干渉の時だつた。或る晩慨然として私に語つた。『日本は之から先き世界を對手として戰ふ覺悟が無けりやアならん。東洋の片隅に小さくなつて躊躇まつてるなら知らず、聊かでも頭角を出せば直ぐ列强の壓迫を受ける。白人聯合して日本に迫るといふやうな事が今後無いとは限らん。夫も壓迫を受けるだけなら、忍んで小さくなつて辛抱出來ない事もなからうが、壓迫が進んで侮辱となり侵略となつたらドウする。國際公法だの仲裁條約だのといふはまさかの時には何の役にも立たない空理空文である。歐洲列强間の利害は各々相扞格してゐても、根が同文同種同宗敎の兄弟國だから、率となれば平時の葛藤を忘れて共通の敵たる異人種異宗敎の國に相結んで衝るは當然有得べき事だ』と、人種競爭の避く可からざる所以を歷史的に說いて

『此覺悟で國民の決心を固め、將來の國是を定めないと、何十年後に亡國の恨みが無いとも限らない。』と反覆痛言した事があつた。二葉亭の青年時代の國際的興味が再び熱沸して來たのは其頃からで、此の憂國の至誠から鋭意熱心に東洋問題の解決を研究するので、決して大言壯語を喜ぶ單純なる志士氣質や或は國家を飯の種とする政治家肌からでは無かつた。二葉亭の文學方面をのみ知る人は政治を偏重する昔の士族氣質から產出した氣紛れのやうに思ふが、決して开んな浮いた泡のやうな空想では無かつたので、牢乎として拔く可からざる多年の根強い根柢があつたのだ。今にして思ふと、三十年前に人種競爭の止むを得ざる結果から歐亞の大衝突の當然來るべきを切言した二葉亭の巨眼は推服すべきものであつた。

　明治四十年の六月、突然急病に犯されて殆んど七十餘日間病牀の人となつた。夫から以後著るしく健康を損じて、平生健啖であつたのが俄に食慾を減じ、或る時、見舞に行くと、『此頃は朝飯はお廢止だ。一日に一杯ぐらゐしか喰はない。夜もおち〱寢られない。』と云つた。『そりや不可ん。轉地したら怎うだい、神經衰弱なら轉地が一番だ。』といふと、『轉地なんぞしたつて癒るもんか。社の者も頻りと心配して旅行しろといふが、海や山よりは町の方が好き

だつなアに、僕の病氣は何でも無い、小說を書かないでも濟むやうにさへして吳れたら其瞬間に直ぐ癒つて了う』と云つて淋しく笑つた。

一體が負け嫌ひの病氣に勝つ方で、どんなに苦しくても滅多に弱音を吹かなかつた。官報局を罷めてから間もなく、關節炎に罹つて腰が立たなかつた時も元氣は頗る盛んで、談笑自如として少しも平生と變らなかつた。其時から比べると、病氣は夫程重くも見えなかつたが、元氣は全で失くなつて頗る銷沈してゐた。豈夫かに嫌ひな文學を強ひられるばかりで病氣になつたとも思はなかつたが、何となく境遇を氣の毒に思つて傷心に堪へなかつた。

『平凡』の豫告が現はれた時、二葉亭が昔しから推奬したゴンチャローフの名作を憶ひ浮べて題名に興味を持つたので直ぐ手紙を送つた。文句は忘れたが、意味は斯うである。——『平凡』といふ題名が如何にも非凡で面白い、（といふのは前にも云つた通り『其面影』の題名に關して往復數回した事があつたからで、）定めし面白いものであらうと樂みにしてをる、左に右く現に文學を以て生活しつゝある以上は假令素志でなくても文學にも亦十分身を入れて貰ひたい、人は必ずしも一方面でなければならないといふ理由は無いから、文人であつて政治家或は實業

家を兼ねるのも妙であらう、政治或は外交に興味を有するが故に他の長所である文學を廢するといふは少しも理由にならない、且苟くも前途に平生口にする大抱負を有するなら努めて寬濶なる襟度を養はねばならない、例へば西園寺侯の招宴を辭する如きは時の宰相たり侯爵たるが故に謝絶する詩人的狷介を示したもので政治家的又は外交家的器度では無い――といふ、態ういふ意味の手紙であつた。

無論此手紙を送つたのは二葉亭と議論する意でも何でも無かつた。唯『平凡』の題名に興味を持つた餘りに筆を走らしたので、陶庵侯招宴一條の如きは二葉亭の性質として應じないのは百も二百も承知してゐて少しも不思議と思つてゐないから、二葉亭の氣質を能く理解んでる私が更めて爭ふやうな事は決して做ない。無論又數行の手紙で二葉亭を反省させ或は屈服する事が出來やうとも思つてゐなかつた。

然るに此位な揶揄弄言は平生面と向つて談笑の間に言合ふに拘らず、此手紙がイラ〳〵した神經に餘程觸つたものと見えて平時に無い怒氣紛々たる返事を直ぐ寄越した。曰く、『平凡は平凡也、それを強て非凡とおつしやるなら非凡でもよろし、されど平凡は矢張平凡也、首相の

招待に應ぜざりしはいやであつたから也、このいやといふ聲は小生の存在を打てば響く聲也、小生は是非を知らず、可否を知らず、只之が小生の本來の面目なるを知りたる而已。」云々と。夫から最後に、『何れ其中に行く』と私が書いたに對して、『謀面は今時機に非ず、軈て折あるべし。』と結んで。手もなく當分面會謝絶を通告して來た。私が二葉亭から請取つた何十通の手紙の中で是程墨痕淋漓とした痛快なものは無い。青筋出して肝癪起した二葉亭の面貌が文面及び筆勢にあり／＼彷彿して、當時の二葉亭のイラ／＼した極度の興奮が想像された。が、腹の立つた有の儘が少しも飾られないで表白されてゐるだけに、二葉亭の面目が歴々と最も能く現はれてゐた。此のいやといふが二葉亭の存在を打てば響く聲であると云つたは何よりも能く二葉亭を説明してゐる。

二葉亭の文學嫌ひは前に云つたやうに單純な志士氣質や政治家肌からでは無かつたが、夫程に懊惱してヂリ／＼と興奮するまで文學を嫌ひ抜いてゐたのは、一つは『此のいやといふ存在の聲』が手傳つてゐたのである。二葉亭は何事についても右と云へば左、左と云へば右と云ふ一種の執拗な反抗癖があつて、終局の歸着點が同一なのが明々白々に解つてゐても先づ反對に

立つて見るのが常癖であつた。如何なる得意のものでも褒められると苦い顔をして、如何なる不得意のものでも貶されると一生懸命になつて辯明した。假に若し其の欲する如くに政治家又は實業家として相當の位置を作らしめたなら、其時は恐らく余は政治家に非ず、實業家に非ずと云つたかも知れない。之が即ち長谷川辰之助の存在の聲であつたのだ。

尤も文學を嫌つて實際界に志ざしたは強ち此一癖からばかりで無く、實際方面に於ける抱負も或る人々の思ふやうに萬更詩人的空想から産出したユートピヤ的或は志士氣質の自大放言では無かつた。一寸つと聞けて馬鹿々々しい浦鹽の女郎屋論でも、底を叩くと統計やら報告やら頗る周到細密な數字的基礎があつた。殊に北京から歸朝した後の說には謹々傾聽すべき深い根柢があつた。無論實際の舞臺に立たせたなら直ぐ持前の詩人的狷介や道學的潔癖が飛出して累をなしたであらうが、夫でも若し愈々其方面に驥足を伸ぶる機會が與へられたら、強ち失敗に終るとも定められなかつた、或は意外の功を擧げないとも計られなかつた。左に右く終に一回も此の自信ある手腕を試みる機會を與へる事が出來ずに了つたのは、二葉亭自身の一生の恨事であつたのみならず、二葉亭の知友としても亦頗る遺憾であつた。

十四　露國の亡命客及びダンチェンコ

其頃波蘭の革命黨員ピルスウツキーといふ男が日本へ逃げて來て　葉亭を訪ねて來た。其外にも二葉亭を賴つて來た露國の虛無黨亡命客が二三人あつた。二葉亭は渠等の爲めに斡旋して或は思想上多少の連絡ある人士又は政界の名士に紹介したり、或は渠等が長崎で發行する露文の機關雜誌を助成したり、渠等の資金を調達する爲めに布哇の耕地の買手を捜したり、或は文藝上の連絡を目的とする日波協會の設立を計畫したりして渠等の爲めに種々奔走をした。二葉亭は會てヘルチェンやビェリンスキーに傾倒して虛無黨思想に就ての多少の興味をも持つてゐたから、帝國主義を懷抱して日本の膨脹を夢見つゝも頭の隅の何處かで渠等と契合してゐたかも知れぬが、其以外に渠等を利用して國際的芝居を一と幕出さうとする野心が內々有つたらしい。其頃北京時代の友人阿部精二へ送つた手紙に、「西伯利より露國革命派續々逃込み、中には東京へ來るものも有之候故、此等を相手に一と仕事と出懸けし處、相手が丸でお坊ちやんにて話にならず、到頭骨折損となりたり、今も革命派の上京する者は必ず來つてあれこれと相談を掛け

候へども最早相手にならない事に決し候、渠等は皆空論を以て事を成さんと欲する徒にて口舌以上の活動をせんといふ意なし、こんな事で何が出來るものかと愛想をつかしたる次第に候、實は最初は今度こそ一世一代の仕事といふ意氣込で取掛けたれども右の次第にて之も亦駄目となりたり、嗚呼心中の遺恨誰に向つて訴へん、此上は最早退隱の外なし、小説でも書いて一生を送るべく候、』とあるは多分此間の機微を洩らしたものであらう。が、露西亞の革命黨員を相棒に何をするつもりであつたらう。二葉亭は明石中佐や花田中佐の日露戰役當時の在外運動を頻りに面白がつてゐたから、或はソンナ計畫が心の底に萠してゐたかも解らぬが、夫よりはソンナ空想を燃やして儘にならない鬱憤を晴らしてゐたのだらう。公平に見て二葉亭が實行力に乏しいのを輕侮した露西亞の亡命客よりも二葉亭自身の方がヨリ一層實行力に乏しかつた。二葉亭では明石中佐や花田中佐の眞似は迚も出來無いのを自ら知らないほどのウツケでは無いが、そんな空言を叩いて據ろなしの文學三昧に送る不愉快さを紛らす爲めの空氣焰（からきえん）を吐いたのであらう。

明治四十一年の春、ダンチエンコが來遊した。二葉亭は朝日を代表して東道の主人となつて

處々方々を案内して見せた。ダンチエンコは文人としては第二流であるが、新聞記者としては有繋に露西亞有數の人物だけに興味も識見も頗る廣く、日本の文人のやうな文學一天張の世間見ずではなかつた。隨つて思想上に契合するものが有つても無くても、毎日々々諸方を案内しつゝ互に宏博なる知見を交換したのは、恰も籠の禽のやうに意氣銷沈してゐた當時の二葉亭の憂悶不快を紛らす慰藉となつたらしかつた。

ダンチエンコは深く二葉亭に服して頻りに露都への來遊を希望し、且池邊三山及び村山龍平に向つて露都通信員の派遣を勸告し、其の最適任者としての二葉亭の才能人物を盛んに推奬したので、朝日社長村山も終に動かされて其提案に同意した 耆婆扁鵲の神劑でも迚も癒りさうもなかつた二葉亭の數年前から持越しの神經衰弱は露都行といふ三十年來の希望の滿足に拭ふが如く忽ち掻消されて、恰も籠の禽が俄に放されて九天に飛ばんとして羽叩きするやうな大元氣となつた。其當座は丸で嫁入咄が定つた少女のやうに浮き〳〵と燥いでゐた。

十五　露都行及び其最後

露都行の抱負。入露後の消息。發病。歸朝。終焉。葬儀

愈う決定してからは一日も早く文學と終始した不愉快な日本の生活から遁れるべく、俄に急き立つて、入露の準備をする爲めに殆んど毎日、朝から晩まで朝野の名流を訪ふて露國に關する外交上及び產業貿易上の意見を叩き、碌々家人と語る暇が無かつた程に奔走した。

愈々新橋を出發したのが四十一年の六月十二日であつた。十四日に恰も露西亞から歸着した後藤男を敦賀に迎へ、其の翌日は米原まで男爵と同車し、隨行諸員を遠ざけて意見を交換したさうだ。如何なる意見が交換されたかは今猶ほ不明であつて、先年追悼會の席上後藤男自らの口からも其談話の內容を發表する事は出來ぬと云はれたが、左に右く此會見に由て男爵の知遇を得、多年の夙志が男爵の後援で遂げられさうな緒を得たのは明らかであつた。

米原で後藤男の一行と別れて神戶へ行き、神戶から乘船して大連を經て入露の行程に上つた。

其途上小村外相の歸朝を大連に、駐日露國大使マレウヰチの來任を哈爾賓に迎へて各々意見を交換した。是等の會見始末は精しく三山に通信して來たさうだが、亦國際上の機微に渉るが故に世間に發表出來ないと三山は云つてゐた。此の三山も今では易簀して了つたが、手紙は多分三山の遺篋の中に殘つてるかも知れない。

が、露國へ行つて何をするツモリであつた乎は友人中の誰にも精しく話さなかつたが、左に右く出發に先だつて露國と交渉する名士を歴訪し、更に其途上わざ／＼迂回して後藤や小村やマレウヰチと會見した事實から推しても二葉亭の抱負や目的を略ぼ想像する事が出來る。出發前數日、文壇の知人が催ほした送別會の卓上演説(テーブルスピーチ)は極めて抽象的であつたが抱負の一端が現れてをる。其要旨を掻摘むと恁うである。

『自分は平生露西亜の新聞や雜誌を讀んで論調を察するに、露西亜人の日本に對する睚眦の怨は結んで中々解けない。時來らば今一と戰爭しやうといふ意氣込は十分見えてゐる。蓋し白人種の異人種を征服するは征服されるものから見れば領土の纂奪であるが、白人種の立場から云へば、人類の幸福の爲めの未開の土地の開發であつて、露西亜の南下の如きも露西亜人は神の

特別なる恩寵を受くるスラヴ人の當然の使命だと思つてもゐるし、文明が野蠻に打勝つ自然の大法だとも信じてゐる。夫故に露西亞人の眼から見て野蠻國たる日本に露西亞が負けたのは英人がブアに負けたのと同樣、啻に露西亞一國の不名譽ばかりぢや無い、世界の文明國の前途の爲めの由々しき一大事である。此儘に若し濟ましたなら、白人の文明は或は黃人の蠻力に蹂躙されて終には如何なる慘禍を世界に蒙むらすかも解らん。ツマリ黃人の勝利は文明の大破壞であるから、此儘指を啣へて引込んでる事は世界の文明の爲めに出來ない。勝誇つた日本の羽翼未だ十分ならざる內に二度と再び起つ事の出來ないまでに挫折いて置かねばならんといふのは單に露西亞一國の爲めばかりで無くて、世界の文明の爲め人道の爲めだといふが露西亞人の腹の底の覺悟である。可也、先方が其了簡なら此方もそのツモリで最う一度對手にならうと云ひたい處だが、一度の戰爭は東洋問題を解決する爲め止むを得ないとしても、二度の戰爭は殘念ながら日本の國力が許さない。日本人としては日本の國力が十分恢復出來るまでは何とかして二度の戰爭はあらせたくないといふのが當然の願ひで、夫には露西亞人がまだ知らない日本の文明の眞相を理解させて、日本人はブア人のやうな未開人でないといふ事を十分會得させるが

第一策だと思ふ。無論、其麼な姑息の方法では根深い誤解を除く事は迚も出來ないかも知れんが、少くも彼我國際間の融和を計るには日本の文明を紹介するが有力なる一手段である。自分が露西亞に行くのは朝日の通信員としてゞあるが、此機會を與へられたを幸ひとして、及ばずながらも盡して見たいと思ふは此方面の努力で、甚だ不完全であるが聊かの經驗ある露西亞語を利用して日露國民相互間の誤解を釋き、再び不祥の戰爭が無からしむるやうに最善の努力を盡したいと思ふ。自分の微力を以てしては精衞海を塡むる世間の物笑ひを免かれんかも知れんが、及ばずながらも之が自分の抱懷の一つである。」云々。

果して二葉亭の云ふ如く其頃の日露國民間に暗雲が低迷してゐたか否かは別であるが、國家を憂ふる赤誠は此の一場の卓上話の端にも十分現はれてをる。出發前暇乞ひに訪ねて呉れた時も、露國へ行けば日本に通信する傍ら露國の新聞にも頻々投書して日本の文明及び國情を紹介し、場合に由れば講演をも開く意だから、就ては材料となるべき書籍を折々廻附して貰ひたいと云つた。私は大いに同感を表して、取敢へず手許に有合はした『開國五十年史』を贈り、註文次第何でも送ると快諾したが、露西亞へ着いてから尙だ一回も註文を受ける間も無い中に不

起の病に取憑かれて了つた。朝日の通信員としてタイムスのブローウヰツやマツケンジーを期すると同時に日本の平和の爲めの福音使ともならうとしたらしかつたが、其抱負の一端だも實行の緒に就く遑がない中に思はぬ病の爲めに歸朝すべく餘義なくされた。

二葉亭は學生時代から呼吸器が弱かつた。自分でも要愼して痰は必ず鼻紙へ取つて決して矢鱈と棄てなかつた。殊に露西亞へ出發する前一年間は度々病氣になつて著るしく健康を損じてゐた。此の懸念される容體で寒い露國へ行くのは險呑だから一應は健康診斷を受けて見たらと口まで出掛つたが、幸ひに何にも故障が無ければだが、萬一多少の故障があつたからツて之が爲めに多年の夙望を思留りさうもなし、折角意氣の旺盛なる目出度い門出に曇影を與ふるでもないと思つて、多少は遠廻しに匂はして見たが、强ては餘りに勸めなかつた。だが、こんなに早く不起の病の牀に就かうとも思はなかつた。

露都へ着いたのが四十一年の七月十五日であつて、着くと直ぐ、一と月經つか經たない中に神經衰弱に罹つて了つた。で、彼是れ半年近くも何にも做ないで暮して、怎うか怎うか癒り掛けた翌る四十二年の二月十四日、ウラヂーミル太公の葬儀を見送るべく、折からの降りしきる

雪の中を行列筋の道端に立つてゐると、何しろ露西亞の冬の嚴しい寒さの中を降りしきる雪に打たれたのだから、病上りの身の何とて堪へらるべき、忽ち迷眩して雪の上に卒倒した。同伴の日本人の誰彼れは驚いて介抱して直ぐ下宿に連れて戻つたが、之が病みつきとなつて終に再び枕が上らなくなつて了つた。其果が到頭露人の病院に入院して肺結核といふ診斷を受け、暫らくオデツサあたりに轉地するか左なくば斷然歸朝した方が上分別であると、醫師からも朋友からも切に忠告された。

此忠告を受けた時の二葉亭の胸中萬斛の遺憾苦悶は想像するに餘りがある。折角爰まで踏出しながら、何にもしないで手を空うしてオメ／＼と怎うして歸られやう。此儘縱令露西亞の土とならうとも生きて再び日本へは歸られないと駄々を捏ねたは決して無理は無かつた。が、此儘滯留すれば病氣は益々重るばかりで、終には取返しが付かなくなるのが看え透いてゐながら萬に一つ歸朝すれば恢復する望みが無いとも限らぬないのを打棄つて置くべきで無いと、在留日本人の某々等は寄つて集つて歸朝を勸告した。初めは何と云つても首を振つて諾かなかつたが、剛情我慢の二葉亭も病には勝てず、散々手古摺らした擧句が據ろなく納得したので、病氣

が稍や平らになつたを見計らつて大阪商船の末永支配人が附添ひ、四月五日在留日本人の某々らに送られて心淋しくも露都を出發し、伯林を迂廻して倫敦に着し、郵船會社の加茂丸に便乘したのが四月九日であつて、末永支配人に船まで送られて、包むに餘る萬斛の感慨を抱きつゝ心細くも歸朝の途に就いた。

初め愈々歸朝と決するや、西比利亞線を歸る乎、或は倫敦へ出て海路を取る乎といふが友人間の問題となつたさうだ。其結果が短距離の西比利亞線を棄てゝ態々遠廻りの海路を擇ぶに決したのは、寒い西比利亞線を行くよりは船で歸るが海氣療法ともなるといふ意見が勝つたからださうで、不思議に加茂丸へ移乘した時に擔架で運ばれたほどの重態が出帆してから次第に元氣を恢復して來た。末永大阪商船支配人の特別の依賴と云ひ、朝日の記者、名譽ある文人としての名は事務長を初め船員が皆知つてゐたから、船醫の外に特に一名の給仕を附添として手厚く看護し、此元氣なら滯りなく無事に歸朝出來さうだと一同安心して大いに喜んでゐた。然るにポルトセイドに着き、愈々熱帶圏に入ると、氣候の激變から病が俄に革まつて、コロンボへ入港したころは最早賴少（たのみすく）なになつて來た。



パセパンシヤンの荼毘の烟

電報は櫛の齒を引く如く東京に發せられた。一電は一電よりも急を告げて、歸朝を待詑びる友人知己は共都度々々に胸を躍らした。

五月十日、船は印度洋に入つた。世界に著き澎湃たる怒濤が死ぬに死なれない多感の詩人の熱悶苦吟に和して悲壯なる死のマーチを奏する間に、恰も夕陽に反映へされて天も水も金色に彩どられた午後五時十五分、船長事務長及び數百の乘客の限りなき哀悼悲痛の中に圍繞かれて眠るが如くに最後の息を引取つた。

五月十五日新嘉坡に着いた。近藤事務長は土地の有志と計りて、事務長以下十數人、遺骸を奉じて埠頭を去る三哩なるパセパンシヤンの丘巓に假の野邊送りをし、日本の在留僧釋梅仙を請じて慇ろに讀經供養し、月白く露深き丘の上に遙かに印度洋の鞺鞳たる波濤を聞きつゝ薪を組上げて荼毘に附した。一代の詩人の不幸なる最後にふさはしい極めて悲壯沈痛なる劇的光景であつた。空しく壯圖を抱いて中途にして幽冥に入る千秋の遺恨は死の瞬間までも悶えて死切れなかつたらうが、生中に小さい文壇の名を歌はれて枯木の如く疊の上に朽ち果てるよりは、遠くヒマラヤの雪嶺を觀望する丘の上に燃ゆるが如き壯志を包んだ遺骸を赤道直下の熱風に吹

かれつゝ荼毘に委したは誠に一代のヒーローに似合はしい終焉であつた。

遺骨が新橋に歸着したは五月三十日で、越えて三日葬儀は染井墓地の信照庵に營まれた。會葬するもの數百人。權門富貴の最後の儀式を飾る金冠繡服の行列こそ見えなかつたが、皆故人を尊敬し感嘆して心から慟哭し痛惜する友人門生のみであつた。初夏の夕映の照り輝ける中に門生が誠意を籠めて捧げた百日紅樹下に淋しく立てる墓標は池邊三山の奔放淋漓たる筆蹟にて墨黑々と麗はしく二葉亭四迷之墓と勒せられた。

三山は墓標に揮毫するに方つて幾度も筆を措いて躊躇した。此の二葉亭四迷は故人の最も憎める名であつた。此名を墓標に勒するは故人の本意で無いかも知れぬので、三山は筆を持つて暫らく沈吟したが、シカモ此名は日本の文學史に永久に朽ちざる輝きである。二葉亭は果して自ら任ずる如き實行の經綸家であつた乎否かは永久の謎としても、自ら屑よしとしない文學を以てすらも猶且つ此の如く永久朽ちざる事業を殘したといふは一層故人の材幹と功績の偉なるを傳ふるに足るだらう。と、三山は終に意を決して二葉亭四迷と勒した。

以上は唯だ一生の輪廓を描いたに過ぎないが、人物と思想とは特に剖析細究しないでも略ほ

知る事が出來やう。文人としての二葉亭の位置の如何なるやは暫らく世間の判斷に任すとしても明治の文壇に類の少ない飛離れた人物であつたは此の白描のデッサンを見ても大凡推測られやう。文人乎、非文人乎、英雄乎、俗人乎、二葉亭は終に其の全人格を他にも自分にも明白に示さないで、恰も彗星の如く不思議の光芒を發しつゝ倏忽として去つて了つた。渠は小說家でなかつたかも知れないが、渠れ自身の一生は實に小說であつた。（明治四十二年六月記 大正十三年十年補修）

二葉亭餘談

一　二葉亭との初對面

私が初めて二葉亭と面會したのは明治二十二年の秋の末であつた。此の憶出を語る前に順序として私自身の事を少しく云はねばならない。

之より先き二葉亭の噂は巖本撫象から度々聞いてゐた。巖本は頻りに二葉亭の人物を讃歎して、「二葉亭は哲學者である、シカモ輪廓の大なる人物である、」と激稱してゐた。『浮雲』は私の當時の愛讀書の一つで、『あひゞき』や『めぐりあひ』をも感嘆して何度も反覆してゐたから是非一度は面會したいと思ひながらも機會を得なかつた。

其頃私が往來してゐた文壇の人は幾何もなかつた。紅葉美妙以下硯友社諸氏の文品才藻には深く推服してゐたが、元來私の志してゐたのは經濟であつて、文學の如きは閑餘の遊戲としか思つてゐなかつた。平たく云ふと、當時は硯友社中は勿論、文學革新を呼號した『小說神髓』

の著者と雖も今日のやうに藝術を深く考へてゐなかつた。況してや私の如き唯の應援隊、文壇のドウスル連といふやうなものは最高文學に對する理解がある筈がなかつた。面白づくに三馬や京傳や其磧や西鶴を偉人のやうに持上げても、內心では此輩が堂々たる國學又は儒林の先賢と肩を列べる資格があるとは少しも思つてゐなかつた。渠等の人物が怎(と)うの怎(か)うのといふよりはドダイ小說や戲曲を尊重する氣がしなかつた。坪內逍遙や高田半峰の文學論を讀んでも、議論としては感服するが小說其物を重く見る氣にはなれなかつた。

私が初めて甚深の感動を與へられ、小說に對して敬虔な信念を持つやうになつたのはドストエフスキー！の『罪と罰』であつた。此の『罪と罰』を讀んだのは明治二十二年の夏、富士の裾野の或る旅宿に逗留してゐた時、行李に携へた此の一冊を再三再四反覆して初めて露西亞小說の偉大なるを驚嘆した。

私は詞藻の才が乏しかつたから、初めから文人になれやうとも又ならうとも思はなかつた。が、小說雜著は兒供の時から好きで可成(かなり)廣く涉獵してゐた。其頃は普通の貸本屋本は大抵讀盡して聖堂圖書館の八文字屋本を專ら漁(あさ)つてゐた、西洋の物も少しは讀んでゐた。夫故、文章を

作らしたからカラ駄目で、迚も硯友社の諸君の靴の紐を結ぶにも足りなかつたが、其礦以後の小説を一と通り漁り盡した私は硯友社諸君の器用な文才には敬服しても造詣の底は見え透いた氣がして圓朝の人情噺以上に動かされなかつた。古人の作や一知半解ながらも多少窺つた外國小說（其頃ゾラやドウデも既に讀んでゐた）でも全幅を傾倒するほどの感に打たれるものには餘り多く出會はなかつたから、私の文學に對する其頃の直踏は餘り高くはなかつた。

然るに『罪と罰』を讀んだ時、恰も曠野に落雷に會ふて眼眩めき耳聾ひたる如き、今までに曾て覺えない甚深の感動を與へられた。恁う云ふ嚴肅な敬虔な感動は唯だ藝術だけでは決して與へられるものでないから、作者の包藏する信念が直ちに私の肺腑の琴線を衝いたのであると信じて作者の偉大なる力を深く感得した。其時の私の心持は『罪と罰』を措いて直ちにドストエフスキーの偉大なる靈と相抱擁するやうな感に充たされた。

夫れ以來、私の小說に對する考は全く一變して了つた。夫までは文學を輕視し、内心「時間潰し」に過ぎない遊戲と思ひながら面白半分の應援隊となつてゐたが、夫れ以來此の如き態度は嚴肅な文學に對する冒瀆であると思ひ、同時に私のやうな貧しい思想と稀薄な信念のものが

遊戯的に文學を語るを空恐ろしく思つた。

同時に私は二葉亭を憶出した。巖本撫象が二葉亭は哲學者であると云つたのを奇異な感じを以て聞いてゐたが、ドストエフスキーの如き偉大な作家を産んだ露國の文學に造詣する二葉亭は如何なる人であらうと揣摩せずにはゐられなかつた。

之より先き、私はステップニャツクの『アンダーグラウンド・ラシヤ』を讀んで露國の民族性及び思想に興味を持ち、此の富士の裾野に旅した時も行李の中へ携へて來たが、『罪與罰』に感激すると同時にステップニャツクを想ひ起し、且二葉亭をも憶ひ浮べた。

今考へると、ステップニャツクと二葉亭とを結び付けるといふは奇妙であるが、其時は同型でなくとも何處かに遠い親類ぐらゐの共通點があるやうに思つてゐた。ステップニャツクの肖像や傳記は其時分まだ知らなかつたが、精悍剛愎の氣象が滿身に張切つてる人物らしく推斷して、二葉亭をも亦巖本から屢々『哲學者である』と聞いてゐた故、哲學者風の重厚沈毅に加へて革命黨風の精悍剛愎が眉宇に溢れてゐる狀貌らしく考へてゐた。左に右く多くの二葉亭を知る人が會はない先きに風采閑雅な才子風の小說家型であると想像してゐたと反して、私は初めから

爾うは思つてゐなかつた。

秋の末に歸京すると、留守中の來訪者の名刺の中に意外にも長谷川辰之助の名を發見して恰も酸を懷ふて梅實を見る如くに歡喜し、其の翌々日の夕方初めて二葉亭を猿樂町に訪問した。丁度日が暮れて間もなくであつた。座敷の縁側を通り過ぎて陰氣な重苦しい土藏の中に案内されると、恰も方領無髯の巨漢が高い卓子の上から薄暗いランプを移して、今まで腰を掛けてゐたらしい黑塗の箱の上の蒲團を跳退けて代りに置く處だつた。

一應初對面の挨拶を濟まして部屋の四周を見廻した。薄暗いランプの蔭に隱れて判然解らなかつたが、ランプを置いた小汚ない本箱の外には裝飾らしい裝飾は一つも無く、粗末な卓子に附屬する椅子さへ無くして、本箱らしい黑塗の剝げた頃合の高さの箱が腰掛ともなりランプ臺ともなるらしかつた。美妙齋や紅葉の書齋のゴタクサ書籍を積重ねた中に變挺な畫や翫弄物を列べたと反して、餘りに簡單過ぎてゐた。

風采は私の想像と餘りに違はなかつた。沈毅な容貌に釣合ふ錆のある聲で、極めて重々しく一語々々を腹の底から搾り出すやうに話した。口の先きで喋べる我々は其の底力のある音聲を

聞くと、自分の饒舌が如何にも薄ッぺらで目方が無いのを恥かしく思つた。

何を喋したか忘れて了つたが、今でも頭腦に固く印してゐるのは、其時卓子の上に讀半しの書籍が開いたまゝ置かれてあつたのを何であると訊くと、二葉亭は極めて面羞げな顔をして、「誠にお恥かしい事で、今時分漸と「種原論」を讀んでるやうな始末で、あなた方英書をお讀みになる方は應ういふ名著を早くから御覽になる事が出來るが、露西亞には文學書の外何にも無いので三歳子も知つてる名著に今時分漸とこさと噛り付いてゐるやうな次第で、』と左も恥入るといふ容子だつた。夫から三十年經つた今でさへ倘だダアウキンを覗かない私は今でも憶出すと面目無いが、猶更其時は消え入りたいやうな氣持がした。

其時私より三四十分も遲れて大學の古典漢文科の出身だといふYが來問した。此人の口から日本將來の文章といふ問題が提起された。其時の二葉亭の答が、今では發揮と覺えてゐないが、何でも應ういふ意味であつた。『一體文章の目的は何である乎。眞理を發揮するのが文章の目的乎、人生を說明するのが文章の目的乎、此問題が決しない中は將來の文章を論ずる事は出來ない。此問題が定まれば乃ち其目的を達するに最も近い最も適する文章が自づから將來の文體

となるのである――』といふ趣旨であつた。

此答には私は意外の感に打たれた。當時私はスペンサーの文體論を初め二三の著名な文章說を讀んでゐたが、恁ういふ意味の文章論を所謂小說家の口から聽かうとは夢にも思つてゐなかつた。問題の提出者たる古典科出身のYは不可解な顏をして何とも云はなかつた。

ドストエフスキーを讀んで落雷に出會つたやうな心地のした私は更に二葉亭に接して千丈の飛瀑に打たれたやうな感があつた。夫まで實は小說其他の所謂軟文學を唯の一時の遊戲に過ぎないとばかり思つてゐたのだが、朧ろ氣ながらも人生と交涉する嚴肅な森嚴な意味を文學に認めるやうになつたのは此の初對面に由て得た二葉亭の賜物であつて、誰に會つた時よりも二葉亭との初對面が最も深い印象を殘した。

（二）　津の守の女の寫眞屋

たしか明治二十四年頃であつた、二葉亭は四谷の津の守の女、寫眞屋の二階に下宿した事があつた。寫眞屋といふと氣が利いてゐるが、宿場外れの商人宿めいたガサ〳〵した下等な家で、

二葉亭の外にも下宿人があつたらしく、寫眞屋が本業であつた乎、下宿屋が本業であつた乎、どちらとも解らない家であつた。

秋の一夜偶然尋ねると、珍らしく微醺を帯びた上機嫌であつて、怎ういふ話のキツカケからであつたか平生の話題とは全で見當違ひの寫眞屋論をした。寫眞屋の資本の要らない話、資本も勞力も餘り要らない割合には樂に儲けられる話、技術が極めて簡單だから女にでも、少し器用なら容易に覺えられる話、寫眞屋も商賣となると技術よりは客扱ひが肝腎だから、女の方が却て愛嬌があつて客受けがイヽといふ話、こゝの寫眞屋の女主人といふは後家さんださうだが相應に儲かるといふ咄、そんな話を重ねた擧句が、『官吏も面白くないから、女の寫眞屋でも初めて後見をやらうかと思ふ。』と取つても附かない事を言出した。

『女の寫眞屋は面白い。が、有るかネ、技師になる適當の女が？』と云ふと、左もこそと云はぬばかりに、『有る、有る、打つて付けのお誂へ向きといふ女が有る。技術は之から教育まにやならんが、技術は何でも無い。夫よりは客扱ひ――髯の生へた七難かしい軍人でも、譯の解らない田舎の婆さんでも、一視同仁に手の中に丸め込む客扱ひと、商賣上の繰廻しをグン／＼押

切つて奮闘する勝氣が必要なんだが、幸ひ人生の荒波の底を潜つて活きた學問をして來た女が有る』と、夫から今の女の教育が何の役にも立たない事、今の女の學問が紅白粉のお化粧同様である事、眞の人間を作るには學問教育よりは人生の實際の鹽辛い經驗が大切である事、茶屋女とか藝者とかいふやうな下層に沈淪した女が案外な道徳的感情に富んでゐて、率といふ場合懐ろ育ちのお孃さんや女學生上りの奥さんよりも遙に役に立つ事を諄々と説き、『女丈夫といふほどでなくとも、恁ういふ人生の荒浪を潜り抜けて來た女でなくては男の眞の片腕とするには足りない』と、何處の女であるか知らぬが近頃際會したといふ或る女の身の上咄をして、『境涯が境涯だから人にも賤しめられ侮られてゐるが、世間を呑込んで少しも疑懼しない氣象と、人情の機微に通ずる貴い同情と――女學校の教育では決して得られないものを持つてる。恁ういふ女に多少の學問と獨立出來る職業を與へたら、虚榮に憧がれる今の女學校出の奥さんよりは遙に勝つた立派な女が出來る、』と意氣込んで咄した。

此の結論に達するまでの理路は極めて井然としてゐたが、ツマリ泥水稼業のものが素人よりは勝つてゐるといふが結論であるから、女の看方に就て根本の立場を異にする私には一々承服

する事が出來なかつた。が、議論は兎もあれ、初めは微酔氣味であつたのが段々眞劍になつて低い沈んだ調子でポツリ／＼と話すのが淋しい秋の寂寞に浸み入るやうな氣がして、内心承服出來ない言葉の一つ／＼をシンミリと味はせられた。

「其女を怎うしやうツてのだい？」

『怎うする意も無いが、境遇の爲め眠つてるヒューマニチーの眼を覺まさせる爲め、眞面目な職業なり學問なりを與へてやりたいのだ』と、女の咄から發して人生論となり、コントのポジティヴィズムに說き及ぼし、蜘蛛が巢を作るやうに段々と大きな網を廣げて、終にはヒューマチニーの大哲學となつた。女の寫眞屋を初めるといふのも、一人の女に職業を與へる爲めといふよりは、救世の大本願を抱く大聖が辻說法の道場を建てると同じやうな重大な意味があつた。

が、其女は何者である乎、現在何處にゐる乎と、切込んで質問すると、『唯の通り一遍の知り合ひだからマダ發表する時期にならない。』とばかりで明言しなかつた。が、『一見して氣象に惚れ込んだ、共に人生を語るに足ると信じたのだ。』と深く思込んだ氣色だつた。

折々――といふよりは煩さく、多分下宿屋の女中であつたらう、十二階下とでも云ひさうな

眞白に塗り立てた女が現はれて來て、茶を汲んだり炭をついだりしながら媚かしい容子をして、何か調戯はれて見たさうにモジ／＼してゐた。沈毅な二葉亭の重々しい音聲と、恁うした眞劍な話に伴ふシンミリした氣分とに極めて不調和な下司な女の輕い上調子が蟲唾が走るほど堪らなく不愉快だつた。

十二時近く此の白粉の女が來て『最う臥せりますからお床を伸べませうか、』と云つた。遲いとは思つたが、初めて時間に氣が付いて急いで座を起たうとすると、尙だ餘談が盡きないから泊つて行けと云ひつつ『お客樣の床も持つて來て吳れ』と吩咐けた。

二葉亭は談話が上手でもあつたし且好きでもあつた。が、此晩ぐらゐ興奮した事は珍らしかつた。更ければ更けるほど益々身が入つて、今では其咄の大部分を忘れて了つたが、平日の冷やかな科學的批判とは全く違つたシンミリした人情の機微に入つた話をした。二時となり三時となつても話は綿々として盡きないで、餘り遲くなるからと臥床に橫になつて、蒲團の中に潜ずり込んで了つても猶ほ此儘眠て了ふのが惜しさうであつた。『寢やう乎』と寢返りしては復た暫らくして、『怎うも寢られない』と向き直つてポツリポツリと話し出し、到頭鷄の音が聞え

て雨戸の隙が白んで來たまでも語り續けた。明るくなつたので最う眠るでも無いと床を離れて『夫ぢやア歸らう』と云ふと、まだ話が仕足り無さゝうな容子で、『どうせ最う眠られんから運動がてら其邊まで送つて行かう』とムツクリ起上つて、そこ／＼に顏を洗つてから一緒に家を出て、津の守から坂町を下り、士官學校の前を市谷見附まで、シラ／＼明けのマダ大抵な家の雨戸が下りてる中をブラ／＼と送つて來た。八幡の鳥居の傍まで來て別れやうとした時、何と思つた乎、『イヤ、昨宵は馬鹿ツ話をした、女の寫眞屋の話は最う取消しだ、』とニヤリと笑ひつゝ、『飛んでもないお饒舌をして了つた！』

× × × × × ×

其晩の話を綜合して想像すると、境遇の爲め泥水稼業に墮ちた可哀相な氣の毒な女があつて、之を泥の中から拾ひ上げて、中年からでも一人前になれる自活の道を與へる意で、色々考へた結果がコヽの女の寫眞屋の內弟子に住込ませて仕込んで貰つてるらしかつた。が、幵んな女が果して有つたかドウかは知ない。此晩度々見えた白粉の女が然うらしくも思はれたが、マサカに二葉亭が『一見して氣象に惚れ込んだ』といふほど思ひ込んだ女が那樣な下司な引摺だとは

信じられなかつた。女の寫眞屋の話は夫切で、其後コッチから水を向けても『アレは空談サ』とばかり一笑に附して了つたから今以て不可解である。二葉亭は多情多恨で交友間に聞え、可成艶聞にも富んでゐたらしいが、私は二葉亭に限らず誰とでも酒と女の話には餘り立入らんから、此方面に於ける二葉亭の消息に就ては餘り多く知らない。唯だ此の一夜を語り徹かした時の二葉亭の緊張した相貌や言語だけが今だに耳目の底に殘つてる。

（三）食道樂と無頓着

二葉亭には道樂といふものが無かつた。が、若し強て求めたなら食道樂であつたらう。無論食通では無かつたが、始終可成嚴ましい贅澤を云つてゐた。且頗る健啖家であつた。

私が猿樂町に下宿してゐた頃は、直ぐ近所だつたので互に頻繁に往來し、二葉亭はいつでも夕方から來ては十二時近くまで咄した。其頃私は毎晩夜更かしをして二時三時まで仕事をするので十二時近くなると釜揚饂飩を取るのが例となつてゐた。下宿屋の女中を呼んで、顋をしやくツて『宜いかい』といふと直ぐに合點したもんだ。二葉亭も來る度毎に必ず此の常例の釜揚

を賞翫したが、一つでは足りないで二つまでペロリと平らげる事が度々であつた。

二葉亭の恩師古川常一郎も交友間に聞えた食道楽であつた。曾て或る暴風雨の日に俄に鰻が喰ひたくなつて、其頃名代の金杉の松金へ風雨を犯して綱曳き跡押付きの俥で駈付けた。處が生憎不漁で休みの札が掛つてゐたので、『折角暴風雨の中を遙々車を飛ばして來たのに殘念だ』と、悄氣返つて頻に愚痴つたので、帳場の主人が氣の毒がつて、『暫らくお待ち下さいまし』と奥へ相談に行き、『折角ですから一尾でお宜しければ……』と云つた。『一尾結構、』と古川先生大いに滿足して一尾の鰻を十倍旨く舌打して賞翫したといふ逸事がある。恩師の食道楽に感化された乎、將た天稟の食癖であつた乎、二葉亭は食通では無かつたが食物の穿議が可成嚴ましかつた。或る時一緒に散策して某々知人を番町に尋ねた歸るさに靖國神社近くで夕景となつたから、何處かで夕飯を喰はうと云ふと、此近邊には喰ふやうな家が無いと云つて容易に承知しない。夫から馬場を通り抜け、九段を下りて神保町をブラ〳〵し、時刻は最う八時を過ぎて腹の蟲がグウ〳〵鳴つて來たが、中々そこらの牛肉屋へ入らうと云はない。到頭明神下の神田川まで草臥れ足を引摺つて來たのが九時過ぎで、二階へ通つて例の通りに待たされるのが常より

一層待遠しかつたが『恁うして腹を空かして置くのが美食法の祕訣だ』と、態て持つて來た大串の脂ッこい奴をペロ〳〵と五皿平らげた。

私は食物には割合に無頓着であつて、何處でも腹が空けば其の近所の飲食店で間に合はして置く方であるが、二葉亭は中々爾う行かなかつた。いつでも散歩すると意見の衝突を來すは必ず食事であつて、其度毎に『食物では話せない』と云つた。電車の便利の無い時分、向島へ遊びに行つて、夕飯を喰ひにわざ〳〵日本橋まで俥を飛ばして行くといふ難かし屋であつた。

其上に頗る多食家であつて、親しい遠慮の無い友達が來ると水菓子だの餅菓子だのと三種も四種も山盛りに積んだのを列べて、お客はそつちのけで片端からムシヤ〳〵と間斷なしに頰張りながら話をした。殊に蜜柑と樽柿が好物で、見る間に皮や種子を山のやうに積上げ、『死骸を見ると左う澤山喰つたらしくて體裁が宜くない』などゝ云ひ〳〵普通の人が一つ二つを喰ふ間に五つも六つもペロ〳〵と平らげた。

が、贅澤は食物だけであつて、衣服や道具には極めて無頓着であつた。私が初めて訪問した時にダーウヰンの『種源論』が載つてゐた粗末な卓子が其後脚を切られて、普通の机となつて

露西亜へ行くまで使用されてゐた。硯も書生時代から持古るしたお粗末のものなら、墨も筆も少しも擇ばなかつた。机の上は勿論、床の間にさへ原稿紙や手紙殼や雜誌や書籍がダラシなくゴタクサ積重ねられ、裝飾らしい裝飾は一物も無かつた。一と口に云ふと、地方からポツと出の山出し書生の下宿住ひ同樣であつて、原稿紙からインキの色までを氣にする文人らしい趣味や氣分を少しも持たなかつた。文房粧飾といふやうなそんな問題には極めて無頓着であつて、或る時そんな咄が出た時、『百萬兩も儲かつたら眼の玉の飛出るやうな立派な書齋を作るサ』と事もなげに呵々と笑つた。

　衣服にも矢張無頓着であつた。煙草が好きで、いつでも煙管の羅宇の破れたのに紙を卷いてチウ〳〵吸つてゐたが、愈々烟脂が溜つて吸口まで滲み出して來ると、締めてゐるメレンスの帶を引裂いて掃除するのが癖で、段々引裂かれて半分近くまでも斜に削掛のやうに總が下つてる帶を平氣で締めてゐた。實業熱が昂じて待合 りを初めてから俄かにめかし出したが、或る時羽織を新調したから見て呉れと斜子の紋付を出して見せた。可成目方のある斜子であつたが、給甲斐機の胴裏が如何にも貧弱で見窄らしかつたので、『此胴裏ぢや表が泣く、最少し氣張れば

宜かつた』といふと『何故、昔から羽織の裏は甲斐機に定つてるぢやないか、』と澄ました顔をしてゐた。夫から、『此頃は二子の裏にさへ甲斐機を付ける。斜子の羽織の胴裏が繪甲斐機ぢやァ郡役所の書記か小學校の先生染みてゐて、待合入りをする旦那の估券に觸る。思切つて緞子か繻珍に換へ給へ、』（其頃羽二重はマダ流行らなかつた。）といふと、『緞子か繻珍？――そりやァ華族樣の事ッた、』と頗る不平な顔をして取合はなかつた。丁度同じ頃、其頃流行つた黒無地のセルに三紋を平縫ひにした單羽織を能く着てゐたので、『大分澁いものを拵へたネ、』と褒めると、『此位なものは知つてるサ、』と頗る得々としてゐた。

（四）俗曲趣味

二葉亭は江戸ッ子肌であつた。あの嚴めしい顔に似合はず、（野暮を任じてゐたが、）粹とか澁いとかいふ好みにも興味を持つてゐて相應に遊蕩もした。然ういふ方面の交際を全く嫌つた私の生野暮を晒つて、『遊蕩も少しはして見ないとホントウの人生が解らんものだ、一つ何處かイヽ處へ案内しやうぢやないか、』と能く云ひ〳〵した。

二葉亭のお父さんは尾州藩だつたが、長い間の江戸詰で江戸の御家人化してゐた。お母さんも同じ藩の武家生れだつたが、矢張江戸で育つて江戸風に仕込まれた。兩親共に三味線が好きで、殊にお母さんは常盤津が上手で、若い時には晩酌の微醉にお母さんの絃でお父さんが一とくさり語るといふやうな家庭だつたさうだ。(二葉亭の直話。)江戸の御家人には恁ういふ藝欲や道樂があつて、大抵な無器用なものでも淸元や常盤津の一とくさり位は唄つたもんだ。二葉亭のお父さんも晩酌の膳に端唄の一つも唄ふといふ嗜みがあつたのだから、若い時分には相應に此方面の苦勞をしたらうと思ふ。此の享樂氣分の血は二葉亭にも亦流れてゐた。

其頃の書生は今の靑年がオペラやキネマへ入浸ると同樣に盛んに寄席へ通つたもので、寄席藝人の物眞似は書生の課外レスンの一つであつた。二葉亭も亦無二の寄席黨で、語學校の寄宿舍にゐた頃は神保町の川竹(其頃は川竹とは云はなかつたが)の常連であつた。新内の若辰が大の贔負で、若辰の出る席へは千里を遠しとせず通ひ、寄宿舍の淋しい徒然には錆のある聲で若辰の節を轉がして喝釆を買つたもんださうだ。二葉亭の若辰の身振聲色と矢崎嵯峨の屋の談志の物眞似テケレッツのパアは寄宿舍の評判であつた。嵯峨の屋は今は六十何歲の老年でマダ

健在であるが、あのムッツリした朴々たる君子がテケレッツのパアでステテコ氣分を盛んに寄宿舍に溢らしたもんだ。語學校の教授時代、學生を引率して修學旅行をした旅店の或る一夜、監督の各教師が學生に強要されて隱し藝を迫られた時、二葉亭は手拭を姉さん被りにして箒を抱へ、俯向き加減に白い眼を剝きつゝ「處、青山百人町の、鈴木主水といふお侍ひさんは……」と瞽女の坊の身振りをして、平生小六かしい顏をしてゐる先生の意外な珍藝にアッと感服さしたといふのは矢張昔し取つた杵柄の若辰の物眞似であつたらう。「謹嚴」が洋服を着たやうな滿面苦澁の長谷川辰之助先生が恁ういふ意表な隱し藝を持つてゐやうとは學生の誰もが想像しなかつたから呆氣に取られたのも無理は無い。が、「謹嚴」のお化のやうな先生は尾州人と云ふ條、江戸の藩邸で江戸の御家人化した父の子と生れた江戸ッ子であつたのだ。

東片町に住つた頃、近所に常盤津を上手に語る家があつた。二葉亭は毎晩其刻限を覘つては垣根越しに聞きに行つた。艶ッぽい節廻しの身に泌み入るやうなのに聞惚れて、爲永の中本に出て來さうな仇な中年增を想像しては能く噂をしてゐたが、或る時尋ねると、「時にアノ常盤津の本尊を到頭突留めた處が、アンマリ見當外れでビックリした。仇な年增どころか皺だらけの

イ、婆アさんサ。あの乾枯っびたシャモの頸のやうな咽喉からドゥしてアンナ艶ッぽい聲が出るか、聲ばかり聞いてると身體が融けるやうだが、顏を見るとウンザリする。」と云つた。が、顏を見るとウンザリしても其聲に陶醉した氣持は忘れられないと見えて、其後も時々垣根の外へ聞きに行つたらしかつた。『平凡』の一節に『新内でも清元でも上手の歌ふのを聞いてると、何だか恁う國民の精粹といふやうなものが髣髴としてイキな聲や微妙の節廻しの上に現れて、吾が心の底に潜む何かに觸れて何かゞ想ひ出されて何とも云へぬ懷かしい心持になる。私は之を日本國民が二千年來此生を味うて得た所のものが間接の思想の形式に由らず直ちに人の肉聲に乘つて無形の儘で人心に來り迫るのだ」とあるは二葉亭の此間の藝に魅入られた心境を説明してをる。だが、恁ういふと馬鹿に難かしく面倒臭くなるが、畢竟は二葉亭の頭の隅のドコかに江戸ッ子特有の廢頽氣分が潜在して、同じデカダンの産物である恁ういふ俗曲に共鳴したのであらう。之を日本國民が二千年來此生を味ふて得た所のものと國民性に結びつけて難かしく理窟をつける處に二葉亭の國士的形氣が見える。

だが、同じ日本の俗曲でも、河東節の會へ一緒に聽きに行つた事があるが、河東節には閉口

したらしく、成程親類だけに二段聽きだ、アンナものは三味線の搖籃時代の產物だと云つて根つから感服しなかつた。河東節の批評は略ぼ同感であつたが、私が日本の俗曲では何と云つても長唄であると長唄禮讃を主張すると、長唄は奧さん向きの家庭音曲であると排斥して、何と云つても隅田河原の霞を罩めた春の夕暮といふやうな日本民族獨特の淡い哀愁を誘つて日本の民衆の腸に染込ませるものは常盤津か新内の外には無いと反對した。此俗曲論は日本の民族性の理解を基礎として立てた說であるが、一つは兩親が常盤津が好きで、兒供の時から聽き馴れてゐたのと、最一つは下層階級に味方する持前の平民的傾向から自然に是等の平民的音曲に對する同感が深かつたのであらう。

二葉亭は洋樂には一向趣味が無かつた。折に觸れて洋樂に對する私の興味を語ると、『洋樂はトツピキピのピだ』と一言に蔑しつけた。『洋樂にも可成シンミリしたものがある、ヘイヅンかシユーベルトのセレナードでも聽いて見給へ、可成シンミリした情調が味へる、且シンミリしたものばかりが美くしい音樂では無いから……』と二三度音樂會へ誘つて見たが、『洋樂は眞平御免だ！』と云つて應じなかつた。櫻井女學校の講師をしてゐた時分、卒業式に招かれて

臨席したが、中途にピアノの彈奏が初まつたので不快になつて卽時に退席したと日記に書いてある。晩年には夫ほど偏意地では無かつたが、左に右く洋樂は嫌ひであつた。此頃の洋樂流行時代に居合はして、所謂鋸の目を立てるやうなヴァイオリンやシャモの絞殺されるやうなコロラチウラ・ソプラノでもそこらこゝらで聽かされ、加之にラヂオで放送までされたら二葉亭は迚も助かるまい。苦蟲潰しても居堪まれないだらう。

（五）犬と猫

俗曲よりも好きだつたのは犬と猫であつた。俗曲と家畜を一緒にするのは變であるが二葉亭の趣味問題として云ふと、俗曲の方には好き嫌ひや註文があつて、誰が何を語つても感服したのでは無かつたが、家畜の方は少しも擇り好みが無く、どんな犬でも猫でも平等に愛してゐた。「浮雲」時代の日記に、『常に馴れたる近隣の飼犬の此頃は余を見ても尾を振りもせず跟をも追はず、其傍を打通れば鼻つらをさしのべて臭ひを嗅ぐのみにて餘所を向く、此頃は殽を食する事稀なれば殘りを食ます事も屢々あらざればと心の中に思ひたり、唯恁う思ひたるばかりに

て左して心に留めざりしかど何となく快からず』とあるは犬に與へる殘殽にだも不自由をして懷いた犬に背かれたのを心淋しく感じたのであらう。

『平凡』の中の犬の一節は二葉亭の作中屈指の評判物であるが、あれは仲猿樂町時代の飼犬の實話を書いたものである。あの行衛知れずになつた犬といふはポインターとブルテリヤの醜い處を搗交ぜたやうな下等雜種であつて、『平凡』にある通りに誰の目にも餘り見つとも好くない厭な犬であつた。『平凡』では棄てられてクン〳〵鳴いてゐた犬の子を拾つて育て上げたやうに書いてあるが、事實は役所の歸途に隨いて來た野良犬をズル〳〵ベツタリに飼犬として了つたので、『平凡』にある通りな狐のやうな厭な犬であつたから、家族は誰も嫌がつて碌々關ひつけなかつた。が、犬振に由て愛憎を二つにしない二葉亭は不便がつて面倒を見てやつたから、犬の方でも懷いて、二葉亭が出る度毎に跟を追つて困るので、役所へ行く時は格子の中に閉ち込めて何處へも出られないやうにして置いた。其の留守中は淋しさうにションボリして時々悲しい低い聲を出して鳴いてゐたが、二葉亭が歸つて來て格子を開けると嬉しさうに飛付き、框に腰を掛けて靴を脫がうとする膝へ飛上つて、前脚を肩へ掛けてはベロ〳〵と頰ぺたを舐めた。

『こら〳〵、そんな所爲をする勿』と二葉亭は柔しく制しながらも平氣で舐めさしてゐた。時に出ると、嬉しくて堪らぬやうに踵から泥足のまゝ座敷まで追掛けて來てジャレ付いた。ジャレ付くのが可愛いやうな犬では無かつたが、二葉亭はホク〳〵しながら、『こら〳〵、疊の上が泥になる、』と細い眼をして叱りつけ、庭先きへ追出しては麪麭を投げてやつた。之が一日の中の何よりの樂みであつた。『平凡』に『……ポチが私に對ふと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？……何方だか其れは解らんが、兎に角相互の熱情熱愛に人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる、』とあるは此瞬間の心持を云つたもんだ。

此犬が或る日、二葉亭が出勤した留守中、お客が來て格子を排けた途端に飛出し、何處へか逃げて了つて夫切り歸らなかつた。丁度一週間ほど訪ひも訪はれもしないで或る夕方偶と尋ねると、いつでも定つて飛付く犬が居ないので、怎うした犬はと訊くと、潮垂れ返つた元氣の無い聲で、『逃げたのか、取られたのか、居なくなつて了つた』と、見えなくなつた顚末を語つて吻と嘆息を吐いた。『丸きり踪跡が解らんのかい？』と重ねて訊くと、夫れ以來毎日役所から歸ると處々方々を搜しに歩くが皆目解らない、『多分最う殺されて了つたらう』と悄れ返つて

ゐた。『昨日は酒屋の御用が來て、此方さまのに善く似た犬の首玉に兒供が繩を縛り付けて引摺つて行くのを壹岐殿坂で見掛けたと云つたから、直ぐ飛んでつて其處ら中を訊いて見たが、皆目解らなかつた。兒供に虐め殺された乎、犬殺しの手に掛つたか、どの道モウ居ないものと斷念めにやならない』と、自分の兒供を喪くした時でも之ほど落膽すまいと思ふほどに弱り込んでゐた。家庭の不幸でもあるなら悔みの言葉の云ひやうもあるが、犬では何と言つて慰めて宜いか見當が付かないので、『犬なんてものは何處かへ行つて了つたと思ふと、飛んでも無い時分に戻つて來るもんだ。今に必と歸つて來るよ、』と云つて見た。が、二葉亭は『イヤ、最う斷念めた！』と默り込んで了つたので、此上最早言葉の接穗が無かつた。

其當座は犬の事ばかりに屈托して、得意の人生論や下層研究も餘り口に出なかつた。恰も私の友人の家で純粹セツター種の仔が生れたので、或る時セツター種の深い長い艶々した天鵞絨よりも美くしい毛並と、性質が怜悧で敏捷こく、勇氣に富みながら平生は沈着いて鷹揚である咄をして、一匹仔犬を世話をしやうかと云ふと、苦々しい顏をして、『イヤ、貰ふ氣はしない、先妻が死んで日柄が經たない中に、どんな美人があるからッて後妻を貰ふ氣になれるかい、』と

褻くなつた醜い犬を追懐して惻々の情に堪へないやうだつた。

犬よりも最う一倍酷愛してゐたのは猫であつた。皆河町時代から飯田町、東片町の家に出入したものは誰でも知つてる、白いムク〳〵と肥つた大きな牝猫が、いつでも二葉亭の膝の廻りを離れなかつたものだ。東片町時代には大分老耄して居睡ばかりしてゐたが、此の婆さん猫が時々二葉亭の膝へ這上つて甘垂れ聲をして倦怠さうに戯れてゐた。人間なら好い齢をした梅干婆さんが十五六の小娘の嬌態を作つて甘つ垂れるやうなもんだから、小癪らしくて撲り倒してやりたい處だが、猫だから夫ほど妙にも見えないで、二葉亭はお祖父さんが孫を可愛がるやうにホク〳〵して甘やかしてゐた。

此猫も本とは皆河町時代に何處からか紛れ込んで來た迷ひ猫であつて、毛並から面付までが餘り宜く無かつた。が、二葉亭は、『誰も褒めて呉れ手が無くても、大事な可愛い〳〵娘だ、』と、猫を抱へて頬摺りしながら能く言つたもんだ。『人間の標準から見て、猫の容貌が好いの惡いのといふは間違つてる、此猫だつて誰も褒めて呉れ手が無くても猫同士が見たら案外な美人であるかも知れない、其證據には交尾の時には牡猫が多勢張りに來する、』と。

且曰く、『假に容貌が惡いにしても、容貌の好惡で好き嫌ひをするのは眞に愛する所以では無い。自分の娘が醜いからと云つて親の情愛に變りが無いと同樣に、猫にだつて矢張同じ人情が無ければならない筈だ。犬や猫の容貌が好いの惡いのと云つて好いたり嫌つたりするは人間として實に恥かしい事だ。』と。

二葉亭の家では主人の次には猫が大切にされた。主人の留守に猫に粗糙があつては大變だと云つて、家中がどれほど猫を荷厄介にして心配したか知れない。出入の八百屋の女房が飛んで來て、『大變で厶ります、唯今此方さまのお猫さんが横町の犬に追はれて向ふの路次に逃込みました。』と目の色變へて註進に及んだといふ珍談もあつた。

殽を買ふにも主人の次には猫の分を取つた。殘殽を當てがふやうな事は決して無かつた。時々は『猫になりたい』といふ影口もあつた。下世話に、犬は貰はれる時お子樣方はお幾たりと尋ねるが猫は孩兒は何匹だと訊くと云ふ通りに、猫は犬と違つて兒供に弄られるのを煩さがるものだが、二葉亭の家では猫は主人の寵幸であつて兒供が翫弄にするのを許さなかつた。兒供の方でも父の秘藏を呑込んで、先年死んだ長男の玄太郎が五ツ六ツの惡戲盛りにも『あれは父

ちやんのおにやん子」と云つて指一本も決して觸れなかつた。

此猫は主人の寵愛に馴れて頗る行儀が惡るかつた。客が來て食物が出ると、必ず何處からかヌウツと現はれ、ノソ〳〵食物の傍へ行つて臭ひを嗅ぐ。世間の猫はコソ〳〵忍び足で近づいては、油斷を見濟まして引攫ふものだが、二葉亭の猫は叱られた事が無いから恐いといふ事を知らない。鷹揚にノソ〳〵やつて來て、自分の好きな鹽煎餅か搔餅でもあらうもんなら、宛も此家のものは竈の下の灰までが俺の物だといふやうな顏をして、平氣で菓子鉢に顏を突込んではボリボリと喰べ初める。すると二葉亭は眼を細くして、『これ〳〵、復たそんな意地汚なをする』と靜かに膝へ抱取つて掌上へ菓子を取つて喰はせながら、『放任教育だから行儀が惡くて困る』と猫の頭を撫で〳〵『が、本來猫に行儀を仕込むツてのが間違つてる、人間の道德で猫を縛らうとするのは人間の我儘で、猫に取つては迷惑千萬な咄だ』と云つた。けれどもお膳が出てから、生腥い臭ひに愈々鼻をムク〳〵さして、お客のお膳であらうと一向お關ひなしに顏を突出し、傍若無人にお先きへ失敬しやうとする時は、いくら放任教育でも有繫にお客の肴を掠奪するを打棄つて置けないから、然ういふ時は自分の膝元へ引寄せてお椀の蓋なり小皿なり

に肴を取分けて陪食させた。が、此の悍白猫めは頗る健啖家で、少とやそつとのお裾分では滿足しなかつた。刺身の一と皿位は獨り占めにペロリと平らげて猶ほ飽足らずに、首を伸ばして主人が箸に挿んで口まで持つて行かうとするのを矢庭に横取りをする。すると二葉亭は眼を細くして、『ドウモ敏捷こい奴だ！』と莞爾々々しながら悦に入つたもんだ。

二葉亭の猫に於けるや、丁度若い母親が初めて產んだ子を甘やかすやうに、始終懷ろに入れたり肩へ載せたり、夜は抱いて寢て、チョツカイでも出せば溶けるやうな顏をして頰摺したり接吻したりした。猫めの方でも大甘垂れに甘垂れて舌を出してはペロ〳〵と二葉亭の顏を舐めた。『接吻だけは止せといふが、怎うしずにはゐられない』と狀貌魁偉と形容しさうな相好を壞して、頤の下に猫を抱へ込んでは小娘のやうに嬉しがつて舐めたり撫つたりした。

飯田町にゐた時分、或る日曜日の朝十時頃に尋ねると、今起きたばかりだと云つて眠さうな顏をしてゐた。なんぼ日曜日でも少と寢坊が過ぎると云ふと、『昨宵は猫のお產で到底寢られなかつた。』と云つた。段々訊くと、豫てから猫の產月が近づいたので、書齋の戶棚に行李を準備し、小さい座蒲團を敷いて產所に充てゝゐた處、昨夜は宵から容子が變なので行李の產所へ入

れるとは直ぐ飛出して息遣ひも苦しさうに喵々啼きながら頻りと身體をこすりつけて變な容子をする。爰で産落されては大變と、强に行李へ入れて押へ付けつゝ靜かに脊中から腰を撫つてやると、快い氣持さうに漸と落付いて、暫らくしてから一匹産落し、到頭拂曉まで掛つて九匹を取上げたと、猫のお産の話を事細やかに說明して、『お産の取上爺となつたのは辨慶と僕だけだらう。が、卿の君よりは猫の方が餘程豪かつた。』と手柄顏をした。夫から以來習慣が付き、子を産む度每に必ず助産のお役を勤め、『犬猫の産科病院が出來れば差詰め院長になれる經歷が出來た。』と大得意だつた。

不思議な事には之ほど大切に可愛がつてゐたが、此猫には名が無かつた。家族は便宜上『白』と呼んでゐたが、二葉亭は決して名を呼ばなかつた。『名なんかドウでも好い、無くても好い、猫に名なんか付けるのは人間の繁文縟禮で、猫は名を呼ばれたつて決して喜ばない。』と云つてゐた。こんな處にも空名虛譽を喜ばない二葉亭の面目が現れてゐた。

最一つ不思議な事は、此位に猫や犬を可愛がつてゐても、ツイぞ一度人から貰つた事が無い。『棄てられたり紛れたりして來たから拾つて育てゝやるので、犬や猫を飼ふのは樂みよりは苦

みである、わざ〳〵求めて飼ふもんぢや決して無い、」と云つてゐた。二葉亭の犬や猫に對するや人間の子を愛すると同じ心持であつた。

六　二葉亭の文章癖

二葉亭は始終文章を氣にしてゐた。文人が文章に氣を揉むのは當然のやうであるが、今日の偶像破壞時代の文人は過去の一切の文章型を無視して、同じ苦むにしても之までの文章論や美辭法からは全く離れて自由であるべき筈である。極端に云へば、思想さへ思ふ存分に發現する事が出來るなら方式や修辭は革命家の立場からはドウでも宜かるべき筈である。二葉亭も一つの文章論としては隨分思切つた放膽な議論をゐたが、率ざ自分が筆を執る段となると假名遣ひから手爾於波（テニヲハ）、漢字の正訛、熟語の撰擇、若い文人が好い加減に創作した出鱈目の造語の詮索から句讀（くとう）の末までを一々精究して際限なく氣にしてゐた。

二葉亭時代の人は大抵國漢文の秩序的教育を受けたから、國漢文の課題文章の習練には可成苦まされて文學卽文章の誤つた考を吹込まれてゐた。當時の文章教育といふのは古文の摸倣で

あつて、山陽が項羽本紀を數百遍反覆して一章一句を盡く暗記したといふやうな教訓が根深く頭に染込んでゐて、此の根深い因襲を根本から剿絶する事が容易で無かつた。二葉亭も根が漢學育ちで魏叔子や壯悔堂を毎日繰返し、同じ心持で清少納言や鴨長明を讀み、馬琴や京傳三馬の俗文學までも究め、課題の文章を練習する意で近松や馬琴の眞似をしたり、或は俗文を漢譯したり漢文を俗譯したりした癖が拔け切れないで、文章を氣にする文章家氣質がいつまでも失せなかつた。一面には從來の文章型を根本から破壞した革命家であつたが、同時に一面に於ては亦極めて神經的な新らしい雕蟲の技術家であつた。

　自分は小說家で無いとか文人になれないとか云つたには種々の複雜した意味があつたが、自ら文章の才が無いと斷念めたのも亦有力なる理由の一つであつた。二葉亭の作を讀んで文才を疑ふ者は恐らく決して無からうと思ふが、二葉亭自身は常に自己の文才を危んで神經的に文章を氣に病んでゐた。文章上の理想が餘り高過ぎたといふよりも昔の文章家氣質が失せなかつたので、始終文章に屈托してゐた。ツルゲーネフを愛讀したのも文章であつて、晩年餘りに感服しなくなつてからも猶ほ修辭上の精妙を嘖々し、ドストエフスキーの『罪と罰』の如きは露國

の最大文學であるを確認しつゝも猶ほ、ドストエフスキーの文章はカラ下手くそで全で成つてゐないと云つてツルゲーネフの次位に置き、文學上の批判が兎もすれば文章の好惡に囚はれてゐた。例へば現時の文學に對しても、露伴を第一人者であると推しながらも、座右に置いたのは紅葉全集であつた。近松でも西鶴でも內的概念よりはヨリ多くデリケートな文章味を鑑賞して、此の言葉の綾が面白いとか此の引掛けが巧みだとかいふやうな事を能く咄した。又紅葉の人生觀照や性格描寫を凡近淺薄と貶しながらも其文章を古今に匹儔なき名文であると激賞して常に反覆細讀してゐた。最も驚くべきは『新聲』とか何々文壇とかいふやうな青年寄書雜誌をすらわざ／＼購讀して、中學を卒業したかそこらの無名の青年の文章まで一々批點を加へたり評語を施こしたりして細さに味はつた。丁度植物學者が路傍の雜草にまで興味を持つて精しく研究すると同一の態度であつた。

　此點では私は全く反對であつた。私は自分が惡文家であるからでもあらうが、夙くから文章を輕蔑する極端なる非文章論を主張し、曾て紅葉から文壇の野獸視されて、君の文章論は狼の遠吠だと罵られた事があるくらゐの文章上のアナーキストであつたから、文章論では二葉亭と

も度々衝突して、内心窃に二葉亭の古い文章家氣質を慊らなく思つてゐた。が、自分のやうな鈍感者では到底味ふ事の出來ない文章上の微妙な說を聞いて大いに發明した事も屢々あつたし洗練推敲肉瘦せるまでも反覆塗竄何十遍するも決して飽きなかつた大苦辛を見て衷心嘆服せずにはゐられなかつた。歿後遺文を整理して偶然初度の原稿を檢するに及んで、世間に發表した既成の製作と最始の書き卸しと文章の調子や匂ひや味ひが丸で別人であるやうに違つてるのを發見し、二葉亭の五分も隙が無い一字の增減をすら許さない完璧の文章は全く千鍛萬錬の結果に外ならないのを知つて、二葉亭の文章に對する苦辛感嘆を愈々益々深くした。

(七) 田端の月夜

三十六年、支那から歸朝すると間もなく腦貧血症を愛ひて暫らく田端に靜養してゐた。病氣見舞を兼ねて久し振で尋ねると、思つたほどに衰れてもゐなかつたので、半日を閑談して夜るの九時頃となつた。暇乞ひして歸らうとすると、停車場まで送らうと云つて、唯つた二三丁であるが限なく霽れた月の晩をブラ〱同行した。

滿月では無かつたが、一點の曇りも無い冴えた月夜で、丘の上から遠く望むと、見渡す果もなく一面に銀泥を刷いだやうに白い光で包まれた得も云はれない絶景であつた。丁度秋の中頃の寒くも暑くも無い快い晩で、餘り景色が好いので二人は我知らず暫らく佇立つて四邊を眺めてゐた。二葉亭は忽ち底力のある聲で『明月や……』と叫つて、較や暫らく考へた後、『……跡が出ない。が、爰で名句が浮んで來るやうでは文人の緣が切れない。絕句する處が賴もしいので、此鹽梅ではマダ實業家の脈がある、』と呵然として笑つた。

汽車の時間を計つて出たに拘らず、月に浮かれて餘りブラ〳〵してゐたので、停車場でベルが鳴つた。周章てゝ急坂を驅下りて轉がるやうに停車場に飛込みさま切符を買つた處へ、終列車が地響き打つて突進して來た。ブリッジを渡る暇もないのでレールを踏越えて、漸とこさと乘込んでから顏を出すと、跡から追駈けて來た二葉亭は柵の外に立つて、例の錆のある太い聲で、『芭蕉さまのお連れで危ない處だつた』と云つた。其途端に列車は動き出し、窓からサヨナラを交換したが、狹い路を辿つて歸る淋しい背影が月明りに霞んで見えた。二葉亭の健康の衰へ初めたのは其頃からであつた。

八　對島沖の大海戰の二日後

最も元氣だつたのは日露戰爭中であつた。大阪朝日の待遇には餘り平らかでなかつたが、東京の編輯局には毎日或は隔日に出掛けて、海外電報や戰地の通信を瞬時も早く讀むのを樂みとしてゐた。

「砲聲聞ゆ」といふ電報が朝の新聞に見え、愈々海戰が初まつたとか、或は之から初まるとかいふ風說が世間を騷がした日の正午少し過ぎ、飄然やつて來て、玄關から大きな聲で、

「到頭やつたよ！」と叫つた。

「やつたか？」と私も奥から飛んで出で、「結果は？」

「マダ十分解らんが、勝利は確實だ。五隻か六隻は沈めたらう。電報は來てゐるが、海軍省が伏せてるから號外を出せないんだ。」と左も大本營か海軍省の幕僚でもあるやうな得意な顏をして、「昨夜はマンヂリともしなかつた。今朝も早くから飛出して今まで社に詰めてゐた。結局はマダ解らんが、電報が來る度每に勝利の獲物が次第に殖えるから愉快で堪らん。社では小使

給仕までが有頂天だ。號外が最う刷れてるんだが、海軍省が沈默してるから出す事が出來んで焦り〳〵してゐる。尤も今日は多分夕方までには發表するだらうと思ふが、近所まで用達しに來たから內々密と洩らしに來た。』

と、いつも沈着いてる男が、跡から〳〵と籠上げる嬉しさを包み切れないやうに滿面を莞爾々々さして『何十年來の溜飲が一時に下つた。赤錆だらけの牡蠣殼だらけのボロ船が少しも恐ろしい事アないが、夫れでも逃がして浦鹽へ追ひ込めると士氣に關係する。之で先づ一段落が着いた。詳報は解らんが、何でも餘程旨く行つたらしい……』と鳥渡考へて『事に出るとロスの奴、滅茶々々かも解らん。今日の電報が樂みだ。』

と云ひつゝソヽクサして『恁うしちやをられん。之から復た社へ行く。』と茶も飲まないで直ぐ飛出し、『大勝利だ、今度こそロスの息の根を留めた、下戸もシャンパンを祝ふべしだネ！』と周章た格子を排けて、待たせて置いた車に飛乘りざま、『急け、急け！』

こんな周章たゞしい忙がしい面會は前後に二度と無かつた。『ロスの奴滅茶々々かも解らん』と宛も軍令部長か參謀總長でもあるかのやうなプライドが滿面に漲つてゐた。恐らく此歡喜を

一人で味つてられないで、周章てゝ飛んで來たのであらう。

九　二葉亭の破壞力

二葉亭に親近した或る男は云つた。『二葉亭は破壞者であつて、人の思想や信仰を滅茶々々に破壞するが、破壞したばかりで之に代るの何物をも與へて呉れない』と。思想や信仰は自ら作るもので人から與へるべきもので無いから、求めるものゝ方が間違つてるが、左に右く二葉亭は八門遁甲といふやうな何處から切込んでも切崩す事の出來ない論陣を張つて、時々奇兵を放つては對手を焦らしたり悩ましたりする擒縱殺活自在の思辯に頗る長じてゐた。

勿論、演壇又は靑天井の下で山犬のやうに吠立つて憲政擁護を叫ぶ熱辯、若くは建板に水を流すやうに或は油紙に火を點けたやうにベラ〳〵喋べり立てる遂辯では無かつたが、丁度甲州流の戰法のやうに隙間なく槍の穗尖を揃へてジリ〳〵と平押しに押寄せるといふやうな論鋒は頗る目鮮ましかつた。加ふるに肺腑を突き皮肉に入るの氣鋒極めて鋭どく、一々の言葉に鐵槌のやうな力があつて、觸るゝ處の何物をも粉碎せずには置かなかつた。二葉亭に接近して此の

鋭どい萬鈞の重さのある鐵槌に思想や信仰を粉碎されて、茫乎として行く處を喪つたものは決して一人や二人で無かつたらう。

それがしの小說家が俄に作才を鈍らして一時筆を絕つて了つたのも二葉亭の鐵槌を受けた爲めであつた。それがしの天才が思想の昏迷を來して一時有らぬ狂名を歌はれたのも亦二葉亭の鐵槌に虐げられた結果であつた。二葉亭に親近するものゝ多くは鐵槌の洗禮を受けて、精神的に路頭に迷ふの浮浪人たらざるを得なかつた。中には靈の飢餓を訴ふるものがあつても、靈の空腹を充たすの糧を與へられないで、却て空腹を鐵槌の弄り物にされた。

二葉亭の窮理の鐵槌は啻に他人の思想や信仰を破壞するのみならず自分の思想や信仰や計畫や目的までも間斷なしに破壞してゐた。で、破壞しては新たに建直し、建直しては復た破壞し丁度兒供が積木を翫ぶやうに一生を建てたり破したりするに終つた。

二葉亭は常に云つた。フヰロソフヰーといふは何處までも疑問を追究する論理であつて、若し最後の疑問を決定して了つたなら夫はドグマであつてフヰロソフヰーでなくなつて了うと。又曰く、人生の興味は不可解である、此の不可解に或る一定の解釋を與へて容易に安住するは「あ

きらめ」でなければイグノランスであると。此の如くして二葉亭の鐵槌は輕便安直なドグマや「あきらめ」やイグノランスを破壞すべく常に揮はれたのである。

十二　葉亭の風丰人品

誰やらが二葉亭を評して山本權兵衛を小說家にしたやうな男だと云つた。海軍問題以來山本伯の相場は大分下落し、漸く復活して頭を擡上げ掛けると、忽ち復た地震の爲めにピシャンコとなつて了つたから、文壇の山本伯と云ふは苔の下の二葉亭も餘り難有く無いだらうが、風丰が何處か似通つてゐる。山本權兵衛と見立てたのは必ずしも不適評ではない。

が、骨相學や人相術が眞理なら、風丰の似通つてゐる二人は性格の上にもドコかに共通點がありさうなもんだが、事實は性格が全く相反對してゐた。二葉亭に若し山本伯の性格の一割でもあつたら、アンナにヤキモキ悶えたり焦々したりして神經衰弱などに罹らかつたらう。社會的にも最少し成功したらう。が、氣の毒なる哉二葉亭は山本伯とは全く正反對に餘りに內氣であつた、餘りに謙遜であつた、且餘りに潔癖であつた。切めて山本伯の九牛一毛なりとも功名

心があり、粘着力があり、利慾心があり、且其上に今少し鐵面皮であつたなら、恐らく二葉亭は二葉亭四迷だけで一生を終らなかつたであらう。

が、方領粗髯の山本權兵衛然たる魁偉の狀貌は文人を青瓢簞の生白けた柔弱男のシノニムのやうに思ふ人たちをして意外の感あらしめた。二葉亭の歿後知人は皆申合はしたやうに二葉亭の風丰が所謂小說家型で無かつた初對面の意外な印象を語つてゐる。其上に重厚沈毅な風丰に加へて、双眉の間に深い縱の皺を刻みつゝ緊と結んだ口から考へ〳〵ポツリ〳〵と重苦しく語る應對振は一見信頼するに足る人物と思はせずには置かなかつた。且對談數刻に渉つても曾て倦色を示した事が無く、如何なる人に對しても少しも城府を設けないで、己れの赤心を他人の腹中に置くといふやうな話し振は益々人をして心服せしめずには置かなかつた。

二葉亭を何と云つたら宜からう。小說家型といふものを強ち青瓢簞的のヒヨロ〳〵男と限らないでも二葉亭は小說家型では無かつた。文人風の洒脫な風流氣も通人氣取の嫌味な肌合も無かつた。が、同時に政治家型の邊幅や衒氣や倨傲やニコポンは藥にしたくも無かつた。君子とすると覇氣があり過ぎた。豪傑とすると神經過敏であつた。實際家とするには理想が勝ち過ぎ

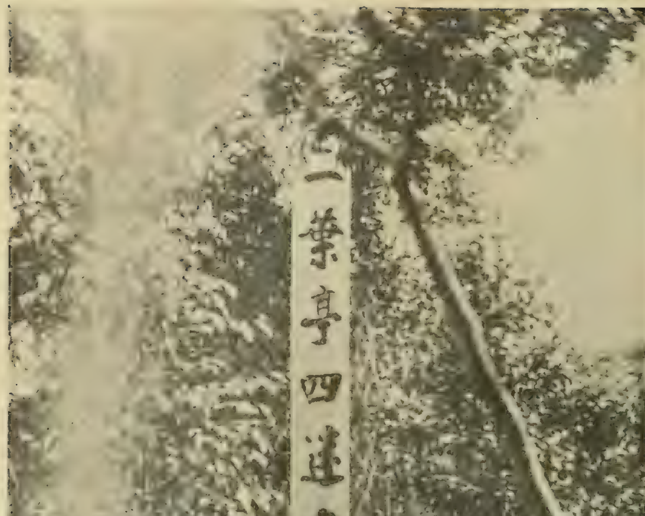
てゐた。道學先生とするには世間が解り過ぎてゐた。ツマリ二葉亭の風格は小說家とも政治家とも君子とも豪傑とも實際家とも道學先生とも何とも定められなかつた。

社交的應酬は餘り上手で無かつたが、慇懃謙遜な言葉に誠意が溢れて人を心服さした。辯舌は下手でも上手でも無かつたが話術に長じてゐて、何でも無い世間咄をも面白く味はせた。殊に小說の梗概でも語らせると、多少の身振聲色を交へて人物を眼前に躍出させるほど頗る巧みを究めた。二葉亭が人を心服さしたのは半ば此の巧妙なる座談の力があつた。

二葉亭は極めて謙遜であつた。が、同時に頗る負け嫌ひであつた。遠慮の無い親友同士の間では人が右と云へば必ず左と云ふのが常癖で、結局同じ結論に達した場合『むゝ、然うか、夫れなら同說だ、』と云つたもんだ。初めから同じ結論に達するのが解つてゐても故意に反對に立つ事が決して珍らしくなかつた。且此の反對の側から同じ結論に達する議論を組立てる手際が頗る鮮かであつた。

負け嫌ひの甚だしいは、人に自分の腹を看透かされたと思ふと一端決心した事でも直ぐ撤去して少しも未練を殘さなかつた。曾て二葉亭の一身上の或る重要な問題に就て坪内博士と談合

した時、二葉亭の心の中は多分恁うであらうと推斷して博士に話した。すると間もなく二葉亭は博士を訪ふて、果して私が臆測した通りな心持を打明けて相談したので、『内田君も今來て君の心持は多分然うであらうと話した』と、坪内博士が一と言云ふと直ぐ一轉して、『そんな事も考へたが實は猶だ決定したのでは無い』と打消し、そこ〳〵に博士の家を辭するや否、直ぐ其足で私の許を訪ひ、『今、坪内君から聞いて來たが、君は恁う〳〵云つたさうだ。飛んでも無い誤解で、毛頭僕はそんな事を考へた事は無い、』と辯明した。復た例の癖が初まつたナと思ひつゝも、二葉亭の權威を傷つけないやうに婉曲に言ひ廻し、僕の推察は誤解であるとしても、然うした方が君の爲めの幸福では無い乎と意中の計畫通りを實行させやうとした。が、口を酸くして何と說得しても『开ンな考は毛頭無い、』とばかり主張つて、相談は到頭夫ぎりとなつて了つた。現在自分の口から言出して置きながら、人に看透かされたと思ふと直ぐコロリと一轉下して、一端口外した自家意中の計畫をさへも容易に放擲して少しも惜まなかつたのは鳥渡類の少ない負け嫌ひであつた。恁ういふ旋毛曲りの「アマノジヤク」は始終であつて、一々記憶してゐないほど珍らしくなかつた。



二葉亭埋骨の木標

（池邊三山筆）

二葉亭は恁ういふ人物であつた。小說家であつて一向小說家らしく無かつた人、政治家を志ざしながら少しも政治家らしくなかつた人、實業家を希望しながら企業心に乏しく金の欲望に淡泊な人、謙遜なくせに頗る負け嫌ひであつた人、ドグマが嫌ひなくせに頑固に獨斷に執着した人、更に最う一つ加へると極めて常識に富んだ非常識な人――恁ういふ矛盾だらけな性格破産者であつて、此の矛盾の爲めに竟に一生を破壞に終つた人であつた。

二葉亭の古い日記から二節を引いて以て二葉亭の面影と性格とを偲ぶの料としやう。

『此世を棄てんとおもひたる人にあらねば此世の眞の價値は知る可からず。』

『氣の欝したる時は外出せば少しは紛るゝ事もあるべしと思へどもわざと引籠りて求めて煩悶するが却て心地よきやうにも覺ゆ。』

――大正四年八月稿、同大正十三年十月補筆――

二葉亭追録

（一）二葉亭が存命だつたら

二葉亭が存命だつたら今頃ドウしてゐるだらう？ といふ問題が或る時二葉亭を知る同士が寄合つた席上の話題となつた。二葉亭は迚も革命が勃發した頃まで露都に辛抱してゐなかつたらうと思ふが、假に當時に居合はしたとしたら、ロマーノフ朝に味方したらう乎、革命黨に同感したらう乎、ドッチの肩を持つたらう？ 多恨の詩人肌から亡朝の末路に薤露の悲歌を手向けたらうが、ツァールの悲慘な運命を哀哭するには餘りに深くロマーノフの罪惡史を知り過ぎてゐた。が、同時に入露以前から二三の露國革命黨員とも交際して渠等の苦辛や心事に相應の理解を持つてゐても、双手を擧げて渠等の革命の成功を祝するには亦餘りに多く渠等の陰謀史や虐殺史を知り過ぎてゐた。

二葉亭の頭は根が治國平天下の治者思想で叩き上げられ、一度は軍人をも志願した位だから、

ヒユーマニチーの福音を說きつゝも猶ほ權力の信仰を把持して、"Might is right" の信條を忘れなかつた。貴族や富豪に虐げられる下層階級者に同情してゐても權力階級の存在は社會組織上止むを得ざるものと見做し、渠等に味方しないまでも呪咀するほどに憎まなかつた。

二葉亭はヘルチエンやバクーニンを初め近世社會主義の思想史に略ほ通じてゐた。就中ヘルチエンは晚年までも座邊から全集を離さなかつたほど反覆した。マルクスの思想をも一と通りは辨へてゐた。が、畢竟は談理を好む論理遊戲から愛讀したので、理解者であつたが共鳴者で無かつた。書齋の空想として興味を持つても實現出來るものとも又是非實現したいとも思つてゐなかつた。却て恁ういふ空想を直ちに實現しやうと猛進する革命黨や無政府黨の無謀無考慮無經綸を馬鹿にし切つてゐた。露都へ行く前から露國の內政や社會の狀勢に就ては絕えず相應に硏究して露國の暗流に良く通じてゐたが、露西亞の官民の斷へざる衝突に對して當該政治家の手腕器度を稱揚する事はあつても革命黨に對してはトンと同感が稀く、渠等は空想にばかり俘はれて夢遊病的に行動する駄々ッ子のやうなものだから、時々は灸を据ゑてやらんと取締りにならぬとまで、官憲の非違橫暴を認めつゝも兎角に官憲の肩を持つ看方をした。

『露西亞は行詰つてゐるが、革命黨は空想ばかりで實行に掛けたらカラ成つてゐない。いくらヤキモキ騷いだつて海千山千の老巧手だれの官僚には歯が立たない、』と二葉亭は常に革命黨の無力を見縊り切つてゐた。歐洲戰といふ意外の事件が突發した爲めと云ふ條、コンナに早く革命が開幕されて筋書通りに、ト云ふよりは寧ろ筋書も何にも無くて無準備無計畫で初めたのが勢ひに引摺られてトン／＼拍子にバタ／＼片附いて了はうとは誰だつて夢にだも想像しなかつたのだから、二葉亭だつて矢張、若し存生だつたら地震に遭逢したと同樣、暗黑でイキナリ頭をドヤシ付けられたやうに感じたらう。

が、二葉亭は革命黨の無力を見縊つてゐても、其の無思慮な輕率なヤリロに感服しなくても丸きり革命が起るのを洞察しないぢや無かつた。『露西亞は今噴火坑上に踊つてる。幸ひ革命黨に人物が無いから太平を維つてゐられるが、何年か後には必ず意外の機會から全露を大混亂に陥れる時がある』とは屢々云ひ／＼した。『其時か日本の驥足を伸ぶべき時、自分が一世一代の飛躍を試むべき時だ』と畑水練の氣焰を良く擧げたもんだ。

果然革命は歐洲戰を導火線として突然爆發した。が、誰も多少豫想してゐないぢやないが餘

り迅雷疾風的だつたから誰も面喰つて了つた。其上、東京の地震の火事と同樣、豫想以上に大きくなつたので愈々面喰つて了つた。日本は二葉亭の注文通りに此機會に乘じて驥足を伸べるどころか、火の子を恐れて縮こまつて手も足も出ないでゐる。偶々チョッカイを出しても火傷をするだけで、動やともすると野次馬扱ひされて突飛ばされたりドヤされたりしてゐる。之では二葉亭が一世一代の芝居を打たうとしても出る幕が無いだらう。

だが、實をいふと二葉亭は舞臺監督が出來ても舞臺で踊る柄では無かつた。縱令舞臺へ出る役割を振られても愈々となつたら二の足を踏むだらうし、踊つて見ても板へは附くまい。が、寢言にまでも此の一大事の場合を歌つてゐたのだから、失敗までも此の有史以來の大動搖の舞臺に立たして見たかつた。

ヨッフエが來た時、二葉亭が一枚會合に加はつてゐたらドウだつたらう。あの會合は本尊が私設外務大臣で、双方が探り合ひのダンマリのやうなもんだつたから、結局が百日鬘と青隈の公卿惡の目を剝く睨合ひの見得で幕となつたので、見物人はイヽ氣持に看惚れたゞけで餘程な看功者でなければドッチが上手か下手か解らなかつた。あアいふ型に陷つた大歌舞伎では型の

心得の無い素人役者では見得を切つて大向ふをウナらせる事は出來ないから、丸切り型や振事の心得の無い二葉亭では舞臺に飛出しても根ツから榮えなかつたらうが、沈惟敬もどきの何とかいふ男がクロンボを勸めてるよりも舞臺を引緊めたであらう。

とは思ふものゝ、二葉亭は舞臺の役を振られて果して躍り出すだらう乎。空想は可成大きく、談論は極めて鋭どかつたが、率ざ問題にブツからうとするとカラキシ舞臺度胸が無くて、存外咄咀逡巡して容易に決行出來なかつた。實行家となるには二葉亭は餘りに思慮が細か過ぎた。右から左から縦から横から八方から只見う恁う見て卯の毛で突いたほどの隙も無いまでに考へ詰めてからで無いと何でも實行出來なかつた。實行家の第一資格たる向ふ見ずに猪突する大膽を缺いてゐた。勢ひ躍り出すツモリでゐても出遲れて了ふ。機會は何度來ても出足が遲いのでイツモ機會を取逃がして了ふ。存命してゐても二葉亭は矢張とつおいつ千思萬考しつゝ出遲れて、可惜多年一劍を磨した千載の好機を逸して了うが落であるかも解らん。

が、夫でも活かして置きたかつた。アレカラ先き當分露國に滯留して革命にも遭逢し、勞農政府の明暗兩方面をも目睹したなら、其の露國觀は必ず一轉囘して刮目すべきものがあつたで

あらう。舞臺の正面を切る役者になるならぬは問題で無くして、左に右く二葉亭をして此の餘りに大き過ぎて何人にも豫想出來なかつた露西亞の大變動に直面せしめたかつた。

（2）二葉亭は實は舊人

二葉亭は露國文化の注入者としては先驅者であつた。プーシキンやゴンチヤローフやドストエフスキーや露西亞の近代の巨星の名什を晄讀したのが四十年前で、ツルゲーネフの斷章を初めて日本に翻譯紹介したのが三十六年前であつた。其頃は日本ばかりでなくて歐羅巴ですらが露西亞を北歐の半開民族視してゐたから、露西亞の文化なぞは問題とならなかつた。露西亞の文學がボツボツ歐羅巴の大陸語に翻譯され出したのは矢張同じ頃からで、何一つ歐羅巴に遲れを取らないものは無い日本の文化事業の中で唯一つ露西亞の文學の紹介に率先（縱令其後を續けるものが暫らく無かつたにしろ）したといふは二葉亭あつたが爲めであつた。

が、新らしい露西亞の文藝の研究者、精通者、紹介者としては二葉亭は實に輝いた先驅者であつたが、元來露西亞の思想なるものは極めてオーソドツクスな官僚的階級差別心と頗る放縱

は藝術的に露西亞の勝れた世界的大作に負ふ處があつても思想的に露西亞から學ぶべき何物をも與へられなかつた。随つて少年時代から魏叔子や陸宣公で培はれた頭は露西亞の文學の近代的氣分に觸れても其中に盛られた自由思想を容れるには餘りに偏固になり過ぎてゐた。

二葉亭が小説家型よりは國士型であるといふは生前面識があつた人は皆認める。此の國士型といふは維新前後から明治初期へ掛けての青年の通有であつて、二葉亭に限らず同年配のものは皆國士を理想とした。本黨の床次、現閣の濱口、皆學校時代から國士を任じてゐた。當時の青年が政治に志ざしたのは皆國士を標的としたからで、坪内博士の如く初めから劇や小説を生涯の仕事とする決心で起つたものは異數であつた。德富蘆花が「ほとゝぎす」に名を成した後の或る時『我は小説家たるを恥とせず』とボーロ擬きに宣言したのは矢張文人としての國士的表現であつた。町人宗の開山福澤翁が富の福音を傳道しつゝも士魂商才を叫んだ如く、當時の青年はコンパスや計算尺を持つ技師となつても、前垂掛けで算盤を持つても、文藝に陶醉してペンを持つても、國士といふ桎梏から全く解放されたものに先づ無かつた。身、歐羅巴の土を

踏んで香水氣分に浸つたものでも頭の中では上下を着て大小を佩してゐた。

二葉亭も矢張、夙くから露西亞の新らしい文藝の洗禮を受けてゐても頭の中では上下を着て大小を佩してゐた。聰明の人だから近代思想にも十分な理解を持つてゐたが、若い自由な思想に活きるよりはヨリ以上に國士的壯圖の夢を見てゐた。文學的天才に惠まれてゐながら文學に氣乘りがせず、トルストイやドストエフスキーの偉大を認めつゝも較やもすれば輕侮する口氣を洩らし、文學の尊重を認めるといふ口の下から男子畢世の業とするに足るや否やを疑ふと云ふ如きは皆國士の惡夢の囈語であつた。

二葉亭は兒供の時は陸軍大將を理想として士官學校を志願までした。不幸にして不合格となつたので、軍人を斷念して外交方面へ方向を轉じたが、學校が思ふやうにならず、其上に一家の事情が纒綿して、三方四方が塞がつたから仕方が無しに文學に趨つたので、初一念の國士の大望は決して衰へたのでも鈍つたのでも無かつた。語學校に教授を執つた時もタヾの語學教師たるよりは露西亞を對照としての天下國家の經綸を鼓吹したので、松下村塾の吉田松陰を任じてゐた。夫故に同じ操觚でも天下の木鐸としての新聞記者を希望して、官報局を罷めた時既に

新聞記者とたらんとして多少の運動をもした位だから、朝日の通信員として露西亞へ上途した時は半世の夙志が初めて遂せられる心地かして意氣滿盛、恐らく其心事に立入つて見たら新聞通信員を踏臺として私設大使を任ずる心持であつたらう。が、二葉亭の頭は活きた舞臺に立つには餘りに纎細煩瑣に過ぎてゐた。北京に放浪して親友川島浪速の片腕となつて亞細亞の經綸を策した時代は恐らく一生の中の得意の絶頂であつたらうが、餘りに潔癖過ぎ詩人過ぎて、左したる衝突も無いのに僚友の引留むるを振拂つて歸朝して了つた。川島は滿洲朝の滅亡と共に雄圖蹉跎し、近くは直隷軍の慘敗の結果が宣統帝の尊號褫奪宮城明渡しとなつて、時事日に非なりの感に堪へないで腕を扼してゐるだらうが、依然信州の山河に盤踞して嵎を負ふの虎の如くに恐れられてをる。渠は實に當世に珍らしい三國志的人物であるが、渠と義を結んで漢の天下を復する計を立つるには二葉亭は餘りに近代的思想を持ち過ぎてゐた。シカモ近代人となるには亦餘りに古風な國士的風懷が有り過ぎてゐた。此の鳥にも獸にもドッチにもなり切る事が出來ない性格の矛盾が何をするにも二葉亭のキヤリヤの障碍となつた。

二葉亭と交際した二十年間、或る時は殆んど毎日往來した。終日或は夜を徹して語り明かし

た事も有つた。が、お互ひの打明けた談合の外は話題はイッデモ政治談や對外策、人生問題や社會問題に限られて滅多に文學に觸れなかつた。偶々文學談をしてもゴーゴリやツルゲーネフでなければ芭蕉や西行、京傳や三馬らの古人の批評で、時文や文壇の噂には餘り興味を持たなかつた。怎うかすると紅葉や露伴や文壇人の噂をする事も時偶はあつたが、舞臺の役者を土間や棧敷から見物するやうな心持でゐた。

「浮雲」以後は暫らく韜晦して文壇との交渉を絶ち、文壇へ乘出す初めに提携した坪内博士とすら遠ざかつてゐた。が、再びポツ／＼飜譯を初めてから新聞雜誌記者や文壇人が頻繁に出入し初めた。二葉亭が二度の文人生活を初めたのは全く糊口の爲めで文壇的野心が再燃したわけで無く、ドコまでもシロウトの内職の心持であつた。本職の文壇人として、舞臺或は幕裏の或は樂屋の人間として扱はれるのを痛くイヤがつてゐた。二文壇の名士が來てはツルゲーネフのトルストイのと持掛けられるにはクサクサする」と苦り切つてゐた。

「浮雲」を書いた時は眞に血みどろの眞劍勝負であつた。「あひゞき」や「めぐりあひ」を譯した時は一刀三禮の心持で筆を執つてゐた。夫にも拘らず、後には若氣の過失で後悔してゐる

と云つた。自分には文學的天分が無いと謙下りながらも兎角に大天才と自分自身が認める文豪をさへ茶かすやうな語氣があつた。萬更文學の尊重を認めない處か、現代文化に於ける文藝の位置を十分知り抜いてゐるくせに、頭の隅のドコかで文學を遊戯視して男子畢世の業とするに足るか否かを疑つてゐた。二葉亭の理智の認める處を正直に云はせれば世界に於ける文學藝術の位置なぞは問題では無いのだが、儒敎や武家の敎養から文藝を雕蟲末技視して輕侮する思想が頭の隅のドコかに粘り着いてゐて一生文人として終るを何となく物足らなく思はした。ゴーゴリやツルゲーネフの洗禮を受けても魏叔子や陸宣公で鍛え上げた思想がイツマデも抜け切らないで、二葉亭の行くべき新らしい世界に眼を閉ざさした。二葉亭は近代思想の聰明な理解者であつたが、心の底から近代人になれない舊人であつたのだ。

（3）二葉亭は長生きしても終生煩悶の人

夫なら二葉亭は舊人として小說を書くに方つても天下國家を揮廻しさうなもんだが、藝術となると然うで無い。二葉亭の對露問題は多年の深い研究とした夙昔の抱負であつたし、西伯利

から滿洲を放浪し、北京では中心舞臺に較や乘出してゐたし、實行家としてこそ左したる手腕を示しもせず、又手腕が無かつたかも知れぬが、頭の中の經綸は決して空疎で無かつた。若し小說に假托するなら矢野龍溪や東海散士の向ふを張つて中里介山と人氣を爭ふぐらゐは何でも無かつたらう。二葉亭の頭と技術とを以て思ふ存分に筆を揮つたなら日本のデュマやユーゴーとなるのは決して困難で無かつたらう。が、藝術となると二葉亭は此の國士的性格を離れ燕趙悲歌的傾向を忘れて、天下國家的構想には少しも興味を持たないで矢張市井情事のデリケートな心理の葛藤を題目としてゐる。何十年來シベリヤの空を睨んで悶々鬱勃した磊塊を小說に托して洩らさうとはしないで、家常茶飯的の平凡な人情の紛糾に人生の一臠を探して描き出さうとしてゐる。二葉亭の作だけを讀んで人間を知らないものは恐らく世間並の小說家以上には思はないだらうし、又人間だけを知つて其作を讀まないものは、二葉亭を小說家であると聞いて必ず馬琴の作のやうなものを聯想せずにはゐられないだらう。

恁うした根本の性格矛盾が始終二葉亭の足蹟に累を成してゐた。最一つ二葉亭は洞察が餘り鋭ど過ぎた、といふよりも總てのものを畸形的立體式に、或は彎曲的螺旋式に見なければ氣が

濟まない詩人哲學者通有の痼癖があつた。尤も恁ういふ痼癖が屢々大きな詩や哲學を作り出すのであるが、二葉亭も亦此の通有癖に累ひされ、直線に屈曲を見出し平面に凹凸を搜し出して苦んだり悶いたりした。坦々砥の如き何間幅の大道路を行く時も二葉亭は木の根岩角の凸凹した羊腸折や、刃を仰向けたやうな山の脊を縱走する危險を聯想せずにはゐられなかつた。日常家庭生活に於ても二葉亭の家庭は實の親子夫婦の水入らずで、シカモ皆好人物揃ひであつたから面倒臭いイザコザが起る筈は無かつたが、二葉亭を中心としての一家の小競合ひは絶間が無くてバンコと苦情を聽かされた。二葉亭の言分を聞けば一々モットモで、大抵の場合は小競合ひの敵手の方に非分があつたが、實は何でも無い日常の些事をも一々解剖分析して前後表裏から考へて見なければ氣が濟まない二葉亭の性格が原因してゐた。一と口に云へば二葉亭は家庭の主人公としては人情もあり思遣も深かつたが、同時に我儘な氣難かし屋であつた。が、二葉亭の此の我儘な氣難かし屋は世間普通の手前勝手や肝癪から來るのでは無くて、反覆熟慮して考へ抜いた結果の我儘であり氣難かし屋であつたのだ。

二葉亭は一時哲學に耽つた事があつたが、其の哲學の根柢は懷疑で、疑ひがあるから哲學が

有る、疑ひが無くて假定の名の下に或る前提を定めて掛るなら最うドグマであつて哲學で無いと云つてゐた。が、一切の前提を破壞して了つたならドコまで行つても思索は極まり無く、結局は出口の無い八幡知らずへ踏込んだと同じく、一つ處をドウ〳〵廻りするより外は無くなる。夫では阿波の鳴門の渦に卷込まれて底へ〳〵と沈むやうなもんで、頭の疲れや苦痛に堪へ切れなくなつたので、最後に盲龜の浮木のやうに取捉へたのが即ちヒユーマニチーであつた。が、根柢に橫はつてるのが懷疑だから、動やともするとヒユーマニチーはグラ〳〵して、命の綱と頼むには手頼甲斐が無かつた。けれども大船に救ひ上げられたからツて安心する二葉亭では無いので、板子一枚でも何千噸何萬噸の浮城でも、浪と風との前には五十步百步であるやうに思へて終に一生を浪のうね〳〵に浮きつ沈みつしてゐた。

　政治や外交や二葉亭が所謂男子畢世の業とするに足ると自ら信じた仕事でも結局が矢張安住してゐられなくなるのは北京の前轍に徵しても明かである。最後のペテルスブルグ生活は到着早々病臥して碌々見物もしなかつたらしいが、假に健康でユル〳〵觀光もし名士との往來交歡もしたとしても二葉亭は果して滿足して得意であつたらう乎。二葉亭は以前から露西亞を禮讃

してゐたのでは無かつた。來て見れば豫期以上に愈々幻滅を感じて、案外與し易い獨活の大木だとも思ひ、或は箍の弛んだ桶、穴の明いた風船玉のやうな民族だと愛想を盡かして了うかも解らない。當座の中こそ訪問や見物に忙がしく、夙昔の志望たる日露の問題に氣焔を吐きもしやうし努力もするだらうが、暫らくしたら多年の抱懷や計畫や野心や宿望が總て石鹼玉の泡のやうに消えて了つて索然とするだらう。歐洲戰が初まる前までどころか、恐らく二三年も露都に過ごしたらクサ〳〵して迚も辛抱出來なくなるだらう。

所詮二葉亭は常に現狀に滿足出來ない人であつた。絕間なく跡から〳〵と煩悶を製造しては手玉に取つてオモチャにする人であつた。二葉亭が曾て疑ひがあるから哲學で、疑ひが無くなつたら哲學で無くなると云つた通りに、悶えるのが二葉亭の存在であつて、悶えが無くなつたら二葉亭で無くなる。命の有らん限り悶えから悶えへと一生悶えを追つて悶え拔くのが二葉亭である。『浮雲』の文三が二葉亭の性格の一部のパーソニフキケーションであるのは二葉亭自身から聽いてゐた。煩悶の內容こそ違へ、二葉亭はあの文三と同じやうに疑ひから疑ひへ、苦みから苦みへ、悶えから悶えへと絕間なく藻搔き通してゐた。之が即ち二葉亭の存在であつて、

長生きしたからつて二葉亭の生涯には恐らく「滿足」や「安心」や「解決」や「落着」は決して見出されなかつたらう。

(4) 二葉亭はヽ敗の英雄

二葉亭は失敗の英雄であつた。小說家としては未成の巨人であつた。事業家としてドレほどの手腕があつたかは疑問であるが、事を侶にした人の憶出を綜合して見ると相當の策もあり腕もあつたらしく、萬更な講釋屋ばかりでも無かつたやうだ。實を云ふと實務といふものは臺所の權助仕事で、馴れゝば誰にも出來る。實務家が自から任ずるほどな難かしいものでは無い。處が日本では昔から法科萬能で、實務上には學者を疎んじ讀書人を輕侮し、議論をしたり文章を書いたり讀書に親んだりすると左も働きのない低能者であるかのやうに輕蔑され或は敬遠される。二葉亭ばかりが志を得られなかつたのでは無い。ダンヌンチオも日本だつたら義兵を募る事も領は魯か文部の長官にだつて選ばれさうも無い。パデレフスキーも日本に生れたら大統軍資を作る事も決して出來なかつたらう。西洋では詩人や小說家の國務大臣や商賣人は一向珍

らしく無いが、日本では詩人や小説家では頭から對手にされないで、國務大臣は愚か代議士にだつて選出される事は覺束無い。恁ういふ國に二葉亭の生れたのは不運だつた。

小説家としても『浮雲』は時勢に先んじ過ぎてゐた。相當に賣れもし評判にもなつたが半ばは合著の名を假した春廼舍の聲望に由るので、二葉亭としては餘り難有くもなかつた。數ある批評の何れもが感服しないのは無かつたが、ドレも之も窮所を外れて自分の思ふ坪に陷つたのが一つも無かつたのは褒められても淋しかつた。『其面影』や『平凡』は苦辛したと云つても二葉亭としては米錢の方便であつて眞劍でなかつた。褒められても貶されても餘り深く關心しなかつたらうし、自ら任ずるほどの作とも思つてゐなかつた。

正直に云つたら『浮雲』も『其面影』も『平凡』も皆未完成の出來損ないである。あの三作で文人としての名を殘すのは假令文人たるを屑（いさぎよ）しとしなくても亦遺憾であつたらう。

結局二葉亭は日本には餘り早く生れ過ぎた。若し歐羅巴だつたら小説家としても相應に優遇され、二葉亭も亦文人たるを甘んずる事が出來たであらう。

（大正十四年一月『女性』一部登載）

大正十四年六月十日印刷
大正十四年六月十五日發行

定價金貳圓八十錢



思ひ出す人々

著作者　內田魯庵

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　溝口榮
東京市小石川區小日向町一番地

印刷所　溝口印刷所
東京市小石川區小日向町一番地

發行所
東京市日本橋區數寄屋町壹番地
株式會社　春秋社
電話大手六一八五番
振替東京二四六八一番

昭和十四年六月[illegible]一読




夏木立
金港書籍



